

転生業務課は本日も大忙しです

通りすがりのめいりん君@すきよあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖夜だろうと関係なく働く男は、不運と過労が重なり事故にあってしまう。

気がつくとも男は役所のような場所に居て、書類を手に行ったり来たりのため回り回し。

ようやく終わったと思ったら、よくわからない部屋に通されて、そこにいるボサボサ髪の疲れた女性に死んだことを伝えられた。

しかも、次に女性から伝えられたのは「輪廻によって生まれ変わる事が出来ない」という意味不明な言葉だった。

消滅したくなければ女性の下で働くしか無いなんて理不尽まで突きつけられて……。

そもそもここは何をするところなんだ？

目次

転生業務課編

プロローグ

- 第一話：死んでも仕事からは逃げられなかったみたいです 14
第一話：死んでも仕事からは逃げられなかったみたいです② 23

- 第二話：派遣業務もやらなきゃいけないらしいです 33
第二話：派遣業務もやらなきゃいけないらしいです② 39
第二話：派遣業務もやらなきゃいけないらしいです③ 47
第二話：派遣業務もやらなきゃいけないらしいです④ 51
第三話：転生課と勇者には深い関係があるらしいです 58
第三話：転生課と勇者には深い関係があるらしいです② 65
第三話：転生課と勇者には深い関係があるらしいです③ 73
第四話：世界を管理するという事らしいです 83
第四話：世界を管理するという事らしいです② 91
第五話：如何にもな異世界みたいです 98
第五話：如何にもな異世界みたいです② 105
第五話：如何にもな異世界みたいです③ 112
第五話：如何にもな異世界みたいです④ 120
第六話：チートで無双らしいです 127
第六話：チートで無双らしいです② 134
第六話：チートで無双らしいです③ 142
第六話：チートで無双らしいです④ 149
第六話：チートで無双らしいです⑤ 156
第七話：ザドキエルの役割らしいです 164

第七話：ザドキエルの役割らしいです②	170
第七話：ザドキエルの役割らしいです③	181
第八話：転生課の役目を果たすときみたいです	189
第八話：転生課の役目を果たすときみたいです②	197
第八話：転生課の役目を果たすときみたいです③	204
第八話：転生課の役目を果たすときみたいです④	210
第八話：転生課の役目を果たすときみたいです⑤	220
エピローグ：転生業務課は本日も大忙しです①	226
エピローグ：転生業務課は本日も大忙しです②	234
EXストーリー	
EX1：エルラドの勇者①	241
EX1：エルラドの勇者②	248
おまけ	
おまけ：キャラクター紹介	255

転生業務課編

プロローグ

俺は猛烈に仕事に追われていた。白を基調とした手狭な部屋で次々と運ばれてくる書類に目を通し、仕分けに次ぐ仕分け。いくらか仕分けた分が溜まったら今度は、仕分けごとに処理していく。無論、その間にも書類は運ばれてくる。

一体なんの事務仕事をしているかと言うと、簡単に言えば生あるものの、特に“人”の転生をしている。

仕分けとしては、まず悪魂あくこんと善魂ぜんこんに分け、その後、どの世界にどれだけの数を転生させるかを割り振っている。

当然だが、人力だけと言うわけではない。

天部の中心部にある巨大な樹木、生命セフィロートの樹と呼ばれる演算装置によって大半の魂は自動的に割り振られて流転する。だが、中には自動的に割り振られない魂がある。わかりやすい例で言うならば俺のように肉体のみ、あるいは魂のみが死を迎えた者だ。

しかし、これは比較的稀有な事象であり、膨大な数故に死んだ魂だけが来ることは良くあるものの割合としては決して多くない。では、何が一番多いのか。それは輪廻転生を拒んだ者だ。

壮絶な生の末に死を迎えた。生を満足してしまった。生に執着がない。などの理由から生まれ変わることを拒否してしまう者が非常に多いのだ。

こうなると悪魂だとしても演算装置セフィロートでは判断できなくなってしまうので、俺たち転生業務課に投げてくるというわけ。

雑学だが『地球』に置ける一日の死者数はおよそ15万人と言われていて、これを一日の秒数である86400秒で割ると約1.7という数になる。二秒でだいたい三人。これが『地球』に置ける秒あたりの死者数となる。

地球の、それも人類だけでこれだけの数が亡くなっているのだ。これが各世界になってみる。膨大な数だ。ソシヤゲで0.0001%

と聞けば果てしなく少ない確率に思えるかもしれない。だが、100万倍にすれば100%になる。つまり規模がデカければ稀有な事象だって極普通に起こるってこと。

実際に輪廻を拒む者は十万人に一人ってほどだろうが、大本の数が膨大なだけにかかりの数になってしまうのだ。とは言え、あくまで演算装置による輪廻を拒んだだけなので転生業務課で手続き(強制)をすればどうにでもなるんだがな。

これが今の俺に課せられた仕事だ。

こんな仕事を少なくとも『地球』計算で一月はぶつ通しで続けているが困ったことに、この天使としての身体は天部にいる限り休息を必要としないらしく、腹は減らないし、眠くもならない。

しかも天使は堕ちない限りは死ぬことまで無いと来た。

いやはや、イナンナがいくら美人と言えど許されないことはあるぞ。不眠不休で働き続けるとかペンタブラック(注、世界一黒い物質)もびつくりの黒さだっつーの。そりゃ職員も逃げ出すわ！

せめて一月前に知っていれば働く方を選ばなかったかもしれないのに…。

いや、どうだろうな。イナンナに至っては俺が初めてここに来て話をしたのが、いつぶりか分からない休みだと言うくらいには休んでないらしいから、それも知っていたら結局働いていたのかもしれない。

そう。一月前、俺が人生に幕を閉じた時から、そんな天使生とも言うべき新たな生が始まったのだ。

く一月前く

「先帰るぞ。いつまでも残ってないでお前らも早く帰れよ」

そんな言葉を残して数人の上層幹部達が退社していく。時刻は十七時過ぎ、所謂定時退社だ。

なんとも羨ましいもんだ。と言うのも俺たち平社員はほぼ毎日が終電間際だったり、徹夜や社内泊も日常的にある。かく言う俺も一週間前から家に帰っていない。

まあ、帰ったところで飯を作る気力なんてないからコンビニ弁当を

買って、後はシャワー浴びて寝るだけだが。

正直に言うとうと会社のロッカーに着替えはあるし、洗濯にしたって家でなくとも出来るのだからわざわざ家に帰る必要がない。

——なんて思うようになったのはいつからだろうか。

定時退社なんて入社して一週間の頃に一度だけあつたきり、八人居た同期も半年しないうちに俺だけになった。

新生活に気が浮つく間も無く自宅は薄ぼこりのかぶった寝るだけの場所と化し、ここ二年くらいは休日ですら会社で寝てる始末。もはやどつちが自宅だから解らない。

とつくに気づいているさ、この会社は世に言うブラック会社、その中でも飛び抜けて黒い社会の闇だ。

働き方改革？ブラック撲滅？そんなのは世間へ向けた猫の皮ではない。皮を一枚剥けばどんな会社だって闇の鱗片を持っている。

ちなみに十七時に帰っているのは会社の設立当初はから居る古狸どもで、他の上司は早くても二十時と定時には程遠い時間だ。

溜息をつきながらもキリが良いところまでデスクワークを続け、気づけば終電時間もとうに過ぎた午前一時前。大半の社員は帰ったがそれでも社内には俺を含めて数人が残っていた。

空腹と眠気を栄養ドリンクで誤魔化そうと考えた俺は社内を設置された冷蔵庫を開くが、私物の栄養ドリンクは入っていないかった。

考えてみれば約一週間も社内に閉じこもっていたようなものなのだからなくなりもするか。

体は重いが流石に栄養剤もコーヒーも無しじゃ三徹目は切り抜けられないので仕方なくコンビニまで買いに行くことにし、残っている同僚に一声掛けてから財布だけ持って会社の外に出る。

外は身を裂く様な寒さで、雪までちらついていた。

携帯を開いて日付を見ると今日は十二月二十四日らしい。通りで深夜にも関わらず人が多いわけだ。

そんな事を思いながら道にたむろっている若者達を尻目に脇を抜けながら目的のコンビニへ向かう。

コンビニに着いたら取り敢えず適当に栄養ドリンクと缶コーヒー

を買い物カゴへ放り込み、レジへ持っていく。レジを通す際に店員から哀れみの目を向けられたが、こんな日に働いている時点で同類だろと思っただけで薄く微笑んでやった。

外に出ると、再び肌を撫でるように冷たい風が吹き付けゾワつと毛が逆立つような感覚を覚えた。早く家に帰ろうなんて思う残念な自分の頭にまた溜息をつきながら会社家への道路を歩く。

重い体を引きずりながら会社への道を歩いていると先ほどたむろっていた若者達がまだ道端で騒いでいた。俺は邪魔だと思いつつも行きと同じように脇を抜けようとする。

その時だった。

若者達がふざけあっている反動で誰かが俺に後ろからぶつかった。普通なら軽くよろけつつも転ばない程度の些細な衝突。しかし既に二徹している俺の身体は突然の事態に対処できず道の横、車道へ向かって倒れ込んでしまう。

倒れこむ寸前、視界は何か白いもので埋め尽くされ、耳には大きな音が響く。それが何であるかを判断する前に俺の思考は断絶した。

夜の静寂を切り裂く悲鳴が薄く白化粧をした住宅地に轟とんく。その光景を目にしたものは事態の悲惨さのあまり、目を背け、直視してしまつたものは嗚咽とともに腹に溜めたものを吐き出した。

若者がぶつかりよろけた男は運悪く通りかかった大型トラックになすすべも無く轢かれた。

白くなつた大地に真っ赤な鮮血を飛び散らせ、その身体はかろうじて原型が留まつている程度で、もはや誰であつたかなど確認が出来ないほどに潰れていた。

クリスマスの夜に起きた悲しい事故。それを見て誰かが呟く。

「事故も事故。大事故だわ……」

その声は誰の耳に入るわけでもなく、寒空の風に吹かれて闇に消えた。

目が覚めた俺はどこかの建物で椅子に座っていた。手にはコンビニ

二の袋ではなくバーコードリーダーの付いた番号札が握られており、辺りには忙しなく動きまわる人が多く居て、番号を呼ばれた人が窓口にいる職員らしき人物の方へと向かっていく。

この場所に見覚えはないが、どうやらどこかの役所に居るらしい。いや、やたらと白い場所だから病院かもしれない。

いずれにせよ。なんで俺がここに居るのかは判らずに眉根を寄せていると自分の持つ番号札と同じ番号が呼ばれた。

とりあえず状況に流されて窓口へ向かい、番号札を渡すと職員の男性が俺の番号札に付いていたバーコードを機械で読み取り、それから血相を変えてパソコンを弄り始めた。

数分ほどそのまま待たされた後に、男は一枚の紙を差し出して「二番の窓口」へ行くようにと言った。

言われるままに紙を二番の窓口を持っていくと、またしばらく待つように言われたので椅子に座って待つ。十数分ほど待たされた後に今度はクリップで纏められた何枚かの紙を渡されると共に「五番の窓口」に書類を渡すように言われ、俺は何となく嫌な予感を感じ始めた。

予感が外れる事を祈りつつも五番の窓口で書類を出して待つ事数十分。渡したはずの書類を返されて「三番の窓口」へと言われ俺は溜息を吐いた。

それからもやれ「四番」へ行け、「七番」へ行け、「二番」へ行け、「四番」へ行けなどと続き、最終的に「九番の窓口」へとたどり着いた。

どうせまたたらい回しにされるなんて考えながら書類を九番の窓口に出して椅子に座る。しかし残念なのはどうしてここに居るかすら判らないのに流されるがままになってしまう日本人の習性だろう。急ぎではないとは言え古狸共上から下へながされたに押し付けられた仕事を終わらせないと不要な小言を貰ってしまうので一刻も早く会社へ戻りたいのだがな。

もう何でも良いから早く終われと思いながら名前が呼ばれるのを待つと、今回は数分で名前を呼ばれた。

窓口へ行くと、どうやら場所を移すらしく役所の奥の方へと連れて行かれる。

しばらく歩いた後に通された部屋は会議室や応接室とはほど遠い書類の散乱した部屋で、中には書類の山に挟まれた妙齢の女性が一人だけ居て、部屋に入った俺のことを見ていた。

その姿は目元に大きな隈があり、長い髪はボサボサに広がっており、疲労が全身に見て取れた。

なんとなく会社の同僚達を思い出す姿に思わず苦笑いが漏れそうになるがぐつと堪えて、案内してくれた職員と目の前の女性のやり取りを待った。

やがて話が終わったのか案内してくれた職員の方は部屋を出て行き、俺とボサボサ髪の女性だけが残された。どうすればいいかわからないので女性の方を見ると、女性もまた俺の方を見ていた。

数分ほどそのまま時間が過ぎ、このままでは埒があかないと思った俺はどうしたら良いかと問いかける。すると、女性はそのまま立っていてほしいと答えたので仕方なく立ち尽くす。

再び静寂が生まれ、見つめ合う時間が訪れる。営業などで女性と顔を突きあわせることも多いので照れたりはしないけれど、訳も分からないまま見つめ合うというのはなんとも言えない気まずさがあった。

沈黙の間と化した部屋は女性が口を開くまで続いた。ようやく発声された言葉は女性の「見えた!」という言葉だった。何が見えたのかは謎だし、いきなり大きな声を出すものだから驚いて少し身体が跳ねた気がする。

「……えっと、何が見えたんですか?」

「ちよつとね」

女性はそうはぐらかすと、案内してくれた人にこの場所の事を聞いているかと聞かれた。当然無いと答えると女性は深い溜め息をついた。

「ちなみにここがどこかわかる?」

「わかりませー」

「——だよー。連中は不親切だもんねー。うんうん」

女性は俺の答えを最後まで聞くことなく勝手に納得して頷いた。頼むから俺にも説明してくれ。

「じゃあこの場所にいる理由も知らない訳だ」

「……はい。流されるがまま連れてこられました」

そう答えると、女性はわざとらしく「はいはい。ゼーんぶ解りました」と明後日の方向へ向けて言った。その後小さく「アイツらめ…」と呟いていたのは聞かなかったことにしよう。

女性の放つオーラが完全に同僚と重なったように思えた。

「はあ…。OK OK、全部説明してあげるわ」

女性に促されるまま、手近な椅子に腰掛けるとマグカップが一つ差し出された。中には湯気を立ち上らせたコーヒーが入っており、礼を言ってから口に含むと程よい苦味が頭を冴え渡らせる。どうやら良い豆を使っているらしく、俺が普段会社で飲んでいる安いインスタントコーヒーとはまるで別物だ。

「さて、まずは」

そう前置きをして女性は長々と話し始める。

「ここは、というよりこの世界は貴方の居た“地球”ではないわ。地球とは根本的に次元が違う位置に存在する場所よ。ちなみにここは天部てんぶと呼ばれているわ」

次元が違うとか地球じゃないとか、突拍子もない言葉に眉根が寄る。

「天部……？」

「そうね。貴方でも聞き馴染みのありそうな言葉で言うならば天国かしら？ここには君達人間から天使や神と呼ばれるような存在が働いているの」

「では、やはり私は死んだのでしょうか…」

薄々予感していたとはいえど、ショックは拭いきれなかった。死んだんだと自覚した途端に頭の中にはいくつもの後悔が過る。

ロクに遊びもせず、仕事ばかりだった事。特に俺は酒も煙草も好まず、女遊びなんてしたことすらなかった。

「残念だけど、その通りよ。貴方は脇見運転していた大型の運送用ト

ラックに轢かれて死んだわ。信じられないなら死ぬ瞬間の映像も見せてあげられるけど、どうする?。」

何事でもないように聞かれたが流石に自分の死ぬ姿は見たいと思わないので丁重に断ると女性はつまらなさそうに「そう?。」と言って、説明を続けた。

「とにかく貴方は死んだわ。そして何故ここに居るのか、それは死んだ者の魂を天部で管理しているためよ。一般的には善き魂は新たな魂に生まれ変わり、悪き魂は地獄の業火の燃料にされる。だから善き魂である貴方は生まれ変わり、輪廻、つまり転生する予定だったのよ」
ここまで言うとき女性は深いため息を吐いて俺の書類と思われる紙を縦に割いてから丸めると、部屋の隅に置かれたゴミ箱へ放り投げた。

「予定だった。と言うのはどういうことですか?。」

「そのままの意味よ。つまり転生はしない。正確にはまだ出来ないのよ。貴方は本来はまだ死ぬべきでは無いのに死んでしまったから、生まれ変わるための条件が整ってないのよ」

「輪廻に条件なんてあるんですか?。」

「有ってないようなものなんだけどね。たまに居るのよ。貴方みたいな不運な奴が」

そっぽ向いて吐かれた女性の言葉に、ただただ苦笑いするしかなかった。

「私達は死んだ者の魂を管理してるって言ったでしょ。でも誰かが死んでから対応したら後手後手で仕事にならない。そのために寿命の予測を立てて、決まった時間に決まった数を転生させているの。そもそも一度に転生出来る定員数もあるしね」

「つまり今の俺は員数外ってことですか」

「それもあるけれど、一応、定員についてはなんとか出来るの。貴方が転生できない理由はね。貴方、死んでないのよ」

…この人は何を言っているのだろうか。ついさつき『貴方は死んだ』と言ったのに、今度は『死んでない』と来たか。

「失礼ながら、貴女の言っている意味がわかりません。私は死んだの

ではないのですか？」

「ああ、ごめん。えつとね。確かに“肉体的”には死を迎えているわ。でも、魂は死んでいないのよ」

更に意味がわからない。これは俺の理解力が足りないからなのか、などと思っていると女性は察してくれたのか頭を掻きながら解りやすく説明してくれた。

生には“肉体”と“魂”の二つがあり、この二つの生が途絶えて初めて“死を迎える”のだそうだ。

魂だけが死を迎えた場合は、二度と覚めぬ眠りに落ちる。魂の無い肉体は始めこそ時を止めたようになるが、やがて緩やかに死へと向かい始めるらしい。おそらくは植物状態に近いものだと思われる。

そして肉体だけが死んだ場合、生きた魂は行き場をなくして地上を彷徨う。この時、魂に刻まれた“業”によっては生者を脅かす悪魂あくこんに成り果てる。これが悪霊や妖怪などと呼ばれる存在で、逆に善魂ぜんこんと呼ばれる存在は彷徨った後に天へと召されるそうだ。

ちなみに器の無い魂は、龍脈などの影響を直接受けるためすぐに死んでしまうらしい。のだが、何故か俺は肉体が死んで早々に天部に来てしまったため、魂が死んでいないのだと言われた。

転生は肉体と魂、両方の死を迎えたものしか出来ないため、魂が生きている俺は転生することが出来ない。というのが今の俺の状況だ。

「本来なら魂が死を迎えるまで待てば良いんだけど、この天部は時間の概念が無いから死ぬに死ねないのよね」

「時間の概念が無い？あれ、だって——」

『決まった時間に決まった数を』云々の話かしら」

女性は俺の疑問などお見通しとばかりに割って続ける。

「あれはね。各世界の時間の事で天部のことではないのよ。そもそも世界によって時間の流れは違うわ。それなのに管理をする天部この場所にまで時間の流れがあったらそれぞれの世界とズレが生じてしまうじゃない？だから——」

「時間の概念が無い。と言ったんですね」

今度は意趣返しとばかりに俺が女性の話に割って口を出す。

「まあ、そういう事」

少しムツとした様子で素っ気なく呟く姿を見て、ちよつと大人気なかつたかなと思つた。

「……最後のは少しあれだったけど、理解力は悪くないし話もしつかり聞いている。悪くは、ない。か？」

拗ねたようにそつぽを向いた女性は俺に聞こえない程度の声量でぼそつと何かを呟いた。

「質問なんですけど」

と断つてから俺は口を開く。

「ここに居る限り私は死ねないのですよね。でも死なないことには輪廻、転生も出来ない。俗っぽい言い方ですがひよつとして詰んでませんか？」

「詰んでないわ。一応、私の力を使えば魂を地上へ縛ることが出来るのよ。所謂地縛霊いわゆるのようにね。いずれ魂の死を迎えれば再び天部へ来て輪廻転生することになる。のだけど……」

「その様子だと、何か不都合があるんですね」

「大いにあるわ。天部にとつても、貴方にとつても、ね。実は強制的に地縛霊にする方法はね。その土地に縛るのではなく、その場所に縛ることになるの。だから地上では一切の浮遊が出来ない。しかも、縛る場所は必ず霊道などの力場でなければならぬから、通常の魂よりも強い「業」を受けてしまうの」

「魂が業を受け続けたら妖怪になる……」

「そう。だから世界を管理するものとしてそうした不浄の物を意図的に作るような真似はしたくないのよ」

女性は肩を落としてため息を付いてみせた。初対面の俺でも解るくらいいわざとらしく。

「まあ、一応は貴方が取れる選択肢が二つあるのよね」

「二つ、ですか？一つは私の地縛として、もう一つはなんですか？」

俺の問いかけに女性は満面の笑みを向けてきた。

美人に笑顔向けられているというのに、何か企んでいるのが見え見えでちつとも嬉しくない。だってこの笑顔は、あれだ。古狸共が仕

事を押し付けて来る時の笑顔によく似ている。

「もう一つはここで働くことよ」

ほれ見ろ。

「えっと、それは……」

「嫌なら貴方を地縛するしか無いわね。不浄の物は大概祓われて魂ごと地獄で焼かれてしまうのだけど、ここで働きたくないのなら仕方ないわよねー」

俺の合意はほぼ関係ない。と言った所か。この強引さは営業で何度か経験したこともあるが、実質的に一択しか無い状況を覆すのはまず無理だ。

流石に俺だって消えたいわけではない。それにここで働くと言ってもまだ悪いと決まったわけではないしな。

：わかってる。ボサ髪に大きな隈くま、そして何よりも俺の同僚達とよく似た雰囲気を持つ女性からして、まともな仕事環境で無いのは間違いないだろう。

折角、天国らしき場所に居るんだ。せめて生前よりはマシな状況で働ける事を祈るとするさ。

「わかりました。ここで働かせてください。ええと……」

そういえば、これだけ色々な話をしていたはずなのに俺はこの女性の名前を知らない。今更聞くのも間が悪い気がして言いよどんでしまう。

「イナンナよ。イナンナⅡエデン。無理言ってしまったってごめんなさいね。長瀬君ながせ」

「あれ自分、名乗りましたっけ？」

疑問を感じた俺は、女性が名乗ってくれた事を無視して聞き返してしまう。すると、

「聞いてないけれど、貴方がここに来た時に過去を覗かせてもらったからね」

とんでもない答えが帰ってきた。

「づえ……」

思わず、苦い声が漏れる。

あの時の『見えた』ってそういう意味だったのか…。
なんとも言えない不快感が背筋を駆け抜け、俺は無意識のうちに身震いしていた。

過去を覗かれたと言うことは、誰にも話したことの無いあんな事やこんな事も全て目の前の女性イナンナに知られたということだ。

「ごめんなさいね。できたら恨まないでほしいわ。これも仕事なのよ」

「人の過去を覗くのがですか…?」

「覗くこと自体が目的ではないけどね。善悪がどつちつかずな魂を分けるためだったり、今回の長瀬君みたいに判断が付かない場合とかは覗くわ」

そう言われてると確かに理にはなっていない様に思える。読んでいることだつて相手に伝えなければいい話だし。

「普段は読んだなんて言わないんだけど、長瀬君にはこれからここで働いてもらうからね。内緒にしても仕方ないでしょ?」

すっかり俺は働くことになっているようだ。別にいいけど。

イナンナがこの責任者であるのはほぼ間違いない。では他の職員は?…おそらくは居ないだろう。

俺に出されたマグカップはお客様用らしき綺麗なセット物で、お茶汲み道具がある付近に似たようなものがあるのが見える。と言うかマグはそれしか見えない。イナンナが使っているような私物らしきマグが見当たらない。

そして机の配置もだ。責任者用の大きなデスクがドンと奥に据えられている以外は、書類置き場になっている長机があるだけだ。一応、種類分けはしてあるのか書類棚がいくつか乗っているけれど、一人で捌ける量じゃないのは火を見るよりも明らかである。だが、俺は確信を持って言える。この職員はイナンナ、彼女一人だと。

常人なら部屋の光景を見るだけで回れ右したくなりそうなお世辞にも良いとは言えない異常な職場環境。でも、なぜだろうな。ここままで色々な考えを巡らせているのに、あまり嫌って気がしないのは。

「折角だからもう一度名乗るわね。私はイナンナⅡエデンよ」

仕切り直しとばかりにイナンナは名乗ると右手をこちらに差し出してきた。

それを見て俺は小さくため息を付いてから、同じ様に右手を差し出す。

「改めて、自分は長瀬、長瀬啓示ながせ けいしです。これからよろしくおねがいします」

「騙すような感じでごめんなさい。こちらこそよろしくね。長瀬君」

「それは別に大丈夫です。…それよりなんですけど」

「ん？」

半分くらい流されて働くことになったけれど、今更ながら俺は働く上で最もと言っても過言ではない情報を聞いていなかった。

「この仕事ってなんですか？」

「あー。そう言えば、言ってなかったわね」

イナンナはふふんと鼻を鳴らすと得意げに言い放った。

「天部、転生業務課てんせいぎょうむかへようこそ！」

第一話：死んでも仕事からは逃げられなかったみたいで
す

「天部、転生業務課へようこそ！」

「：転生、業務課ですか」

得意げに言われたものの、一切ピンと来なかった。

「主に魂魄の輪廻、転生を担当している部署よ」

それは今までの会話でなんとなく解ってた。

「んー…。色々説明して上げたいんだけど、まだ天部の仕組みをよく知らない貴方に説明するのは骨なのよね……」

「そこをなんとかありませんか？」

説明を聞く前に承諾してしまった自分も悪いんだけど、流石に何の説明もなしにというのは辛い。

「って言ってもなあ。セフィロートによってそれぞれの世界から魂魄を集め、善悪分けて振り分ける輪廻システムからこぼれた魂を手動で判別してシステムに組み直す。で解る？」

「少しはわかりますが、できればもう少し噛み砕いていただけると幸いですね」

「だよね。一番主要となる仕事が今のやつなんだけど。うーん……」

イナンナは腕を組んで唸る。どうやらうまい言葉が見つからないようだ。

その時、ドアをノックする音と共に一人の男性が部屋に入ってきた。軽く会釈すると、特に会話することもなく何枚かの紙を長机の上に置かれた書類収納棚に入れるとそのまま出ていく。先程から度々誰かが来ては同じ様に紙を書類棚に入れては出ていつている。何らかの書類だとは思うのだがそれなりの頻度で届けられているし、一度に届く枚数も一枚や二枚ではない。

何かを思いついたのか、その書類棚の中からイナンナは一枚だけ紙を取り出して俺に差し出した。見てみると何処かの誰かの身上書のようなだ。

「これは？」

「輪廻システムから漏れた魂に関する情報が乗った書類よ。基本的にはシステムによって自動的に魂の善悪が分けられていくんだけど、中には強い意志で生まれ変わることを拒んでしまったりしてシステムが対応できない魂が居るのよ。そういった者の情報がここに運ばれるってわけ」

「なるほど…。ちなみに拒んだ人達はどうなるんですか？」

「私が強制転生の手続きをしてもう一度システムに流す」

「あー、意志の尊重とか無いんですね」

「当たり前でしょ。どれだけの数が来ると思ってるのよ。バカ真面目に意思確認なんてしてたら終わらないじゃない」

「ご無体な。と思ったが、そうして話している間にまた一人、肩身が狭そうにしながら書類を置いていった。」

確かにいくら時間の概念がないと言っても一人に捌ける量はたかが知れている。そう考えたら一々確認するなんて時間の無駄だな。時間の概念無いらしいけど。

「と、まあこれが主な業務の一つね。他にも色々あるんだけど、現状は私一人じゃMHマンアワー（注：一人でこなすことのできる仕事量の単位）が足りてないから他部署に委託してる部分もあるわ」

「むしろ、よく一人でやってますね」

「私だってやりたくてやってる訳じゃないわよ。でもここで働きたかって人がいないんだから仕方ないじゃない」

残念ながらそれは俺でも思う。他に選べるならばわざわざこんな誰でも解る真つ黒な場所で働きたいなんて思うはずがない。まあ、俺はすでに承諾してしまったから働かざるを得ないが。

「どうやら俺がやる仕事は当面の間は強制転生手続きれになるそうだ。イナンナ曰く超絶単純作業が数の暴力で襲ってくる仕事だとか。」

他には、各世界のバランスを保ちつつ、発展させたりする必要もあるのだとか。これについては流行りのライトノベル小説よろしく故意的に力を持たせた魂を送り込んだりすることだ。場合によっては魔王に対する勇者のようなパターンもあるらしい。なんだか

安っぽいラノベに出てくる神様ポジみたいなことをやる訳だけど、ぜんぜん嬉しくないな。

ちなみに、矯正転生手続きに対して、

「単純作業なら頭を無にしても出来るな…」

と、ぼやいたら、

「…やっぱ、貴方を選んで正解だったわ。単純作業なんて普通は嫌がるものよ」

とのお言葉を頂いた。失礼な。

話をしているうちに溜まる一方の書類が気になってきたので簡単な流れを聞いて作業に取り掛かりたいと伝えると、イナンナはその前にやることがあると言い出した。どうも 魂だけの存在 今のままでは仕事が出来ないらしい。

この転生業務は世界を維持、発展させるための重要な仕事であるため特別な権限が必要となるが、存在として危うい魂にはその権限を与えられないというのだ。ならばどうすればいいのかと問うと、それは俺が新たな身体を手に入れることだという。それを聞いた俺はてっきり誰かに乗り移って身体を手に入れるのかと思ったが、どうも違うらしい。

「これでもここは神の住む場所なの。身体を作り出すくらいのは出来るのよ」

とのこと。流石、女神様だ。俺なんかじゃ思いもよらならないようなことを言いやがる。

それからイナンナは見慣れた形のオフィスデスクから数枚の紙を取り出すと、迷いなく筆を走らせて俺に差し出した。見ると、俺の身上書と何かしらの契約書のようなのだ。

「長瀬君にはこれからそれを持って生命の樹セフィロートのある場所に行ってもらおうわ」

「？わかりました。どちらの方へ行けばいいですか？」

渡された書類を手に迷いなく部屋を出ていこうとした俺をイナンナが慌てた様子で引き止めた。

「案内役を呼んであるから！流石に一人で行けなんて言わないわよ」

「案内なんてあるんですね」

「そりゃあるわよ。天部のことを何も知らない長瀬君を一人で行かせるほど私は鬼畜じゃないわよ」

俺の働いていた会社なんて、会社説明会の日には案内を一人も出さず、1分でも遅刻したものは説明会に参加させなかったというのに。迎えを待つ間に何もしないのもあれなので、いくつか気になったことをイナンナに聞いておいた。

一つは俺が新たな肉体を得るのは転生とは違うのか、ということ。

これについては、転生ではなく昇華だと言われた。要領を得ない答えだったが、要点をまとめると「死を介さずに上位の存在となることを昇華と呼ぶのだそうだ。つまり俺は人間ではなくなるということになる。」

二つ目はそのままの流れで俺がどんな存在になるかを聞いてみたところ『天使』との答えを頂いた。

あっさりとした口調で、さも当たり前前のように言われてしまった。人間卒業だと身構えた俺が馬鹿みたいじゃないか。いやー、それにしても人間卒業かー。しかも天使だよ天使。想像もつかないけど翼とか生えちやうのかな。

…それはともかくとして重要なのは三つ目の質問だ。

「イナンナさんはどうして嘘をついてまで俺をここで働かせようとしたんですか？」

「なんのことかしら」

当然、はぐらかすか。素直に答えるとも思っていなかったが。

「安心してください。別に働くのを辞めるという訳ではないんです。ただ純粹に疑問に思いましたね。先程、仕事の説明をする際に渡された身上書を見た時に気づいたんですけど、その気になれば俺の魂くらい簡単に殺せますよね？」

「…その紙を見せてもらえるかしら」

書類ケースに戻した他人の身上書をイナンナに渡す。

その身上書の人物は自然に死んだ訳ではなく、天部の者によって消されていた。死因は『魂焼き』と書かれていた。しかし、書類の下の

方に備考で「地獄の炎に焼べられて尚、足掻き生きているため転生業務課に判断を任せたい」とも書き加えられていた。つまり転生業務課にはこの魂をどうこう出来る力があると云うことだと思ふ。

「この仕事の目的が『世界を維持、発展させる』『使命と能力を与えた者を送り出すことがある』ならば、維持発展に邪魔になる。例えば滅亡へ向かわせようとする者や、その回避のために送り出した転生者が使命を投げ出す事だつてあると思うんです。それらの者は転生業務課の仕事にとつて不都合でしか無い。不都合を排除する事だつてあるんじゃないですか？その紙に記された者のように」

俺の言っていることは大半が憶測だ。でもそうであるという考えが有つての発言でもある。

イナンナは俺の話をおまじり聞くこと無く、怒涛のように説明を続けていた。まるで俺に考える余地を与えないように。特に働くと答えた後はすぐさま俺を昇華させる準備を整えたりした。迎えなんていつ頼んだのか解らない。ずっと目の前に居たのに。

じーつと見つめる俺の視線に耐えられなくなつたのか、イナンナは目を逸して深い溜め息を漏らした。それから観念したように、

「…思っていたより敏いわね」

そう呟く。

「ええ、その通りよ。私はその気になれば天部で管理している世界の生物は全て私の手のひらで生死を決められる。本当はね長瀬君。貴方をそのまま地球に生き返らせることだつて出来るのよ。魂を殺してセフィロートによつて輪廻転生させることも出来る。ただ貴方は私にとつて都合が良かったの」

「都合が良かった？」

「そう、確かに生きた魂だけが天部に辿り着くのは珍しいけれど、管理している世界は多いから別に見ない程じゃないの。そうね。長瀬君の居た世界で例えるなら双子の卵を見る程度かしら。でもそういう魂つて大半は憔悴しょうすいしていて貴方みたいに意思疎通が出来るほど元気のある魂はまず居ないわ。体力の無い魂は昇華させようとしても存在を保てなくなるの。だから長瀬君の様に元気のある魂が天部に

来るのは本当に珍しい事よ。しかも長瀬君は転生業務課で働けるだけの精神力も持ち合わせていた。だから嘘を言つてまで働かせようと思つたのよ」

想像していたよりも自分本位で身勝手な理由だった。少しだけ働くのを辞めないと言つた自分を責めたくなるほどに。でも聞けてよかつたとも思う。どんな会社にも都合はあるし、その都合を知らずに働くのと知つて働くのでは気分だつて変わってくる。

うん。まあ、ロクでもない上司っぽいのは間違いないけど。

「ちやーっす！守護天使が第二柱！イスラフィール！神使としてイナナナの姐御に呼ばれ見参したつす!!」

不意に、なんの脈絡もなくシリアスっぽい雰囲気をぶち壊す豪快な音を立てて部屋扉が開けられ、元気100%で出来てるような男性の声が部屋の中に響き渡つた。突然のことに驚いて声の主へ振り返るとそこには金髪にピアス、そしてスカジャンというヤンキーフルセットみたいな男がニコニコ笑顔で立っていた。服装はともかくとして顔つきは少しあどけなさが残り格好を除けば好青年な雰囲気を感じ取れる。

「ん？もしかしてアンタが昇華するっていう人魂ひとたまつすか？なんか冴えない顔つすね」

黙つていれば好青年っぽいと追加しよう。

「口を慎んだほうがいいわよ。これからイスラの上司になる相手なんだから」

「そうつすね。申し訳なかつたつす」

イナナナが窺めるとイスラと呼ばれた少年は素直に頭を下げた。あの程度で腹をたてるほど子供でも無いのでそんなに気にしてはいなかつたけれど、そうして謝ってくれるのは嬉しい。でも、今はそれより気になることが。

「別に気にしてないよ。それより俺がイスラさんの上司になるつてどういうことですか？」

「そのままの意味つす。兄貴は昇華したら俺らの上司になるんすよ」

追加の情報が一切ないセリフに頭を抱えそうになる。いや、解らな

いから。俺は社会に出てからずっと平社員のままなんだぞ。後輩は流石に居たけど部下なんて居たこと無い。しかもさつき“神使が第二柱”とか言ったよね。めちやくちや偉そうな相手の上司ってどういうことなんだよ。

「悪いんだけど、私はぼちぼち仕事を再開しないといけないから、細かい話はそのイスラに聞いてくれる？イスラも天部の事や天使の事を長瀬君に説明してあげて頂戴」

「うっす。じゃあ行きましようか兄貴」

「アツハイ」

状況をうまく飲み込めてなくとも呼ばれば身体が反応してしまうのは社会人の性か。はたまた社畜の性なのか。

「えっと、よろしくおねがいます。イスラさん、で良いですか？」

「好きに呼んで欲しいっす。それと兄貴は俺の上司になるんでダメで良いっすよ」

「私はこの天部に来たばかりです。イスラさんは言わば先輩に当たるかと思うのですが」

「俺は気にならないっすね。むしろ堅苦しくされる方がイヤっす」

まあ、相手がそういうなら別にいいか。取引先って訳でもないし。

「それでなんだけど、なんで俺がイスラさんの上司になるの？」

「できれば“さん”付けも止めてほしいっすね」

「あ、うん。わかったよ。イスラ」

「それでいいっす。兄貴は天使の九位階って知ってるっすか？」

「大天使とかのやつかな」

アニメだかラノベだかにそんなのが有った気がする。

「そうっす。そんな感じで天使には9の階級があるんすよ。上から順

に上位三隊の熾天使^{セラフイム}、智天使^{ケルビム}、座天使^{ソロン}。中位三隊の主天使^{ドミニオン}、力天使^{ヴァーティユース}、

能天使^{エクスシア}。そして俺を含めた大天使が所属してる下位三隊の権天使^{アルケー}、

大天使^{アークエンジェル}、一介天使^{エンジェル}っす」

「へー。大天使ってもっと上の方かと思ってた」

「大天使は階級的には下っすけど、仕事自体は結構重要なものが多いかったりするんすよ。例えば俺は神使^{しんし}と呼ばれてて守護天使課を仕

切ってるっす」

「イスラは第二柱とか言ってたっけ」

「そうっすね。神使は七柱まであって、俺はその二柱っす」

言葉遣いや格好はともかく、その神使ってやつに選ばれる実力はあ
るってことか。その神使ってのが何かも気になるな。

「ちなみに兄貴がこれから成るのは第二位の智天使ケルビムっす」

「……………は？」

大天使の上司っただけでも驚いていたのに、第二位っでもう訳が解
らないぞ。この天部のことなんて微塵も知らない俺がいきなりそん
な上位職について良いのか!?

「驚くことじゃないっすよ。イナンナの姉貴はこの天部のナンバー2
なんすから、その直下に就く兄貴もそれだけの階級が必要っただけっ
すから」

「な、ナンバー2…?」

あのボサ髪の社畜感満載な彼女が、ナンバー2だと…。

「多分なんすけど、兄貴が想像してる数倍は重要な課っすよ。転生業
務課って」

各世界の維持と発展のために生命の管理をしているって事は聞いて
いるし、その字面の簡単さに対して重そうな仕事ってのはなんとなく
く感じていた。

「転生業務課の本来の目的は『世界の管理』っす。その世界の中には天
部も含まれてるんすよ。つまり転生業務課が管理しているのは天部
で確認されている全ての世界って訳っす。それらを一挙に仕切って
いるのがイナンナの姉貴なんすよ」

もはや空いた口が塞がらなかつた。今まで地球にいくつもある国
の一つの、更に細かい都道府県の更に更に細分化された街の中の一
角。そんな小さな世界で生きてきた俺には想像もつかないほど途方
も無い規模。

「はは、ははははは……」

規模の大きさに思考がついて行かず、俺は笑うことしかできなかつた。少しどころじゃない、一体俺はどれだけ楽観的に見ていたんだ。「まあ、話が大きすぎて解らないかもしれないけど、実際に天使になれば少しは解ると思うっすよ。昇華の際に天部が持つ知識がある程度は共有されるっすから」

イスラのフォローも放心状態の俺の耳には届かず、ただただ口角を引きつけて笑っていた。

そんな俺の姿を見たイスラは「ダメそうっすね……」と呆れた声を漏らしながら俺の腕を引き、目的地である生命セフィロートの樹のある場所まで案内してくれた。

To Be Continued

第一話：死んでも仕事からは逃げられなかったみたい
です②

俺がその扉の先に入った途端、今まで魂消していた魂がスツと身体に入り込んだような気がした。

その扉の先に広がる空間はとても厳かで、それでいて堅苦しくなく、初めて来るはずなのに長年住んでいた実家のような安心感がある。

「ほら、シャキつとするっす」

「う、うん」

背中をパンつと叩かれて背筋を伸ばす。背筋の伸びた視線の先には光り輝く葉を茂らせる巨大な樹。

なるほどね。正しく生命の樹と呼ぶのに相応しいな。

「昇華の儀式の手続きはこの先っす」

いくつか渡されていた書類でなんとなくわかっていたが、手続きを踏むなんてまるで現代社会だ。おかげでファンタジー感が全然ない。強いて言えば、生命の樹の周りを純白の翼を持った人が飛び交っているのが幻想的か。

それも、手に持った書類と生命の樹の少し手前の役所の受付のような場所で台無し。しかも俺は気づいてしまった。あの飛び交っている天使たちは多分、仕事をしている人たちだ。つまりあの幻想的な光景は社畜達によって構成されているんだろう。都内の夜景と同じだな。

受付に書類を提出した後に、また別の書類に署名をしていく、そんな事務的な作業を終えると、受付のその先、生命の樹の根本へと促される。

「じゃあ俺はここで待ってるっすから、サクツと行って来るっすよ」

「…わかった」

なんとなく、そうじゃないかとは思っていた。生命の樹はこの天部を含めたすべての世界に影響を及ぼす重要なものだし、誰でも気軽

に近づいて良いものとは思えないから。

受付の人もついてきてくれるわけでは無く一人で樹へと近づくと、次第に見えてきたのは重厚な椅子と数人の人影だった。その椅子に座っているのは後光を纏いし一人の男性。まだそれなりに距離があるというのに瞳はこちらへ向いており、すでに視線は重なっていた。その周囲には純白の翼を生やした男とも女とも取れるような顔立ちの天使が静かに佇んでいる。

およそ15mほどの距離で相対し、立ち止まると、

「そのまま、我の下まで来るが良い」

と言われたので、気を引き締めながら眼の前まで移動し、傳く。眼の前に居るのが天部のナンバー1であることは間違いないだろう。

じっくりと見たわけではないが、それなりに髭もあり目つきも鋭い。格好もキトンを着ているためなんとも神様らしい姿に見える。

「面をあげよ」

「はい」

「ふむ、其方が長瀬啓示だな。良い目をしておる。仕事人の目だ」

「ありがとうございます」

「早速だが、昇華の儀を始めるとしよう。長瀬啓示、我の後ろにそびえる生命の樹に触れよ」

「はい」

特に話をするでもなく、彼に言われるがまま椅子の裏から続く祭壇へ登り、薄く輝く木の幹へ手を付ける。

「其方の新たな『生』に祝福のあらんことを！」

「っ！」

髭の男性がそういった瞬間に俺の身体は眩い光に包まれた。

反射的に目をつむり光が収まるのを待つ。やがて光が収まり、俺は静かに目を開ける。すると――

「……これは」

特に、何か変わったような感じはなかった。姿形は何も変わっていないように思える。少なくとも翼は生えてないし、天使の輪のようなものもない。

凄い力を感じるとか相違会ったことも全くなかった。

あれ？失敗しました？

「えっと、これで終わりですか…？」

「そうだ。儀式は成功した。君の魂は無事に天使へと昇華した。自覚しにくいだろうが肉体も得ている。それと幾許かの知識が宿っているはずだ。これは自覚できるんじゃないかな？」

そう言われてみると、確かに先程まで知らなかった知識があった。まるで元から知っていたかのように馴染んでいる。

例えば、この祭壇のある場所。ここはデミウルゴスの間と呼ばれているようだ。生命の樹に直接触れることのできる空間であり、重要な儀式などを行うためにある。また目の前にいるちよい悪オヤジ風なキトン姿の神様の名前も解った。彼の名はブラフ・アトウム、この天部の最高責任者であり、いわゆる最高神として君臨しているようだ。

経験の伴わない、いつ覚えたのかもわからない。知識だけが記憶にある感覚がなんとも気持ち悪さを与える。

「時期に慣れるだろう。今は便利な身体を得たくらいに思っておけば良い」

と言われても、そもそも今までも肉体がないなんて感覚すらなかったからなあ。今だって天使になったって感じはしない。と言うかするわけがないじゃないか。まるで狐につままれたような気分だよ。とは言え、世話になったことに変わりはないので一応儀式に対する礼を告げて、デミウルゴスの間を後にした。

イスラの付き添いの下、転生課の執務室に戻ろうとする間に、腕をつまんでみたり頬をつねってみたりしてみたが、やはり新しい肉体を得たという実感は得られないままだ。

「おかえり」

部屋に入ると、イナンナは視線だけで部屋に入った俺を確認すると再び手元に戻し、

「どうかしら？新しい身体は」

そういった。仕事する手は止めずに。

「正直に言うと、何が変わったのかがわかりません」

「ああ、それは当然のことよ。長瀬君は生まれながらの天使ってわけじゃないからね」

イナンナは見ていた書類を脇にずらすと、一旦背伸びをして座り直してから、「長瀬君も天使になれたことだし話すよ」そう前置きして天部の事や天部に住む者の事を話した。

俺も立ちっぱなしではあれなので手近な椅子に腰掛ける。ちなみにイスラは俺を部屋の前まで案内したことで役目を終えたと言うことで元仕事へ戻っている。

「ある程度は知識として頭に入っていると思うけど、改めて説明するわね。世界を管理するための世界であるこの天部の事を」

長い、とても長い話が始まった。

「まず、この天部というものがどこにあるかというところから始まるのだけど、長瀬君は多元宇宙ってわかるかしら？」

「なんとなく、ですが。平行世界をもっと大きく、遠くから、文字通り宇宙全域を指して複数の似たような宇宙があるって論じられてるやつですよ」

「その通りよ。宇宙はいくつも存在する。長瀬君の住んでいた地球に似た世界もごまんとあるわ。そしてそれらの世界は全て宇宙ごとの法則に則って成り立っているの。：例えば、長瀬君の居た宇宙では例え別の銀河だろうと、同一の宇宙空間の中にあるならば地球と同じ物理法則が通用するのよ。でも平行宇宙では違う。力の発生、音の伝わり方、何もかもが違うわ。そんな多元宇宙で世界は創られてるのよ」

「……理解力のなさを露見させるようで申し訳ないのですが、それが天部のある場所とどうつながるのでしょうか？以前に天国と例えられていましたが、文字通り“天”にあるわけではないのですよね？」

「うーんとね。誤解しているみたいだけれど、この世界は天部じゃなくて天界っていうの。その中の天部って部署がこの場所よ」

「え……？」

俺は思わず「ここが天部だと言ったのは貴女じゃないか」と言いそ

うになった。だが、それを飲み込むのが大人つてもんだ。理解しそこねた私の落ち度なのだから。

「…まあいいわ。続けるわよ。…とにかく多元宇宙の外にあるのよ。だからどの宇宙の法則とも違うし、どの世界にも干渉することができると」

「いまいち解らないのですが、この天部は全ての世界の指標というか、標準となってるー…とかですかね？」

「近いとも遠いとも言えないわね。天部は全ての世界に適合出来るの、各世界が天部を基準にしているのではなく、天部が各世界に合わせられる。まあ、全ての中道にあるって意味では標準と呼べなくもないかもしれないわね」

理解をしようと努力してみたが、ここまでの話で俺の頭に思い浮かんだのは、某国民的小さな魔物を捕まえるゲームに登場するスライムのような魔物の姿だけだった。

そのものである本質は変わらず、それでいて何にでも合わせられる。俺にはそれが存在の不確かなものに思えた。

「その点は大丈夫よ。天部は何物にも交わることがないし、侵されることもないから安心していいわ」

この人、いや女神様はたまに人の心を読んでくるよな。疑問に答えてくれるのは良いんだけどさ。

「—だからこそ天部に時間の流れと呼ぶべきものは無いし、各世界の影響も受けられないから天部に住むものは身体が朽ちることもないよ」

「朽ちることがないって不死身ってことですか？」

「似たようなものね。私達、天部に住む者は天部に居る限り食事はいらぬ。水さえもね。睡眠だって必要がない。身体は常に正常な状態が維持されるし、歳を取ることもない。確かに不死身みたいなものね。でも—」

イナンナは相変わらず俺の方を向いている。でも、この時の目は少なくとも俺を捉えていなかった。俺より後ろ、遙か遠くを見ている。そんな目をしていた。

「どんなに身体が正常でも、精神まで正常になるわけじゃない。生き
てる以上はストレスから逃れることはできない。特に私達は寝たり
食べたりする習慣がないから尚更ね。かくいう私も何百年と寝てな
いけどね」

何百年つていうのは地球で計算した場合の時間ね。と付け加えら
れた。最後の一言は冗談めかした口調だったが、とてもじゃないけ
ど笑えなかった。

何百年も寝てないとか、考えることを脳が拒否するレベルだ。

「とんでもない世界だろう?」

「え、ええ…。とても」

「そんなとんでもない世界なら、住んでる人だつてとんでもないのよ。
私やブラフマンは『ヒト』の世で『神』として崇拜されているわ。ち
なみに天使も一部の者は崇められてるわよ。イスラとか。：はい、こ
ここで問題。イスラの性別はなんだと思う?」

「え?」

唐突に与えられた問題に少し焦りながら考える。イスラはどこと
なく童顔で中性的な顔つきだったが声質や体格は男としか思えな
かった。身長だつて170cmある俺より高かったし。

「男ではないのですか?」

「はい、残念でしたー。不正解です。答えは無性ですー」

真面目な顔つきのまま、手でバツテンを作るイナンナに少しだけイ
ラつとしたが、なんとか抑えて理由を促す。

「信仰によって姿形がある程度決まっている神と違って、天使には決
まった姿が無いの。だから自分の意思で男にも女にもなれる。じゃ
あ天使がどうやって姿を保っているかという点、これも意思なのよ。
大抵の場合は生まれた瞬間に目に写った姿が自分の姿となり、その
後、自我が強くなるにつれて個々の姿になっていくわ。だから長瀬君
みたいに元々人として姿を持っていた者は天使になっても変化を感
じられないのよ。無意識に、元の、ヒトと同じ姿を取り続けるからね」
それが変化の感じられない理由。

「その気になれば長瀬君も姿形を変えられるわよ。例えば、そうね…」

とりあえず女形になってみたらどうかしら?」

「え?」

「だから、姿を変える練習に女形になってみなさい」

そんな簡単に言われても。

「どうやったら良いですか?」

宴会えんかいの盛り上げ役で仮装かそうくらいはしたことも有つても変装へんそうすらしたこと無い俺には姿を変えるなんて想像そうぞうもつかないよね。とはいえ、イナンナに見られている手前てまえやらないわけにもいくまい。

とりあえず、女形と言われてもいまいちイメージが湧かなかつたので、目を閉じながら好きな女優じょゆうさんの姿を思い浮かべて、必死に頭の中で『成れ』と唱え続けてみた。すると、次第に身体に違和感がで始めた。

わざわざ見たり触るまでもなく、明らかに胸が大きくなり着ているワイシャツに潰つぶされているような感覚がある。そして、体格たいかくも一回り小さくなったのか、服が少々大きくなったように思えた。

「出来てるわよ」

「みたいでーっ!?!」

みたいですね。と答えようとした俺は自らの喉のどから出た声に戸惑とまじった。

明らかに男のものではない、少し高めで大人っぽさを感じる女性の声。俺はこの声に聞き覚えがある。あのたまにTVで見かける女優さんの声だ。鏡かがみを見たわけではないが、間違いなく俺は女優さんの姿になっているんだろう。

しかし驚いた途端にまた身体が変化した。それが慣れ親しんだ自分自身の身体なのはすぐに解った。

「天使は本来、雌雄しゆうを持たない。もしくは雌雄混合な存在なのよ。今でこそ自分の意思で姿を持っているけれど、昔は相対あいたいしている相手に合わせた姿になることが多かったわ。当然、姿を変えられるから、長瀬君が想像する天使のように翼を生やすこともできる。で、なぜ変わったか判らないって事についてはね。人として過あやぎしてきた長瀬君は記憶の奥底おくそこで自分の姿を覚えているからなの、特に意識して姿を

変えようとしていない限りは、素の人としての姿を保つのよ。だから天使になったからって姿は変わらなかったし、天使としての力は目に見えるものじゃないから何も変わっていないように感じたって訳よ」
「えつと…?」

「つまり長瀬君の身体は長瀬君のままだから大丈夫ってことよ」

俺は決して頭が良い方ではなかったけれど、普通に中堅大学を卒業する程度の頭脳は持ち合わせている。∴はずだが、解ったのは天使は雌雄同体で変身できるってことくらいだった。

「申し訳ないけど、話をすすめるわね。次はこの転生科の使命について、業務内容には軽く触れたと思うのだけど覚えてるかしら?」

「生命の樹セフィロートが分けることの出来なかった魂を手作業で仕分けて、転生の手続きをする。でしたっけ」

「そうそう。それがこの転生科で一番量の多い業務よ。長瀬君もしばらくはこれだけをやってもらうことになるわ。とはいえそれはあくまでも業務の一端、転生科の主任務は別にあるわ」

「それが各世界の管理…ですか?」

「この天部を含めた。ね。各世界の管理を担当してる奴らから文明、生態、環境などあらゆる報告が上がってくるの。それを元に生命の数を調整したり、他世界からの魂を送り込むことで文明に刺激しげきを与えたり、世界に対する驚異きょういに対抗するための力を与えたり、過度な力の抑制よくせいをしたり。世界の維持、発展のために必要なことの大半を転生科が担っているわ」

「ちよ、ちよつとまっけてください!いくら時間の概念がないと言っても、そこまでの業務をこなすには人が足りなさすぎませんか?」

このオフィス(?)にあるデスクは三つだがイナンナの座っている以外の二つに関しては書類棚が置かれていたりで使用できるような状態にはない。だから俺が始めに来たときからここはイナンナ一人の部署だと思っただし、それにイスラもイナンナが一人で切り盛りしているって言うていた。

「あと二人居るのよ。ただ、その二人はデスク業務じゃなくて実際に各世界おもむに赴いて直接的に管理業務を行っているから、業務室ごには滅多

に出来ないのよ。殆どは念話ねんわでやり取りしてるからね。私は責任者だから基本的に業務室に居なければならぬから、他の二人には頑張ってもらってるのよ。まあ、そのうち会う機会もあると思うわ。この業務室で行うのは転生者管理おもが主だから大丈夫よ。現に私一人でもやれているしね」

でも前にいつ休息を取ったか覚えてないみたいなこと言ってますよ。たよね!?!と買ったけど、口に出すのは諦めた。

寝なくても食わなくても死なないなら休息がなくても問題は無いってことだし、イナンナはもう病気の域に居るのは間違いないと思っただから。

「まあ、精々頑張って頂戴。私が少しでも楽できるように」
「最後の一言が余計ですよ」

その後は天部の仕組みに関する話をサラッと流すように話されて、そのまま俺は業務開始となった。

どうやら天部では働いた業務量に対して報酬がもらえるらしい。報酬はポイントとして個人の生体情報に蓄積ちくせきされていき、ポイントを使用することで各世界の金銭きんせんを手に入れられるとの事。仕事が休みときは各世界に降りてある程度の自由行動が許されるので、その際に使う路銀の手法だそう。

ただ、俺らはほぼ仕事詰めになるのでポイントは貯まる一方になると言っていた。なので詳しい説明をしても仕方がないと。

それと俺らの業務が無くなることもあるそう。各世界の管理者による管理が甘かったり、杜撰ずさんだったりすると罰として一定の間、転生科に来て業務をこなさなければならぬらしい。イナンナはその期間を使って各世界を飛び回ってる二人の部下と会って業務の進行状況の詳細を聞いたり、トラブルがないか確認しているらしい。場合によってはイナンナ自ら手を下すこともあるとか。そら休息なんて取れないわけだと思っただけれど、これも口に出すのは諦めた。それより今は休息云々よりも、目の前にある書類の山を片付けるほうが先決せんけつである。

次々と運ばれてくる書類を善悪で仕分け、一つ一つ手続きして、生

命の樹に流していく。どれほどの量をこなしたのかは考えないことにした。

イナナナの言っていた通りで身体的な疲れは一切感じないので、心を無にしてひたすら書類と格闘かくとうしていく。

これが俺の新たな天使生の始まりだった。

To Be Continued…

第二話：派遣業務もやらなきやいけないらしいです

時間の感覚なんて遠の昔に消え去り、ただ俺は目の前の書類と格闘していた。

常に加え続ける書類にキリなんてものは無く、疲れることも無い身体のお陰もあって、休憩すら取ること無く働き続け、気づけば、イナンナとも仕事の事くらいしか話さなくなっていた。初めこそ聞きたいことがごまんと有ったが、地球で数えたとして大体一ヶ月、730時間もあれば流石に聞くこともなくなる。

ちなみに俺は一応、死ぬ前に持っていた腕時計を複製して使っている。これは西暦で年月日をデジタル表示してくれるもので、一月経つたと理解かつたのも、この腕時計が俺の死後も止まらずに時を刻み続けてくれたためだ。この時間の概念がない世界での指標とできる腕時計は俺にとつて金銀財宝よりも価値がある。

そういえば、この時計は初任給に喜んで衝動的に買ったブランド物の時計なんだよね。毎日酷使してたのに俺が死ぬまで壊れずに動いていてくれたんだな。

そう思ったらなんだか愛情すら感じてきた。なんか可愛いな腕時計。

……何を言っているんだ俺は。

「長瀬君ちよつと良い？」

くだらない事を考えた自分にため息をついていると、不意にイナンナから声をかけられた。

「はい。なんででしょう？」

「私が呼び出した相手がそろそろ来るから、適当なところで作業を止めてもらえるかしら。長瀬君にも聞いてほしい話なの」

「自分にも聞いてほしい話…ですか。わかりました」

作業を止めてまで聞いてほしいって事は俺にも関係のある大事な話なんだろう。

俺は言われたように手元の書類を最後にして作業を中断し、大きく背伸びをした。やはり肉体的な疲労は無くとも、精神的な疲れは感

じているようだ。

そんな俺の仕草を見ていたイナンナがくすくすと笑う。

「やっぱ長瀬くんでも疲れるのね」

「感覚的には全然大丈夫なんですけどねー」

「休ませてあげたいんだけど、もうしばらくは厳しいのよね…。無理しない程度に頑張って頂戴」

「まだまだ無理な感じはしないんで大丈夫です」

「それは大丈夫とは違う気がするのだけれど…」

頭も痛くならないし意識も飛ばないし俺は問題ないと思っ
ているのだが、イナンナ的にはそうじゃないようだ。眠気の限界が来て
無意識下で作業し始めてからが本番なんだけどな。

「やっぱ長瀬君は普通じゃないわね。流石だわ」

「不思議ですね。褒められてる気がしません」

ーコンコン

不意に、いつもの天界の役人共のノックとは違う丁寧な音が室内に
響いた。

「来たみたいね。入って良いわよ」

イナンナが扉の向こう側へ声を飛ばすと、扉はゆっくり開けられて
一人の女性が「しつれいします」と言いながら転生課の部屋へと入っ
てきた。

役人共とは大違いだ。なんと言っても奴らは腰を低くして、そそく
さと入ってきたと思っただらそそくさと書類を置いて出て行ってしま
う。それが奴らの仕事だから仕方ないといえば仕方ないのだが、書類
を持ってこられる俺からすればちよこちよここと出入りするの
は目障り極まりない。

入ってきた女性は、やや体のシルエットが隠れるニットのセータ
に、もこもこした上着を合わせた格好をしていた。ファッションには
疎いので自信は無いが、確かボアジャケットとか呼ばれるタイプの上
着だったと思う。

俺もニュース番組とかバラエティ番組は仕事の合間に見ていたし、
営業などで外回りしていれば道行く女性に目が行くことも有った。

だからこそ言える。この人(?)は地球を、それも日本を知っている。

「久しぶりね。イザナミ」

イナンナの言葉に女性は、

「本当に久しぶりわね。でも出来れば転生課以外で再会したかったわ」

そう返した。

「イザナミ」聞いて俺は納得した。

確認のためにイナンナに念話を使つて、

『もしかして、この方は伊邪那美命さんですか?』

と聞くと、イナンナから肯定の言葉が返ってきた。

「長瀬クンは初めましてになるわね。どうやら私が誰だか気づいたみたいだけど、とりあえず自己紹介させてもらうわね」

ナチュラルに名前を呼ばれたんだけど、神様クラスつてみんな読心持ちなの?」

「私の名前はイザナミ。地球では伊邪那美命とか黄泉津大神なんて呼ばれていたわ。今は天界の現界管理部にある地球管理課の責任者をやっているの。後、駄兄にイザナギつてのが居るわ。よろしくね」
「ご丁寧ありがとうございます。改めまして、私は長瀬啓示と申します。一度は死んだ身ですが、イナンナの温情により天使の第2階位へ生まれ変わりを果たし、現在、この転生課で働かせていただいております。以後、お見知りおきの程をよろしくお願い致します」

「お、おお…。めっちゃ丁寧じゃん…。え、長瀬クンつてそういうキャラ?」

イザナミは俺の挨拶にやや慄き、イナンナへ言葉を飛ばした。

「社畜が染み付いてるだけでしょ。イザナミは多分、長瀬君がこれからとても世話になると思うから、そんな堅苦しく話していると互いに疲れるわよ。せめて私を相手に話すくらいには口調を崩さない」

「あ、はい…」

つい生前の癖で話してしまったのだが、逆に相手に威圧感を与えてしまったらしい。

「てか、きつき第2階位とか言っただけでなかった？」

「あ、はい。第2階位、ケルビム 智天使を頂きました」

「硬いかたの嫌きらいだからタメでいーよ。…でもそっかそっか、元気そう
安心したよ」

「さ、流石にタメで話すのは恐れ多いですよ！」

だってイザナギとイザナミと言えばゲームとかでもよく目にする
くらい有名な神様だぞ。俺みたいな一般いっぽんピーポーが気軽きがるに話してい
い相手とは思えない。が…。

「私が良いって言ってるんだから気にしないでいいの」

そう言われてしまえば、それまでだ。ここで意固いこじ地に敬語けいごを貫つらぬくのは却かえって失礼しつれいになる。

「…わかったよ。よろしくイザナミさん」

「うんうん。それでよろしー！」

なんか、やけにラフな人…じゃなくて神様だと思った。こう言っ
てはあれだが、とてもギャルっぽい。喋り方も格好も俗ぞくに染まっ
てる。

「…で、挨拶は済んだかしら？本題ほんだいに入りたくないのだけど」

一通り話に区切りくぎりが付いたところで、イナンナが割り込んできた。

そうだ。まさかイザナミも挨拶をするためだけに来たわけじゃあ
るまい。わざわざ仕事の手を止めさせてまでイザナミを迎むかえたのに
は理由があるはずだ。

「忘れてた。今回の始末しまつについて話に来たんだった」

「始末？」

あまり聞いて嬉うれしくない単語たんごに眉根まゆねを寄せながら聞き返す。

一般的にも何かを失敗した時などに「始末をつける」など言うた
め良いイメージがない。俺の中で始末と言えば始末書が浮かぶ。

理不りふしん尽理由で書かされ、無駄な時間を過ごすことで業務が溜ま
り、仕事が遅いと更なる理不りふしん尽を生む悪魔あくまの代物しろもの。

「怒らないで聞いてほしいんだけど」

「は、はい」

イザナミはやや神妙しんみょうな面持ちおもてで俺へ向き直ってきた。

先程までのキャピキャピした雰囲気はなくなり、真剣味が伺える。あまりにも真剣な声と態度に俺まで釣られてしまう。

「長瀬クンの死亡は予定外だったの」

「それは知ってる」

「だから転生課に連れてこられたんだし。」

「あーえっと、そうか。イナンナから言われてるんだもんね。でもそうじゃないのよ。長瀬クン、貴方が死んだのは完全に私の手違いなの。殺したと言い換えてもいいわ」

なにそのよくある転生物作品みたいな台詞。

「イナンナから聞いてないかしら？本来の死は数年先だったって」

「あー聞いた覚えはあるな」

「まだ死ぬ予定ではなかった云々は会ったばかりのときに言っていたほうな気がするな。てつきり数年後には過労死するって意味だと思っていたが、話的に違いそうだな。」

「実は、長瀬クンには流し雛になってもらっていたのよ。流し雛ってわかる？」

「聞いたことはある気がするけど、どんなものかまでは知らないな」

「そっか、えつとね。流し雛って言うのはね。祓い人形と呼ばれる依代に自身の厄などの穢れを移して川に流して清めるっていう日本にある儀式の1つなのよ」

「んん？あれ、俺が流し雛ってことは…」

「雛には厄や穢れを移すんだよな。それって—」

「気づいた？そう、君にはあの一帯にある厄を集めてもらおう役目を与えていたの」

「だからいずれ、祓い人形と同じように川に流して清める必要がある。それが私の予定だと三年後だった。でも、予定外に君が死んでしまったせいで長瀬クンに集まっていた厄がバラまかれちゃったのよ。大変だったのよ。後処理。さつきまでやってたんだから」

「え？俺が責められるの？」

てつきり手違いで死ぬことになってごめんっていう異世界物の定番が来ると思ってたのに、そんな空気じゃないぞ。

「ほんと、ちよつと目を離れた隙に死んじゃうんだもん。大事故にも程があるわ」

「なんか、すみません」

「長瀬クンが謝ることじゃないわ。あの愚兄が少しでも働いていれば回避出来ていたでしょうし。そもそも長瀬クンは管理される側に居たんだから仕方ないのよ。むしろ私のほうが悪いと思ってるわ。ちやんと管理していれば後三年は人として生きられたのだから」

悪気は感じないし、多分だけど「悪い」って言葉も本心で言っているとは思う。だからこそ解るのだが、人っ子一人死んだって神様は何も気に病まないんだろう。

所詮は神様なんだし、当然といえば当然か。

「で、私が何しにここへ来たか、だけど。長瀬クンの件でね。管理不手際の罰を受けに来たのよ」

「罰だなんて言っていないぞ。私は転生課の業務に関わることで、管理の重要性を再確認してもらっただけなんだから」

イザナミの言葉にすかさずイナンナが反応するが、確かに転生課の業務をやらされるって言うのは罰と思われても仕方ないと思う。

なんと言ってもひたすら単調で、膨大な書類の山と格闘するだけだからな。

「…まあ、そういう事もあってね。長瀬君にはしばらく別の仕事を頼みたいのよ。今の仕事はそのままイザナミに引き継がせればいいわ」
「うあー！愚兄ちゃんにやらせたい！私ばかりこんな目に合うのは理不尽だ！」

「この子は放つといていいから、とりあえずここに行つて頂戴」

叫ぶイザナミを尻目に俺はイナンナから簡易的な地図の書かれたメモを渡されたのだった。

……To Be Continued

第二話：派遣業務もやらなきやいけないらしいです②

俺は渡されたメモを頼りに天界を歩き、天部から現界管理部へと来ていた。

管理部というのは天界にいくつか存在している部署の1つだ。

イナンナの話し方が悪いせいで俺も勘違いしていたのだが、天部というのはあくまで部署の1つであり天界の一部らしい。それは天使としての入れられた知識の中にもあった。

天界は三個の部署と二個の部門で出来ており、部署は天部、現界管理部、資源管理部、そして部門は魔界部門、仙界部門に分かれている。

どうでもいい事なのだが、何故か現界管理部ではなく現界管理部と呼ばれているのが気になる。

今来ている現界管理部は、天部にある大本の生命の樹から伸びた根から、新たに生えて生まれた世界を1つ1つ管理している部署で、地球もそのうちの1つだ。

世界ごとに課があるのだが、全体でいくつあるのかは天使の知識にもなかった。ただバカみたいに多いということだけは解る。

「……んか」

幾多にある扉の群れから「エルラド管理課」と書かれた扉を探し出し、四回ノックした。このノックの数は就活の際に覚えたのだが、プロトコール・マナーと言って「初めて訪れる場所」や「礼儀が必要」な場所では四回以上がマナーとなっているのだ。

案内とかなにもないし、扉はどれもこれも似たりよったりだし、本当に探すの苦労したわ。

「はいはいー!」

中から元気な女性の声が聞こえ、扉が開け放たれた。

「どちら様ー?」

出てきたのは明るい茶髪をした長髪にキトンを着た女性でどことなく生命の樹で会ったトマスに似た雰囲気を感じた。

「私は天部の転生課から遣わされた。ながせー」

「あー！イナンナさんの所の子ですね！ほんつと待ってたよお！とりあえず入って入って！」

「えっ？えっ？」

挨拶すら遮られ腕を握られたかと思えば、次の瞬間には部屋に拉致されていた。

「いやー待ってました！あ、私はエルラドの管理者を任されてるブルーデイカって言います！よろしくね。それでなんですけど、実はエルラドがもう結構、余談を許さない状況が続いてまして、人族と魔族で戦争待ったなしの一触即発なんですよー。なので、早速行ってもらって良いですかね？とりあえず、勇者を探し出して人族の陣営を引かせてほしいんです。魔族は元々保守的な感じなので人族さえ引かせられれば戦争は回避できると思うんですよ。『戦争なんて勝手にやらせとけ』って思いますよね？私も普段どおりの状況であるならそうなんですけどお、ちよーつと今はエルラドに割ける資源が足りてなくてですね。戦争を起こされるとエルラドが資源不足になりかねないんです。ですので転生課の方には申し訳ないんですけど、なんとかしてくださいー！」

「長え。あと長い。」

とにかく戦争を起こされると面倒だからなんとかしてこいってのはなんとなくだけど解った。

でもこれって転生課の仕事なのか？世界の維持と管理は管理部の仕事だったと思うんだが。

「本当なら私が直接下界に降りて手を加えたいんですけど、私は世界に直接的な干渉を行える権限を持っていないので行使できる力が制限されちゃうんですよー。なので権限を持つ転生課の方にはホントト申し訳ないんですけどやってもらうしかなくてえ…」

「それで俺が派遣されたのか…」

「はいー。ひとまず勇者の故郷であるギューの里付近に…」

「ちよつとまってもらっついていいですか？上司に確認することがあるので」

権限については天使の知識になかったため、俺は権限についてイナ

ンナに聞いてみることにした。

通話料無料、圏外知らずの鮮やかな通話が可能な念話はチートだと思う。

『世界に干渉する権限について、ねえ。本当に天使としての知識にはなかったの?』

イナンナに確認されてもう一度、思い出そうとしてみるがやはり俺の記憶の中にはなかった。

『はい、今まで天使の知識に含まれる言葉は聞いたり考えたりすれば自然と頭に浮かんだのですが、今回の権限に関することはなにも』

『まあ、世界への干渉って基本的に神の仕事で天使は転生課とか守護天使みたいな例外的存在しか機会がないから仕方ないのかもね』

『さつき、エルラドの管理者が直接下界^{おっしや}について仰つていたんです。現界管理の仕事はわかりませんが、下界に降りる必要があるんですか? なんか天界から力を使つてーとか出来ないんですか?』

転生物の作品でそういうの見たことある気がするんだけど。

『普通はそうするけど、今回は勇者っていう一個人と話して勇者に戦争を止めてさせてほしいってことなんでしょ? 確かに天界から教会や王にお告げを出すことは出来るのよ。でもその方法は資源も食うし、何より勇者個人にとって目的に沿わない。だから下界に降りる必要があるんじゃないかしら』

『…でもその権限が無いからって話でしたよね』

『個人的に下界へ降りて遊んだりすることは許されているのだけど、女神や天使として天界の仕事をするのは禁止されているのよ。そしてその防止策として能力に制限がかかるようになるの。念話とか自身の転移とか世界に合わせた能力は許されている。けれど、管理に関わるような力は一切使えないわ』

イナンナは話を区切るように一呼吸おいてから次の言葉を紡ぎ出した。

『でも転生^私業務課^達は違う。転生課はあらゆる世界の管理に対する最上級の権限を有してるの。なぜだか判るかしら?』

『えつと…。天部として確認している世界の全てを管理するにはそれ

くらしいの権限が必要とかですか…?』

『あれ。私、長瀬君にその話したかしら…?』

『イスラから聞いたんです』

俺の答えにイナンナは納得したように「ああ」と呟いた。

『その通りよ。各世界の発生や消滅しょうめつを含め、あらゆる物の生しょうと死しを扱うのが私達、転生部なのよ』

…なんか俺が思ってた数倍は凄い仕事何じゃないか？

『安心していいわよ。世界の発生と消滅クラスの話は神じゃないと関われないから長瀬君には関係ないわ』

『ちよーつと聞きたいんですけど、イナンナさんって最後に休んだのいつですか？言っておきますけど休憩きゅうけいじゃなくて完全なオフのことですよ』

『オフの日がいつだったかなんて覚えてる訳ないじゃない』

そんな偉そうに言うことではないと思う。

『とにかく、転生課は下界に降りても自由なことが出来るから、何かしら問題が起ると転生課にお声がかかるって訳。本当は転生課のやる業務じゃないんだけどさ。うかつに権限を与えると勝手なことをされて、かえって問題ごんごとが増えるのよ…』

『なるほど…』

「—あのー。聞いてますっ。」

「は…。」

少し長く話すぎたのか、目の前にいる彼女が少し強めの口調で話しかけてきた。

俺はイナンナに『すいません。現場の者との話に戻りますね』と伝えて目の前の彼女に向き直る。

「とにかくもうギュー村に送りますから、あまりぼーつとなさらないでくださいね。とりあえずお伝えした通り、勇者に接触して戦争を止めるように説得してください。ではお願いしますね!」

「は…え?…ちよ、まっ—」

よくわからないまま俺は光に包まれた。

ギュー村ってなんだ。勇者に接触って何のことだ。

文句を言いたくともすでに光の中に居る俺は何も出来ず、ただただ眩しさに目を細めて状況を受け入れるしかなかった。

しばらくすると光は目を開けても大丈夫な程度に収まり、少しずつ目を開けるとそこには一面の草原が広がり、しばらく感じていなかった風が頬を撫でるように吹いていた。

「……素晴らしい景色だけど、ここどこ……?」

あのぶーなんちゃらとかいう女神はギュー村とか言ってた気がしたが、見渡す限り草原でありとてもじゃないが村があるようには見えない。

人に訪ねようにもこんな草原に人が居るわけもなく、俺は途方に暮れてため息をついた。

とりあえず、少しだけ高くなっている丘の上を目指し歩きながら、俺は先程のことを思い出していた。

もしかしての話になるが、あの女神様は俺がイナンナと話している間も説明し続けていたのかもしれない。俺は上司に確認する事があるとは伝えたつもりだが、そもそも彼女はあまり俺の話聞いてなかったし上司と話す旨も伝わっていなかったとしても不思議ではない。

……だとしてもいきなりこんな酷いと思うが。

「に、しても……こんな気持ちは久しいな……」

天界には風とか気温のような概念はなく、ただただ空間が広がっているだけ。生活臭や埃の臭いすら存在しないのだ。

清浄な空間が広がっているとさえ聞こえは良いが、変化も刺激もなにもない。無菌室の方がまだマシだろう。

それがここでは草の匂いが花をくすぐり、そよぐ風によって服がなびく。

ただ埃とコピー用紙とコーヒーの匂いがした会社とも、コーヒーの匂いだけが充満している天部とも違う。とても新鮮で清々しい。

やがて丘の上まで辿り着くと、より一層強い風が吹き抜けた。

丘の上は見晴らしがよく、先程までは見えなかったものも見えた。先程居た場所から丁度、丘を超えた先そこにあつたのは幾多のテント

と、豆粒ほどではあるものの人のような姿が目に入った。

こういう事に詳しくない俺でも村ではない事はわかる。おそらくは野営地で間違いないだろう。

もしあれが俺の想像通り野営地だとすると、あれは人族か魔族の野営地つてことになる。そんなところにスーツを着た男が近づくなんてのはあまりにも怪しすぎる。いきなり攻撃されたっておかしくない。

俺はなんとなく嫌な予感がしていた。ここは見晴らしの良い丘の上であり、こちらから丘の下の陣が見えていると言うことは、つまり向こうからもこちらが見える位置に居るということだ。

それに気づいた俺はすぐさま身をかがませたが、もう遅い。陣の方から大きな鳥のような生物が飛び上がったのが見えた。

更に、地上からも馬のような生き物に乗った騎馬隊らしき存在がこちらを指して陣から出てきたのだ。

やばい。すぐに気づいた俺は、慌てて起き上がり奴らが来る方とは逆に走り出す。

ずっと運動していなかった身体は少し走っただけですぐに重くなり、脚にはすぐに乳酸が溜まっていく感覚がした。

走りながら後ろを見ると既に先程まで居た丘の上まで鳥が来ており、こちらを捉えていた。当然だ。緑しか無い場所で黒いスーツを着ているのだ。隠られるわけがない。

「やばいやばいやばいやばいやばいやばい!!」

見間違いないやなれば鳥のようなやつはトカゲのような姿に見えた。翼竜つてやつだ。勇者の居る世界だ竜が居たっておかしくない。

天使が地上で死んでも天界に戻るだけだっけ聞いてるけど、死にたくはない!

やがて、

「人族だな! 止まれ!!」

後ろから叫び声が聞こえた。

「ひいつ!?!」

「逃げるな! 止まれ!」

「姫を奪った人族め！逃さんぞ！」

止まれって止まる奴は居ない！

走ってる俺に対して空を飛ぶ翼竜が居ってきている。どう考えても逃げ切れないのは明白だった。

だが殺されるかもしれないと言う恐怖に支配された俺はただ走る
ことしか出来ず、息も絶え絶えになりながらも必死に。

それもこれも、全部あのぶーなんちゃらとか言う女神のせいだ。
焦ったのかは知らんが人の話を聞いてくれてさえいればいきなりお
くられることはなかったと思うし、そもそもどう考えてもギュー村
じゃない所に送り込んでるし絶対許さない。

仕事で大事なのは報連相と、仕事に対しての確実性だ。派遣業務で
違う現場に送り込んだら大変な事だぞ。

だのにこんな平原にいきなり送り込みやがって、絶対に許さない。
「つく…：以外に素早い奴め…。だが翼竜からは逃げられないぞ！大人
しく止まれ！」

もう、絶望的だった。

どうあがいたって逃げられない逃げられるビジョンが見えない。
天使らしく空を飛べれば逃げられるかもしれないが、俺には翼がない。
そうだ。翼だ。

「生えろ…：つく…：生えろ!!」

回らない頭で必死に念じる。

イナンナは意識すれば翼を生やすことも出来ると言っていた。な
らば今生やさないで、いつ生やすというのか。

ひたすら逃げたい、生えろ、飛べと念じ、そして―

「―な…：翼が、生えた!」

「ひい…：あ…：」

俺の足は地面から離れ、浮かび上がっていた。

しかしそれすら気づかぬまま足を動かして、前へと飛ぶ。…いや、
走った。

「つく…：、早い！」

俺は追いつがる翼竜を引き離していることにも飛んでいることに

も気づかず、ただ逃げるために飛び続けたのだった。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第二話：派遣業務もやらなきやいけないらしいです③

半狂乱のまま必死に飛び続け、俺が落ち着きを取り戻す頃にはどことも知らぬ場所にたどり着いていた。

空から見ているはずなのに、元いた平原はどこを向いても見えない。

眼下には森が広がり近くには岩山らしきものが少し見えるだけ、街や村は見える限りはどこにもなかった。

長瀬啓示、異世界で迷子である。

しかも――

「っつとこと……」

逃げるために必死で、無意識のうちに飛んで来たため飛び方がいまいちわからず、ホバリングすらできずにフラフラと旋回してなんとか落ちるのを防いでいる。

正直、今翼を動かしているのもどうやって居るのか解ってない。人にはない翼は未知の感覚過ぎて理解しきれない。

しかしギリギリのところまで飛んでいるものの、兵士から走って逃げ、ここまでも必死に飛んできた俺の身体は限界が近かった。

とにかく身体を休めたかった俺は落ちないようにゆっくりと高度を下げていき、久方ぶりの地面へ崩れるように着地する。

翼が大きすぎて森の中には降りられなかったので旋回しながら見つけた森に空いた穴へと降り立ったのだが、そこには神秘的な泉が広がっていた。

のどが渴いていた俺はとても透き通っていて綺麗な泉だから大丈夫だろうと根拠の無い事を思いながら泉の水を手ですくって口をつけた。

「美味しい……」

水なのに柔らかく、ほんの少し甘い気さえした。

俺は疲れ身体に染み渡らせるように泉の水を飲み、一息ついたところで疲れからか猛烈な眠気に襲われた俺は翼を広げたまま半身で横たわり、そのまま意識を失った。

啓示は気づかなかったが、泉の周りには様々な動物が顔をのぞかせており、啓示のを見ていた。

しかし、久々の運動と竜に追われる恐怖などが積み重なり疲れの限界を迎えていた啓示はそれに気づくことなく、泉の辺りで倒れてしまったのだ。

啓示が倒れて眠ったあと動物たちはしばらく様子を見ていたものの、明らかに動かない啓示に動物たちもやがてゆっくりと啓示に近づいていった。動物たちはいずれも地球に存在するような姿ではなく、言葉にするならば3メートルはありそうな青色のクマに鋭い牙を生えたヤギ、毛むくじやらの狐のようなものなど、この世のものとは思えない姿をしている。

「フツクル…」

「ぐるぐるるるる…？」

「くつくくる…」

動物たちは啓示から5mくらい離れたところで立ち止まり、顔を見合わせて何かを確認するように鳴いてから毛むくじやらの狐だけが、更に啓示へと近づいていった。

狐は啓示の顔に鼻を近づけてスンスンと匂いを嗅ぎ、身体の周りぐるぐるを回って様子を窺った後に、待っている動物たちへ向けて、「くるるー」と鳴いた。

それが合図とばかりに待っていた動物たちも啓示へと近づき、やはりスンスンと匂いを嗅いで、そして寝転がった。

大きい動物は啓示の周りに、小さい動物は広げられた翼の上などそれぞれの場所を見つけて腰を下ろすとそのまま寝始めたのだ。

そこから少し時間が経ち、啓示の周りで眠る動物たちも数匹は入れ替わったりする中、その入れ替わった動物たちの中に明らかに他の動物たちとは違う存在が混じっていた。

その存在は啓示の翼の上で気持ちよさそうに丸まって寝ていた。丸まった羊の角のようなものが頭に生えていることを除けば、その姿

は5〜6歳の男の子のように見える。

広がった翼に動物や男の子が集まって寝ている光景はとても異様で、なぜ啓示はこんな状況下で熟睡出来るのか不思議なほどだった。

「むいゃ…」

男の子は布団でもつかもうとしていているのかすつと腕を伸ばすと啓示の羽を掴んで、そのまま引っこ抜いた。

「あだあ!？」

熟睡している啓示もこれにはたまらず飛び起き――

「―っがあー!」

れなかった。

翼に乗った動物たちの重みのせいで身体を起こせずに反動で地面に頭を叩きつけてしまうが、幸いにも下は草が生えており芝のように柔らかかったため痛みはそこまでではなかったようで、頭を擦りながらも起こせる範囲で身体を起こして辺りを見渡した啓示は驚きで目を見開いた。

「痛つてえ…。え…?え?え?何?動物?え、ええ?男の子…?なにこれ…」

自分の周りに集まっている動物、なにより男の子の存在に驚きを通り過ぎたのか一瞬だけ慌てたものの、すぐさま落ち着きを取り戻し呆れたような声を出した。

「…………え、本当になんなの、これ」

啓示は考えるのを諦めたのか、間の抜けた顔ですぐ近くで寝ているらしいウサギのような丸い毛玉状の動物に手を伸ばした。

ウサギにしては少し大きいような気がするが、啓示は気にせずに乗せる。

―モフツ!

「おお…!」

―モフツモフツ!

「おおおおー!」

なんとも言えない滑らかな白く、手が沈むほど柔らかかな毛並みに啓示は夢中になってモフった。

「……くう……？」

モフられた動物がうぎったそうな声を漏らしながら顔を上げた。

「ウサギじゃ、ない……」

啓示はウサギだと思つてモフっていたその動物は白い毛並みで初めに啓示に近づいた狐だった。起こされた狐は目を細めて啓示の顔を見てから、

「くるう」

とお辞儀をしながら一鳴きして啓示のそばから離れ、少し離れたところで「くうおーん」と遠吠えをすると走り去ってしまった。

それを皮切りに眠っていた動物達が次々に目を覚まし、何故か様に啓示にお辞儀をしてから去っていく。

まだ頭の働いていない啓示は最後に去っていった大きな青いクマを見ながら、

「(昔のゲームにあんなモンスター居た気がするわ)」

などと呑気な事を考えていた。

啓示が寝ぼけているのもあるが、社畜生活が人としての危機管理能力を確実に奪っていた。

後に残されたのは眠ったまま起きる気配も無い男の子と啓示だけである。

啓示はなんとか上半身は起こせた物の、翼に乗られたままではどうしようもなく啓示は起こすか起こさないか迷ったように手を右往左往させていた。

その時である。

「その子に何をしたっ!!」

静寂が支配していた泉の畔を引き裂くような怒声が響いた。

To Be Continued

第二話：派遣業務もやらなきやいけないらしいです④

叫びと同時に何か俺の頬をかすめるように飛んできた。

シユンという風切り音だけが聞こえ、何が飛んできたかまではわからなかったが、少なくとも攻撃されたらしい事は解った。

「次は当てる。大人しくその子を開放しろ！さすれば命だけは助けてやるぞー！」

「何もしてない！俺に言われても困る！俺に戦う意志は無い！」

「嘘を付くな！天使の姿を騙る悪人め！」

「はあ!？」

勝手に翼の上に寝られただけなんだけど。というか逃げたくとも翼に乗られたままじゃ逃げ出す事もできない。そもそも誰がどこからどうやって攻撃してるのかもわからないのだ。

「開放する気はなさそうだな」

「開放するから！この子は連れて行くなり何なり好きにしろよ！」

「そうか、まあどのみち悪人を逃がすつもりもない。痛い思いをしたくなければ大人しく手を上げろ」

「くそっ！」

この世界に来てからロクなことがない。

悪態をつきつつも、正直怖くて仕方ないので手を挙げると再び風切り音が聞こえ、俺は反射的に目を閉じた。

男だつて怖いものは怖い。

何回か風切り音が聞こえた後に静寂が生まれた。ゆっくりと目を開けると俺の周りには縄のついた矢がいくつか地に刺さっており、先程までの風切り音が矢の音であることを知った。

縄のついた矢で縛り上げるつもりなのかと思うと俺は震え上がつた。そして同時に矢で射られる可能性もあることに俺は情けなくも少しチビってしまう。

「貴様、なぜ矢を弾く。大人しくと言っているだろう」

再びかけられた声は先程よりも怒りが込められていて、それはそれは迫力のある声だった。

ただ、意味がわからない。俺は言われた通り何もせずに手を上げて抵抗はしていないのだから。

「もういい、多少痛いだろうが抵抗したお前が悪いのだ」

—ビュゴ!

と先程までの風切り音が可愛く見えるような大きな音が響き次の瞬間、俺の目の前ほんの1メートルほどの所に鏃やじりがあった。

「ひえあ!?!」

明確めいかくな身の危険を感じ、情けない声を出してしまっただがよくよく見ると矢は空中で止まっており、やがてポトツと地面に落ちた。

暴力なんかとは無縁むえんの世界で行きしてきた平和な俺の脳はもう限界に達していた。具体的に言おうと、

「誰か助けてえ!!」

そう叫んでしまうくらいに。

声は上ずっており、腰は完全に引けている。十年來の親友でさえ去っていくんじゃないかというくらいの完璧なビビリっぷりを披露ひろうしていた。

『了解っス』

ふと、そんな声が響いたと同時に俺の目の前に白い光の柱が立ち上る。

眩しさに目を覆い、それでもなお恐怖で覆った隙間から何が起きようとしているかと見ようとしていた。

「ふう…。大丈夫っスか?なんか人に見せちゃいけないような顔してるっスけど」

光の柱が次第に細くなり、その中から現れた姿に俺は安堵あんどした。見慣れた金髪の童顔フェイス、そしてインパクトのつよいスカジャン。そんな格好をする奴は一人しか居ない。

「イスラあー!」

「え、なんすかそれ…めっちゃ引くんスけど…」

思わず抱きつこうとして再び翼の重みで後ろへつんのめった俺にイスラは蔑さげすんだ目を向けた。

「で、何があっ—」

イスラは言葉を言い切る前に勢いよく振り返り木々の隙間を見やる。一步遅れて矢が地面へ落ちるがイスラはそれを気にも止めずに。

「なるほど。そういう事っスか」

「いきなり襲われて！それで！」

「天使を傷つけられる奴なんて、そうそう居ないんスけどね…。それで、どうしたら良いっスか？サクツと殺しても良いっスけど」

「ここに、殺すって！それはダメだって！何か事情があるみたいだったし！ダメだよ！」

事も無げに、さもそれが当たり前であるかのように出てきた。殺す“”という言葉に俺は慌てて止める。

「まあ、そういうことなら適当に無力化して連れてくるんで、ちよつと待つてるっスよ」

そうさらつと言ってみせたイスラは、一瞬で姿を消して、言葉の通りさらつと縛り上げた人を連れて再び目の前に現れた。

「……!!、……!!」

先程まで俺を襲っていたであろう相手は光の輪つかに縛られた姿のまま、凄い剣幕で何かを叫ぶように口をパクパクとさせていた。まるで声を封じられているように。

「で、こいつはなんなんスか？」

「それは俺が知りたい…」

イスラの登場と危機からの脱却だつきやくで幾分いくぶんかの余裕を取り戻した俺はひとまずイスラに頼んで、翼の上で寝たまま微動だにしない男の子を翼から降ろしてもらった。

ようやく開放され、俺は安堵の息をついて肩を回す。翼も何度かパタパタと動かして土を払い、それから俺はエルラドに来てからの経緯をイスラに説明した。

するとイスラは少し、いやかなり不思議そうに、

「兄貴って天使になってそこそこ経つっスよね。まだ天使の力を使えないんスか？」

そう聞いてきた。

「天使の…力…？姿を変えたりするやつ？翼生これやす的な」

「いや、まあそれも確かに天使の力なんスけど、なんつーか漫画にあるような異能力つスよ。さつき俺が使った座標移動とか、コイツを黙らせる沈黙化サイレントみたいなの？」

軽いノリでイスラが指をさす先には、先程までの剣幕が嘘のように怯えた表情があつた。

先程まではそこまでの余裕がない、というより襲ってきた相手というのが怖くてよく見ていなかったが、落ち着いてみてみれば相手は女性である。しかもかなり美人な。尖った耳から察するにエルフというやつなのかもしれない。

「イスラ」

「どうしたんスカ」

「異能力についても気になるんだけど、とりあえず沈黙化？サイレントとか言つてたつけ、それ解いてあげてほしいんだけど、なんかこの人怯えて死にそうな顔してるし」

「うっす」

イスラが軽い返事を返すと同時に女性の口から、

「許してください。せめてその子だけでも、私はどうなってもいいので、本当の天使とは思わず、ごめんなさい、許して、助けて、殺さないで、悪気が合ったわけじゃないんです——」

そんな声がブツブツと漏れ出した。

「あの」

「ひゃい！ごめんなさい！許して！」

「別に殺さないから落ち着いて——」

「ごめんなさい！口答えしません！どうかその子だけでも！」

「あの、だから——」

「本物の天使様だなんて思わなかったんです！どうか！お慈悲を！」

ガタガタを震え、恐怖のせいかわ青ざめた表情で女性は額ひたいを何度も地面に叩きつけた。

「やめて、止めて！許すから！許しますから！」

いきなりそんな事をされ、俺も慌てて女性の頭を掴み叩きつけるのを止めさせる。

「なにか事情があったのでしよう？幸いにも私は怪我もしてませんか、落ち着いてください。ね？」

本当はまだ襲われたことに対して若干の怖さが残っているものの、俺は営業で培った笑顔^{つちか}を最大レベルで貼り付けて宥める^{なだ}。

女性はすぐには落ち着かなかつたものの、額を打ち付けるのは止めてくれたので手を離して、落ち着いたら事情を話してほしいと伝えた。

しばらくの沈黙が続いた後に女性はポツポツと話してくれた。

「つまり、私を人攫^{ひとさら}いだと勘違いしたのですね」

「そうです…。数日前にもレオ：その子を求めて現れて…。なんとか守ることが出来たのですが、代わりに里の者が数名さらわれました…。」

「この子を求めて？」

「レオは勇者ヘンリーと魔族の皇女キャメルの子なんです。訳有って私達森人族^{エルフ}の里で匿^{かくま}っているんです」

唐突に出てきた「勇者」の言葉に俺は眉根を寄せた。あまりにも都合が良すぎると思ったからだ。

「まさかとは思いますが、里の名前はギューだったりしますか？」

「そうですが、なぜそれを。あ、いえ、天使様ならそれくらいお見通しですよ。すいません」

ありえない。そう思った。

俺は平原から無意識で飛んできた。泉に降りたのもたままたまそこが目についたからだ。そのまま疲れて寝てしまった訳だが、目が覚めたら勇者の子が翼の上で寝ていました。しかも当初の目的であるギューの里の住民が出てくるだなんて出来すぎている。運が良いでは済まされない。

どこか作物的なものを感じる。

「ところで、この子はずっと寝たままなんですけど、病気か何かなんでしょう？」

疑念^{ぎねん}を感じながらもとにかく話を続ける。確認するのは最後で良いはずだ。

「レオは夢魔の血を引いているんです」

「夢魔というのは？」

「他者を眠らせ、夢を操る種族です。まだ力を十分に扱えない子供のうちは、睡魔の力を操りきれないのでよく眠るそうです。基本的には一度寝たら並大抵のことでは起きません。そのはずなんです…」

「何か有ったのですか？」

「今日は、急に起きたかと思っただら森に連れて行ってほしいと頼まれたんです。人攫いが現れたばかりなので駄目だと言ったんですが、頑なに連れて行けと言うので連れてきたら、ほんの少し目を話した際に姿を消してしまつて…」

「普段とは違う行動…」

「なんか、変だ。うまく言葉に表せられないけど、まるでレールの上に立たされてるようなそんな違和感がある。」

「ちよつと良いっすか？」

「これまでレオを抱きかかえたまま黙っていたイスラが口を挟んだ。」

「その勇者つてどんな奴つすか？」

「人当たりは良いと思います。我が強いわけではないですが芯もしつかりとしていた勇者と言われるに相応しい——」

「—そうじゃないっす。どこから来たのか、どうやって生まれたのかとかそういう話しつすよ」

「…ヘンリーがどこで生まれたのかは定かではありません。30年ほど前にこの森、まさしくこの泉の畔に捨てられていたのです。本人が言うには元々別の世界に生きていたそうですが、私達は戯言ぎげんことだと思つていたので詳しいことは何も」

「能力は？」

「空を自在に駆け回り、勇者の力と言われている天を操る魔法を扱えます」

「…ふうん」

いくつかのやり取りで思うところがあつたらしく、イスラは考え込むような仕草をしてから俺に、

「確認したい事が出来たんで一旦帰るっす。天使の力については念話

で説明するんで、話せるタイミングになったら教えて欲しいっス」

そう言い残して、光の柱を生み出して消えてしまった。

「えっと、何かまずいことでも…?」

「大丈夫。こっちの話なので気にしないでください」

イスラが何を調べに行つたのかはわからないので、適当に言葉を濁しておく。

「とりあえず、ずっとここに居ても仕方ないからギューの里に連れて行ってもらっても良いですか?まだいくつか確認したい事があるのですが、ぼちぼち日も傾いて来ていますし。それとも部外者は里に入れませんか?」

「い、いえ!天使様なら大歓迎です!喜んで案内させていただきます!…:それでなんですけどー、光の輪こを解れいてもらってもよろしいでしょうか…?」

女性は申し訳無さそうに聞いてきた。

「あー…。少々お待ち下さいね…」

イスラも解いてから消えてくれればいいのと思いつつ、俺はイスラに念話を飛ばして天使の力について聞くのだった。

∴ To Be Continued

第三話：転生課と勇者には深い関係があるらしいです

「あの、狭いところですが…」

「ウインス。硬いよ」

「あうっ…。ごめんなさい」

「だから硬いって」

あれから俺はイスラに助言を受けながら天使の力というものを使い始めた。

正直に言うとうイスラの助言はそこまで当てにならなくて、光の輪を解くことすら手間取ってしまった。とは言え、それも仕方ないだろう。イスラは生まれながらの天使だから天使の力なんて無意識で使える。

呼吸のやり方を人に教えてみると言われてもうまく言葉にできないのと同じように、イスラもまた力の説明が出来なかったのである。『翼を生やす時に、肌で天の力を感じると思うんすけど、その力を自分のやりたいようにコントロールするんすよ』

とか言われてもあまりわからない。まず天の力を感じるってのがわからない。翼だって半無意識下で生やしたものだし、イナンナに言われて姿を変えたときも何も感じた覚えがない。

そんなこんなで苦戦して、光の輪が解ける頃にはもう夜の帳とぼりが下りきっていた。

ウインスが里長さとおやに挨拶をとったが、流星に夜に押しかけるわけにも行かないと伝えると何故かうインスの家に泊まることになったのだ。

ちなみにウインスというのは俺を襲ってイスラに縛られた女性のことだ。硬く接せられると俺としても肩がこるので楽に話してもらうように言ったのだが、ウインス曰く天使にそんな口調で話すのは落ち着かないらしい。

仕方ないので笑顔で「慣れて」と言っておいた。

初めは女性の家に泊まるとかとても緊張するな。なんて思ったものの、よくよく考えると普段からイナンナと狭い天部の部屋で2人切

りだなと思いついたら、なんて無いことだと気付いた。

「それにしても、エルフと言つても木に住んでるわけじゃないんだな…」

ウインスの家は開けたところに作られた木造の家だった。俺は大きな木の幹の中に部屋が広がっているようなのを想像していたので、少しがっかりである。

「村長の家はこの森一番の精霊樹だから、その想像も間違いではないよ。ただ、今どき木に住むのは古エルフくらいなものだけど」

「それは楽しみだ」

「レオはそのベッドに寝かせてください。…時間も時間ですがお食事を作ろうかと思うんです。天使様もお召し上がりになりますか？」

「いただきます。…あの、本当に楽にしてよ。自分の家なんだからさ」「ど、努力し…する！」

「レオは飯ができたら起こせばいいのか？」

「え？起こせるんですか？天使の力、まだぜんぜん使いこなせないんですよね？」

「^{デスベル}解除くらいなら多分出来るから！」

レオは夢魔の力で自分を眠らせているため、起こしたいのであれば魔法による睡眠を解除しなければいけない。なんとも面倒な種族だ。

親に守られなければ、幼くして死んでしまう種族だなんて。

「じゃあ食事を用意させていただきますので、精々頑張つてレオを起こしてください」

「ラフに話すのは難しくても、小馬鹿にするのは出来るんだな…」

まあ良いけど。堅苦しくやられるよりはね。

ウインスが家の奥へ消えてしまったので、俺は寝かせたレオに向き直る。

羊のように弧を描いた角が外側に向けて伸びていて、人間ではない事を実感させる。

何度見ても俺には五歳位の男の子に見えるのだが、こんな小さくても十二歳らしい。魔族には成長が早い種族と遅い種族が居ると説明を受けたが、そういうものなんだろうな。

第一、ウインスなんてどう見たって二十代前半そこらって見た目で八十過ぎてるらしい。流石エルフって感じ。

「ふう…。っふー！」

天の力というのはよくわからないが、少なくとも力を扱う上での感覚みたいなものは掴み始めていた。

なんかこう、そう。何にも汚されない白き光のような暖かくも冷たくもあるような。不確かだけど明確にある。なんか、そんな感じ。

うん。やっぱよくわからないというのが正しいな。

…そんな曖昧な力を使うのが良いのか悪いのか。それはわからない。

「んにゃ…」

ひとまず解除は出来たようだ。

「天使様…？おはようございませす」

「おはよう」

「…あれ、ウインスは？もしかして天使様が起こしてくださったんですか？」

「そうだよ。ふむ、よく天使だってわかったね」

ずっと寝てたのに。

「気配でわかりますよ。この世界に無い神聖な力を感じますから」

「気配？」

「そうです。天使様は離れていても判るくらい強い力を感じますよ」

「そうなんだ…」

イスラが言うには天使は元々天の力を纏っている状態なんだそう。意識的に外そうとしても、よほど力の扱いに長けてないと無理なんだとか。つまり俺には絶対に無理だ。

これは天の力を体に纏うことで鎧の役目を果たしているのだが、これがウインスの放つ魔法や矢などの攻撃を無力化していたらしい。

一見すれば便利なチート能力だが、逆に言えばレオの様に力を感じ取れる相手からすれば常に居場所と存在を知らせているのと変わらない。レオが判るなら、その親でしかも勇者であるヘンリーや魔族の姫様も判るはずだ。逃げられたら出会うのが困難になる。

「ちなみにそういう気配?とかが判るのって割と普通だったりする?」

「そうですね。ある程度の探知魔法が使えれば判ると思います」
「うーむ…」

課題が山積みだ。今回の派遣を皮切りに次々に派遣されてもおかしくない。となれば力を使いこなすのは前提条件みたいなものだろう。

もし天使であることを隠して行動しなければならなくなったら、天の力が漏れたままなのは論外。

「そう言えば天使様はどうしてエルラドへ来たのでしょうか?」

「仕事でね。君のお父さんに会いに来たんだよ」

「父上に…。もしかして天使様は女神ブーティカ様の使い…ですか?」

「俺はイナンナっていう別の女神の使いで来たんだ。ブーティカも関係はあるけど、使いではないよ」

先程までの明るい顔だったのが急に訝しげなものに変わり、なんとなく事情があることを察した俺は素直に話すことにした。

天の力を与えた勇者は、天界で正確に言えば管理部で厳正に管理される。当然ながら一方的に使命を与える以上、管理者との不和は許されない。

もし不和が起これば、勇者の勝手な行動や資源の無駄に繋がる恐れがあるからだ。

だが、今の反応を見るにブーティカはヘンリーと何かしらの因縁があるのかもしれない。

「ーご飯出来たよ」

丁度いいのか悪いのか、空気を断ち切りながらウインスが鍋を持って現れた。

鍋からはとても良い香りがしており、腹を刺激させる。でも、この匂いは――

「肉?」

「ローストミートです。グレービーソースって言う肉のタレをかけて

食べるんだ。後はジャケツトポテトもあるよ。本当はもつと良いものを作りたかったんだけど天使様を待たせるのも悪いと思つて」

「お邪魔してる立場で文句なんて言わないよ。とても美味しそうだ」
聞き覚えのある料理名も気になるが、それよりも、

「エルフって肉、食うんだな」

なんならジャケツトポテトの中身はチーズだし。

「…居るんですよー。エルフは動物性の物を口にしないとかいいう迷信を信じてる人。あ、天使様だった」

「これだけ馬鹿にしておいて敬語出来ないとか絶対ウソだよ。わざとだよな?」

「さ、天使様。冷める前に召し上がってください」

「う、うん」

さつきまであんなに天使を畏怖してたのに扱いが酷い。

いや、今気にするのはそこではない。ローストミートとグレービーソース、そしてジャケツトポテトの方だ。味はまあ美味しい。日本人受けする味では無いにしろ地球の料理という感じがする。

詳しいことまでは知らないが、ジャケツトポテトと言えばイギリスの郷土料理では無かったか。

そしてヘンリーという名前。先程までは気にもしていなかったが、料理と重ねると見えることがある。ヘンリーという名前はニューヨークで見たことがある。王室の中にも居る名前のはずだ。

今はまだ推測。だから、ウインズに確認しなければならない。

「ウインズ。この料理を教えたのは勇者だったりするか?」
と。

「よくわかったわね。そうよ。ヘンリーが教えてくれたの」

これで確定だ。勇者ヘンリーは地球からの転生者だ。なんとなく見えてきたぞ。

イスラが急に天界へ帰ったのもおそらくは…。その答え合わせのために俺はイスラに念話を飛ばし、そして理解した。

「レオ、君は勇者がどこに居るか判るよね?」

「多分、ですが…」

「そんなに警戒しないでくれ、勇者の事を害すつもりではないよ。だから案内してほしい」

「……わかりました」

理解した今ならどうしてレオがブーティカを警戒するかはよく解る。

この世界で起きようとしてる戦争はブーティカのせいだ。俺がやるべきことは戦争を止めることでも、この世界の管理をすることでもない。

俺は転生業務課の一員で、俺の仕事は『命』の管理だ。例えどこに派遣されようとその使命が変わる訳ではないようだ。

ちなみにご都合展開が続いた理由もわかった。

初めから手のひらの上だったんだ。誰の？そりゃあ、転生課の課長様イサナナのさ。

翌朝、俺はレオの情報を元に勇者の下へと跳んだ。現界に降り立つときと同じ様に『座標を指定した転移』で。

昨夜、寝ている間に天使としての知識が整理されたのか、今まで言われるまで解らなかったような天使の力や天界のことも解るようになっていた。

同時に、人らしい感覚も薄れているような気がしたが。

今の転移もどうすればいいかとか考えるまでもなく、それこそ息をするように跳ぶことが出来ていた。

「ここに、父上と母上が居るはずですよ」

転移した先には蔦の絡まったみすぼらしい小屋が1つあるだけだった。山小屋と言われれば理解できるが、人が住んでいる家とは思えないほどにボロボロである。

「あいつ、こんなところに雲隠れしてたのね」

「ウインスは知らなかったのか」

「どこから情報が漏れるかわからないからって教えてくれなかったのよ」

「なるほどね」

確かに、隠れるにはぴったりだろう。

「で、なんで立ち尽くしたままなのよ。会いに来たんでしょ？」
「んー。わざわざ危険に近づきたくないかな。見えてる扉は罠みたいだし」

小屋には扉が1つ見えているが、そこから天の力を感じるのだ。おそらくは特定の人以外が触ると起動するタイプの罠だ。

「だからって立っけていても仕方ないじゃない」

「大丈夫だよ。多分、もう少しで出てくるから」

俺がちょうどそう言い切ったタイミングで扉が開き、中からハリウッド俳優ですと言われても違和感のないイケメンなおじさんが出てきた。

∴ To Be Continued

第三話：転生課と勇者には深い関係があるらしいです

②

「父上…」

「大きく、なったな」

イケおじは優しげにレオを見ながら呟いて、静かに目を閉じると一呼吸置いてから、

「やれ」

そう冷たく言い放った。

刹那、俺達の周りを薄い霧のようなものが流れる。何が起ころのかなぜか理解した俺は即座にウインスとレオの身体を抱き寄せる。

2人の身体は力が入っておらず抱き寄せたものの重さで少し蹠踉^{よろ}めきそうになった。

今の霧は睡眠魔法だ。それもとても高位な夢魔^{むま}によるもの。

「やっぱり私の魔法も効かないのね」

「想定通りだな。君はそのまま家の中に隠れていなさい」

「解ったわ。あなた…死なないでね…」

家の戸から輝く銀髪を覗かせながら奥に消えていく人影を見てからイケおじがスツと腰を落として構えた。

腰に下げた剣は抜いていないが、素人でも感じられるほどのピリピリと肌を刺すような空気を感ずる。初めての感覚だがこれが殺意や殺気と呼ばれるものなのだろう。

本気の殺意に喉が引きつるような緊張を覚えながらも抱きかかえた2人をそつと寝かして、2人から離れる。

イケおじの彼が手を出してこないのは俺が2人を抱きかかえているからなのは気づいていた。だから離れる。下手な刺激を与えないために。

大丈夫。襲われても天の鎧がある。そう思っていた。

一晩経って明らかに恐怖感が減っており、謎の冷静さと思考の明瞭^{めいりょう}さが宿っていた。

天使の力も曖昧ではなく理解して使うことが出来ている。負ける要素がないと、思い違いをしていたのだ。

俺が寝かせた2人から数歩移動し、イケおじと目を合わせた瞬間に彼が動く。

「天閃割碎！」
てんせんかつさい

瞬く間に近づく彼の姿が、時間を引き伸ばしたかのようにスローモーションに見える。彼の顔はイケメンが台無しなほど殺意に満ちており、いつの間に抜いたのか手に持った剣を天に掲げ、半身の状態で垂直に振り下ろしてきた。

迫りくる剣に対して反射的に腕を前に持っていきクロスさせる。

「ズバンッ！」

と短く聞こえた気がした。

「つは！脳天から力チ割ってやるつもりだったんだがっ……！だけでも！」

振り下ろされた剣はガードした腕を容易く切り落とし、余波の剣閃だけで背後にあつた樹木を縦に割っていた。

「二閃！」
いっせん

ボトツと落ちる自分の腕を目を見開き動きが止まった俺に更に横薙ぎの斬撃が迫っていた。

辛うじて目だけで彼を見る。そして、

「ツスン……」

俺の首は飛んだ。

あつけなく、斬られた。

そう、俺は理解していたはずだ。勇者もまた天の力を扱う者だと。痛みはなかった。なんなら頭が落ちた今でも意識がある。

いつだったか聞いたことがある。江戸時代、処刑の達人であつた山田浅右衛門に斬首されたものは痛みも殺された事すら把握出来ずに首を落とされるのだと。今の俺もそんな感じかもしれない。

死んだ所でセフィロトを通じて生まれ変わるだけだ。一度死んだ身、そんなに性に執着もない。などと格好つけたことを考えていた。

次第に不思議になってきた。あまりにも意識が残りすぎている。

「…あれ？」

もしかしなくても死んでない？

「何を不思議そうにしている。死んだふりが俺に通じるとでも思ったのか」

イケおじが俺の眼の目の前に剣の切っ先を向けて凄む。

そこでようやく俺は思い出した。天使は死なない事を。

イケおじは剣で俺の頭をすくい上げ、髪を掴んで自らの顔の前に持ってきた。すくい上げられた際に頭がぐるぐると回転し俺の三半規管を揺さぶる。

「うっぷ…吐きそう…」

「心配すんな。今のお前は胃が繋がってない」

揺れた頭で『戻れ』と念じる。視界が少しだけぶれてすぐに俺の頭はイケおじの手から離れた。

いきなり身体が戻った感覚に目眩を起こしそうになり、俺は自分の頬を両手で叩く。

「お前、本当に刺客か…？天使にしては弱すぎる」

「…天使だよ。なりたてだけだな。痛みはなかったけどできればもう斬らないでくれ…」

今の今まで自分の首が落ちていたと思うだけで吐き気がする。斬られた腕もくつついているとはいえ違和感が拭えない。

力を過信してやられるとか、イキリ主人公かよ。

「私はね。ローガンさん。貴方に要件が有って来たんだ」

「あんたからは敵意を感じない。信じてもいいが、1つ確認させろ」

ローガンは構えと警戒を解かずこう言った。

「お前はブーティカの使いか？」

と。

事情が解った今だからこそ思う。あの女神は本当にクソだな。

ブーティカの使いではないことを伝え、別の仕事でブーティカとは関係ないと説明するとローガンはようやく剣を収めてくれた。

「すまないが2人を家の中で寝かせてあげたい。運ぶのを手伝ってくれるか？」

刺すような剣幕も、いくらか柔和なものに成り俺も無意識のうちに入っていた肩の力が抜けた。

2人を抱きかかえて家に入ると、先程隠れた銀髪の女性が心配そうに近寄ってきた。

「貴方…：大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だよ。こいつはブーティカの使いじゃない」

「そうなの…？」

仮にもこの世界の女神なのにここまで嫌われてて良いのかと思うくらい嫌われている様子に思わず苦笑する。一応、戦の女神ブーティカってこの世界で振興されているはずなんだがな。

眠っている2人をベッドに寝かせ、俺達は椅子に腰掛けた。

「それで、貴方はなんなのかしら」

銀髪妙齢の女性が座って第一声を上げた。その目は鋭く俺を突き刺すような睨みだった。とても若くて美人だと言うのに。

しかし、天使と言うだけで敬われることもあるって聞いた気もするのに敵意を向けられてばかりだ。

それだけブーティカが嫌われているのだが。

「よさないか。仮にも彼は天使だ」

「こんな変な黒い服を着た天使なんて見たことないわ」

「…俺の居た世界ではこれが仕事着としてよく使われていたんだよ。それに彼は俺をローガンと呼んだ。俺が地球に居たことを知っていて接触してきたんだろう」

「そうなのね」

悪かったな。格安のビジネススーツで。天使の白い翼に合わないのは解つても楽なんだよ。

「こんな動きづらそうなのが仕事着だなんて」

銀髪の彼女ーキヤメル・サタン・デモニアーが小馬鹿にして笑う。

「あの、話していいっすかね…」

割と美人にチクチク言われるのが心に来ます。

「まず、私は元々は地球と呼ばれる星に居た人間だ。少し前に色々あつて天使になって今は天界は天部と呼ばれる場所で働いている。

ローガンさん。私はジャパニーズだったんだ。残念ながらイギリスには行ったことが無かったけどね。トラファルガー広場の美術館は一度くらい行ってみたかったものだよ」

自己紹介は簡潔に、そして相手も反応しやすい一言を添えるのが打ち解けやすい。営業業務で学んだことだ。

ローガンはニッコリと笑い右腕を差し出してきた。

「今の俺は、ヘンリー」だ。話の出来そうな男で良かったよジャパニーズ。ただ、良い挨拶だと思うが、お前の名前が無かったな」

「これは大変失礼した。私の名前は長瀬啓示ながせけいしという。ケイシと呼んでくれ」

俺も右腕を差し出しがっしりと握手する。

ヘンリーは腕をブンブンと振り、次に横に座る銀髪の女性に自己紹介をするように促した。

「…デモニア国第3皇女、キャメル・サタン・デモニアよ」

彼女は渋々と言った様子で腕を差し出してきた。俺は営業スマイルで「よろしく」と言つてその手を握る。

本題を話す前に俺はまず、俺の仕事についてさらっと話した。

「つまりケイシは俺の力に用事があるんだな？」

「ヘンリーさん。貴方は正式な手続きをせずにブーティカによって天の力を与えられてしまった。そのまま力を使い続ければエルラドにある資源リソースはどんどん減ってしまう。私はそれを止めるために来たのです」

「すまん。なんだつて？」

「順を追つて説明しましょう」

俺は居住まいを直して、長台詞に備えて咳払いを1回した。

「まずは世界に存在する資源しげん、天界では単に資源エネルギーと呼ぶこともありませんが。まずはこれについて説明しましょう。

資源というのは世界を構成する目に見えぬ物質の一つです。わかり易い例は地脈ですか。世界を維持するために必要な文字通りエネルギー。それが資源です。各世界に存在するエネルギーはその世界を構成する生命セフィロトの樹によって決まっています。それを覆るのが貴方

も使っている天の力。天の力は生命が循環、つまり輪廻を繰り返すことで生まれるため基本的に無限の力を有しています。故に天の力は強力なのです。その力を調整し、世界を枯らさないようにするのがブーティカなどの管理部の者の仕事です。が、ブーティカは規則を破り他世界から勇者を勝手に送ってしまった」

「そうだ。奴は一度死んだ俺の魂を弄び勝手な使命を与えてこの世界に落とした」

「ヘンリーさんにとっては重要かもしれませんが、天界私どもとしてはそこではなく、正式な手続きを踏まずに力を与えてしまったことが問題なのですよ」

ヘンリーは少しだけ不機嫌そうに口を歪めた。当然だ。勝手に産み落とされたことはどうでもいいと言われたようなものなのだから。「勇者の力とは本来、天界に存在する天の力を扱い、天の力をその世界に残すもの。つまり使えば使うだけ世界としてのエネルギーは増やせるものなんです。ですが、今の貴方はエルラドに存在する資源を消費して天の力を再現している。そして放たれた力は天界へと返ってしまっている状態なのです。おかげで貴方が力を使えば使うほど世界が痩せこけていく。身に覚えがあるんじゃないですか？今まさに起きようとしている人族と魔族の戦争。仕掛けたのは人族ですがその理由は土地が枯れ始め食糧難が起こっているからだ」

これが世界の法則。だから世界に干渉できる天使や神我々などが維持管理を行っている。これだけなら勇者など作らなくとも天使が降りて力を使えばいいだけのようにも思える。だが、俺達の使う力は天界から引き出し、放った後はセフィロトを通じて天界に戻ってしまう。

勇者のようにその世界に力を留めることは出来ないのだ。力を使って花畑を作ることとはできる。だが、世界にある資源の総量が変わらない以上、花畑が出来た分だけどこかの土地が痩せてしまう。そういう仕組みなのだ。

「…まさしくその通りだよ。だから俺は人族ヒューマノイドの里を出たんだ。以前は豊かな国だった。だが、俺が魔物と戦っていくうちに土地が弱っていったんだ。俺はてつきり魔物の仕業だと思っていたが、そうか俺の

せいだったのか…」

歯噛みして拳を握りしめるヘンリーを心配するようにカメラが握られた拳に手を重ねた。

「悪いのはヘンリーじゃない。それは天部の者として私が保証する」
勇者となれる魂は多くない。例え世界が多くともポンポン出てくるものではないのだ。

だから強引に使命を着せることはある。俺はまだ手続きをしたことはないが、イナンナは当たり前のようにやる時が来ると言っていた。

「どうすればいい。俺は、魔物との戦争で勇者としての力をひたすら使った。今のお前の話が確かならそれだけエルラドは弱ってしまったということだろう?」

「その通り。だから私が派遣されてきたのです」

「教えてくれケージ。俺は、何をしたらこの世界に償える。教えてくれ!」

ヘンリーは椅子から立ち上がり、机に手をおいて頭を下げた。

いきなり頭を下げられ少ししたじろぐ。昔から人に謝られるのは嫌いだ。自分のほうが悪いことをしている気分になる。

「頭を上げてください。ヘンリー、貴方が悪いわけではない」

俺はヘンリーの肩にそつと手を乗せてそう伝えた。イスラから伝えられた情報で知っているが、ヘンリーは勝手に召喚されたと憤つて居るものの、この世界を愛し、勇者として間違いも起こさずに働いてくれていた。そんな彼を責めることは誰にも出来ないだろう。

「少し手続きをすればちゃんとした力が使えるようになりますよ」

「頼む、世界のためなら何でもしよう」

目に確かな意思を携えてヘンリーは答えた。正しく勇者と呼ぶに相応しい姿。

俺は少しだけ楽しくなっていた。

まるで自分がゲームやアニメの登場キャラクターになったかのよう感じ、そのノリのまま笑顔で言い放つ。

「では、勇者ヘンリー。世界^{エルランド}のために一度死んでくれ
と。」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第三話：転生課と勇者には深い関係があるらしいです

③

「では、勇者ヘンリー。世界エルラドのために一度死んでくれ」

そう言うと、キヤメルはカツと目を見開いて立ち上がる勢いのまま手に持った光るものを俺に突きつけた。だが、突きつけられたペンは首に刺さる事なく天の力に阻まれる。

「よさないか！キヤメル！」

「でも！」

「でも」じゃない。まだ事情も聞いていないだろう」

静かに2人のやり取りを見守る。下手に何か口にすればまた刺されるような恐怖を感じたからだ。そう。ぶつちやけ滅茶苦茶ビビってます。ヘンリーに首をはねられたときよりも怖い。

キヤメルは窘められて尚、鬼気迫る形相で俺を睨み腕が震えるほどペンを力いっばい首に突き立てている。頭では天の力を貫けるわけがないと思っけていても、感情が不安を掻き立てやまない。俺はただ悟られないように黙ってヘンリーがキヤメルを諫め終わるのを待つ。

「…妻がすまない。だが、俺も死ぬと言われておとなしく死ぬるほど往生際が良くないんだ。納得できる説明をしてもらおうか」

「勿論、そのつもりだ。少し話を端折^{はしよ}り過ぎてしまったようで、申し訳ない」

努めて冷静に、突然会社に訪問してきた取引先の人に疲れを悟られないようにと練習したポーカーフェイスで返す。内心はまだ心臓がバクバクしてるけど。

目の前には渋々ペンを収めたものの不満を隠しきれていないキヤメルが未だに睨んでおり胃に穴が飽きそうなほどのプレッシャーを与えてくる。

「別に本当に死んでもらうわけじゃないんです。ただ、今の肉体は捨ててもらおう。本来、人の身体で天の力を使うことは出来ない。勇者には勇者の身体が必要なんです」

「待て、ならなげ今の俺は勇者の力…。お前に言わせれば天の力が、それが使えるんだ？」

「強引に設定を書き換えているような状態なんですよ。昔のゲームで最大M^{マジックパワー}Pが999しか無いのに、データ上で999分の10000にしているような極めて力づくで乱暴な方法でね」

「なるほど…？」

いまいち伝わらなかつたのかヘンリーは首をかしげた。

「あー、どういえばいいやら…。えっと、本当はどんぐりなのにコーヒーと言っているみたいなの？」

「代用勇者…って事か？」

「そんな感じ。本物の勇者ではないんです。勇者って言う種族の生物があると思ってもらったほうが良いかな…？勇者と言う生物は形に囚われないから例え見た目が悪魔だろうが天使だろうが、勇者として生まれたならば『種族：勇者』になる」

「よくわからないが、とりあえずブーティカの仕業だつて事は理解した」

「あ、それでいいです」

実はイナンナに聞きながら説明していたのだが、やはり自分が理解していない事を人に説明するのは難しい。

「とりあえず、今の人間の身体を捨てて、勇者としての身体を手に入れてもらうって事です。人としてのヘンリーは死ぬけれど、魂を引き継いで新しい勇者の身体に生まれ変わってもらう。要するにこの世界に来た時と同じように転生させます」

「…少し待ってください」

ヘンリーは額ひたいに手をおいて少しうつむいた。それほど時間をかけずに顔を上げて、

「まず、転生ということは俺はまたガキから始めなければならんのか？」

そう聞いてきた。『まず』ということは聞きたいことがいくつあるのだろう。

「新しい身体は今と同じ状態で作るのできにしないで良いですよ」

「…ふむ。今の身体はどうなる?」

「えつと、少々お待ちを。…魂のない器として肉体は残るらしいんで、転生が済んだら火葬しろ。とのことですよ」

イナンナに問い合わせ、聞いたままのことを伝える。話の中身がぶつ飛んでいると感じつつも事務的に言う。自分で自分の死体を燃やせて倫理観が狂っているとしか思えない。神に人の倫理を説いても仕方ないのだが。

「貴方には人の情というものが無いのかしら。言ってることが滅茶苦茶だわ」

案の定カメラが噛み付いてきた。でも、俺が逆の立場なら同じことを言う気がするので何も言えない。

流石のヘンリーもこれには唖ってしまった。

「…次の質問だ」

納得してなさそうな顔のままヘンリーは話を次へと進めた。

「どうぞ」

「いや、質問というよりはお願いなのだが、転生するなら次の身体は人族ではなく魔族にしてもらえないか?」

「あー、なるほど」

この世界の情報を見たところ魔族は人間より長く生きるらしい。少なくとも人間の倍、種によっては数倍も生きるそうさ。カメラやレオは夢魔であり、250年くらい生きる種族。それに比べてヘンリーは人族。この世界の人族は60歳前後が寿命であり、恐らくはレオの成長すら満足に見れないまま死んでいくことになる。

個人的には願いを叶えてあげたい。とはいえ…。

「うーん…私の権限ではなんとも言えないんで、直接うちの上司と交渉してください」

俺がただ情で訴えるよりは本人から訴えてもらったほうが聞いてもらえるかもしれない。どうせ一度転生の書類を受け取るために転生課に行く必要があるし。

「解った。俺としては寿命を延ばせる可能性があるなら転生することに異存はない」

「ヘンリー…」

「キヤメル。許してくれるかい？俺は君たちより圧倒的に短い命なのがずつと気がかりだったんだ」

「それは…。私も考えたことはあるけれど、でも一度死ぬのよ…？」

「どのみち、俺がこのまま生きていてもエルラドを枯らしてしまうだけだ。この話を聞いてしまった以上、今のままのうのと生きていくことは出来ない。それに産まれた経緯はどうであれ、俺は勇者なんだ。解ってくれ」

ヘンリーには同情出来ないこともない。理不尽な死を遂げて、ブーティカによって死を弄ばれもてあそ勝手に転生させられた挙げ句、こんな美人な嫁さんもらって、美人でエルフの幼馴染が居て、可愛い息子が居て…。

あれ、こいつ以外と恵まれてるな。別に身体が勇者じゃないとは言え天の力を使える転生チートに違いはないし。資源の減少はヘンリーに関係があるわけじゃないし。

「それでも…」

「信じてくれ。必ず戻ってくる」

「うん…」

段々と茶番を見せられている気になってきていた。本人たちは至って真面目なんだろうけどそれが逆に演技っぽさを感じさせるのだ。

平和な日本で育った俺にとって、ドラマチックな出来事なんて文字通りテレビドラマや映画くらいでしか見たことがなく、二人のやり取りも目の前で芝居でもしているような気がしてしまう。

「覚悟はできた。一思いにやってくれ」

「あ、はい」

時代劇で切腹する武士のような真剣な顔で見つめられてスンツと感情が落ちた。

「じゃあ、天界体験ツアーにご招待します」

「え、何その棒読—」

真顔のまま腕を伸ばし、ヘンリーの額に手を当てて魂を身体から引

き抜く。魂の抜けた身体は糸の切れた人形のように机に突っ伏して動かなくなつた。

「あ、あなた!？」

「魂を抜いただけですよ。今はまだ息があるかもしれませんが、その身体は時期に死を迎えることになる。その後は先程伝えたように火葬でもすればいい」

「ヘンリーを返さなかつたら絶対に許さないから」

ヘンリーの身体を不安そうに抱え、目に涙をにじませたままそれでも尚、強気にキツと睨まれ俺は肩を竦ませながら、

「任せてください」

そう伝えて天部へと跳んだ。

一瞬だけ光りに包まれ、次の瞬間には無機質な部屋に見慣れた書類の山と机が目の前に現れる。

もしかしたらまだイザナミが居るかと思つたが、姿はなく、代わりに別の人影があつた。

書類に囲まれ苦虫を噛み潰したような顔でブツブツと怨嗟えんさの声を漏らしながら机に向かつている彼女に気づいたヘンリーが猛る。

『っーブルーティカア!』

叫びを上げて掴みかかろうとするヘンリーの首根っこを掴み阻止する。

「止めるな!こいつは、こいつは一発殴つてやらないと気が済まん!」
「あ〜…?」

名前を呼ばれたブルーティカが心底やる気のなさそうな声を出しながら首だけでこちらを見た。そして暴れるヘンリーを見て目をパチクリさせた後、ニターつと嫌な笑みを浮かび上がらせる。

「つぷ、何、あんた死んだの?ざまーないわね!このブルーティカ様の手を煩わせた罰よ!」

「んだと!つく、離せ!あいつをぶっ飛ばしてやる!」

「へへーんだ。殴れるもんなら殴つてみなさいよ。実体もないくせに、べー!だ」

「つく!このっ!」

まるで子供の喧嘩のような言い合いが続くかと思われたその時、

「随分余裕そうね。ブーティカ？」

部屋の奥、書類で隠れた机に向かっているイナンナが一言、そう言うとうとブーティカは途端に青ざめた表情になり「すみませんでしたあ！」と叫んで再び目の前の書類に向かい始めた。

ヘンリーはヘンリーで見覚えのある光の輪で身体を縛られた状態のまま何かを叫ぶように口をパクパクとさせていた。恐らくはイスラがウインスにしたのと同じ力だろう。天の力に名称は無いそうなので、適当に☒拘束☒と☒沈黙☒としておこうか。

「おかえり長瀬君。どうだった？ 現界は」

「悪くないですね。少なくとも転生課よりはゆっくり出来ました」

「熟睡してみたみたいだもんね。羨ましいわ」

心なしかイザナミが来ていたときよりも隈が濃くなっているように感じるイナンナが遠い目をしてそう言った。百年単位で働き詰めの女神は疲れ切った顔のまま紙を一枚、俺に差し出す。

転生申請書、特定の魂を思い通りに生まれ変わらせるために必要な書類。昇華の儀が必要な天使や神といった存在を除けば本当にどんな姿、能力にも出来る勇者を産むための必須アイテムだ。

俺はヘンリーに落ち着いて暴れるなど伝えてから☒拘束☒と☒沈黙☒を解く。

「これから転生させるから、改めて確認していきますよ。まずは身体。これはエルラドで過ごしたそのままの姿をベースに、種族は羊型の夢魔。年齢も今のままにしておきます」

「あら、素体元の種族を変えるのね」

書類に目を通しながら聞いていくとイナンナが興味深そうに聞いてきた。そう言えばヘンリーが交渉するって話だったな。渡された書類に素体元と書かれていたので流れで聞いてしまった。自分で言ったことを忘れるとは社会人にあるまじき失態。

俺が確認するかと思って振り返ろうとすると、目の前に居るヘンリーがスツと腰を降ろし、頭を下げた。今日日みないくらい綺麗な土下座。

「お、俺…じゃなくて私の妻の種族、夢魔は人種の数倍は生きる種族で、ハーフである息子も長く生きるはずです。私は、この成長も満足に見れないまま寿命を迎えてしまうのが怖い。そこで転生の話を聞き、種族を変えられないかとケーシさんに頼んだのです。どうかお許しを頂けないでしょうか」

良い歳した男が切実な声で頭を下げている。並々ならぬ思いだろう。果たしてイナンナはこの想いにどう答えるのかと内心ワクワクしている自分がある。少し下衆い考えではあるが、他人が真剣に土下座して頼み込んでいる事の顛末てんまつというのは気になる。

だが、返ってきた答えは、

「ふーん。ま、良いんじゃないかしら？ 番が違う時つがいを生きるのは悲しいし。長瀬君の判断に任せるわ」

そんな投げやりでやる気の感じられないものだった。地に伏して全力で神頼みをしたヘンリーからしたら肩透かしだろう。

「え、あ。ありがとうございます！」

そんな一幕もありつつ、全検を任された俺は仕切り直して話を続けた。

「えっと…。夢魔にしてみれば老け顔かもしれませんが構いませんね？」

「あ、ああ」

「使える能力も今までのまま、天の力を正しく使えるようにだけしておきます。晴れて本物の勇者になるる訳です。これもいいですか？」

「大丈夫だ」

「…後は特に無い。ですよね？」

俺の問いかけにヘンリーは真剣な表情で頷く。後は出来上がった書類をイナンナの承認の下にセフィロトへ送れば転生が果たされる。

「生まれ変わり、落ちる地は家の前におきます」

「ああ、わかった」

頷き合い、俺はイナンナに必要な事項を記入した書類を手渡す。するとイナンナは怪訝そうな顔で、

「折角の同郷だと言うのに、もう別れて良いのかしら？」

そう聞いてきた。

俺とヘンリーは向き合って、そしてお互いに笑った。住んでいた星が同じとは言え、国が違えば生活も違う。実はそれほど共通の話題はなかった。それでも俺達は同じ元地球人だ。

「なに、また話したくなったら遊びに来ると良い。天界も悪い奴らだけじゃないと解ったしな」

「それは何よりです」

「…なあ、最後まで素で話してくれよ。出会ったばかりとは言え同郷の友人じゃないか」

ヘンリーは俺の右手で肩をポンと叩いて、左手で拳を突き出してきた。それに答えるように俺も右手で拳を作り突き合わせる。

「そうだな…。次はもつとゆっくり話そう」

「良いだろう。その時は本場のイギリス料理を食わせてやるよ。折角だ。スターゲイジー・パイを作ってやる」

「そ、それはちよつと遠慮しておこうかな」

魚が雑に刺さっているパイを想像して丁重に遠慮の意を言葉と全身で伝える。不味いと噂のニシンのパイなんて食べたくない。ヘンリーがボソツと「噂されるほど不味くないんだがなあ」と零しているが、イギリス人の舌は信用ならない。

ウインスの作った料理は確かに美味しかった。だがそれは久々に食べる食事であること、空腹であること、何より地球の飯で有ることを前提とした「まあ美味しい」程度だ。

イギリスの食事が不味いと言われるのには理由がある。それは「出汁」と「塩気」の欠如。例えばウインスの作ったローストミート。あれはローストしすぎた硬い肉に、抜けきった肉汁とワインを足しただけに思えるソースをかけたものだった。正直、ほぼ肉の味だ。それでも肉の出汁があるだけまだマシなのである。

とは言え、パンと一緒に食べたローストミートは割と美味しかった。

多分、エルフは元々素材の味を好むため、イギリス料理と相性が良かったのだらうと思う。朝飯として食べたトーストには無縁のバ

ターが塗ってあり、塩すら振られていない堅焼きの目玉焼きが乗っていたし。たまには悪くないが、濃い味が好きな日本人には味気ないもんだ。

「料理は置いておくとして、折角だ。同郷の誼^{よじ}みとしてこれを渡しておくよ」

イギリス料理から逃げるようにヘンリーに手のひらサイズの丸いガラス玉のようなものを手渡す。

「それに天の力を注げば、俺と通話出来るようにしてある。もしエルラドで困ったことが起きたら手助けしてあげる」

「いいのか？俺に出来ることなんてパイを焼くくらいだぞ？」

「それはいらない」

ややかぶせるくらいの勢いで断る。

「言っただろ。同郷の誼^{よじ}みだつて」

初めての出張で出会った人。ただそれだけのことだが、俺にとっては同郷の人であり、また不安も多かった初の現界で仲良く成れた人達でもある。

エルラドには然程、情があるわけではないが彼らの手助けが出来たら良いなと思った。

「ありがとう」

「ウインズとレオにもよろしく言っておいてくれ」

「ああ、頼まれた」

言葉なく手を差し出し、ヘンリーも黙ってその手を握った。数秒の間、力いっぱい握手をして、それからイナンナへ向き直り、改めて書類を渡した。

「もう良いのね？」

イナンナの確認に頷いて返す。

書類を受け取ったイナンナは立ち上がり、目を閉じて書類に天の力を流した。書類はまばゆい光に包まれた後に光がヘンリーの方へ移り、ヘンリーの姿はそのまま光に溶けて消えてしまった。あつという間の出来事に余韻^{よゐん}も何も無いまま。

「これでよしと…。じゃ、長瀬君。次はここに行ってきて」

感傷に浸る間も与えず、イナンナは疲れ切った顔でまた紙を渡して
きた。

∴ T o B e C o n t i n u e d

第四話：世界を管理するという事らしいです

ヘンリーをエルラドに再転生させ、これで一段落いちだんらくつける。そう思っていた俺に渡された新たなメモ紙一枚。言いたいことは多々あるが、言った所で無駄なのを知っているので我慢してその紙を受けとる。

紙には対象世界の管理課の名称ともう一つ、仕事に関する内容が書かれていた。ただ一言、

—勇者、久々津誠一郎の処分を求む。と。

「これ、管理部から貰った世界と勇者に関する資料よ」

メモ紙に目を通し終わると、イナンナは紙束を差し出してきた。束ねられた紙の表紙にはシンプルな字体で『イカニモナと勇者久々津誠一郎について』の文字のみ。

ぱらぱらとページを捲めくって軽く目を通していく。情報は大事だ。

イカニモナは2大陸と小さな島々が存在する地球に比べるとやや小さい星で、基本的には資源リソースの豊かな星らしい。存在する人は、ただひと“人”と呼ばれる人間によく似た種族のみ。獣耳けもみみが生えていたりする。亜人あじんの類は無し。生活水準は中世ヨーロッパの暮らしに魔法技術を足した程度で人々は狩りと農業で暮らしている。

らしい。

魔法技術ってなんだよ。中世ヨーロッパの生活水準とか知らねえよ。そんな言葉を飲み込みつつ続きに目を通していく。

—勇者が召喚された経緯について。

イカニモナはその昔、2つの大陸間で大戦争が繰り広げられた。その際に、大量の資源が失われたため、イカニモナ管理課の要請で勇者を転生。結果的に、大きな爪痕は残ったものの勇者の尽力もあって大陸間の和平が成立、現在では大陸諸国間の関係は良好なものと言える。

しかし、少し前にイカニモナに溜ネガティブまった負の資源によって大陸の一部で大雨による大災害が発生。田畑が水浸しになり川和沿いは地形ごと流される大きな被害を受けた。それに対し、諸国王が競技した結果、最も被害の大きかった富国セレブダロウで古より伝わる勇者召

喚の儀が行われることとなった。管理課は現界の動きに便乗し、勇者の転生を行った。

つまりこの久々津って勇者は土地の回復。つまり資源を天界から補充する目的で召喚されたようだ。

ここまでの記述を呼んだ感想は『至極全うだな』と言った感じ。ただ、これだけだとなぜ、どうして久々津という男を処分、恐らくは殺さなければならぬのかがわからない。

なにかあるとすれば、それは久々津本人の人格等に問題があるのか。

―勇者久々津誠一郎について。

久々津誠一郎は地球出身。農家の家で生まれ育ち、農業学校へ通っていたが、よわい 17にして事故により死亡。原因は台風の中、畑を見に行き、どぶ川に落ちて水の流れに抵抗できなかつたことによる溺死。その後、生きたいという強い思いと農作の知識を買ったイカニモナ管理課が魂をすくい上げ、勇者として転生させられる。

その際に久々津が求めた能力は、
風に飛ばされないような強靱な肉体。

体調を崩しにくく、疲れも取れやすい回復体質。

人を先導するために必要な人の意識に干渉する能力。

意識に干渉する能力でなんとなく先が読めたような気がするぞ。
と心のなかで呟きながら読みすすめる。

久々津は地球での姿をそのままに前述の能力を得て、天界での記憶を消去した上でセレブダロウに転生。あくまで肉体を再構成させているので転移ではなく転生である。

その後、久々津はセレブダロウを拠点に各地の農耕地を再生させていくが、次第に態度が変化。勝手に召喚したことや、被災地域への貢献を理由に地位や女を要求するようになる。また、人の意識に干渉する能力をもってセレブダロウの上層部を洗脳し、好き勝手なことをし始める。

とが 咎めた者。裏で暗殺を画策した者を洗脳した者を使ってしゅくせい 粛清。セレブダロウの異変に気づいた諸国が調査するも、久々津が勇者の力を

使いこれを撃退。セレブダロウが大陸きつての貿易中間国だったこともあり、諸国との摩擦が増大し、小競り合いの頻発、ついに戦争へと発展した。

折角、補った資源も無駄に消費。また予定している魂の量を超える死者が出たため、管理部の方から看過できない状況と判断。よって勇者久々津誠一郎を処分を求む。

異世界に言つて、勇者と崇められ、明らかに他人とは格の違う能力を得て気が大きくなったのだろう。なんとも浅ましい。

「まあ、世の中そんなもんよ。別段、珍しくもないわ。さつきまで居たヘンリーみたいに正義感が強く、世界に尽くしてくれる勇者なんて実はそんなに居ないのよ」

夢もへつたくれも無いイナンナの言葉が静かな部屋に響く。

「今まで知りえなかった状況に恐怖、絶望してしまふ者。得た力に飲まれてしまふ者。初めから働く気の無い者。大半はそんなものよ。でも、そういう奴らに限って天の力に適応しやすいの。だから転生させたり転移させたりするのだけど、転生課は慈善活動家じゃないわ。ただ魂を拾って転生させ、俺TUEEさせるのが目的じゃない」

「だから使えないなら処分すると…?」

「そうよ。全員では無いけれど、この久々津つて助平みたいに資源の浪費をするばかりで世界を衰退させてしまふ勇者を止めるのも管理部の仕事なの」

「でも、管理部、管理課では現界に直接の手出しが出来ないから」「こそ。転生課に回されるのよ」

ただでさえ忙しい方なのに、本来の業務と外れたことまでやらなければならぬから更に忙しくなる訳だ。だからイザナミのように業務に不備があったり、ブーティカのように不適切だと解つていながら故意的に問題を起こした神々に罰として雑用をさせて負担の軽減を図っているのか。

そんな事を考えながら事務作業に忙殺されているブーティカをチラと見る。不満たらたらに仕事をするブーティカは俺の視線に気づ

くと、キツと睨んできた。そうになっているのは俺のせいでは無いのだが。

俺はイナンナに見えないようにジエスチャーで「手を止めるな」と伝えると、ブーティカは声には出さずに口の動きで「ばーかばーか」と言ってきた。神のくせに幼稚なやつだ。

「誰が幼稚ですつてえ！」

「ブーティカ」

「はい、すみませんでした」

俺の考えを読んだらしいブーティカが荒声を上げると、イナンナは冷たい声でブーティカの名を呼んだ。それだけで険しい表情がスンと落ちて真顔になり黙ってしまった。どうやらイナンナには逆らえないらしい。それがイスラから聞いた転生課の持つ権力のためなのか、かんわきゅうだい純粹にイナンナのせいなのかはわからない。

かんわきゅうだい
閑話休題。

俺はとりあえず仕事の詳しい内容と段取りを聞くために管理部のイカニモナ管理課へ行くことにした。過去の書類のせいでそう思っているが『イコール処分 Ⅱ 殺す事』だと決め打ちするのは良くない。

人を殺すなんてあまり考えて良い気になるものではない。天使に成った影響か、天の力を使った影響かは知らないが、殺人に対する禁忌感はそれほど無い。だが、仕事だからといって人を殺したい訳ではないのだ。どんなに久々津がグズで救いようがない人間だとしても殺しても良いだなんて考えに至ることはない。

天使は確かに死なないのだろう。でも精神が壊れることはある。つい一月前まで人間だった俺に人を殺す行為がどれほどの精神的負荷を与えるか。それこそ俺が「知り得なかった状況に恐怖、絶望」してしまいうとも限らない。

いや、これ以上の考えは無駄か。不安がるのは詳細を聞いてからでも良いはずだ。

「…イカニモナ管理課に行ってきます」

「いつてらっしやい。あそこの責任者はそのブーティカと違ってまともな奴だから安心するといいわ」

「わかりました」

「わかるなよ！私だってまともに仕事してー」

「ブーティカ？」

「すいませんでしたあ!!」

もはや天井かと思うようなやり取りに呆れながら転生課を出た。にしてもほんつと懲りないなこいつ。

管理部へ来るのはこれで2度目。というか昨日ぶりだが、やはり扉の多い空間だなと思った。縦に抜けた空間に並べられた扉が螺旋を描きながらどこまでも続いている。徒歩でも移動できる階段があるが、多くの者は真ん中の吹き抜けを飛んで目的地の扉へ向かっているようだ。俺も昨日は歩いたが、もう飛ぶ方を覚えたので躊躇いなく吹き抜けへ飛び出す。

歩くよりは楽とは言え、あまりにも多い扉から目的のイカニモノ管理課を探すのはしんどい。世界がそれだけあるのだから仕方ないっちゃ仕方ないのだが、もう少し簡単に見つけられる方法は無いものか。

幾多ある扉からイカニモノ管理課を探しだした俺は深呼吸をしながらノックする。すると中から気の抜けるような女性の声で返事が返ってきた。

「どちらさまですかあ?」

薄く扉を空けながら顔を覗かせたのは一見すると子供のような見た目の女性だった。

また女性か、などと思わなくもないが今度の彼女は随分と外見が幼い。本当にこの人が管理者だろうか?

「転生課の者です。勇者久々津の処分に関する話を伺いに来ました」

「おー、貴方がイナンナの新しい部下さんですねえ。イナンナから話は聞いてますよお」

扉を空けて、幼き女性が俺を招き入れる。それだけのことなのだが、なぜか少しだけ背徳感がした。

「私は、転生課所属の智天使、長瀬啓示です」

入り口から少し進み、開けた空間へ案内されてから俺は目の前の女

性に名乗った。

「ご丁寧にもどうもお。私はあ。イシスつて言いますう。これでもお、イカニモナの管理者なんですよお。よろしくおねがいしますねえ」
「はい、よろしくお願いします」

どうにもイシスの話し方は気が抜ける。ふわふわとしていて掴みどころがないというか、気の張りようがないというか。声と姿も相まって、本当に子供のようだ。

頬が緩みそうになる気持ちを抑えながら案内された空間を改めて見る。いくつかの机デスクが並び、天使達が仕事している様子が見える。入ってきた俺の視線を向けている者も居る。人手があるようで羨ましい限りだ。一人くらい転生課にも分けてもらえないものか。

「今あ。お茶を入れるのでえ、ここに座って待っていてください」

イシスはそう行ってスイーッと飛んでどこかへ行ってしまった。課長自らお茶を入れに行つたのに先に座るのもどうかと思つたのだが、ここは好意に甘えて遠慮なく指示された席に座ることにした。

可愛らしいぬいぐるみの乗つた課長席のすぐ近くにある席で、放置された空のマグカップにはネフティスと書かれたシールが張つてあつた。マグの柄は麦穂を抱いたイシスに似た女の子のイラスト。似ているというかイシス本人が描かれているのかもしれない。そうやって不審じやない程度に辺りの物を見たりして待っていると、いつの間にか俺へ向けられる視線が増えていた。

俺の勘違いでなければ『男がイシスに何の用があつて来たんだ』という視線だと思う。

「おまたせしましたあ」

針の筵むしろになつたかのような気持ちになりかけているとようやくイシスが戻つてきてくれた。それだけで先程までの刺すような視線が消える。

戻ってきたイシスの傍らには別の女性が居て、その女性がイシスの前にマグカップを俺の前にティーカップを置いた。シナモンのような甘い香りとミルクの香りが混ざつた飲み物が注がれている。

「マサラチャイつて言うお茶ですよ。甘くてくほっこりするんです

よお」

マグを両手で持って口をつけるイスラに習って、カップに口をつける。口元へ持つてくるとより香りが強く感じられた。一口飲んでみた感想としては、甘い。これに限る。驚くほどに甘いのだ。とてもではないがごくごく行ける感じではない。とは言え美味しい。お茶というよりお菓子のような感覚があるが、疲れた脳に染みていく気がする。

お茶を淹れてくれた女性は、俺の座る席に放置されたマグカップを手にとると、一緒に運んできたティーポットからそのマグカップへ注ぎ、そのまま口をつけた。そして小さく、

「甘っ…。砂糖入れすぎ…」

そう呟いた。

「もく、ネフティスったらあ。その甘さが良いんだってばあ」

「お言葉ですがお姉さま。私はコーヒー党ですので。同じ甘い飲み物でもまだインディアンコーヒーの方が好みです。お客様も甘いのが苦手でしたら普通のコーヒーなどもございますよ」

ネフティスと呼ばれた女性の言葉に俺はマサラチャイチャイで大丈夫だと返した。本音を言えばブラックコーヒーの方が好きだが、先方の好みに合わせていたほうが話もしやすいだろう。

ネフティスはイシスを「お姉さま」と呼んでいた。もしかしたら二人は姉妹なのかもしれない。にわかには信じがたいが。

確かに、顔つきは若干似ている。イシスが成長したらネフティスの様になると言われても違和感はない。が、ネフティスは170cmはありそうなほどの長身の上キリツとした端正な顔立ちで、細身ながらも出るところが出ているモデルのような体型で装飾の施されたワンピースらしきものを着こなしている。それに対し、イシスは小学生高学年、いいとこ中学生なりたてくらいの体型と顔立ちに花柄のワンピース姿。どちらが姉かと聞かれれば十人が十人ネフティスだと答えるだろう。

「…何やら色々と考えているようですが、私がイシスの妹で間違いありませんよ」

「おっと、失礼しました」

「どうにも女神と言う存在はすぐ心を読んでくるようだ。

「確かに変わった姉妹である自覚はあるので構いませんよ。…では、私は別の仕事があるのでこれで失礼します」

ネフティス本人が戻ったなら席を立つべきかと考えていると、ネフティスはそう言い残して立ち去ってしまった。

「ありがとねえ。ネフティスく。…よおしー！じゃあケーシさん、お仕事のお話をしましょく」

イシスは手を降ってネフティスを見送ると、手に持った紙束を差し出しながらそう言った。

∴ T o B e C o n t i n u e d

第四話：世界を管理するという事らしいです②

前回のエルラドと違いしつかりとした段取りがあることを嬉しく思いながら、イシスが手渡す紙束を受け取る。

「用意した書類は転生課の方へ送らせていただいた物とお、変わらない所もあるので適度に飛ばして説明しますねえ」

「わかりました」

「まずう、これから話し合うのはあ、ケーシさんがあ、現界げんかいに降りてからの行動についてとなりますう。ではあ、渡した書類の1枚目を捲ってくださいい〜」

言われるまま開くと、そこには『転生課の支援が必要な必須事項』と書かれた題字と目録が並んでいた。内容はこうである。

1. 勇者の処分
2. 情勢の安定
3. 負ネガティブの資源リソースによる時空の歪みの除去

《1》の項目については事前に貰っていた資料と変わらないが、《2》と《3》についてはよくわからない。と、言うか《3》に至ってはどう考えても管理課がやるべき仕事に思える。

「1については転生課へ渡しておいた資料と変わらないのでえ、具体的な内容についてを話しますねえ」

「お願いします」

待つてました。

「端的に言いますとお、久々津誠一郎くぐつせいいちろうを殺してほしいのですう」
「……」

やはりそうなるか。

そうであろうと思いつつも、そうであってほしくないと思ってきた事実を突きつけられ、俺は黙って口を固く結んだ。

「でもお、ただ殺すだけでは駄目なのですう。久々津に悟られる事なく殺さないでダメですう」

「暗殺つて事ですか…」

「そうですう。暗殺してほしいのですう。でもお、生半可な力だとお、

勇者を殺せないの、転生課さんの方でなんとかしてほしいのですう」

天界に居る者の殆どは現界で使える力が限られている。だが、その程度の理由だけなら転生課には頼らないだろう。要するに、その暗殺方法に問題があると見える。

「今回の、転生課さんにお問い合わせするのはあ。勇者の魂を引き抜きと^{デリート}消去おなのですよ。肉体の方は利用価値があるので生かしてください」

なるほど転生者の魂への干渉は転生業務課の特権だ。

俺は少しだけ安心してた。魂の引き抜きはエルラドで経験済みだし、魂を殺すのだって悪魂と同じ様に書類でちよちよいと処理するだけ。罪悪感も低そうだ。

思ったより難しいことはないかも。などと呑気な事を思っているとイシスは俺の考えている埒外なこと言った。

「そしてえ、これが一番重要なのですけどお。イカニモナの住民に天界の存在を知られては行けないのですう」

「え？」

「イカニモナの管理はあ、私で二代目なんですけどお。先代の管理者様からの方針でえ、天界からの手出しを悟られないように管理しろと申し送られているのですう」

「だから、暗殺……」

天使の力で強引に近づいてパパッと解決できるかと思ったがそういう訳にもいかなさそうだ。

「はい。お供としてネフティスを付けますのでえ、ケーシさんも女性型になっていただいてえ、勇者の方から誘い入れられるように目立つ行動をしてほしいのですう。接触さえできれば後は魂を抜くだけですの、パパアーつとお願いしますねえ」

「……」

「ではあ、次の――」

「待つて待つて」

今さらつと女性型になれとかぬかしませんでしたかね。この幼女。

「女性型はマストですよ。ネフティスだけが勇者に呼ばれてもしかたありませんからあ。それにい、女性2人で暴れたほうが目立つと思えますよお」

「それは…」

「勇者は気配察知に優れているのでえ、忍び込むのはかなりリスクーなんですよお。なのでバレないようにするためには勇者から招き入れられたほうが良いんですう」

「なるほど…」

「納得しましたあ？ではあ次の説明に移りますねえ」

理屈としては納得できたものの、俺個人としてはあまりあまり納得の行く答えではなかった。確かに天使に厳密な雌雄しゆうは無く、姿も変えられる。が、女性になるというのは抵抗がある。

思うところは多々とあるものの、代案が浮かぶわけでもなく、流されるしかないというのは歯がゆいものだ。

「2つ目のお、情勢の安定ですがあ。これに関してはあ勇者の暗殺後の話となりますう。勇者の勝手で荒れた情勢をある程度でいいので鎮めてください」

「具体的には何をすれば？」

「えつとお、諸国へ勇者が暗殺されたことの通達と、国交及び流通の回復による諸国への謝罪ですねえ。傀儡となつている王の代わりも探してください。ちよつと大変そうに感じるかもしれませんが、勇者さえ居なくなればある程度、大胆な行動をしてもバレたりはしなないと思うのでえ、安心してください」

「わ、わかりました」

「最後に負の資源ネガティブリソースによる時空の歪みの除去ですねえ。これは勇者の暗殺に向けて目立つてもらおう間にお願ひしますう。負の資源そのものはこちらで少しずつ対処をしているのですがあ。細かい歪みまでは探知しきれないのでえ、現界で情報を集めながら1つずつ潰してください。これはかなり手間で時間もかかると思いますがお願いしますう。これで全てですが何か質問等がありますかあ？」

「(女性型になれつて事を除けば)ありません」

「ではあ。もう少ししたらネフティスが現界へ降りる手続きを終えて戻ってくると思いますのでえ、しばしお待ちください。」

現界に降りてからの行動については実際に行動を共にするネフティスと擦り合わせたほうが良いだろう。

それにしても、女性型への変身か…。

嫌というわけではないが、中々に考えさせられる。体の変化は強くイメージを持たなければすぐに長瀬今啓示姿に戻ってしまう。何より、ただ女性になるわけではなく、女性になった上で活動しなければならぬ。

「あ〜！伝えるの忘れるところでしたあ」

「うわおー！」

頭を悩ませているときにいきなり大声で話しかけられて反射的に体がビクツツとしてしまった。

「どうされましたか？」

「えつとお、久々津誠一郎はあ貴方と同じ日本人なんですよお。なのでえ、女性型と言つても日本人っぽい姿はあやめてくださいねえ」

「あー…。そうですね。わかりました」

難題が増えた。これでは人気アイドルの姿を借りる作戦が使えない。言われてみれば当然なのだが、相手も日本人なのであればアイドルの姿なんて狩りたら一瞬で日本人だとバレかねない。

天界の者とバレなかったとしても転生者であると疑われたら要らぬ警戒を生み接触しづらくなってしまふ。

イナンナめ、厄介な仕事を与えやがって。そう心の中で悪態をついたときに思いついた。そうだ。イナンナの姿を借りれば良いや。と。

イナンナは普段こそ大きな隈にボサ髪の疲れ切ったOLみたいな姿をしているものの、顔立ちはとてもよい。くたびれた姿ですらわかる程の美人だ。今でこそ見慣れたが、初めにあつた時は美人すぎて緊張したほどだ。

また一度だけ見た外向けの正装姿は絶世の美女、まさしく女神と呼ばれるにふさわしい美貌だった。隈隠しのためか多少メイクは厚いのだろうが、それは日頃からよく顔を見ているから気づけたのだら

う。

日本人つぼさは欠片もなく、美人でスタイルも良い。男であれば特殊性癖を持った人でもなければ大体は目で追ってしまいそうな姿。これ以上に適した姿もあるまい。

幸いにもあの時の姿は目に焼き付いて離れない。普段のくたびれた姿とのギャップも相まって脳裏に深く焼き付いているのだ。

「現界への顕現けんげん手続き、終了しました。おまたせして申し訳ありません。啓示さ…ま……?」

丁度考えがまとまった頃、ネフティスが小走り気味に戻ってきた。先程とは衣装が変わっており、革のローブのようなものを羽織っていた。

駆け寄ってきたネフティスは何故か俺の名前を疑問形で呼び、前まで来ると唾然とした表情で立ち尽くしてしまった。

「いえ、対して待っていませんので気にしないでください。それより、今回は一緒に現界へ降りて仕事のサポートをしてくださるとお聞きしています。よろしくお願いしますね」

俺は立ち上がって握手を求めながら精一杯の（営業）スマイルをネフティスに向けた。

「え、あ。はい。よろしくおねがいます…。その、イナンナ様自らいらつしやるとは思いませんで、驚いてしまいました」

「イナンナ…?」

おずおずと言った様子でネフティスが俺の手を取りそう言った。

俺もイナンナが来るとは聞いていないので訝いぶかしみながらも辺りを見回す。しかし、イナンナの姿はどこにも見えない。

不思議に思い、目を丸くしているネフティスに問う。

「失礼、私もイナンナが来るとは聞いていません。その話はどちらからお聞きになりましたか?」

「え?…つえ?…つええ?」

俺の問いにネフティスは訳がわからなそうに俺の顔とイシスの顔を交互に見た。

そんなネフティスの姿を見てイシスはくすくすと笑い、机から手鏡

を取り出すと鏡面を俺に向けてこう言った。

「ネフティスの言っているイナンナは貴方のことですよお。ケーシさん」
と。

確かに差し出されている鏡に写っているのはイナンナの姿だ。それも外向けにバツチリ決めているやつ。

本当に綺麗な姿だな。とか考えて居るときに何か引つかかった。そう、これは鏡である。目の前の鏡に写る顔と目があっているのである。つまり、この顔は、

「俺がイナンナになってる…」

イナンナの姿で活動しようと考えていたので問題はないのだが、今は特に変身しようとか考えていたわけではないので少し疑問だが、今は都合が良いので深くは考えないことにする。

「ふふっ。本当に気づいてなかったんですねえ」

「えっ?じゃあ本当に啓示さんなのですか!?!」

「はい、啓示は私です」

ネフティスは目を見開いて俺の姿をじつくりと眺め、眉根を寄せていた。言葉には出されていないが表情からなんとなく何が言いたいかはわかった。

「(なんでそんな姿なんだ)」

と言ったところだろう。

「イシスさんの条件に合う女性型に思い当たる節がイナンナくらいしか居なかったもので…。もしかしてやりづらいですか?」

イナンナは天界のN.O. 2だ。そんな姿で要られたら居心地が悪いと思うかもしれない。平社員が仕事をするとき真隣に専務が居るようなものだろうから。

「い、いえ…そんなことはないのですが…。その、啓示さんって怖いもの知らずなんですね…」

「え?」

「な、なんでもありません!」

なにやら思っていた答えと違う言葉が返ってきて反射的に聞き返

してしまった。

もしかしなくても、超お偉いさんの姿を勝手に使っているヤバイ奴みたいに思われてはしないだろうか。なんとなく周りからの視線もチクチクとしたものから畏怖のようなものに変わっている気がしないでもない。

「えと…。申し訳ないのですが、私は都合にあつた他の姿になれそうにないので、このままやらせてください。中身は私ですので、できれば気にしないでいただけると助かります…」

「善処します…」

これから言葉だけでなく態度も固くなってしまったネフティスと共に現界へ降りることになる。

「ふふふつ、仲良くするんだよネフティス。いつてらつしやくい」

「は、はい。行ってきます。お姉さま」

「ケーシさんもお、妹の事をよろしくお願いしますねえ」

「はい。それでは、行ってまいります」

初めからこんなギクシャクで大丈夫なのかは甚だ疑問ではあるが、少しすればネフティスの方もこの姿に慣れてくれるはずだ。

今回はエルラドと違い、管理者が協力してくれている。だからそこまで大変ではないだろう。と簡単に考えていた。

これから待ち受ける過酷な現界での生活なんて微塵みじんも考えること無く、俺はネフティスと共に現界、イカニモナへ《転移》した。

∴ To Be Continued

第五話：如何にもな異世界みたいです

啓示達が限界へ降りるより過去。イカニモナ歴でおよそ三年前、その男は召喚された。

「…はい？」

重厚なカーペットが敷かれ、荘厳な玉座そうごんの前に現れた男は辺りの様子に困惑し、そして自身の身体を弄り更に困惑した。

それもそのはず、彼は事故に合い、儂くも生命を散らしたはずなのだから。

不幸にも命を落とし、イカニモナに転生させられた男。その名は久々津誠一郎くぐつせいいちろう。彼は元々地球のとある場所に住んでいたなんの変哲もない大学生だった。

彼の死因は溺死。

農家の家庭に生まれ、幼いことより土と共に生きてきた彼は、大型台風が直撃した際に畑の様子を見に行き、どぶ川に転落。そのまま流されて最終的に溺れ死んだ。

だがどうだ。死んだと思っていた自分が何故か見知らぬ場所で大勢の人に囲まれている。いきなりそんな状況に置かれれば久々津でなくとも困惑するだろう。

慌てふためく久々津のそばに豪華なマントを羽織った王が近づき、膝をつく。

「我はセレブダロウの王、ポンドという。勇者殿。落ち着いて聞いてほしい。この世界は其方の居た世界とは異なる別の世界。我らはある事情があり、他世界より勇者を呼び出す勇者召喚の儀を行った。その結果現れたのが其方じゃ」

「は？異世界？勇者？何を言って…」

目をパチクリとさせ、王の言葉に眉根を寄せた久々津に王は「落ち着いた頃に説明させてほしい」と言い残し、臣下達に久々津の世話を任せた。

これまで田舎町しか知らなかった久々津にとって王城での生活は文字通りの別世界であり、浮かれた久々津は王から説明を受けた時を

ロクに聞かずに二つ返事で頼みを引き受けてしまった。

勇者としてもはやされ贅沢ができると思っていた久々津は、各地の荒れた土地の整備などで日々駆り出され、また魔物と出くわしても戦えるようにとセレブダロウの近衛兵と共に訓練に参加させられるなどの過酷な環境に嫌気が差し、我儘を言い出した。

「俺に働いてほしければ相応のものを用意しろ。金でも女でもいい」と。

すぐさま近衛隊長や、視察団など久々津に関わってきた者たちが説得しようとするが、これに失敗。それどころか何故か久々津に与するようになってしまう。

久々津は記憶になかっただろうが、それこそが天界で己が求めた人の意識に干渉する能力だった。

説得に来た者たちを追い返す際に気づいたその能力を使い久々津はすぐさま王を自身の傀儡へ変えてしまう。

それからは好き放題の一言に尽きる有様が続いた。

各地から美女を呼びつけ、意識を奪い自分にとつて都合の良い思想を植え付け侍せる。他国が干渉しようものなら、その国の兵すら傀儡へと変え牙を向く。

天から与えられた力を己の私利私欲にばかり使い始めたのだ。イスは異変に気づき、天啓を与えるなど久々津本人を軌道修正しようとするが響くこと無くついに資源を補うどころか消費し始めてしまった。天の力を悪なる使い方をしたために資源を消費して負の資源を生むという最悪の事態まで発生していたのだ。

そして現在。自身が世界に仇をなす存在になつていいるなど本人が知る由もなく。

「おい、宰相。わざわざ俺が畑を生き返らせてやったというのに上がりが減つているそうだな」

豪華な広い部屋で半裸のまま多数の女性を侍らせ偉そうに座り、この部屋で久々津以外唯一の男に向かって声をかけた。

「はい、農奴を多く使用し手を尽くしていますが、土地が痩せ始めているのか実りが悪くなつていいるそうです。どうか勇者様のお力でもう

一度、畑に祝福をかけてくださりませんか」

宰相と呼ばれた身なりの整った高齢の男性は久々津に傳かしずき、助けを乞うも、久々津はみるみるうちに顔をしかめ、声を荒げる。

「ふざけるな！あれだけ俺を働かせておいてまだ働けっというのか！」

「ですが、このままでは勇者様への上納もままならない状況でして…」

「知るか！愚民共を絞ればまだ出てくるだろ！」

「もう限界でございます。これ以上は農民たちが干上がってしまします」

「それこそ知らんな。俺が助けなければ今頃は路頭に迷っていたような連中だろ。助けに頼るばかりで自分らでなんとかしようとしてこなつたツケだ」

久々津は隣に侍らせた女性の胸を揉みながら鼻で笑いながら宰相へ吐き捨てた。

「で、ですがっ！」

「くどい！山に入って山菜をとつても良い、獣を狩っても良い、生きていくだけならいくらでも方法はある！」

「彼らは獣を追い出すのが手一杯で魔物と出くわした日には逃げるか死ぬかしらできません！」

「じゃあ死なせとけ！」

「……っ！」

「何か言いたそうだな。てめえも愚王ぐおうやこの女共こいつらみたいに操っても良いんだぞ。俺は困らん」

「まさか言いたいことなんて…。従わせていただきますよ。民を守るのが私の使命ですから」

宰相は齒噛みし、ゆっくりと下を向いた。力強く瞑った目には涙こそないものの、悔しさのようなものが見て取れる。

そんな宰相の様子を見て久々津は笑いながら出ていけと指示した。

宰相が退出し、部屋の扉が閉まると久々津は舌打ちをして隣りにいる女性を乱暴に押し倒し、その胸に噛み付いた。

噛まれた女性が苦悶の声を上げるものの、他の女性はそれを咎めた

りすることもなく、まるで心が抜けているかのように黙って見ている。

そんな様子を窓から覗く影が1つ。その影は久々津が性行為を初めた所で静かに城壁を下り城下へと身を隠した。

城下の大通りへ出てもローブとフードでしっかりと顔を隠している影は少しだけ大通りから外れた場所に立つ建物までこそそそと移動すると、ドアを5回ノックした。

「…イシスイズ」

扉は開かず、代わりにそんな言葉が聞こえてくる。それに対し、影は、

「スイートシスター」

そう答えた。

―ガチャリ

鍵の開く音の後にギギギという古い木戸の音が鳴りながら薄く扉が開かれた。建物の中は陽の光がほとんど入らず、明かりは蠟燭ろうそく1本だけの暗がり広がっていた。

「…ツケられてない？」

「…大丈夫です。城下に着いてからは気配を遮断しておいたので誰も私に気づいていません」

「わかった。とりあえず入って」

影はそそくさと建物に入ると大きなため息をついて、ようやく顔からフードを外した。

「ご苦労さま。ネフティス。寒かったですよ。ココアを淹れておいたよ」

湯気の立った木製のマグカップを手渡して王城を偵察していたネフティスを労うのは啓示だった。その姿はイナンナの姿を借りた状態ではなく、啓示本来の姿であった。

「ありがとうございます」

ネフティスは両手を温めるかのようにマグを抱えて何度かフー

フーと息を吹きかけて熱々のココアを啜った。

「熱ッ」

「大丈夫？」

「すいません、大丈夫です」

「落ち着いたら状況の説明をお願いね」

「はい」

しばしの沈黙とココアに息を吹きかける音やすする音だけが続き、ココアの中身が半分ほどなくなった頃にネフティスが口を開いた。

「…王城はひどい状況でした。おそらく宰相以外は全て操られていると見ていいと思います。忍び込むのは至難かと」

「でも、ネフティスは勇者のところに行けたんだよね？」

「お言葉ですが、ケーシ様が私と同じ様に気配を殺して城壁をバレずに登って移動するのは無理かと…」

「それは、無理だね。ごめん」

王城に忍び込むに当たって天の力は使えないという話だったため、実力で登らなければならぬと考えれば無理だ。自慢じゃないが元々運動する方でもなく、社畜ぐらして体力も筋力も貧弱が城壁を登るなど気配を殺さなくともできる気がしない。

「……やっぱりアレじゃないと駄目？」

「それが堅実かと」

アレというのは、俺が身体を女性に変化させて久々津の方から俺達を呼ばせるという手段の事。確かに美形2人で派手に動けばすぐに目に止まりそうではあるが、純粹に女として振る舞わなければならぬというのは精神的にキツイ。

そもそも女性的な振る舞いがよくわからない。イナンナのごとは大体判るが、仕事姿に女性的なものもない気がする。

「ちなみにですが、イナンナ様の姿以外に成れたりしませんか？どうにも心臓に悪くて…」

「うーん。出来なくもないんだけど日本の有名なアイドルの姿だから久々津に警戒されちゃうとおもうんだよね」

「他には？」

「成れたとしても活動できるほど安定しないんだ。期待ハズレで悪いんだけど、まだ天使の力に慣れてなくてね」

「ではやはりケーシ様が噂の新人だったのですね」

「え、噂になってるの？」

「もっぱらの噂ですよ。あの転生課に新人が入り淡々と仕事をこなしている」と

そんな噂になっているなんて知らなかった。一体どこから流れたんだろう。

「ちなみに、噂の出どころは天族ですよ」

「え？」

「あれ、違いましたか？知りたそうに見えたので」

「いや、その通りだよ。びっくりした」

天族というのは俺が天界へ来たときにたらい回しさせてきたアイツらの事だ。何らかの理由があり悪魂あくこんとされたものの、まだ善性が残っている魂が自らの背負っている業を清算するために身を変えたのが天族。

主に生命セフィロートの樹の自動輪廻システムの補助をするのが彼らの仕事だ。生命の樹から弾かれた魂に関する書類を転生課へ持つてくるのも彼ら。要するに天界の庶務、雑用係だ。

「転生課は全ての部署に関係がありますからね。しかも転生課は超絶激務の部署と天界の誰もが知っています。そこに新人が入ったとなれば噂になるのも仕方ないと思いますよ」

「なるほど…」

イナンナは天界ナンバーワンのNo. 2な訳だし、その直轄になる新人となれば目立つのも仕方ないか。

「脱線してしまいましたね。えっと、ひとまず予定通り国境近くの交易街に移動し、ケーシ様のギルド登録を済ませましょう。その後はとにかく派手にクエストをこなしましょう。そうすれば自ずと久々津まで話が行くことでしょう」

「それしかないか…」

「はい、諦めてください」

た。
ネフテイスにそう言われ、俺は項垂うなだれながら静かに「了解」と呟い

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第五話：如何にもな異世界みたいですよ②

「それで交易の街へはどうやって行くんだ？」

いつまでも落ち込んでいては仕方ないので気持ちを強引に切り替えてネフティスへ問いかける。この世界については知らないことだらけなので下手に口を出すより、ネフティスに任せようが計画も上手くいくだろう。

「西の門から出てそこからは転移してしましましょう。座標の調整は私がしますので、転移の力はケーシ様に行使をお願いします」

「わ、わかった」

前回のエルラドでもレオに座標を指定してもらいながら転移しているので、大丈夫だとは思っている。

少しだけ何故ネフティスが転移の力を使わないのかと思ったが、すぐに理由は思いついた。転生課として制限なく天の力を使える俺と違って、ネフティスはほとんどの力を制限されている状態だ。例えば、イカニモナこの世界で見れば破格な力を扱えたとしても。

「ここから飛ぶのは駄目なんだっけ？」

「城下には結界のようなものが貼られているようなので天の力を使った転移は悟られる可能性があるかと」

「え」

そう言われて、目を閉じて意識を研ぎ澄ます真似を試みるがよくわからなかった。

「慣れれば判るようになりますよ。ひとまず、私が気配遮断の魔法を使いますので西門まで行きましょう」

「わかった」

「本当はサクツと屋根の上を跳びたいところですが、この世界の魔法を使うのは厳しいでしょうから歩いていきましょう」

「ごめんね。助かるよ」

偵察の際にも使っていたという気配遮断は魔法だったようだ。今回のように天の力を使うわけに行かない現場がこれからも出てくるとしたら、世界に準ずる天の力とは別の不思議な力。いずれは俺も

各世界でその世界にあった力を扱えるようにならなければいけないかもしれないな。

管理部からイカニモナへ降りた際にも城壁の外から歩いて入ったため街の様子もある程度見ていたが、この街は城下と思えないほど閑散としており、さながらゴーストタウンのようになっている。戦争になるかもしれないということでも質素儉約に努め国のために耐えよとお触れが出ているせいだ。

ネフティスが調べた情報によると、このお触れを出したのは宰相だそうだ。久々津の手から民を守るためだろうというのがネフティスの考察。

国の中枢がこれでは経済的には大打撃になっているはず。酒池肉林を楽しみたい久々津の意には背いているように思える。どうして久々津は放置してるのだろうか。

「…まもなく城門です。なるべく気配を抑えるようお願いします」
「了解…」

石で作られた門を守る衛兵の横をそろりそろりと抜け、忍び歩きのまま衛兵の死角になるところまで移動した所で大きなため息が出た。

「つぶはあ…。息が詰まるな…」

「あはは、まあ次に通るときは堂々と歩けますから。今回だけですよ」

「だと良いんだがな…。じゃあ跳ぼうか、補助を頼むよ」

「お任せください」

ネフティスが俺の肩に手を当てて転移先に関係する情報を直接脳へと流してくる。それを頼りに俺は☒転移☒した。

一瞬だけ視界が白に染まり、次の瞬間には木々に囲まれた大きな街が目の前に現れた。

街の周りには堀があり、入り口は対面になるように2箇所、門というよりは柵に近い扉が街の出入り口を守っている。とても陳腐ちんぷな言い方だが、まさしくファンタジーな世界に出てくる冒険者の街と言った表現がしつくりと来るような見た目。

「あの街へも気配遮断を使って入るのか？」

「いえ、あの街へは普通に入りましょう。大丈夫です。これでも私は

あの街で有名な冒険者なのですよ」

「ネフティスはすでに冒険者登録を済ませているのか」

「ええ、度々歪み散らしに現界へ来るので活動しやすいように。ああ、そうでした。あの街に着いたら私のことは『ティース』とお呼びくださいいな」

「ティースだな。わかった」

「それと、そろそろ女性型へ変化をお願いします。：イナンナ様の姿に關しましてはなんとか慣れるように頑張るので」

「うっ…。わ、わかったよ」

なるべく考えないようにしていたが、ついに来たか。イカニモナについて身を隠した後、イナンナの姿では緊張すると言うことで元の姿へと戻していたが、結局またイナンナの姿を借りることになるとは。

俺はイナンナの姿を想像し、それを自分の姿に合わせるような感覚で身体を変化させる。

数秒とかからずに変わった姿は、先程までより数センチほど目線が低くなり、世界が少しだけ広くなったような錯覚を覚える。

「見事な変化ですね…。イナンナ様そっくりですよ。心臓に悪いくらい…。」

「なんかごめんね?」

少し萎縮したような様子で引きつった笑顔を見せるネフティスに申し訳なく感じながら自分の身体を見る。

普段の『長瀬啓示』としての身体よりやや小さいイナンナの身体。その感覚を確かめるように腕を伸ばしたり手を握ったり開いたりしてみる。

「うーん。動く違和感あるなあ」

「あの、それより前に服装に違和感をもってほしいのですが」

「あー、ぶかぶかだもんね」

「そうでは無くてですね?」

「?」

呆れたようにため息をついてからネフティスは俺の身体を指差し

た。

「スーツはおかしいと思いませんか？」

「……………そうだね」

あまりにもスーツが身体に馴染みすぎて何も思わなかったが、確かに真っ黒なこの服はこの世界に合わないなんてレベルではないだろう。

「服装も身体を変化させるのと同じように変えられますよ」

「やってみる。ありがとう」

「いえ、ケーシ様は天使に成り立てですし仕方ありませんよ」

「はは…」

いくら新人とは言えど、先方にフォローしてもらってばかりなのはなんだか複雑な気持ちだ。早く使いこなせなければ。

その後、服を変化させてみるものなかなかうまく行かず。最終的にネフティスから「スーツの穴（翼が生えていた所）を無意識のうちに直しているのだからできるはず」と助言を貰い何とか服を変化させることが出来た。

淡いブラウンのジャケットにタータン柄と呼ばれる模様のついた薄緑のキュロットを合わせたキルトの衣装。初めはスカートだったのだが俺がどうしても受け入れられず、ネフティスに相談した結果、キュロットスカートと呼ばれる巻きスカートに見えるズボンに落ち着いた。

それでもやや足元に違和感があるが、スカートよりはマシだ。

武器を持っていないのも不自然だという事でレイピアの様に細身のスモールソードを腰の左側に下げ、ようやくこの世界でも違和感の少ない見た目になることが出来た。武器を扱ったことがないので戦えるかと問われれば「無理」と即答できる自身があるが。

ともあれ、少なくとも街に入る分には問題ない。

「左肩が下がってますね」

「仕方ないだろ…。思ったよりも剣が重いんだよ」

「その剣は1kgキログラムもないはずですが？」

確かにネフティスの言うようにこのスモールソードという剣はと

ても軽い。が、1kg近い重さを腰に釣れば重心がずれてしまうのも仕方ないと思う。

スモールソードは一応、刃は付いているものの基本的には刺突剣らしい。普通の剣術すら出来ないのに刺突剣なんか下げてどうるんだと思わないこともないが、どうせ飾りなので気にするだけ無駄である。

「そういういえば俺…じゃなくて、私の名前は どうしますか？ ケーシ様のままなのは些^{ちやい}か違和感があるかと思うのですが」

「そうですね…。というかどうして急に敬語に？」

「一人称を私にするときは自然とそうなると思いますか、癖みたいなものですよ」

「…まあ良いですけど」

少し不満げながらもネフティスは納得してくれた。別に普通に話せないこともないのだが、取引先と話している感覚で居たほうが言葉にボロが出ないと思ったのでありがたい。普通に話しているとなにかの拍子に“俺”と言ってしまうそうだし。何より敬語なら女言葉である必要もないし。

「名前ですが『イエナ』とかどうですか？とある世界の“示す”という言葉から取ったんですが」

「私の名前の『啓示^{けいし}』から連想したのですね。とてもいいと思います」
「ではそれで。そうそう、私達は姉妹という事にするつもりですのでご了承願います」

「わかりました。頑張って妹を演じますね」

「え…」

「え？」

敬語キャラは妹のイメージだったのだが、俺を見るネフティスの目は「何言ってるのこの人」と物語っていた。つまり俺をお姉ちゃんにするつもりなんだろう。もういいいさ、乗りかかった船だ。

せめて姉妹とわかりやすいようにネフティスには敬語を止めるようにとお願いした。敬語で話し合う姉妹とか違和感しかないからな。それと、どうせ俺がお姉ちゃんになるならばイシスに話すように喋っ

てもらったほうが姉妹館も出るだろう。

「それでティース？街での予定はどうするのですか？」

街へ入る門の目前まで来た所で俺はネフティスに今後の計画の確認をした。

「まずは冒険者ギルドでイエナの冒険者登録をしま…するわよ」

「冒険者登録…」

「その後は、一党を組めば私と同じランクまで依頼を受けられるから、高ランクの依頼をこなして悪目立ちするの。大丈夫よ。イエナならどんな魔物でも楽勝だから」

「あの、私は武術経験なんて皆無ですよ？」

「天界と変わらない力を自在に使えるのに現界で死ぬわけないでしょ…。それどころか傷をつけることすら出来ないと思うわ。天の鎧があるのだから」

そう言えば天の鎧は天の力が同等レベルの力じゃないと打ち碎けないのだったか、異世界チートも真つ青な性能だな。天の力があれば冒険者で高ランクになるのも余裕って訳か。まさにオレツエーだな。

今更だけど、目立つことが目的だからとはいえ計画が雑すぎる。どんな依頼があるかわからない以上仕方ないのかもしれないけど、ほら、活動拠点とかさ。

「街では基本的に宿酒場で部屋を取って活動するつもりよ。イエナには悪いけれど同じ部屋で過ごすしてもらってからそのつもりで居てね」

「うえ!?ちよ、ちよつとそれは聞いていませんよー」

「今は女同士、なんなら姉妹なのだから気にすることないわ。むしろ部屋を分けるほうがおかしいと思わないかしらっ？」

「それは、そうですけど…」

今更だけどこの姿で過ごすと言うことは裸を見ることになるのか。いや、風呂の時は元の姿になればいいだけ、勝手に姿を借りておいて裸を見るなんて最低なことはいらない。しちゃいけない。

「さ、門を潜るわよ。覚悟は良い？」

「ええ、行きましよう」

先に行くネフティスを追うように門の外に立つ門番へと近づく。

ネフテイスは手慣れた様子で門番と話しをして、俺に簡易入門書なる木札を発行してくれた。冒険者ギルドで冒険者カードを作るまではこれが無いと街の出入りは出来ないそうさ。

また、何か問題を起こせば簡易入門書はすぐに剥奪されるの？ 明も受けた。

「テイスのお姉さんなら心配は無いだろうがな。はっはっは」
なんて言っていたけれども。

特にこともなく門を抜けた俺達を待ち受けていたのは城下町とも違う、まるでおとぎ話に出てくる国のような煉瓦と木造の家々が並んでいた。

To Be Continued

第五話：如何にもな異世界みたいです③

遠目から見たときも思ったが、カラフルかつ統一感のある木造建築の町並みはとても趣があり、門をくぐって目の前に広がる商店街と思われる建物たちは昔、旅行雑誌でみたノルウエーのブリッゲンの街のようだ。

交易の街というだけあって商店街はとても賑わっており、様々な店舗や露天が軒を連ねている。

至る所から美味しそうな食べ物匂いがして俺の腹をグーっと鳴らした。

「イエナ、姉…さん。えと、…ギルドに行くまえに、お腹すいたなら腹ごしらえしま、する?」

俺の様子をみてネフティスがしどろもどろになりながらもそう言ってくれた。これでも俺は彼女から見たら上級幹部並の相手に当たるらしいので仕方ないだろうが、俺としては早く慣れてくれとしか言えない。

「美味しいものが食べたい!私はお腹が空きました!」

「ふふっ。それなら私の知るところっておきのお店に連れて行ってあげますね。お昼時なので混んでいるかもだけど」

やったぜ。

エルドラでは何故かイギリスの郷土料理しか食べなかつたので異世界特有の料理にはとても興味がある。

：今度エルドラに行ったらウインズにエルフの郷土料理とか作ってもらおうかしら。ヘンリーには悪いけれどスターゲイジーパイは要らない(鋼の意志)

ネフティスの案内で訪れた店は大通り沿いにあり、看板にはでっかく「酒場トラード」と書かれていた。トラードというのはイカニモナで交易を指す言葉だそう。まさに交易の街らしい名前だな。

店内はネフティスの言っていたように繁盛しており、席はカウンターくらいしか空いてなかった。

特に店員の案内などがあるわけでもなく、ネフティスはカウンター

席へと腰掛けたので俺も習って隣に座る。

「よお、ティース！久々じゃねーか！えらいべっぴんを連れてんな。誰よ」

俺達が座るとカウンターの奥で忙しそうに料理を作る大柄な男がこちらをチラと見て言った。

「やつほ、私の姉さんでイエナっていうんだ。ギルドに登録させようと思って連れてきたんだ。しばらくは滞在するつもりだから親父もよろしく頼むよ」

「任されよ！ティースの姉さんって事は強いんだろ？」

「私なんか比にならないくらい強いよ」

え？

「お前さんより強いってもうそれ人間じゃねーだろ」

「そうかもな。とりあえず、私達、腹減ったから適当にランチ作ってくれ。エールは無しでいい」

「あいよっ！ちよーっと待ってな！」

親父さんが豪快に笑いながら鍋を操る。俺は乾いた笑いで流すしかなかった。

そりやまあ、人間じゃない？！というか、俺がネフティスより強いとかホラはやめていたきたい。エルドラでヘンリーと戦った時に理解したけれど、どんだけ天の力と言うとてつもない力を使えようが、使いこなせなければ意味がない。

ヘンリーと同じ様に天の力を使えるであろう久々津と正面からぶつかったら勝てるかわからない。また物理的に首が跳ぶのは嫌だ。あの表現のし難い恐怖は思い出しただけでも冷や汗が出るっつてもんだ。

料理を待つ間、俺は念話を使ってイナンナに現況とこれからの予定を伝えることにした。

『長瀬です。今大丈夫ですか？』

もしかしたらまだブーティカの相手をしていたりで忙しいかと思っただが、返事はすぐに来た。

『大丈夫よ。どうかした？』

『ちよつと報告が―』

久々津の事、イカニモナの状況をさらつと説明して、これからの予定を伝える。イナンナは俺の話を一通り聞き終えると、

『なんか面白いことになっているわね』

そういつた。

『勝手に姿を借りてしまつてすみません』

『別に良いわよ。変なことするわけじゃないなら好きにしてください。そういうえば、その姿なら女湯で堂々と覗けるわよ』

『しませんよ！風呂の時は元の姿に戻りますから安心してください！』

『そうなの？私は気にしないわよ』

『俺は気にしますから…』

『意外と小心ね。まあいいわ。こっちは大丈夫だから向こうに合わせ
てゆっくりやってらっしゃい』

『はあ、わかりました』

茶化すような言葉をかけられ、俺がため息交じりに返事を返すと、
先ほどと打つて変わつて真面目な声色で、

『仕事のためなら私は本当に気にしないから、必要ならその姿を有効
活用しなさい。そのためならばその身体を傷つけても、はずかし辱めを受け
ても構わないわ』

そういつた。

『姿を変えているだけで心は長瀬君自身に変わりはないから、痛いのは
長瀬君だけだね。まあ、頑張つてみて♪』

『は、はい』

真剣な口調に柄にもなく緊張してしまった。普段は疲れ切つただ
るような声のくせに、こういうギャップはズルいな。

『百面相なんかしてどうしたんですか？』

どうやらイナンナと念話で話している間に表情が変わっていたの
かネフティスが耳打ちで話しかけてきた。

念話で表情が変わってしまうのは直さねばならないなと思ひなが
ら口に手を当てて表情を戻し、周りに聞こえないように小声でイナン

ナへ報告をしていた旨を伝えた。

「ふーん……。どこでも気軽に念話ができるんだ…」

「え?」

「私達みたいな一般の神や天使は現界げんかいだと力が大幅に制限されるのは知っていますよね?」

「そう聞いているね」

「例えばですね。現界と、その現界の管理部で念話を繋ぐことは出来ますが、他部署に居る相手には神器しんきを使わなければ念話も出来ません。念話1つ取っても能力の制限がどれだけのものかわかりいた

だけるか?」

つまり媒体も無しに好きなかだけ念話出来るのは転生課に所属しているものの特権ということか。

「私より強いと言っていたのを冗談かなにかと思われているようですが、本気ですよ。久々津が本気を出せばわかりませんが、基本的にこの世界でケーシ様を害することの出来る者は居ないでしょう」

「天の力の衣、か」

「そうです。ケーシ様の制御を上回る力をぶつけられればわかりませんが、いくら天の力を使える勇者でも余程の鍛錬を積まなければケーシ様の天の衣を打ち破れないはずです」

思っていたよりも自分の存在がチートめいていて俺は「ははは…」と苦笑を漏らすしかなかった。

そして俺の中でヘンリーの株がストップ高に達した。今の話から察するにヘンリーは勇者の力に驕らず誠心誠意、世界エルラドに尽くし、力を付けたからあんなに強いのだろう。

…そんな言い訳した所で俺が弱いのに変わりはないが。ヘンリーが強いのはそうなんだろうけど、それ以上に俺が力を使いこなせていないのもあるはずだ。

それにしても今の話が本当ならば本格的にチートなんだな。転生課って。

俺は心の中でイナンナへの感謝を述べた。こんなチートな身体に生まれ変わらせてくれてありがとう。と。後、出来ればもう少し仕事

の負担を減らして欲しいと。

「またせたな。ほれ、トロード特製ランチ2人前お待ち！」

そうしてらうちに料理が完成したらしく、親父さんが俺とネフティスの前に大きなランチプレートに乗った料理をドンと置いた。

「おー…これはっ！」

まさしくマンガ肉！

細い骨に肉が付き、ボリユミーかつ食べやすそうなサイズ。それが2つと、イモの様なものにパンが乗せられていた。

マンガ肉からはジューシーな肉汁が垂れており、イモとパンがそれを吸っている。見るだけで美味しそう。

『ケーシ様。今の姿のままがついたりしないように気をつけてくださいね』

『うっ…そ、そうだね』

よだれを垂らしそうになっている俺にネフティスが念話を使って注意する。今すぐかぶり付きたいがここは上品にナイフとフォークで食べるべきか。とつてもかぶり付きたくなる見た目なのに残念だ。

俺は慎重にナイフで肉を削ぎ落とし、口へと運ぶ。すると肉はホロツと崩れて口の中に広がった。どうやら肉を細かく切って貼り付けるようにして作られているらしい。ケバブみたいなものなのかな。

肉は1種類ではなくいくつかのものが混ざっているらしく、柔らかいものもあれば、少し歯ごたえのあるものもあった。

次はパンに乗せてみる。口に入れると、パンからじゅわっと染み込んだ肉汁が溢れ出る。少々硬いパンではあるが肉と一緒にならば気にならないくらいだ。

タレに付けられているようだが、感じたことのない風味がする。独特のスパイスが効いたタレが肉に染み込んでいてとにかく美味しい。この姿でなければ今すぐにもかぶり付きたい。

「うまいか？」

「とっても！」

「そりゃあ良かった！」

親父さんは料理を作る手を止めずにこちらを見て、にっこりと笑っ

てまた料理に向き直った。

「イエナ姉さん食べるの早いね」

「だってこんなに美味しいんですよ！おかわりしたいくらいですよ！」

ネフティスの言葉に食い気味でそう答えると、お皿の上にお肉が1つ追加された。肉をくれた親父さんの方へ顔を向けると、親父さんは照れくさそうに、

「良い食いつぶりだった例だ。食いな！」

「いいんですか!?!ありがとうございます！やっただつ！」

「ちよつ、姉さん！もう…」

ネフティスはなにか言いたそうにしていたが俺の顔を見ると諦めたようにため息をついた。

「ごめんよ。男は美味しい肉を目の前になると自制が効かないんだ。」

食事に舌鼓を打ち、一息ついて店を出た俺達はネフティスの案内で当初の目的地である冒険者ギルドへと向かう。ちなみに食事の代金はネフティスが経費として持たされていたお金で払われた。

俺も自由に使える金がほしいと思ったのでネフティスに通貨を手に入れる手段を聞いた所、これからギルドで高ランククエストをクリアしていけば余るほど手に入るはずだとの事。

トレードと冒険者ギルドはとても近く、ギルドに着いた俺はすぐさま冒険者登録の手続きを進めることになった。

書面に自分の登録名と使用する武器、使える魔法の系統などを書き入れる。魔法に関してはネフティスから『天の衣があるので防御魔法とか書いておいたら良いんじゃないですか?』と言われたのでそう書いておいた。

最後に記入ミスが無いか確認して、更にネフティスにダブルチェックをもらった上で書類を受付に提出する。

「はい、確かにお預かりしました」

「登録したばかりですまないんだが、姉さんのランクを早急に上げたんだ。特別昇級試験をしてくれないか?」

渡された書類を持ってギルドの奥へ行くこうとする受付さんにネフティスがそう問いかけると、受付さんは少しだけ逡巡しゆんじゆんした様子を見

せたが、すぐに「ギルドマスターへ確認してきます」と言い残してギルドの奥へと消えていった。

しばらく待っていると、受付さんと一緒に背が高く耳が長い妙齢の人物が出てきた。耳の長さはウインスより少し短いように思えるが、おそらくはエルフだろう。

「ティース！久しぶりね」

「エルファこそ久しぶり」

「特別昇級試験をしろって冒険者が現れたなんて聞いたから誰かと思っただわ。試験を受けるのは隣に居る貴女ね？」

「あ、はい。よろしくおねがいします」

女性らしく手を前で組むようにして深くお辞儀をする。こういう細かい所でボロを出したくないからな。

「ご丁寧にも。私はこの街の冒険者ギルドを取り仕切るギルドマスターのエルファよ。貴女は噂に聞くティースのお姉さんかしら？」

ネフティスに姉が居ることを知る相手に、姉と名乗っていいか念話でネフティスに確認すると問題ないということだったので、エルファに肯定の意を伝える。

「どーっても礼儀正しいのね。ティースとは大違い！」

「ちよつと失礼じゃない？」

「ふふっ。言っておくけれど、ティースのお姉さんだからといって試験を優遇したりはしないわ。死ぬ気で挑むことね」

エルファはネフティスの言葉をスルーして俺の肩に手をおいて微笑む。その笑みがとても怖いもののように思えた。

「え、えつと…。試験内容はなんでしょうか…？」

「うちのギルドでナンバーワンNo.1の1等級冒険者、ザコツシュとの一騎打ちよ」

エルファがそう言うと、ギルドの空気がざわついた。そして同時に先程まで俺に向けられていた奇異の目が哀れみのものに変化する。

どうやらザコツシュと呼ばれた人物はとても強い相手のようだ。

ギルドの等級システムの事はよくわからないけれど、1等級なら最上位と見て間違いないはずだ。

不安ではあるが、まあ、どんなに強くても天の衣があれば負けはないだろう。相手は天の力を使えない一般人な訳だし。

「試験は2日後。ギルド裏の訓練場で行うわ。逃げちゃダメよ☆」

パチンツ！とウインクを飛ばされ、俺はまたしても乾いた笑いを漏らすしかなかった。

T o B e C o n t i n u e d

第五話：如何にもな異世界みたいです④

俺はネフティスは耳打ちでザコツシユについて聞いてみた。するとネフティスは嫌そうな顔をしてから、小さくため息を付く。

「ザコツシユは名前の通り雑魚よ。姉さんなら余裕で倒せるはずだわ」

「う、うん。とりあえずティースがザコツシユのことをよく思っていないのは判りました」

「：使うのは剣と炎、特に爆発系の魔法を好んで使うわ。魔力操作に長けていて爆発の反動を使って人間離れた速度で剣を振るうイキり男よ」

ネフティスは渋々と言った様子で淡々と説明した。？明を聞いている限りとても雑魚には聞こえないのだが。

「姉さんの防御魔法を貫ける奴なんか居ないわ。あのイキり男がどれだけ強くておね」

確かに防御面は天の衣があると言っても攻撃面はなにもないし、人間離れた速度とか目で追える気がしない。天の力が使えたって動体視力は普通の人間なのだから。

負けないのと勝てるのかどうかは全く別物だ。

どうしたものかと唸ると、目の前でコソコソしている俺らを見ていたエルファがくすくすと笑った。

「勝たなくても大丈夫よ。実力を見て、見合った等級をつけてあげるから」

それを聞いて少し安心した。倒さなくてもなんとかなるのなら俺は天の衣で身を守るだけである程度の実力と判断されるはずだ。

ズルだつて？良いんだよ。戦えないんだから。

「心配ないわ！姉さんは勝つ！」

「ティース、私は守るだけで精一杯ですよ」

むしろ守ることしか出来ないまである。

「とにかくあのイキり男に勝つのはいいえ、勝ちなさい！」

ネフティスが軽くキャラ崩壊に陥っていた。一体どんな因縁を

持っているのか知らないが、俺を巻き込むのはやめてほしい。

「エルファア！この依頼クエスト受けるから！姉さんの実力を思い知らせてやるんだから！行くよ姉さん！」

ネフティスは壁に向かって跳び、貼り付けられていた依頼書をエルファアに突きつけると、俺の首根っこを掴んで走り出してしまった。

「え、ちよつ、ネフつ、ティース!？」

「ちよつと、ティース！試験は明後日なのよ!？」

エルファアの呼び止める声も虚しく街の外までノンストップで駆けたネフティスは、町外れの森の近くまで来てようやく俺をおろしてくれた。

いや、降ろすというよりは急停止して俺は振り落とされたのだが。受け身も取れなかったものの、天の衣が機能してくれたのか特に痛みもなく背中から着地した。

俺は起き上がりながら道中のことを思い出す。ネフティスは門番の呼び止めを「クエストに行くから!」と言い残すだけでロクに検閲を受けて受けずに飛び出していたが街へ戻る時は大丈夫なのだろうか。

服についた土を払い。なにやらうずくまって頭を抱えているネフティスに声をかける。

「……した」

「え?」

「やらかしたあ！ほんつとすいません！私、頭に血がのぼるって長瀬様に大変な迷惑を!」

「う、うん。とりあえず落ち着こー」

「本当にすいませんでしたあ!」

ガバつと顔を上げたかと思えば俺に向き直り、額を地面に擦り見事な土下座を披露してくれたネフティスにやや引きながら、俺は落ち着くようにと呼びかけた。

それから三十分ほどかけてようやく落ち着いたネフティスは改めて頭を深く下げて謝ってきた。

「大丈夫だから、もう謝らなくていいよ。それよりさ、受けた依頼をこ

なしちやおおう？」

前向きに考えるところ。依頼をこなせば路銀が手に入ると。

試験が明後日であるならば、明日は街を見て回る程度に押さえておきたい。となれば今日のうちに依頼をこなしてお金を手に入れておくしかあるまい。そんな観光気分が良いのは知らないが、考えようによつては久しぶりの旅行みたいなものだ。少しくらい楽しんだってバチは当たるまい。

ネフティスとザコツシユの間柄も気になるは気になるが、そんなのは後でも聞ける。むしろ今聞いて話が長引かれる方が面倒だ。

「依頼内容を教えてもらっていいかな？」

「はい……。えつとこの先の渓谷に出現するワイバーンの討伐です。ワイバーンは別名『亜竜』と呼ばれますが、立派な竜種で強さとしては2等級の冒険者が一党を組んで討伐するようなレベルです」

それでも竜種の中では最弱だと、ネフティスは付け加えた。

「そんなの2人でどうにかなるの？」

「私ならソロでも狩れなくはない相手ですね。ワイバーンの攻撃手段は鋭い翼爪とムチの様にしなる尻尾、あとは噛み付く程度なので近接戦闘で倒すことができます。長瀬様はあまり天の力を扱うのに慣れていない様子でしたので、練習になればと」

取り乱していた割にはしつかり考えられてる。討伐数は5匹以上で、6匹目からは追加報酬となるそうだ。1匹辺りの報酬も大きく、1匹分で街の人間が1週間ほど生きていけるほどの金がもらえるらしい。

破格すぎるような気もするが、最弱とは言え竜種の鱗は硬く剣を弾く、また空を飛ぶため並の冒険者では一方的にやられてしまい、手傷を追わせることすら出来ないそうだ。

そんなワイバーンを1人で倒すことになりました。

「なりましたじゃねーんだよー！」

俺は憤りをどこにぶつけるでもなく叫びとして虚空に放った。

「何を叫んでいるのですか？」

「なんでもない」

「?えっと、本当に私は見ているだけでいいんですか?」

「うん。自分の使う路銀くらい自分で稼ぐよ」

どうせ戦うことは避けられないのなら、自分を追い込んでしまおう
と言い出したものの少しばかり後悔していた。というのも、既に上空
にはワイバーンが数匹飛び回っており、俺らのことに気づいているの
かキーキーと甲高い鳴き声を渓谷に響かせているのだ。

遠目なので正確な大きさはわからないが、おそらく頭から尻尾の先
で10 mメートルはありそうに見える。

正直、あれが体当たりしてくるだけでも人間は粉々になると思う。

「ワイバーンは岩肌を砕いて落としてくることもあるので、戦うなら
ば開けた場所に出て爪などの直接攻撃を誘い出してください」

「わかった!」

俺は何度かの深呼吸の後、意を決して岩陰から飛び出す。一気に走
り、言われた通りなるべく開けた場所へと出る。

—ギキイイイ

何匹かのワイバーンが俺が飛び出すと同時に騒ぎ出して、そのうち
の1匹が俺に向かって急降下してきた。

いきなりすぎる攻撃にビビり反射的に目を閉じて頭を守るように
腕を突き出す。それからすぐ、ズゴン!という大きな破壊音が聞こ
え、情けなくも俺は膝から崩れてしまう。

心のなかで何度も天の衣があるから大丈夫だと自分に言い聞かせ
て、ゆっくりと目を開けるもののワイバーンの姿はそこになかった。

「一体どこに!」

そう思ったのもつかの間、今度は背後から破壊音と共に大量の石つ
ぶてが飛んできた。

「わあう!」

即座に身体を丸めて衝撃をやり過ごそうとするが、そもそも衝撃を
一切感じない事に気づいた。ネフティスが言っていたように俺の害
することは出来ないようだ。

「…ふふふ、ふふふふふ、アーハッハッハッハ!勝てる!どうしたワイ
バーン!俺は傷一つ付いてないぞ!」

—ギユアア—！

「ひいっ！」

調子に乗ってごめんなさい。怖いものは怖いです。

ある程度は状況に慣れてきたものの、でかい空を飛ぶトカゲなんて居るだけで威圧感がある。それにいくら俺に攻撃が通用しないと云っても俺からワイバーンへの攻撃方法も特に無い。

俺は腰に下げたスモールソードを抜き、テレビで見たフェンシングの構えを見様見真似で取って切っ先をワイバーンへ向けてみる。

こんな細い剣なんてワイバーンに当たった所で折れてしまうのではないかと思ってしまう。

『ケーン様、落ち着いて攻撃を避けて剣を当てるのです』

どこからか様子を見ているらしいネフティスが念話を飛ばしてくるが、それが出来たら苦労はしない。

そもそもスモールソードは刺突剣だ。凶体のでかいワイバーンを相手にこんな細い剣を刺した所でダメージになるのだろうか。

『その剣は天の力で作られています。ある意味で聖剣クラスの代物なので折れる心配はありません。私を信じて思い切り振り抜いてください』

『りよ、了解…！』

攻撃が通じなかったのが不服なのかワイバーン達は騒ぎ、今度は2匹同時に急降下してきた。

引け腰になりながらも俺は目を閉じないように眼を見開いて突撃してくる2匹のうち片方だけを注視する。

ワイバーンは地表近くまで降りてくると身体を捻り、前方向に回転しながら速度の乗った尻尾を垂直に叩きつけてきた。

どんな屈強な壁でも崩せそうな一撃は、天の衣によってあっさりと受け止められる。

「うおおおおおー！」

一寸先に見える巨大な尻尾に怖気づきそうになりながら俺は剣を力任せに振り抜く。すると—

—スッ

と、まるで常温のバターをナイフの刃で撫でたかのように滑らかにワイバーンの尻尾に剣が入り、そのままスパツと尾を切断してしまっ
た。

続けざまに襲いかかってきたもう一匹にも反射的に腕を振る。低空を滑空して噛み付くように襲いかかってきたワイバーンは頭から脚にかけてスツパリと切られ見事なまでの2枚まい卸おろしへと変貌へんぼうする。

「え？」

2枚に卸されたワイバーンから大量の血と内臓が降り注いでくる。が、血は一滴たりとも俺の身体にかかることはなく天の衣によって弾かれた。

「うっ……」

辺りには強い血の匂いが広がり、散乱した臓物ぞうもつが意識を白に染めようとしてくる。

辛うじて意識を保てたのは、まだ目の前にいる尻尾の切れたワイバーンが俺を食べようと大口開けて居るのが見えたからだ。

「うあああああ!!」

食べられたくない一心でワイバーンに向かって剣を振る。

スパツと、ワイバーンの脚が飛ぶ。

剣を振る。

今度はまさに食べようとしていた下顎が切断される。

痛みからかワイバーンは大きな声を上げ首を持ち上げ、俺の剣から逃げようとする。

「ふっ……ぐあ……!!」

俺はただ剣を振る。

剣を振る

剣を振る。

翼を、胴を、脚を、腕を。

恐慌状態になり、何も考えられなくなったまま切り落としていく。

「ギ……ギギア……」

身体中を切られ、虫の息となったワイバーンがついに身体を支えきれなくなつて倒れた。

ズズン…と大地を小さく揺らしながら倒れたワイバーンの頭に俺は容赦なく剣を突き刺す。

「はぁ…はぁ…はぁ………」

初めて生き物を殺した感触が手に残り、切り裂いたワイバーンの身体、飛び出した臓物が脳裏にフラッシュバックして最悪の気分だった。

止めに濃厚な鉄のような血の匂いでついに俺の精神は耐えきれなくなった。

「うぉぁえ…」

ゲボオつと胃の中に入っていたものを吐き出す。すべて吐き出してもなお吐き気は治まらなかった。

頭がぐるぐると回り、胃の中がひっくり返ったような感覚で目眩がする。自分が今、立っているのか座っているのかすら判らないほど気持ち悪い。

胃液すら出なくなるほど吐いて、やがて意識はプツリと切れた。

…T o B e C o n t i n u e d

第六話：チートで無双らしいです

意識を失った俺が目を覚めたのは、辺りがすっかり暗くなった時間だった。寝ている場所も草の上では無くベッドの上。どうやらネフティスが運んでくれたらしい。

朦朧もうろうとする意識の中、半身を起こして昼間のことを思い出す。と同時に殺したワイバーンの姿が脳裏にフラッシュバックし、再び吐きそうになる。

自分の手を見るとわずかに震えている。その震えを抑えるように拳を握り、自分の額ひたいへと当てた。

生き物を殺した感覚がべつとりと手に付いて離れない。

殺したから生きている。殺されないために殺した。その事は理解している。つもりだ。ワイバーンを殺すことで近隣の人々が襲われぬようにギルドの依頼で、“仕事”で殺した。

これが責任転嫁だと言うことはわかる。それでも俺は――

「…ん。目が冷めましたか」

「ネフティス…」

俺の隣で毛布に包まれるネフティスが薄めを開けながら眠そうに声をかけてきた。

気づかなかったが、どうやら一緒に寝ていてくれたようだ。情けない話だが寄り添ってくれているネフティスにとっても安心感を抱いていた。

「…気分は…、あまり良くなさそうですね」

ネフティスは震える俺の手を包み込むように握った。

「とても冷たいですね」

「…」

「怖かったですか？」

「…うん」

武器という相手を殺傷するための道具を使いワイバーンを殺した。頭に剣を突き刺した時、俺はワイバーンと目があつた。怖かつた。呪い殺されるのではないかと思うほどに。

「生き物を殺すのは誰だって怖いものです。ケーシ様が臆病なわけではありません。だから安心してください。さあ」

ネフティスは俺の手を引き、俺の身体を寝かせた。そして頭をそつと抱き寄せ、胸に包み込んだ。

「ね、ネフティス…!？」

「今はゆっくり休んでください」

困惑する俺を、ネフティスはまるで子供を抱くように頭を撫でてきた。

ほんのりと甘い香りと、温もりに少しだけ慌てたものの、疲弊した俺の心には効果抜群で、程なくして俺は眠りに落ちた。

こんなにあんまり安心して眠れたのは幼い頃に母さんの腕の中で寝た時以來かもしれない。

翌日、窓から差し込む朝日で目覚めた俺は、眼前に見えるネフティスの顔に思わず声を上げそうになり、すんで既の所で夜のことを思い出してゆっくりとネフティスの腕を解いた。

眩しい朝日に目を細めながら窓を開けて外気を取り入れる。寒くは無いがスーッと流れる風に少しだけ身震いが起きる。

「むにや…寒っ…。姉さん、寒いー…」

「あ、ごめんなさい」

「むにや…すう…」

朝日を避けるように毛布を頭から被り寝息を立てるネフティスに口をほころばせながら窓をしめる。

昨日は良い歳した大人なのに格好悪い所を見られてしまったな。そんなふうにいるながら俺は宿の1階へ降りて宿の女将さんに井戸の場所を聞いた。

そして水を汲み上げた桶おけを覗くと、そこには髪の毛のボサボサなイナンの顔があった。

「うおあ!？」

思わず奇声をあげて桶を手放す。

—…ポツシヤン

「…」

桶が落ちる音から数泊の間を置いてから俺は自分がイナンナの姿を借りている事を思い出して恥ずかしくなった。

俺の声に心配してきてくれた女将さんに問題ないことを伝えて、俺はもう一度水を汲んで顔を洗い、髪を軽く手で漉すいておく。

軽く寝癖を取ればいいと思っていたが思った以上に髪が言うことを聞かない。髪が長い女性って手入れが大変なんだな。

「あらーちよつとお嬢ちゃん！」

「へ？」

「ダメじゃないそんな乱暴に髪を弄もっちゃ！折角、綺麗な黒髪なんだから！こつちに来なさい！」

「え？えー！」

髪を整えていた所に宿の女将さんが現れ、あれよあれよと言う間に宿の中に引き入れられてしまった。

壁に鏡の備えられたドレッサーらしき机の前に座らせられ、髪を梳かされる。おまけに椿油まで使ってもらって、女将さんの手入れが終わると元のボサ髪は何だったのかと言うくらいツヤツヤのストリートになっていた。

女将さんと言うとなんだか人仕事終えましたみたいな満足げな顔で額の汗を拭っている。

「姉さん？」

ギィ…つと音を立てながら薄く開かれた扉から寝ぼけ眼のネフティスが顔を覗かせた。

「ようやく起きてきたのかい。相変わらず朝に弱いわねえティースちゃんは」

「女将さん…？」

「ほら良いから顔を洗ってきなさい」

「ふあーい…」

女将さんからタオルを手渡されたネフティスは欠伸混じりの返事をしながら、またギィつと扉の音を鳴らして首を引っ込めた。

その後、ばつちり目を覚ましたネフティスは街の案内をしてもらいながら昨日の出来事を聞く。俺が気を失ってからのことを。

どうやらあれから残りのワイバーンを1人で片付けたらしいネフティスは俺を担いで街まで戻り先に宿で寝かせてからギルドへ報告へ行ったそうだ。

後は何もなく、夜にうなされていたらしい俺と添い寝する形で寝て終わり。

それからはクエストのことに付いて話してくれた。

討伐したワイバーンが計12匹。報酬は成功報酬で大銀貨3枚と、追加討伐7匹分で大銀貨2枚と小銀貨3枚。合わせて大銀貨5枚と小銀貨3枚が報酬だ。と言われても価値観がよくわからないのでそれについても軽く説明してもらった。

大銀貨は小銀貨10枚分、小銀貨は銅貨50枚分の価値があり、この街の一般的な住民が日々を生きていくのに1日あたり銅貨20枚程度必要とのこと。つまりたった一度のクエストでこの街の住民が130日以上生きていけるほどの大金を手に入れたことになる。

「とりあえず、これ姉さんの分ね」

そう言いながらネフティスは大銀貨を3枚手渡してきた。

「多くないですか？私、3匹くらいしか倒せていませんよ？」

「私は元々手持ちが割とある方だし、姉さんは街の散策でもお金使いたいでしょ？」

「それは、まあ」

「だから気にしないで受け取っというて」

「なんだか妹にお金の心配されるのは情けない気もしますが……。ありがとうティース」

お金を貰った私はすぐ近くの屋台へ向かってレモネードらしきドリンクを2杯買った。

「はいどうぞ」

「ありがと」

買ったレモネードをネフティスに渡して考える。容器は木製で飲み終わったら返さねばならない。その上で2杯頼んで銅貨2枚だった。

レモネード

感覚的には銅貨1枚で100円くらいの気がするが、だとすれば1日あたり銅貨20枚というのは些か安すぎる気もする。それともこのくらいの生活水準であれば十分なのだろうか。

「姉さん難しいこと考えてるでしょ」

「ちよつとお金のことを考えていただけですよ」

「そんな心配しなくても、適当にドラゴンとか狩ってくれば数年は遊んで暮らせるわよ?」

「ど、ドラゴンだなんて簡単に言うなっ…言うものではありませんよ!」

ドラゴンと言うからにはワイバーンなんかとは比較にならないほど大きくて強いのだろうし、俺なんか出くわしただけで気を失う自信がある。現にワイバーンと戦っただけで気絶したのだから。

「姉さんなら何が来ても余裕なのよ。もつと自信を持ちなさい」
「そう言われても…」

怖いものは怖い。なんとなくの感覚で使っているけれど、天の力は目に見えるわけじゃないし、戦いとなると天の衣がいつ破られるのか不安でならない。ヘンリーレベルに強く、更に天の力を使えなければ破られないと? 明を受けても信じきれないのだ。

非現実的で、不確かな力。それをすぐに理解し、納得しろというのは無理がある。

転移や身体の変化はある程度慣れてはきた。それでも転移前は心臓がバクバクになっているけれど。

だってそうだろう。転移に失敗したらフィラデルフィア計画のエルドリッジの様になるかもしれないのだから。

自分1人ではまだ飛びたくないね。エルラドの時もウインズに座標指定してもらって跳んでいるし、イカニモナ（イカニモナ）に来てからもネフティスに座標指定してもらっている。なんやかんやで自分の力だけで跳んだことはないからね。

…話が脱線したが、この世界の金銭感覚よ。

少し考えてみた結果、思いついたことが1つある。

『ネフティス、この世界に砂糖ってある?』

『ありませんね。イカニモナで甘味料と言えば蜂蜜はちみつですが、高級品ですよ』

『じゃあさつきのレモネードはかなり贅沢なものか』

『そうですねー。蜂蜜が使われていたようなのでかなり贅沢だと思いますよ』

やはりか。

地球でも中世の頃はまだ甘味が主流ではなく、イカニモナと同じ様に甘いものと言えば蜂蜜かじつか果実かじつだったと聞いたことがある。

『銅貨より更に細かいお金があれば教えてほしい』

『あれ？言い忘れてましたか…。えっと、小銅貨があつて5枚で銅貨1枚分ですよ』

『昨日のお昼に食べたパンは1つでいくら位？』

『小銅貨で2枚くらいですね』

俺はネフティスに念話で礼を言って考える。この世界は、一見すると中世ヨーロッパくらいの文明に見えるが、それにしても鉱物資源が豊富と見える。聞けば大銀貨の上にも小金貨と大金貨、更にその上に白金はくきん貨があるらしい。まあ、依頼達成までに金貨を使うことは無いだろうと言われたけれど。

ちなみに貨幣には現代日本の硬貨より細かな細工もされている。これについては魔導具によって施されているそうだ。

魔法のせいなのかは知らんが文明レベルがめっちゃくちゃだな。

『ケーシ様』

うんうん、と考えを巡らせているとネフティスが念話を使って話しかけてきた。

『どうした？』

『天界に住む先輩としてアドバイスです。どうやらこの世界についてあれこれ考えているようですが、どうせ依頼が終わるまでの間しか居られません。考えようによっては仕事とは言え現界げんかいに降りているのです。少し位、息抜きしても怒られないと思いますよ。特に転生課かたの方は休みが全然無いと聞きますし。長瀬様は些か根を詰めすぎているように感じますよ』

「うっ…」

痛い所を突かれて思わずうめき声が漏れた。

根を詰めすぎだと言われるのはこれで2度目だ。会社に居た頃も同僚に言われた覚えがある。

『この世界のことを深く知ろうしてもらえるのは管理者として嬉しい限りですが、ケーシ様が次に来るとしてもおそらく貨幣そのものが変わっていると思うので、考えるだけ無駄かと』

言われてみればその通りである。そもそも転生課の出向が必要な案件自体が珍しい(らしい)のだ。ブーティカのように杜撰ずさんな管理でもしなければ滅多に起こらないのだろう。

その上で再びイカニモナを訪れる機会など、いつあるのか想像もつかない。

『今回は特に急ぎでもありませんから、ゆっくりしましょう。私も管理課で書類に追われるよりはこうして現界で活動するほうが好きなので』

『あはは、そうだな。俺も転生課で事務仕事するより、こうして見知らぬ土地を旅するほうが好きかな』

『ふふ、でしょう?』

ネフティスと2人、向き合って笑い合う。旅行気分でもと内心では思っていたつもりだが、どうやら心底ではあまりにも仕事脳になりすぎていたようだ。

とりあえず今日はオフみたいなものだし、久々の旅行を楽しむくらいの感覚で居てもいいだろう。

そうして、ネフティスの助言の通り、張り詰めていた気を緩めて街を練り歩いた。そして日が落ちそうなほど傾いた頃、俺達は宿まで戻ってきた。

夜に何を食べようかネフティスと話しながら宿に入ろうとすると、
「—ようやく帰ってきたか、ティース。久しぶりだな」

ネフティス呼び止めるような声が聞こえた。

∴To Be Continued

第六話：チートで無双らしいです②

「姉さん。この宿の女将さんが作る魚のパイは絶品なのよ。夜はそれを食べましょ」

「へ？え、ええ。そうね」

かなりハッキリとした声で呼びかけられたというのにネフティスはまるで耳に入っていないかのように呼びかけてきた男を無視した。

俺はと言うとどうしたら良いか一瞬だけ迷ったものの、ネフティスは男を無視してずんずんと宿へ入って行ってしまったため、男を一瞥だけして慌てて宿へと続く。

「えつと……。良かったの？」

宿の扉を閉めてから小声でネフティスに男の事を問いかけると、ネフティスは純粋な眼で、

「何が？」

そういった。

「な、なんでもないです」

本格的に男のことを居ない者として扱っているネフティスの笑顔に若干の恐怖を覚えつつ、これ以上の刺激をしないように俺も宿の前に居た男は忘れることに――

「―つだあ！無視すんなよ！」

バアン！と大きな音と共に扉が開け放たれた。音に驚いて反射的に振り返ると、そこには先程の男が憤慨した様子で立っていた。

まあ、そりやあ目の前で無視されればそうなるよな。

しかし、やはりネフティスは男の事など意にも介さずに、

「あら……。？扉が勝手に。風かしら？ごめんなさいねキッチンとしてなかつたみたい」

などと宣のたまいながら扉に近づくと、扉で男を押し出すように閉じようとした。

「おい……。こら！待てて！ちよちよ、腕、腕挟まってるから！痛い！痛えんだけど！ちよつと!!」

男は慌てて宿の中に入り込もうとしてネフティスに腕を挟まれて

しまった。ネフティスはというと「あら……おかしいわね。何かが引つかかって扉が閉じないわ」とか言いながら尚も無理やり扉を閉めようとしているので流石にストップをかけた。

これ以上は男に怪我を負わせかねない。

俺がネフティスの肩に手をおいて止めるように伝えるとネフティスは男に向かってわかりやすく舌打ちをしてから扉から手を話した。ネフティスの反応から察するに、この男が明日、俺が戦わなくてはならない「ザコツシュ」とか言われていた冒険者なのだろう。

「いつてえ……。腕が千切れるかと思っただぜ……」

「そのまま千切れれば良かったのに」

「他人事みたいに言ってるけど千切れそうになった原因はお前だよ!？」

それにしてもここまでネフティスが嫌悪するなんて、一体どれだけ深い因縁があるのやら。

それから俺は事あるごとに噛みつきこうとするネフティスを宥なだめながら、宿の女将さんに騒ぎのことを謝罪してついでに食事のこともお願いした。そして次に男の方にも謝罪をしてエールを一杯奢る事で許してもらった。

男は単純だから美人に謝られたら無条件で許してしまうものだ。うむ。わかるぞ。俺も初めてイナンナに会った時、地雷臭を感じつつも働くことを選んでしまったからな。

今日、街を練り歩いた時も思っただけど、美人ってのはそれだけで得なのだ。

「先程は妹のティースがご迷惑をおかけしてごめんなさい。私はティースの姉の……イエナと申します。そのお腕の方は本当に大丈夫でしょうか？」

「あ、いえ。だ、大丈夫です！俺、頑丈なのを取り柄なので！お、俺はザコツシュって言います！」

やはりこの男がザコツシュだったか。

「鼻の下伸ばしちやって、私の姉さんに手を出したらアンタのポークビッツ切り落とすからね」

「相変わらず怖え女だな……。別に変な事はしねえよ」

ネフティスの言葉にザコツシユが身震いした。そして俺も密かに下腹部にキュツとした感覚を覚えていた。そうなのである。こんな姿ではあるが下は付いたままなのだ。姿を真似るくらいはできても完全な女体化まではまだできないのだ。

「というかネフティスさん随分と恐ろしいことをサラツと言いますね……。」

「で、アンタは何しに来たわけ？」

「何しにとは御挨拶じゃねえか。俺はお前の言い出した特別昇級試験のせいで受けていた依頼クエストを急いで片付けて戻ってくるはめになったんだぜ？」

「あつそ。急いで疲れてるなら都合ね。さつさと姉さんにみつともなくやられてさつさと醜態しゆうたいを晒さらすといいわ。みんなもまさか1等級冒険者様ともあろう者が初心者冒険者にやられるなんて思わないでしょうね」

しかし、ネフティスはなぜこんなにもザコツシユのことを嫌っているのだろうか。見ている限りでは人も悪くなさそうだ。それに行儀も良い。女将さんが淡々と運んできた料理と酒にお礼も言っていたし、食べ方もきれい。育ちが良いのかもしれない。

「はん。俺の速さについて来れる奴なんて居ねえよ。忘れたならまた思い出させてやろうか？」

「早いだけのアンタに姉さんの防郭ぼうかくは抜けないわ」

「ほーう？ そうなのか？」

だからネフティスさん。私怨に俺を巻き込むのやめていただけませんかね……。

俺は心の中でため息をついてからも表情には決して出さないうように気をつけてから笑顔で、

「さあ、どうでしょう？」

とはぐらかした。下手に答えてしまうと実力を見抜かれかねないからね。

俺の答えにザコツシユは少しだけ目を細めて、そしてニヤつと笑っ

た。どういう意味の笑みかはわからないが、なんとなく嘲あざけられたような気がする。

「どれほどの防郭を使うのか知りませんが、守りに徹するだけじゃ俺には勝てませんよ?」

「……勝てなくても負けなければ良いのです」

「ほう、大した自信だ。明日が今から楽しみですよ」

口調こそ穏やかなものだったが、今度の笑みと口ぶりから明らかにこちらを挑発していた。

どういう訳かは解らないが、先程までのやり取りから察するにどうやらザコツシユはネフティスより強いらしい。そして既に俺より強いつもりなのだろう。

いや、その通りなだけだ。

挑発して俺のやる気を出させるつもりなのだろうが、俺は自分が弱いことを痛いほど理解しているし。こいつのスピードを捉えられるとも思わない。

当然だ。俺は昨日のワイバーンですら尻尾の動きとか見えていなかったのだから。爆発の推進力を利用して人間離れした速さで動き回る奴なんて見えるはずがないだろう。

「精々、俺を楽しませてくれよな」

「善処しましょう」

ザコツシユはニカッと笑うと、手に持ったエールを一気に煽ってから金を机に置いて「俺の奢りだ」と言い残して宿から出ていった。宿は取っておらず、ギルドで寝泊まりするそうだ。

ちなみに置いていかれたお金は3人分の食事代を払っても尚余るほどだった。

「つち……。1等級なら金貨くらいポンと置いていけよ」

ネフティスさん。そういう毒は内に秘めてもらえませんかね。昨夜の出来事が胡蝶こちようの夢ゆめだったんじゃないかと思えてきちゃうだろ!

それからお酒を飲みつつイライラした様子のネフティスが落ち着くのを待つてから、部屋に戻り明日の対策を立てることにした。

具体的にはどうやってザコツシユに攻撃を当てるかについて。防

御面に関しては天の衣を貫けるわけないとネフティスが断言したので議論が始まる前から終わっている。

「攻撃を当てるのなんてケーシ様が天使の力を使いこなせれば余裕だと思えますけどねえ。なんなら時間圧縮したっていいでしょうし」

「そんな簡単に言われても……」

「実際、簡単なはずなんですよ。天使は生命セフィロートの樹を介して知識と力を授けられているんですから。本来は赤子が息をするように力が使えるはずなんです。元の姿に引つ張られ過ぎなのでは？」

前にもそんなことを言われた気がするけれど、俺の常識は地球で生まれ育てられた物なのだから仕方ないと思うんだ。大体、目に見えない不確かな力をどう知覚しろというのか。

「そういう意識が問題なのでは？」

「あの、天界の住民は読心が基本能力なんすか？」

「？」

「ナンデモナイデス」

思わず口をついて出た言葉にネフティスは「何言ってるんだこいつ」みたいな顔をした。

イナンナといい、イザナミといい。どうして考えを読んでくるのか。そんなに考えが読みやすいのか？

まあ、ネフティスの言わんとする事もわかる。自分でも人間でなはいという事の本質を理解しきれてない感覚はあるのだ。その気になればイスラのような力を使えるはずなのに俺の意識が邪魔してるよ
うなそんな感覚が。

「……なんかもう考えるの面倒くさいんで、とりあえず明日は強く当たって後は流れでお願いしますね」

「雑に丸投げしないでよ……」

「あのですね。こう言っただけなんですけど、今のケーシ様にどんな作戦を立てたところで無駄だと思うんです。まともに使えるのは翼に頼った飛行とよく見知った特定の相手への変身だけです。転移は座標補佐があつてようやく使える。天の衣は天界に生きるものとして勝手に機能しているに過ぎないのですから」

「ぐうの音も出ないです……」

「であれば、もう細かいことは考えずに天の衣一点に頼れば良いと思うんです。ザコツシユはかなりの実力者です。が、それはあくまでもイカニモナにおけるもの。天の力が使えるわけではありませんから、ケーシ様の天の衣は私共で作った聖剣でも使われない限り破られないでしょう」

「待て待て待て、それは盛大なフラグじゃないのか」

聖剣を持ち出されたら天の衣が破られる恐れがあるとか嫌な予感しかない。もしも、本当にこれがフラグになったら――

「フラグというか、実際にザコツシユはアパラジタと呼ばれる聖剣を持っていきますよ」

「駄目じゃん!」

「あー、心配は要らないかと。試験で使われるのはギルドで用意する安全処置の施された武器なので」

「聖剣を持っていても使われるわけではないのね」

それを聞いて少しだけ安心した。すくなくともやられてしまう心配は要らなくなったのだから。別に勝たなければならぬ訳ではないし、これはもう実質勝ちですね。

……などと浮かれていられるはずもなく、俺は明日の戦いへの不安でいっぱいだった。

喧嘩すらろくにしたことのない俺からすれば武器を扱うと言うだけで怖い。ヘンリーと対峙したときに初めて知った殺気というもの、あの時は俺がブーティカの刺客ではないとすぐに理解してくれたヘンリーが剣を収めてくれたが、今回の試験は俺も剣を持ち相手と戦うために対峙しなければならぬ。

一応、ワイバーンと戦う前に腰に下げてるスモールソードの使い方ネフティスに手ほどきしてもらったが、ド素人の付け焼刃など全く当てにはならないだろう。

そんなこんなで不安だらけな俺はまたしてもネフティスの腕に抱かれながら眠りについた。おかげで起きたときの気分は最悪だった。女性慣れしてないこともあり寝起きにネフティスの寝息が髪に触れ

る感覚で一気に動悸^{どうき}が激しくなり、おまけに寝たままがっちりと俺の頭をホールドしており、昨日はワイバーンシヨックのためか気にならなかったがネフティスからはなんか良い匂いまでする。

無理に腕から逃れようとしたら胸に顔をこする事になりそう動くに動けず、俺はネフティスが目を覚ますまで部屋中に響いてるのではと思うほどに激しく大きな音を立てる自分の鼓動よりもハッキリと聞こえてしまうネフティスの寝息と匂いにドギマギしながら、反応してしまっているマイサンに「静まれ、静まれ」と念を送りながら過ぎました。

おかげで解放される頃には心身ともに疲れ切ってしまった。心なしか2徹した時よりも疲労感が強い気すらする。

それでも試験から逃げられるわけでもなく、俺は疲労感を感じながら準備をしてギルドへと向かう。ネフティスはというと、まだ寝ぼけていて女将さんが世話をしてくれているはずだ。本当は不安なので一緒に来てほしかったが、起きるのを待っていると約束の昼前に着けそうもなかったので仕方がない。

社会人たるもの5分前には目的地についておかねば。この世界に日時計と水時計しかないから5分前とかわからないけどね！

ギルドに着くと、一昨日とは比べ物にならないほどの人が集まっていた。どうやら皆、俺の特別昇級試験の様子を見に来たらしい。それを知った俺は顔が引きつりそうになった。

ギャラリーが居るとか聞いて無い！そう叫びたい気持ちを抑えて、俺は受付カウンターの側に居るザコツシュへ近づく。

「こ、こんにちはーい、いやよく逃げずに来ましたね！」

ザコツシュはやたらとでかい声で、ややどもりながら挨拶をしてきた。

「あら、ザコツシュさん。こんにちは。本日は、よろしくおねがいします」

「こちらこそ！試験は全力で来てください！不肖ながら1等級冒険者ザコツシュ・ヨワギス、胸をお貸しします！」

テンション高いな！この人。そう思った。

「そういえばティースのやつはどうしたんですか？」

「あの子はお寝坊さんなので……。もう少ししたら来ると思うんですけど」

ザコツシユに聞かれてそう答えると、ギルドの中には「ああ、なるほど」と言った感じの空気が流れた。どうやらネフティスの朝の弱さは周知の事実らしい。

「ティースの事、待つ？」

ギルド長のエルファが気遣ってそう言ってくれたのだが、ギャラリーがこれだけ居る中で試験の当人ではないティースを待つために予定を遅らせるのは気がひけるのでティースを待たずに試験を開始することにした。

ギルドが用意した武器の中から、腰に下げているものに近いスモールソード風の模造剣を手に取りギルドの裏手に広がっていた訓練場でザコツシユと相対して立つ。

さあ、試験開始だ。

To Be Continued

第六話：チートで無双らしいです③

気合を入れて剣を構えた俺を前にザコツシユが薄く笑う。おそろくは俺の構えが成っていないのを一瞬で見抜いたのだろう。

付け焼き刃で剣術の所作を教わったとはいえ俺は戦いのド素人なのだ。

俺は長めの深呼吸しながら右手に持った剣を強く握りしめる。そして、腰をやや落として切っ先をザコツシユの心の臓へと向け睨みつける。

「おーこわいこわい。美人がそんな顔で睨むもんじゃねえ……っぜ！」

ーバボン！カンツ！

ザコツシユが軽口を叩いたかと思つたら、ザコツシユの立っていた位置がいきなり爆発した。その光景に驚く間も無く持っていた剣が弾かれる。握りしめていたおかげで剣が飛ばされることはなかったが、弾かれた影響で腕も上がり俺の胴はがら空きになった。

「手加減はしてやるよ！」

爆発で加速された剣の腹が俺の身体へ叩きつけるように振るわれた。しかし、

「ほう？」

剣は天の衣に阻まれ身体へ当たることとはなく、俺の目の前で止まった。だが、おかげで相手が身体のどこを狙ったのかがわかった。彼は剣の腹で肩を狙っていた。おそらくは肩の骨を外してしまおうという算段だろう。

なるべく俺に傷を残したくないって事か。舐めやがって。いくら俺が弱いと言つても手加減されて負けるのは男としてムカつかずには居られない。

「ふっー！」

相手の剣が当たらないのであれば避けようとか考える必要もない。ただ教わった通りに剣を振る。

「遅い遅いーおそろすぎー！」

弾かれて上がっていた剣を垂直に振り下ろすもののザコツシユは半身をひねるだけで避け剣を握っていない左の掌を天の衣に阻まれるほど近づけると爆発を起こした。

爆発の衝撃は俺の身体に届くことはなかったが、目の前で起きた爆発で反射的に目を覆ってしまった。それから一瞬の間を置いて今度は後ろの方から爆発音が聞こえ、俺は目を閉じたまま腕を回して剣を真横に振った。

「うおーっはは！思ったよりやるじゃないか」

当たりはしなかったものの、ザコツシユが近づくよりも早く振れたため上手いこと牽制になり、意図せずザコツシユの攻撃を凌ぐことができた。

このままでは防戦一方でしかない。いや、それで良いんだけど。それが作戦だったし。でも、いざ戦いとなると男としての本能なのか気が滾るのだ。

俺は身を低くして一気に駆け出す。しかし、ザコツシユが立っていた場所が爆発したかと思うと、もうそこには居なくなっているのだ。しばらくはそんな追いかけては逃げられ、時折飛んでくる攻撃が天の衣に弾かれと続いた。まるで俺の体力を削るかのよう。

「……せめて見えれば」

爆風を利用して飛び回るザコツシユは聞いていた通り人知を超えた速さであり、とてもではないが人の目では追いきれない。爆発音を土煙を頼りに追いかけて回しているが、これでは俺が疲労するだけだ。

「やつと喋ったな」

ボフン。と俺の横合いから爆発が起きる。爆発は天の衣に阻まれダメージが無いが、少しずつ気力が削られていく感覚があった。

唐突に目の前で爆発が起きたり、実際に衝撃が無くとも精神的に疲れが溜まってくるのだ。

「よくそれだけ爆発を起こして魔力が持ちますね……」

魔力切れで動きが鈍るのを狙っているのだが、その気配もない。爆発系の魔法はそれだけ消費も大きく高ランクの魔法士でも連発はできないって聞いていたはずなのに。

「ああ、もしかして俺の魔力切れを狙っているのか？だとしたら止めたほうが良い。俺は移動に使ってるだけだからな。足の裏や掌で小さな爆発を起こす程度なら初級攻撃魔法の炎ファイアバレット 弾よりも魔力消費が少ない。このペースなら一日中使ってたって魔力切れは起こさねえよ」

俺の呟きにザコツシユはそう答えた。

内心で舌打ちをしてから剣を構え直す。作戦変更だ。相手は爆発を利用した移動を行っているだけで攻撃方法は剣による物理。つまり攻撃時は必ず接近してくる。追いかけて不動から相手の動きを見切つて反撃する。目標はカスリでもいいから攻撃を当てることだ。「カウンター戦法でもしようってか？いいぜ、捉えられるものなら捉えてみるよ！」

ばふん、ばふんと連続で爆発が起きザコツシユの動きが加速する。先程までと違い爆発の感覚も短く土煙さえも追えない程に早くなった。攻撃もされているらしきことはわかるのだが、全くもって姿が見えない。

闇雲に剣を振ってみるが、まるでおちよくるかのように剣が爆発によって弾かれてしまう。

いつそ視覚を閉ざし聴覚を頼りにしたらと考えたが、これも駄目。爆発音が前後左右あらゆる方向から聞こえて来るため当てにならない。

やけくそになってひたすらクルクルと回りながら剣を振ってみたが、今度は俺の上空で爆発が起きてハツと顔を上げたところで剣を叩きつけようとするザコツシユと目が合った。

「空は飛べないとも思ったか？」

「ハアッ！」

挑発するような言葉をかき消すように剣を振るうもやはり爆発とともに逃げられる。

「にしても硬え防郭ぼうかくだな。これでも結構、力入れてんだがな」

軽口を叩きながら俺から目を逸らし、ため息をつく姿に俺はカチンと来た。明確に侮られている。目の前で隙を見せるなんて。

俺は考える。ネフティスはその気になれば、天使としての力が使えていればザコツシユの姿を捉えることくらい出来るはずだと言っていた。つまり俺の身体。天使の身体にはそれだけのポテンシャルがあるということだ。問題は俺がその使い方を理解してないということだけ。

なんとかして掴むしか無い。全くわからないけど！

イメージしろ。ウインスを捕まえてたイスラの姿を。あれができれば良いんだ。

ネフティスは走っていた。盛大に寝坊して宿屋の女将に世話を焼かれていた彼女は急ぎギルドの訓練場へと向かう。

このままでは長瀬がザコツシユを殺しかねないからだ。彼は人間の身体に固執して気づかないだけで天使なのだ。もし、天使として意識が覚醒してしまったら例え模造剣と言えど余裕で人を殺せてしまう。

「なんで起こしてくれなかったんだよお！このままじゃ私がイナンナ様に叱られるう!!」

ネフティスは走る。走りながら叫んだ。自分の寝起きが悪いことは理解していたのに、「長瀬様が起こしてくれるだろう」という安易な考えで眠ってしまった自分を責めるしか無い。

だが悔やむ暇はない。今は1秒でも早く試験の行われている訓練場へ着かなければ。

『だから気をつけなさいってえ言ったのに……』

全力で走るネフティスの頭に念話が届く。その声は彼女の姉であるイシスのものであった。

『ご、ごめんお姉ちゃん！』

『長瀬さんはあ智^{ケルビム}天使なんて役職な上にい、転生課の所属なのよお？何かあったら大変なんだからあ』

イシスの優しく窘めるような声にネフティスは何もない空間にペコペコと頭を下げた。無論、脚は止めること無く。

『ほんつとごめん！それで、状況は!?!』

『冒険者さんとお戦っているわあ。今はあ長瀬さんのお防戦状態ねえ。でもお、なんだか長瀬さんの様子がおかしいからあ早く行つてねえ』

『わかったわー!』

ネフティスはイシスとの念話を終わらせると脚に風を纏わせて跳んだ。大きく10 mは跳んだネフティスは建物の屋根に着地して、ギルドのある方向へと真っ直ぐ進む。

そしてギルドの裏手にある訓練場の手前で屋根から降りる。

「ごめん!通して!」

ギャラリーを押し分け、最前列へと辿り着いたネフティスが見たものはギルドマスターであるエルファに立ちふさがれた長瀬の姿だった。

一瞬だけ目の前の光景に思考が固まったものの、エルファの背後に倒れているザコツシユがいることに気づいた。

長瀬の手には模造剣が逆手で握られており、まるで倒れているザコツシユに突き刺そうとしていたかのように見える。

「一体……何が……?」

とにかく長瀬の様子がおかしいと思ったネフティスは長瀬達の元へ駆け寄る。

エルファもなんだか慌てており、長瀬を止めようとしているようだ。

「エルファ!一体何が!」

「!ティース!大変なの!イエナちゃん様子がおかしくてね!」

エルファの説明曰く、今までずっと防戦一方だったイエナ、もとい長瀬の動きが急に変わり、瞬間移動めいた事をし始めた。それに対抗するように速度を上げたザコツシユだったが、これ以上は危険と判断してエルファが止めに入つたらしい。

エルファの魔法でいきなり拘束されたザコツシユは飛び回る速度が災いして地面を転がり気絶。それまでは良かったのだが、ストップをかけたにも関わらず長瀬の動きが止まらずに倒れているザコツシユへ剣を振りかざそうとした。とのことだった。

つまりザコツシユが倒れているのは長瀬がやったのではなくエルファがやったことらしい。それを聞いたネフティスは安堵あんどした。

ひとまずザコツシユは放っておくと決めたネフティスは、振りかぶっていた剣をいつの間にか降ろしている長瀬へ近づき肩をポンと叩く。

「姉さん？」

「……我は……ザ……エルなり……。神……の」

長瀬はブツブツと何かを呟いており、そこに意識があるようには見えなかった。

「あら、なんて言ってるのかしら？」

エルファには長瀬の呟きが聞こえなかったようだが、天使であるネフティスにはハッキリと聞こえていた。

「(ザドキエルですって……？イナンナ様め……面倒な仕事を押し付けてくれたな……)」

ネフティスはこれからの予定を考えて歯噛みしてから、長瀬の頬を両手で挟むように叩いた。すると長瀬は「うわお!？」と情けない声を漏らしながら飛び上がる。

「姉さん……。戦いに集中しすぎ」

「へ？」

状況を理解してないのか目の前に居るネフティスとエルファに目をパチクリとさせている長瀬にネフティスは続けて、

「確かにボコボコにしちやえって言ったけど、ストップかけられたんだから止まらなきゃ。ね？」

そう言った。

「あ……。すいません。ついのもり込んじゃいまして……。その、ザコツシユさんは大丈夫でしょうか？」

長瀬は止めに入っていたエルファに頭を下げて、ザコツシユの身を案じた。

流星にこのまま話させるわけにも行かないと思ったネフティスは念話で長瀬と話す。

『後で何が起きたか説明しますので、ここは合わせてください』

『りよ、了解』

自信なさげに返事を返した長瀬にため息を付きそうになりながらもネフティスは場を収めるためにエルファと話す。

そして、話をつけたネフティスは「姉さんが心配だから」と長瀬を連れて宿へ戻ることにした。

何故かは知らないが長瀬は歩き出そうとしたらいきなりふらついて、膝をつきそうになったのだ。長瀬は「大丈夫」だと笑っていたが、その顔には明らかに疲れが見て取れた。

エルファが心配そうに宿まで付き添おうかと申し出てくれたが、ネフティスはそれを断った。

「試験結果はこれからギルドで話し合って明日には出すわ。だから今日のところはゆっくり休んで明日また来て頂戴。……その、本当に宿まで付き添わなくて大丈夫かしら？」

「大丈夫ですよ。先程は少しバランスを崩してしまっただけですから、ご心配ありがとうございます」

「まあ、姉さんもそう言ってるし。私も居るから平気よ」

「そうね。ティースが居るものね」

そうして、試験を終えた長瀬は時折ネフティスに支えられながらも宿まで歩いたのだった。

To Be Continued

第六話：チートで無双らしいです④

脚がおぼつかないまま宿に付いた俺は倒れ込むようにベッドへと座る。

ネフティスに起こされてからというものの身体が重たく、今も油断したらベッドに沈み込んでしまうのではないかと思うほどにダル重い。そもそもいつの間にも試験が終わったのか。気づいたら試験は終わっていたしザコツシユは倒れてるし。

帰りすがら軽く聞いた感じだと、試験は中止でザコツシユが倒れていたのはエルファの作業らしい。なんでもバトルが白熱しすぎて危険と判断されたんだとか。

「長瀬様」

「えっ？」

いきなり天界モードで話されて咄嗟とっさに辺りを見る俺にネフティスは「遮音結界しゃおん」を張っていると聞いた。

なんていうか便利ですネ。ネフティスさん。

「なんか感心した目をしてますけど、これくらい長瀬様でも余裕で出来るはずなんですけどね」

俺の表情から読んだのかネフティスがそんなことを言ってくる。

「うっ……」

そうは言うけど、天の力なんてー

「いま、『自分は人間だから天の力なんて』とか思いませんでした？」

「うぐぐ……」

「……言わせてもらいますけど、貴方が天の力を使えないのはその意識のせいですよ。使えない訳が無い。それどころか貴方はザドキエルに選ばれるほどの天使。そこら辺に居る神よりも高位な存在だつてわかってますっ？」

「ちよ、ちよつとまってくれ！何の話をしてるんだ！」

ザドキエルだとか高位だとか訳がわからない。そんな話は始めて聞いた。

ネフティスがなんで知らないんだって目で見て来てるけど知らない

いものは知らな―

「―っ!!?」

この感覚、久々だ。覚えた記憶は無いのに知っている。

「そうですね。知らないはずがない。だって貴方は天使なのですから」

「……………」

思い出した。って言い方もおかしいが、俺は知っていた。ネフティスの言う「ザドキエル」が何であるかも。

ザドキエル。天使第2階位、智天使^{ケルビム}。その名が示す役割は『神の正義』。

他にもどうして「俺が智天使ザドキエルなのか」も理解していた。一度に様々な情報が怒涛^{どとう}の様に頭に浮かび上がり、締め付けるような痛みを生み出していた。

頭が破裂しそうだ。知らなかった。ついさっきまでは知らなかったはずなんだ。でも知っていた。理解したくないのに、全て理解してしまった。違う、理解していた。

「思い出しましたか?」

頭を抱え、痛みに悶^{もだ}える俺を意にも介さずネフティスは淡々と話す。

「……………あ、ああ」

膨大な情報の奔流に思考を放棄したくなる気持ちを抑えつつ、ゆっくりと顔を上げてネフティスの顔を見る。その顔はティースとしての活発な雰囲気はどこにもなく、初めて天界の管理部で会ったときのようなやや冷たさを感じる事務的な顔になっていた。

「神の、正義……………。俺は、天使としての使命を全うしようとしたのか……………」

「その通り。貴方は天の力を加減無く使おうとしていた。いえ、エルファの静止が無ければ使っていたでしょう。その結果、ザコツシユがどうなるかは想像に難くない」

「持っていたのが木剣だろうと関係なく、ワイバーンの時みたいにスツパリ斬り捨てていたかもしれない……………ね」

いつもの俺であれば人を斬るなんて恐ろしくて出来るわけがない。が、あの時の俺は自分の意思が抜けていた。天使にそんな副作用があるだなんて聞いてない。……とは言っていられない。既に実害が出そうになったのだ。

「貴方は転生課の持つ自由な権限を行使し、〃神の正義〃を為すことが出来る。あまり認めたくはありませんが、女神の私よりも天界における地位が高いですね」

ネフテイスは腕を組んで俺を睨みつけてくる。威圧感にたじろくと今度はフツと笑って、

「ああ、別に疎んでいるわけではないので安心してください。天界じゃあ良くあることですから」

そう言った。

「そ、そうなのか」

俺の相槌にネフテイスは短く「ええ」と答えた。それから少しだけ沈黙が生まれ、俺達は小さく笑い合う。

「そういえば長瀬様はイスラフィールと親交があるのでしたね」「うん」

「もう思い出しているかもしれませんが、彼の天使としての名前は〃ラファエル〃。その名が表す役割は『神の癒し』です」

言われたことで、また頭の中に情報が浮かんでくる。

イスラはあの見た目からは想像もつかないヒーリング能力の使い手で、精神的な疲れすら回復することが出来る唯一無二の能力で神や天使を癒やすのが彼の使命。

その恩恵を一番受けているのは一切休むこと無く働き続ける転生課のイナンナだ。

俺は頭の中でストーンと考えが落ちた。だからイスラはイナンナの舎弟なんだな。と。だが、また別に俺は〃ラファエル〃と言う名前に引っかけかりを覚えた。

イスラフィールと言う名前のせいで今まで気づかなかったが、ラファエルという天使の情報は地球にもある。なんせ聞き覚えがある。もしかしたらイスラは地球に来たことがあるのかもしれないな。

「あの時、恐らくですが長瀬様はイスラフィールに成り切ろうとした結果、自我を捨て天使の本能だけが残ってしまったのかもしれない」

「そんなことがあり得るのか？」

「知りませんよ。人間から天使に成ったケースなんて他に知りませんし。私なりに有りそうな可能性を言ってるだけです」

冷たい氷のような口ぶりでネフティスは言った。

それから、ネフティスの説教が始まった。

長かったし、怒られていた時のことを説明したくないので要約すると、『自我を捨てるな』『天使であることを自覚しろ』『堂々としている』といった具合の言葉が多かったと思う。

中でも『人間にしがみつくな』という言葉は俺に深く突き刺さった。これまでも似たような事は何度か言われていた。イナンナにも、イスラにも。それでも俺はまだ自分をどこかで“人間”だと感じている。今でさえその意識は抜けきらない。

人間としての生はとづくに終わっているのに。明らかに人間ではない技を使っているのに、だ。

「—もう遅いので今日はこれくらいで許してあげます」

「……はい」

「明日からの動きに期待してますね」

「……はい」

いつの間にもやら日もとつぷりと暮れていて、それだけ長い時間、説教を食らう。もとい話し合いをしていたんだと驚く。

そして時間の経過を自覚した瞬間にグーっとお腹から音が響いた。「少し遅くなってしまうましたが、女将さんに頼んで何か作ってもらいましょうか」

「賛成—！俺、もう腹と背中がくつつきそう……」

お腹を擦りながら、お腹を鳴らす俺を見てネフティスはくすくすと笑う。

そんな風にいつも笑っていてくれれば可愛いんだけどな。さつき説教してたときの凍てつく視線は、うん、怖い……。

とは言え、彼女のこと少しは判った。彼女は真面目だけど硬いわけじゃない。状況を飲み込めるし、俺みたいな使えない上司が急に現れても仕事に影響を出したりしない。

俺が今までに会ったこと無いタイプの人間、じゃなくて女神だ。……あれ、普通だな。

まあ、俺が今まで仕事で関わって来た中にロクな人間はほとんど居なかったけどな。まともに仕事をしないで上から下に流すだけの古狸共、罵詈雑言を飛ばすだけの課長、そんな課長を見てるだけの部長。まともなのは主任くらいだった。もつとも、その主任も仕事を立て込んで1月程帰れなかった際に奥さんと子供に逃げられ、自暴自棄で辞めてしまわれたが。

思い出しただけでも泣けてくる。奥さんと連絡が付かず、1月ぶりに帰った家はおぬけの殻で家具の1つも無くなっていたそうだから。そういう意味では今の仕事環境はとても良いと思える。仕事量を除けばだが。

さて、話を戻そう。

俺達は飯を食った後、部屋で先程詰めた予定を確認する。

当初の目的通り、俺達はギルドの高等級クエストを片っ端からこなすことで悪目立ちを目指す。ちなみに魔物はこの世界で『魔素』と呼ばれるもので出来ているそう。この魔素とは負の資源のこと。ネガティブリソース

本来は勇者に倒させることで消し去らねばならない存在だ。

以前にも説明されてたように、俺達のような神や天使といった天界の住人は現界に直接的な影響を与えられない。

どれだけ魔物を倒そうとイカニモナにおける負の資源が減ることはないのだ。

「もし負の資源、えつとこの世界だと魔素だっけ？それが増えすぎるとどうなるんだ？」

そう聞いてみたところ。

「負の資源は、資源を消費して生まれて居るので、負の資源が増え過ぎれば当然資源も減ります。つまり大地は荒廃し、水は腐っていく。いずれは生き物の住むことの出来ない世界になってしまうのです」

との答えを得られた。なんでも世界の資源の総量は、その世界が出来た時点で決まっておき以後は増減しないらしい。

では勇者が天の力を使い、資源を持ち込んだ場合はどうなるのか。これは俺の知識に有った。

負の資源は悪魂と同じく地獄の業火のための燃料になる。つまり勇者によって負の資源が天界に持ち込まれるのは天界にとっても都合が良いのだ。

それもあるって、勇者が使命をこなさないどころか負の資源を生み出す事は管理する側として大問題なのだ。だから使えない勇者は処分しなければいけない。

ここで実は俺がなぜ「ザドキエル」に選ばれているのかも関わってくる。

先程から何度か話に上がっていたザドキエルの表す役割『神の正義』。ネフティスは「そこら辺の神より高位」だと言ったが、正しくは『最高神のブラフ』と『イナンナ』を除く全ての神、天使より高い権限を持つ。である。

ただし、履き違えては行けないのがこれは職務を遂行する上での話で俺が天界におけるNo.3という訳ではない。

簡単に言うと、俺が転生課として仕事をする上で文句を言えるのはブラフとイナンナだけってことだ。

今回はイカニモナ管理課の意向に沿って仕事をしているが実は俺が女体化は嫌だと言えば突っぱねられる。勿論そんな軋轢あつれきを生むような事はしないが。

だからといってこんな回りくどい方法じゃなくても良いんじゃないかとは思うけどね。

ネフティスは「魔物と戦っていけば天の力の扱いも慣れてくると思いますよ」なんて言っていたので、ネフティスに教わりながら基本的には俺が倒していくことにする。

俺にとっては天の力もそうだが、それ以上に生き物を傷つける事、血を浴びてしまう事に慣れるのも目的の1つだった。

幸い、自分が血を流すことは恐らく無いと思う。なんせヘンリーに

首を刎ねられても血は出なかつたし。まあ、そもそも天使の肉体が死んでも天界に復活するだけらしいが。

そんな訳で魔物を狩って狩って狩り尽くす事、約1ヶ月（※地球換算）。すっかり街の有名人になった俺達の下に城からの使者を名乗る者が訪ねてきた。

∴T o B e C o n t i n u e d

第六話：チートで無双らしいです⑤

「我が王が貴様らの活躍を聞き、是非とも会いたいと申されている。これより用意した馬車に乗り共にセレブダロウ城へ来てもらおうか」使者だと名乗った者達から代表と思わしき無駄に豪華な服装を来た男が俺達の前にズイッと出てきて開口一番にそう言った。

怒りのあまり殴りかかりたくなる気持ちを抑えた俺は偉いと思う。ただでさえ傲慢不遜な態度だが、コイツらはそもそも俺らの泊まる宿に押し入ってきている。それも、早朝に、だ。

俺達は扉をドンドンと乱暴に叩く音で目が覚め、着替える間もなく寝間着姿のまま彼らの侵入を許した。

下卑た目でこちらを見下す代表らしき男と、キラキラと輝き汚れの見えない純白の鎧に銀色に光るヘルムに身を包み長めの剣を腰に下げた騎士と思わしき性別不詳の人間が見える限りで5人。

狭い部屋で暴れられても困るので俺はなんとか堪えたが、とりあえず寝間着姿を晒させないように毛布を被せたネフティスがキレそうになっている。

この1ヶ月、一緒に過ごして気づいたのだが、この人、じゃなくて女神は寝起きがとにかく悪い。無理に起こそうものなら周りに被害が出かねない。というか実際に寝ぼけてるネフティスにちよつかいを出したザコツシユがふつとばされたりしていた。

非常にまずい。いつもならまだネフティスは寝ている時間帯な上にこんな上からの物言いでも無理やり起こされている。少し前まで一般人だった俺が殺気を感じ取れるくらいネフティスがキレかけている。このままでは宿ごとふつとばされてもおかしくない。

この男共がふつとぶ分には一向に構わないが、騎士の後ろでおろしている女将さんに迷惑をかけるようなことはしたくない。

仕方ない。この一月、女に化けて過ごした成果を見せてやるか。

「…貴方達。一体なんのつもりですか。ここは淑女が寝泊まりする場所ですよ。そんな場所に押し入り拳句の果てに一方的に勝手な物言いをするなんて、あまりにも傲慢不遜が過ぎるのではありませんか

？」

キツと睨み、語句を強くして言い放つ。しかし、「ふん。貴様らを城に招待してくださっている我らが王の寛大なお心を理解出来んとは、やはり下民だな。我らは別に貴様らのように不遜な態度を取るなら無理やり連れて行っても良いのだぞ？」

代表の男は取り繕うどころか鼻で笑いながらそう吐き捨てた。不遜なのはどっちだよ。

男は更に俺達に近づこうとしてきたので、俺はこれ以上近づけないように天の力で出来た壁でベッドを囲む。これも修行の成果の1つだ。

不可視の壁に気づかなかった男は俺を掴もうと伸ばした手を壁にぶつけ苦悶くもんの表情と共に腕を引つ込めた。

「あら、どうかしましたか？」

「貴様……。何をした」

「何って、下卑た殿方に近づかれては何をされるか解ったものではありませんから、身を守ったままですよ。自己防衛、同然のことだと思いますけれど？」

あえて怒りを込めて挑発する。

すると男は激高げっこうし、周りの騎士に向かって、

「お前たち！こいつらを捕らえよ！多少傷を付けても構わないと王から言われている！」

そう命令する。

騎士たちは一言も発すること無く、スラリと剣を抜くと躊躇ちゆうちゆうなくこちらへ剣を振り下ろしてきた。だが――

――ギイン！

と金属の弾ける音と共に騎士の振りかざした剣は俺の作った壁に阻まれる。

「その程度の攻撃で私の防郭ぼうかくが抜けるとお思いで？これでも私は《要塞ブルタング》の通り名を頂いている1等級冒険者ですよ」

「つぶ……」

男は齒噛みして俺を睨む。おー怖い怖い。俺が普通の女の子なら

泣いてるぞ。

この要塞フルタングと言うのは1等級へ上がった際にエルファによつて付けられた通り名だ。

俺としてはいい歳してこんな厨二病臭い通り名なんて御免被りごめんこうむたいのだが、こういう時には役に立つ。

ちなみにネフティス、もといティースの通り名は《殲滅治癒師》、ザコツシユは《弾丸男》バレットマンとなつている。二人共びつたりな通り名だと思ふ。

「剣が駄目なら魔法でもなんでも使つてこいつらを無力化せんか！」
「ちよ、それは流石に！」

いくらなんでもこの狭い中で魔法を放たれては宿屋が壊れてしまふ。今すぐゴイツらまとめて転移しなければ。だが、俺はまだ転移を上手く使うことが出来ない。どうしても失敗してフィデルフィアの様になつたらと考えてしまつて1人で跳べないのだ。

騎士達は手をこちらへ向け、一斉に魔法の詠唱を始める。

まずい。こうなつたら失敗したとしてもいいからとにかく遠くへ飛ばしか。そう思つたときにネフティスから念話で話しかけてきた。

『長瀬様、私はもう限界です。座標はこちらで指定しますので今すぐこのゴミ共ごと跳んでください』

『助かるー！』

渡りに船とはこの事、俺はこの室内に要る人間を全て巻き込んでネフティスの指定した座標へ転移させる。

一瞬だけ視界が白に染まった後、俺達は見覚えのある溪谷へと跳んでいた。

「なるほどね……」

ここはワイバーンを倒した溪谷だ。単食つていたワイバーンは全て俺達の手で駆逐くくちくされているので、横槍もなく戦やりあえるだろう。

「おい、お前ら」

背筋の凍るようなドスの効いた声が背後から聞こえる。

ゆつくりと振り返った先に見えた物で俺は「ああ、こいつら死んだな」と、そう思った。

「よくも私の安眠を邪魔したな。しかも無関係の宿屋を巻き込んで破壊しようとするたあ。騎士の風上にもおけねえぞ。ええ?」

オーラでも出ているのか幻覚を見ているのかはわからないが、俺にはネフティスの毛が逆立ち、文字通り怒髪天を衝いているように見え、反射的に目を背けてしまう。

「はー、これだから冒険者は。常識も、品もなんもない奴らばかりで嫌になる。いいか、よく理解しておけ、下賤な貴様らは口は我らのために嬌声をあげるためにあるのだ」

全く懲りる様子のない男の言葉に俺は怒りを通り越して呆れて物も言えなかった。どうしてこの男はネフティスの殺気を前に火に油を注ぐような事が出来るのだろうか。

こんな現代地球で言おうものならフェミニスト共に袋叩きに合うぞ。

ネフティスがゆっくりとベッドから降りる。と同時にベッドが激しく燃え、ネフティスの身を包みこんだ。そして爆風と共に炎の中からメイスを持った鬼が現れた。

今の炎に紛れて服装も寝るときに使っているネグリジエでは無く、普段冒険者活動をする際に着用している革のローブ姿へ変わっていた。

「というか、ベッドごと燃やしてくれたけど、そのベッド宿屋のなんですけど……」

「おい、覚悟しろよ。世の中には死ぬよりも辛いことがあることを教えてやる」

先程からネフティスさんの口調がおかしいと思います。啓示とても怖いと思います。

直感がここに居てはヤバイと告げているように感じたので、俺は走ってネフティスと使者から遠ざかる。途中、騎士が邪魔しようとしたが天の力で作った壁で近づけないようにしてやった。ついでにネフティスからの退路もなくなるように壁を展開する。

ドーム状は難しいのでとりあえず柵状に取り囲む。

一気に広範囲を囲む壁を生み出すと少しだけ立ちくらみがした。

どうにも、力を使いすぎると貧血を起こしたような現象が起きる。だが、これで奴らはネフティスによってボコボコにされるだろう。ただ、城へは向かわないと行けないのだから使者を殺すのはまずいのだが、大丈夫だろうか？

ゆらりとネフティスがメイスを男に向けて真っ直ぐ伸ばす。と同時にネフティスの立っていたところから土煙がたった。

ギリギリ目で見えた様子だとネフティスは地を蹴って使者の腕に向かつてメイスを突いたようだ。

あの速さでぶつけたら腕が吹っ飛んでもおかしくないと思うが、はたして使者の腕は付いたままだ。だが、

「うがあああ!? う、腕が！ 私の高貴な腕があ!？」

使者の叫びが溪谷に響く。よく見えないが、腕が変な方向に曲がったりはしていない。どうしたのだろうかと思っているとネフティスがメイスを肩に担ぎながら腕を抑えて叫ぶ使者を見下ろし冷たく言い放つ。

「もう泣き言か？ まだ前腕の骨を折っただけだぞ。開放もさせてない、粉碎もしてない、ただ折れただけだ。そんなくらい回復魔法が無くたって治るレベルだぞ」

「お、おお、お前たち！ 見てないで私を助けろお！」

ようやくネフティスに恐怖感を抱いたのか使者が周りの騎士に対して助けを求め。しかし、ネフティスが再び土煙とともに消えたかと思うと騎士達は全員地に伏せてしまった。

俺が目で追えたのは3人目までだったが、いずれも胸元へ向かつてメイスを振るい、鎧を陥没させていた。

あれ、生きてますかね？

「な……な……」

「どうした。お前が助けを求めていた騎士はもう居ないぞ」

「き、貴様あ！ 私に手を出したことを後悔させー」

反抗を止めない使者が立ち上がり折れてない腕を振りかぶろうとしたが、ネフティスは軽くメイスを振るって腕を弾く。

「ーはい、反対側」

「うぎやああああ!!」

「どうやら、反対側の腕も折ったらしい。」

「痛そうだな。助けてやるよ。私は優しいからな」

ネフティスが使者の腕に手をかざし回復魔法を発動させると、一瞬だけ使者の腕が発光した。

それだけで治ったようで、使者は自分の手を握ったり開いたりして驚いた様子を見せた。そのまま大人しくなるかと思っただが、使者の男は本当に諦めが悪いらしくニタリと笑う。

「ふははははー！わざわざ私の腕を治すとは、どうやら高貴な私に齒向かった事を後悔したようだなー」

「ーッフ」

またしても使者が最後まで言い切る前にネフティスはメイスを振るう。

「ぎやああああ!!」

「うるさい」

ネフティスが叫びをあげる使者の胸元をメイスで突くと、使者の男は嫌な声を漏らしてそのまま動かなくなってしまった。

「ネ、ネフティスさん……?」

思わず演技を忘れてネフティスと呼んでしまった俺を睨んで短く「イエナ姉さん」とだけ言った。慌てて言い直す。

「あ、ごめんなさい。ティース。その、大丈夫なのですか?その、生きていますか?」

「大丈夫よ。肋あばらが折れて息苦しくはなっているだろうけど、殺してはいないわ。コイツらには私達を案内してもらわないといけないからね」

「そ、それなら良かったわ」

ひとまず怒りで仕事を忘れたりしてない様子のネフティスに安堵する。そしてネフティスの本性に割とビビった。

エルファやザコツシユから話を聞いていたものの、実際にキレたネフティスを見たのは初めてなのだ。

戦いの様子から気づいたかもしれないが、ネフティスはゲームで言

うところの“ヒーラー”ポジションの能力なのだが、彼女はその能力を尋問や拷問に遠慮なく使う。

以前、山賊団を壊滅させた時は複数あるアジトの位置を聞き出すために指の骨を折っては治すという手段を取ったりしていた。結果的に回復魔法で治し、山賊団は無傷のまま街の衛兵に引き渡されたのだが、外傷は無くとも精神の方は何名かやられていたのを覚えている。足先をメイスで叩き潰してぐちゃぐちゃにしてから治すところを見た時なんかは吐いた。

まさに《殲滅治療師》の名に相応しい動きだと言えるだろう。

「とりあえず、宿に戻りましょうか。縄も無いし」
「あ、はい」

騎士達を引きずって使者の周りに集めたネフテイスが事も無げにそう言う。いや、ネフテイス的には本当に事も無いんだろう。

その後、ネフテイスに座標指定を頼み、宿屋の前まで戻ってきた俺達は女将さんに迷惑をかけた事を謝り、ベッドや壁を弁償すると伝えた。

女将さんはそれくらい大丈夫だと言っていたが、俺達はいずれこうなる可能性があることをわかっていて宿屋に泊まっていたのだ。

そもそも今の俺は路銀としては多すぎるほどに金を持っている。具体的には金貨が20枚くらいある。

大銀貨ですら額が大きすぎて使いづらいのに、金貨はそんな大銀貨が10枚分もある。正直、依頼の報酬でもらったものの使い道がない。

俺は女将さんとそうこう話している内にネフテイスは騎士達を縛り上げ、使者の男を連れて部屋の中に消えてしまった。

なんでも尋問することがあるそうだ。

同席するべきかと問うと、ネフテイスは大丈夫だと言ってくれた。どうやら前回吐いた俺に気を使ってくれたらしい。

手持ち無沙汰になってしまったが、俺は都合がいいと思った。少し、俺も調べたいことが出来たからだ。

俺は女将さんにベッドと壁の補修には十分すぎるほどのお金を渡

してから、縛られた騎士の下へと向かった。

∴T o B e C o n t i n u e d

第七話：ザドキエルの役割らしいです

交易の街から馬車に揺られること1週間程、俺達はようやくセレブダロウの首都リッチダモンに到着しようとしていた。

馬車に乗るのは生まれてはじめてのことだったが、乗り心地は決して良いものとは言えなかった。

サスペンション、つまり衝撃吸収機構が無いといえはわかるだろうか。車軸に車輪が付いているだけの簡素な作り。車輪だって木製。山道では車輪の壊れる馬車なんかもあり時間もかかった。

とは言え、これでも早く着いた方ではあるが。

ネフティスの助言で一時的に負の資源を近づけないような結果を作り出したのだ。これによって負の資源の塊である魔物は馬車に近づけなくなるため戦いを避けて来られたのである。

ほんつとずるい能力っすね。

「皆様！間もなくリッチダモンの門を通過します！怪しまれないようお静かにお願いしますよ！」

御者をしている純白の騎士が中に居る俺達にそういった。

馬車の中に居るのは俺とネフティス、そして純白の騎士が1人だ。

程なくして街へ入る門へと辿り着いた俺達の馬車は検閲けんえつを受けるために一時停止した。

「……積荷は？」

「王が招待した交易の街の冒険者姉妹だ」

「ああ、ではこの2人が例の……」

御者の騎士が衛兵と話している間、俺はやや緊張していた。外を見たいが、あまり見ているのは怪しまれるかと思いとりあえず正面に居る騎士へと目を向ける。

騎士は拳を膝の上で握り頭は斜め下、どことなく震えているようにも見える。顔はヘルムで隠れているが、おそらくあの下で目をキョロキョロとさせていることだろう。

騎士の様子を見て俺は逆に肩の力がフツと抜けた。自分より緊張している者を見て安心したのかもしれない。

そんな息の詰まる車内でネフティスだけが堂々としていた。

「2人も堂々としてろ。特にお前は悠然ゆうぜんと構えていなければ怪しまれるぞ」

ネフティスが緊張している騎士の男にそう言った直後、馬車のドアがキィッと音を立てて開かれた。

いきなり聞こえた音に跳ね上がりそうになりながらも、馬車の入り口へ目を向ける。視線の先には衛兵が居て、俺達の様子を舐めるように見ていた。舐めるようにとは言ったが、決していやらしい目では無く少しの異常も逃さぬとという意思を感じる目。

無言のまましばらく馬車の中を見つめ、やがてドアをパタンと閉じた。

「……もらっていた人相書き通りだ。問題ないだろう」

「では、入っても？」

「……いや、最後に1つ聞きたいことがある」

御者の騎士が馬を出そうとするところを衛兵が止めた。

「確か貴様らの隊が出た時はパイザ殿が隊を率いていたと記憶しているのだが、パイザ殿はどうした？」

衛兵の問いに俺と眼の前の騎士がビクンと身体を跳ねさせた。幸いにも音を鳴らさなかったため衛兵は中にいる俺達の様子に気づかなかつたようだが、俺は驚きと緊張のあまり、かつて無いほどに高まる鼓動こどうが聞こえてしまうのではないかと気が気でなかった。

御者の騎士がどう答えるのか、バレやしないか、不安が顔に出ては居ないか、思わず振り返りたくなる気持ちを抑え、手をぎゅつと握って待つ。

「パイザ様は交易の街の領主に用があるとかで残られた。3日後に迎えにあがる予定だ」

「……あの街に用だと？」

「俺達に聞いてくれるなよ。内容までは聞いてないのでな」

「そうか、悪かったな引き止めて、行っていいぞ」

「どうも」

門を抜けしばらく走り門が遠ざかった辺りで俺は詰まっていた息

をプハアと吐く。同じように目の前の騎士も息を吐き、それからヘルムを取った。

「どうもこういうのは苦手だ……。窒息ちっせきするかと思ったぜ」

ヘルムの中から出てきたのはザコツシュだ。本来、彼が来る予定は無かったのだが、いざセレブダロウ城へ向かおうというタイミングで現れて『女2人は心配だ』と言って着いてきたのである。

そのまま馬車に乗せていると怪しまれそうだったので、騎士の中から体格の近かった者を交易の街に残し、代わりに鎧を着て乗ってもらった。

ちなみに先程、話に出ていたパイザは、あの使者を名乗っていた男の事。

今は交易の街で残っている騎士の見張りで宿屋に監禁している。

騎士達の方は隷属れいぞくのじゆつの術をかけられていただけで、解呪したら俺達の味方になってくれた。

彼らは元々セレブダロウ王の近衛騎士だったそうで、今の城の状況を不審に思い調査していたところがバレて意思の無い人形にされていたようだ。

あ、解呪したのは俺です。俺。ネフティスがパイザを尋問している間に頑張りました。

それから騎士達と話し、協力を得たわけだ。内部に協力者がいる状態で入城出来ると言うだけでかなり安心感が違う。

「……この時間から城へは入れさせられないので今日のところは申し訳ありませんが、私の家で過ごしてもらいます」

御者の騎士がそう言った。

彼は近衛騎士団の団長だそうで、隷属化の解けた騎士達を取りまとめられている。

城下町は宿ですら戦争の気運を受け営業を止められており、泊まる場所がないらしく俺達は揃って団長さんのお屋敷で世話になることになった。

俺達を屋敷に降ろした後、団長さんは他の騎士を連れて一度、王城へと向かった。

戻ってきた団長さんから話を聞いたところ俺達が城下に着いた事と、明日に登城とじょうさせるまで城下の宿を無理やり開けさせて過ごさせている事にして宰相に伝えてきたそうだ。

他の騎士達は、自宅を持っていている者は帰り他の者は王城にある近衛兵の詰め所へと帰つたらしい。

食事の前、俺達は団長さんのご厚意で湯浴みまでさせてもらった。ちなみにネフティスと一緒にである。言っておくとやましいことは微塵もない。初めは使用人の方が付いてくれることになっていたので、俺は？化が完全ではなく身体には男のアレがついている。それを隠すために「姉妹で入らせてほしい」とネフティスから言ってくれたのだ。ふたなりなんて世界の神秘みたいな身体をこの世界の人間に見られるわけにはいかない。

俺はどうやって隠すかで頭の中がてんやわんやだったので、こういう起点が聞くネフティスは本当に心強く思える。

まあ、俺のホルスの槍が反応しちやつてなかなか上がれなくなったんだけど。

一緒に風呂に入るのは初めてという訳では無いのだが、どれだけ見たところで慣れるとは思えない。無理です。童貞には刺激が強すぎます。

実を言うと一緒に寝るときも度々反応してました。初めは約得だと感じていたのだが、まじで眠れなくなるので一緒に寝るのは止めたかったのだが、どうやらネフティスは誰かに抱きついていないと眠れないらしく、イシスさんに相談した所「申し訳ないのだけれどお、ネフティスのお抱き枕になってあげてもらえませんか？」と甘い声で頼まれてしまったため受け入れざるを得なかった。

頼まれると断れない日本人の性よ……。

一応、私の名譽のために話しておくこと決して手を出したりはしていない。反応はしてしまった時はネフティスの身体に俺のホルスの槍が当たらぬように腰を引き心頭滅却煩惱退散しんとうめつぎやくぼんのうたいさんと頭の中で唱えて過ごしている。

据え膳食すぜんわぬはなんとやらと言うが、彼女は決して俺を誘っている

訳ではない。第一、俺は彼女の所属する管理課から依頼を受けて転生課を代表して派遣されている。手を出したりなんてしたら転生課に泥を塗ってしまう。

などと言いつつ耐えている。もはや約得感はない。これは拷問です。正直、ネフティスが「いいよ」って言ってくれないかなとか頻繁ひんぱんに考えてます。

そんなこんなでゆでダコになりかけながら風呂を出た。

そう言えば、使用人も居たし、家に風呂があるし、団長さんはかなりの金持ちなんだな。もしかしたらお貴族様なのかもしれない。

「だ、大丈夫ですか？」

「ご心配なく、久々の風呂に少々長湯してしまっただけですから、とーつてもいい湯でした！ありがとうございます！ごさいます！」

「気に入ってもらえたのなら良かったです」

風呂上がりに赤くなっている俺の顔を見て団長さんが少し心配そうにしていたが、俺が礼を言うと言ってくれた。どうやら風呂にはこだわりがあるようだ。

「お？やーつとあがったのか、待ちくたびれたぜ。本当に女は風呂が長いな。一緒に入ったって良かったろうに、いっちょ前に恥ずかしがりやがって」

欠伸をしながら風呂の順番待ちをしていたザコツシユが現れる。

「あんたはどうせ姉さんの裸が見たかっただけでしょ。この助平」

「あのなあ！同じ風呂だったって仕切りはあるし、そもそも街の風呂は混浴が基本だろ！」

そうなのである。街にも銭湯のようなものは有ったが、同じ風呂に簡単な仕切りが立てられているだけだったのだ。現代からでは考えられないが、そもそも日本の風呂も昔は混浴だったと聞くと、風呂が貴重な時代では普通なのかも知れない。

喧嘩に発展しそうな2人を団長さんが「まあまあ」と宥たしなめる。

「ザコツシユ殿が風呂から上がったなら皆様に話したいことがあります」

「私、お腹空いたんだけど」

「こらー！ ティース！ 厚かましすぎますよ！」

「えー、姉さんだってお腹すいたでしょ？」

「それは、まあ……。でも耐えられない程では——」

ーグウ

厚かましいことを言うネフティスを姉らしく注意しようとしたが、タイミングが良いのか悪いのか俺の腹の虫が音を鳴らしてしまった。「ははは、ご心配なく。今、食事も作らせていますよ。話も食事をしながらにしましょう」

団長さんは笑ってそう言うってから、俺とネフティスを客室へ案内してくれた。

案内された部屋は広く、2人でも余るほどだった。ベッドも大きくて見るからにフカフカ、何より清潔感のある白。宿屋のベッドが汚かったわけではないが、明らかにこちらのほうがきれいに見える。

高級ホテルも目じゃない程の部屋で思わず気後れしてしまいそうになったが、ネフティスは気にしていない様子でベッドまで歩いていくとポフンと座ってしまった。

ネフティスの体重でゆっくりと沈むベッドを見て俺も飛び込みたくなったが、今の俺は女性の姿だ。そんなはしたない姿を団長さんに見せられない。

というか、ベッドに座るのもどうかと思うのだが、団長さん目をそらしてますけど。

「じゅ、準備が出来たら使用人に呼びに来させますので、それまでゆっくりしてください。で、では——」

団長さんは早口で言い残すと照れた様子で部屋を出ていった。

もし何かあれば部屋の入口に置いてあるベルを鳴らせば、部屋の近くで待機している使用人が来てくれるらしい。いたせりつくせり過ぎる。なんていうかヤバイですね☆（小並感）

俺は豪華ごうかさに感動しながらも団長さんの足音が十分に遠ざかったのを確認して、部屋に遮音しゃおん結界を張った。

∴ To Be Continued

第七話：ザドキエルの役割らしいです②

「ネフティス。色々確認したいことがあるんだ」

聞きたいことは有ってもなかなか2人で時間を作れず、道中は内緒話なんて出来なかったので、俺はここぞとばかりに切り出す。

ネフティスは、特に驚いた様子もなく、まるで待っていたかのように静かに「私もです」と言った。

先程までの浮ついた空気は一変し、静寂せいじやくが首を絞めるような空気が漂う。

「お茶を入れましょう」

ゆつくりと立ち上がり、自らの荷物から瓶に入った茶葉と、部屋に備えられていたティーセットを取り出して、ティーポットに茶葉入れてからお湯を注いだ。

その間、どちらとも口を開くこと無く次第に部屋に茶葉のいい匂いが広がっていくのを黙って待った。

1分後。蒸らし終わり真っ赤に染められたお湯がトポポと音を鳴らしながらティーカップに注がれる。

「どうぞ」

とネフティス。

「ありがとう」

と俺。

「ネフティス」

どことなく詰まる息に言い淀みながらも続ける。

「あの時、使者の男を尋問してまで何を聞いたんだ？」

「……長瀬様には関係の無いことですよ」

これくらいの質問は予想していただろうと思ったが、ネフティスは何故か少しバツが悪そうな顔をした。

「そうか。まあいいや」

あの時、どうして俺がわざわざ騎士達から話を聞いたか、それは俺はある疑念を抱いているからだ。

1つは管理課の態度について。

もう1つ、この国の実情についてだ。

管理課の態度についてはちよくちよく気になっていた。まるで俺を試すかのような発言。明らかに俺を錬成しようとするネフティスの言動、行動。

初めはクライアントの意向だからとそこまで深くは考えなかったが、この一ヶ月間ネフティスとこの世界で過ごし改めて疑問に思った。本当に久々津誠一郎を処分する必要があるのかと。

そもそも処分にしたってわざわざ魂を抜いて肉体を残さずとも、肉体を殺して天界に魂を持ち帰り、新たな勇者として肉体を再構成したって良いはずだ。残った肉体は塵も残さず焼いてしまえば良いのだから。

無茶苦茶言っているように聞こえるかも知れないが、そのくらいは管理課でも出来る。勇者の力を持った魂の扱いについては転生課へ申請を出す必要があるけれど、それでも転生課の者を派遣してもらうよりは手間も時間もかからないはずだ。

そういった疑念を確信へ近づけるために俺はこの1月、ちまちまと情報を集めた。幸いにもネフティスは朝方から昼前にかけて起こさなければ起きてこない。

寝る時は抱き枕にされてしまうが、朝方ならこっそりと抜け出して自由に行動することが出来た。

この街は交易の街だから貿易商人や行商人なんかは朝でも出入りするし、街の商人達も朝早くから店を開き、朝市のような活気を見せたりもする。当然そういった人々が利用するための飲食店なんかも開いている。

こういったソーシャル・ネットワーク・サービス N S の無い世界で、酒場での聞き込みは確かに王道ではある。しかし情報と言うのは金と切って離せない物だ。特に世界を巡る貿易商や行商を行う商人は一国の情報機関よりも世界の情報に詳しい。

なにより商人は金を払えばあまり情報を出し渋ったりもしない。

「なあ、管理課は久々津誠一郎が本当は何をしていたかを知った上で

転生課へ依頼を出していたのか？」

俺はあえて自分でも知らない事を質問してみた。と言っても全く根拠が無いわけではない。裏取りが済んでいないだけで一応調べた上でそうではないかと考えている事だ。

「……………」

しらばつくれるか、誤魔化すかしても良いだろうにネフティスは沈黙してカップを持ったまま固まってしまふ。

「沈黙は肯定と受け取るぞ」

流石にあつさり過ぎて怪しく思えてしまうほど素直な反応に、俺は困惑していた。裏の裏なのか、それとも素直に表と受け取って良いのか。

ネフティスは神だ。俺なんかよりもずっと長く生きている。こんな引つ掛けにあつさりかかるとも思いづらいが、この1月の生活のせいでネフティスが案外、抜けてたりするイメージ持ってしまったている。

それすらティースとしての演技だとしたら？我ながら考えすぎだとは思ふ。だが気になってしまふのだから仕方ない。

長いような短いような思考時間の後、ようやく口を開いたネフティスは、

「……………そうですね。何のことかわからないと言っておきましょう」

それだけ言つて紅茶をひとすすりし、カップをそっとソーサーに置く。

聞きたいことは他にも有つたはずなのに、何を聞いたら良いか急に解らなくなり言葉が途切れた。

再び重苦しい静寂が場を支配する。

喉が苦しく感じ、俺は紅茶の入ったカップを口に運んだ。

味はわからなかった。ただ、慌てて飲むとして舌をやけどするくらいには紅茶がまだ暑かった。随分と長く感じたが、思っていたより時間は経っていないみたいだ。

お互いに口を開かず、静寂の中に紅茶をすする音だけが響く。

話を切り出した際にネフティスも俺に聞きたいことがあるような

口ぶりだったのに、聞いてくることもなく。ただ時間だけが過ぎてゆく。

緊張で引き伸ばされた時間の中、ようやく紅茶が適温になった頃、部屋の入口からコンコンと音がなる。

一拍置いてからキイト小さな音を鳴らし、開かれた扉から使用人が現れ、淡々と食事の用意が出来たことを告げた。

「続きはまたにしようよ。イエナ姉さん。私、お腹もうぺこぺこなのよね……」

ノックと共にティースモードへ切り替わったネフティスがおどけた様子で言う。釈然としないままではあるが、使用人が居る中で話せるようなものでもない。

上手く逃げられてしまったな。そう心の中で呟いて結界を解きネフティスに続き部屋を出る。

食事はとても質素なものだった。肉はあるが、主に野菜が中心で味付けは塩気が薄く、パンは堅パン。ボソボソしていてスープが無ければ飲み込むのに苦労しそうなほど、不味くはないが、交易の街で食べる食事のほうが余程美味しいだろう。

とは言え、出された飯に文句を言ってお百姓さんに申し訳ないの、モソモソと黙って食べる。だが、日本人の食事感覚を知るはずもないザコツシユとネフティスは遠慮無しに美味しくないと毒づく。

あまりにもド直球な物言いにスープを少し吹き出し、慌てながら誤魔化そうとするものの、良い言葉が思いつかず言い淀んでしまう。これなら黙っていたほうが幾分かマシだったことだろう。

そんな様子を見せても団長さんは嫌な顔一つせず、「申し訳ない」と笑う。そして、

「実はですね。これが城下の実情なんですよ」
そう続けた。

「私の家は自領で取れた野菜が入ってくるだけまだマシな方と言えるでしょう。王命によって出入りが制限され、物流が死んだ所に国軍による徴発で首都の人々は例外なく干上がっています。貴族平民関係なくね」

やはり、変だ。

まるで国の疲弊を態と引き起こしているような違和感。

貴族の力を削ぐにしても強引が過ぎる。これでは反発を生むだけだろう。貴族ならば私兵くらいは持っているはずだ反乱が起きる可能性だってあるはず。

「団長さん。本当にそれは王が引き起こしているのですか？」

勇者はただの大学生だ。とは言え、日本で教育を受けてきて政が一切わからない事はないだろう。日本の歴史は幾度となく内戦、反乱に見舞われてきた。天保の大飢饉で一揆が多発したように。

詳しくどんな事があったか、までは覚えてなくとも飢餓は道徳心も愛国心も無くすことくらいわかるはずだ。

「……わかりません。私達は王の直下部隊なので基本的に命令も王から受けています。ですが、ずっと王に仕えてきた我々が王の乱心を疑うほどにお変わりになられた。それに……」

「それに？」

言葉が切れた団長さんに続きを促す。

「……マイザ様、このセレブダロウの宰相ですが、我々が交易の街へ向かう際の命令を下したのは彼でした。今までも何度かありましたが、私はどうにも奴を信用出来ない」

団長さんは目配せをしてから、そう吐き捨てる。

「これはあくまで私の感想です。根拠もなにもない戯言だと覚えておいてください」

場には静寂が満ち、ザコツシユ以外の全員が苦虫を噛むような顔をしていた。ちなみにザコツシユは満足そうな顔で寝ていた。よくあんな話の中で寝られるものだと感心するね。無論、悪い意味で。

「すまない……。私の愚痴ばかりで」

「まったくね。美味しくない食事が更に不味くなつたわ」

ネフティスの毒に団長さんは乾いた声で笑う。

「そんな話よりもっと建設な話が見たいのよ。愚痴が言いたいのならその後にして頂戴。ザコツシユにでも聞かせると良いわ」

「俺かよ！お前らも聞いてやれよ！」

「いや」

「イエナさんは?」

ザコツシユは仲間が欲しそうな目でこちらを見ている。だが、断る。

「ごめんなさい……。少し、テイスと話すことがあるんです」

ザコツシユには悪いが、俺はあまり聞き上手ではないのだ。

それに団長さんは酒を飲んでいる。愚痴を聞くとして、俺だけ素面しらふなのは辛い。飲もうにも俺は酒にあまり強くないし、そもそも水代わりに出されているぶどう酒は酸味が強くて美味しくない。というのは建前で、ザコツシユを弄るのが楽しいだけだったりする。ネフテイスと話すことがあるのは本当だし。

「……団長さん。こうなったら男二人で朝まで飲み明かそうではないか!」

「明日も任務がありますので朝までというのはちよつと……」

「ですよー!」

結局、団長さんにもフラれたザコツシユが悲痛の声を上げた。団長さんも冗談が解る人のようだ。

「はあ……。で?ちったあ元氣出たかよ」

「え?」

「俺はただの冒険者だから国のいざごきはわからねえ。でも幸いにもここに居るのは3人とも1等級冒険者だ。腕つぶしだけなら近衛のあんたらにも負けない」

ニツと笑いザコツシユは自分の左胸に拳を当てる。

「だから俺達がどうしたら良いのか、教えてくれ。後は俺達がなんとかしてやる」

「そうね。そのうるさいのはともかく、私達の腕は確かよ」

「一緒に頑張りましょう!」

「皆さん……」

なんか良いこと言わなきゃと思ったが、気の利いた言葉が思いつかずにありきたりな言葉になってしまったが、団長さんは笑ってくれた。

「そうですね。近衛団長の私が後ろ向きではいけませんね。折角イエナさんに眷属化を解いてもらつてのです。マイザの化けの皮を剥がしてやりましょう」

「そうこなくつちやな」

立ち上がり腕を突き出すザコツシユに合わせて団長さんも腕を突き出す。意外なことにネフティスも躊躇ためらいなく腕を突き出したことだ。

俺だけ流れに乗らない訳にもいかないので、少し気恥ずかしくなりながらもおずおずと腕を突き出す。

再びザコツシユがニツと笑う。まあ良いだろう。たまにはこういうのも。

座り直すと団長さんは使用人に皿を下げさせ、代わりに地図らしきものをバサツと広げた。

「……城内の見取り図です。私が仕事のために作ったものなので細部はありませんが。これで明日の段取りを説明します」

団長さんはそう言ったが、サラッと見ただけでも細かく書かれており、とても丁寧な地図だった。印刷技術もなにもない世界なので手書きなのだろうが、とてもそうは思えないほどに精巧だ。

「イエナさんとティースさんは招待されていますので、正面から私の引率で入城し、王の前までお連れします。ですが、恐らくは玉座に入る前に宰相―マイザ―が接触してくると思われる。『勇者が呼んでいる』とかなんとか言つて」

「……」

本当に、事前情報通り勇者は、見目の整った女を集めて遊んでいるのだろうか？

勇者がセレブダロウの各所で行っていたある事が真実ならば、国の疲弊を招き、自分は女遊びするような自堕落を許すような性格とは思えない。とは言え、女を集めているのもまた事実。だからこそ俺達は招待されたのだから。

俺達は見極めなければならぬ。この事態の本質を、何が起きているのかを。特に俺は「神サドキエルの正義」の名を与えられている。見極め損

ねてはならない。絶対に。

「勇者様の部屋では多くの女性が閉じ込められていると聞いています。ただ、残念ながらマイザ以外の者はあの区画に近づけないため、中の状況は不明です」

「だがよ。それはティース達の案内にマイザが付きつきりになるってことだろ?」

「その通りです。城内の兵は軒並み眷属化されています。マイザが居なければロクな事は出来ないでしょう。その間にザコツシユさんは私と一緒に玉座へ向かってもらいます。私は近衛団長としてお二人をお連れしたことを報告しなければなりません」

「その隙を突いて俺は忍び込んで王を押しさえれば良いんだな?」

パシッと手を突き合わせてやる気満々の姿勢を見せるザコツシユに団長さんが待ったをかけた。

「いえ、ザコツシユさんは予備の鎧を着てもらい、私と一緒に堂々と玉座へ入ってもらいます」

「うげ……。またアレを着ないといけないのか……」

嫌な顔をしつつもザコツシユは「仕方ねえ」と意気込んだ。

「王も操られている可能性があります。いきなり抑えるのではなく、まずは探らせてください。万が一、本当に操られていた時は――」

「――任せろ。爆速で抑えてやる」

「で、できれば王に怪我をさせないようにお願いしますね?」

やる気に満ち溢れすぎているザコツシユに団長さんが気圧される。

まあ、大丈夫だろう。ザコツシユは俺と同じで常識人枠だしな。

『……長瀬様も大概だと思えますがね』

考えを読まれて俺は慌てて叫びそうになる気持ちを抑えながらネフティスに念話を送る。

『サラッと心を読むの止めてくれませんかね?!』

『ちよつと何言ってるかわからないです』

なんで何言ってるかわからねえんだよ。

天界の住民の読心には慣れつつあるけれど、やはり心臓に悪いので止めてほしい。

「ティースさん達についてですが、申し訳ないのですけど、部屋の状況がわからない以上はどうしても場当たりの対処になってしまうかと思われれます」

「探らせたりとか出来なかったんでしようか？」

「結界が貼られていて特定の人物以外が近づくと焼かれる。そう聞いています」

俺は、それを聞いて「あれ？」と思った。

この世界に初めて降り立った時、ネフティスが王城の壁を登り、部屋の中を見たと言っていなかっただろうか。

ネフティスはこの世界で天の力というチートをほとんど使えない。ならばどうして部屋の中を見ることが出来たのか。結界が城内にしか貼られていないとでも言うのだろうか。

それとも、ネフティスはヒーラーだ。焼かれながら回復したとか……。いや、流石にそれはないだろう。焦げ臭い匂いとかしなかったし。多分。

「大丈夫だろ。ティースなんて普段から行きあたりばったりだしな」

「まあ、私は場当たりのプロだからね」

ネフティスはフンと得意気に鼻を鳴らして誇る。

いや、誇ることにじゃないから。

「いや、誇ることにじゃないから」

あれ？口に出してたかな？と思ったらザコツシユの発言だった。どうやら考えが被ったらしい。同じ正直人枠だからかな！

「私も操られていた間の事は断片的にしか覚えておらず、どうしても細かな作戦と立てられ無いのが本音です。その負担を皆さんにかけてしまうのは心苦しいですが……」

「気にすんなって」

「そうね。精々、報酬の心配でもしておきなさい。なんせ1等級を3人も雇うんだからね」

「おいおい、ティース。俺はお前らが心配で着いてきてるだけだぞ」

「じゃあアンタの分の報酬は私達で貰っておくわ」

「ティース。私達は別に依頼を受けて居るわけじゃないでしょう？」

たまたま近衛兵達の眷属化を解けて、たまたま俺達の都合にも合うから利用しているだけ。世界の状況を改善させるのが目的であって、別に頼まれたからやっているわけではないのだから。

既に余るくらいのお金があるし、そもそも管理課の依頼を完遂したら帰るのだ。報酬をもらっても持って余ってしまう。

「ご心配なく。報酬はちゃんと用意しますよ。対価の無い仕事に責任は発生しませんからね」

「あら、殊勝しゆじやうな考えね。楽しみにしておくわ」

対価のない仕事に責任は無い。か、いいセリフだな。生前の俺に言って聞かせたい。

本当にいいセリフだな。感動的だ。だが、現代社会では無意味だ。それが現代社会の闇……。残業代は出ていたけれど10時間分までと微々たるものだった。つまりそれ以外の残業は無賃労働と変わらない訳だ。

そういえば、天界の仕事に給料とかあるのだろうか……。

「ははは、期待してくれていいかと。これでも近衛団長として随分と貰っていますからね。特にお二人には作戦と呼ぶのも烏滸おこがましいものになります。その分の報酬は上乘せさせてもらいますのでご期待ください」

「それは、楽しみにさせていただきますわ」

まあ、余したお金はネフティスに渡しておけばいいだろう。彼女は定期的に現界げんかいへ降りているらしいし。

「ひとまず、作戦に関する話はここまでです。ザコツシユさんにはまだ細かな説明がありますが、お二人はどうされますか？」

これは、ネフティスと話の続きをするチャンスかな。と思った俺は話から抜け出すことを伝える。

「それでは申し訳ありませんが、私達はお先に部屋に戻って休ませてもらいますね。慣れない馬車旅で疲れてまして」

「わかりました。寝る前のお茶はどうされますか？」

「折角なのでいただきますね」

こうして俺達は食堂を後にし、部屋へ戻った。

ただ、話の続きが出来ると思っていた俺の目論見は外れ、ネフティスは戻って早々に布団へ倒れ込みそのまま眠ってしまった。

どうするかと迷いながらも、ちゃんと眠れるようにネフティスを動かして布団をかける。ポケットに隠しておいた腕時計を覗くと時間はまだ21時を回った所。使用人さんの入れてくれたお茶を飲みながら少し考えよう。

温かいお茶で膨れたお腹を落ち着けながら明日の事を考えているとネフティスが抱き枕を探すようにもぞもぞし始めた。

それを合図に俺も寝間着に着替えて布団へ潜る。すると直様、ネフティスが俺の身体を引っ張り寄せてギューツと抱きしめてきた。慣れつつある柔らかな感触に身を任せ、俺はネフティスの身体ではなく明日への不安を抱えながら。

行きあたりばったりな作戦にいくら考えても不安しか浮かばない。だが、情報は集まりつつある。真実まで後少しのはずだ。そう感じながら眠りについた。

……To Be Continued

第七話：ザドキエルの役割らしいです③

翌朝、夜明けと共に目を覚まし顔を洗おうと廊下を彷徨^{さまよ}っていた俺は使用人さんのご厚意でお風呂を使わせていただけることになった。桶を使い身体にお湯をかけたところで寝ぼけた頭が冴え渡り、同時にハツとした。

「お加減はいかがですかー？」

そんな声を共にタオルを持った使用人さんがトコトコと近づいてくる。

「良ければお背中をお流しさせてもらえませんか？」

まずい。寝ぼけていたとは言えあまりにも迂闊^{うかつ}過ぎる。俺^{イチナ}とネフティスに着いてくれている使用人さんだ。同然ながら女性である。なんなら俺基準で言えば子供だ。高校生か、へたしたら中学生程度にしか見えない。

ロリコンではないのでホルスの槍が起動することはないが、そういう問題ではないのだ。こんな人体の神秘みたいな身体を幼さ残る少女に見られてはいけない。

「いや。大丈夫です！軽く汗を流せば満足ですから！」

早口にそう言う少女は、

「遠慮なさらずに！どうか！」

と懇願してきた。

俺は男ながらに理解した。少女の目は美を求める女性のソレに似ている。おまけにうちの会社に居た女性社員が化粧品の話で盛り上がる時によく似たテンションで近づいてきている。

残念ながら今の俺はイチナナの身体を借りてるだけで、美のことは何もわからないし教えてあげられない。

冒険者として野の中山の中を駆け回っても綺麗な肌と髪を保っているのも「イチナナの綺麗な姿」をイメージして？化しているからに過ぎない。

「……人に触られるのはお嫌いですか？」

「す、少し……」

「そうですか……」

残念そうにシユンとする少女に申し訳なくなり「やっぱお願いしよ
うかな」と言いそうになるのをすんで止める。

正直な所、自分の身体が局部以外女性になっただとしても、女性
に裸を見せたいとは思わない。だって恥ずかしいし。ネフティスと
は何度か入っているけれど慣れはしない。アラサーの男には刺激が
強すぎるのだ。

つーか異世界は美形が多すぎだぞ。男にしろ女にしろ。

「あの……。あまり見られてしていると恥ずかしいので出ていってもらえ
ませんか……？お風呂くらい1人で大丈夫ですから」

本当に止めてほしいと思っっている俺の気持ちに気づいたのか使用
人の少女は名残惜しそうに浴室から立ち去る。

それから数拍様子を見てからゆつくりと浴槽から上がる。

さっぱりするつもりだったのに無駄に気疲れしてしまった。とは
言え気を緩めておくわけにもいかない。今日は王城へ、久々津の下へ
いくのだから。

なんかおかしいよな。目的は勇者のところに行くことなのに、まる
でラスボスの城に挑む前みたいな雰囲気なただけだ。

「皆さん。準備はよろしいですか？」

「待って待って、鎧が上手く着れない」

「はあ……。手伝ってあげるからさっさと着なさい。アンタが王様を
確保できるかどうかも重要なんだからね」

「わかってる。ってかぜんっぜん起きなかつたお前に『さっさと』と
か言われたくねえぞ」

「うっさい、早く着る」

ザコツシユはネフティスに軽く鎧を叩かれパコンと小気味いい音
を響かせた。

なんとも緊張感にかけるけれど、変に気負うよりは良いかも知れな
い。

これでようやく終わる。1月もかけた冒険が、やっと。

謎はまだまだ多い。だけど、それも勇者に会えば判るはずだ。その

時、俺は選択を間違えないようにしなくてはいけない。

「では、馬車を出します」

団長さんはそう言うとお手綱たづなを一振りして馬を歩かせる。

さほどかからずに馬車は城壁の門までたどり着く、日はかなり高く登っており時刻はおおよそ正午前。ここからは一瞬も油断できない。久々津の仕掛けた罠や結界があるかもしれないから。

膝の上で拳をギュツと握っていると脇腹をツンツンされる。反射的に変な声が出てしまい、恥ずかしさでつついてきたネフテイスの方を見るとニツコリと笑っていた。

『硬くなりすぎですよ。もっと自然体で』

俺の緊張をほぐそうとしてくれたようだ。

『ごめん。ありがとう』

馬車は城門の前で止まり、団長さんが小声で荷台の俺達に「着きました」と言う。

その後、馬車は城の御者に預け、俺達は団長さんの引率で城の中へと入る。

初めてきたときは遠目から見ただけだったのであまり気にならなかったが目の前に立ってみるとそのデカさに圧倒されそうだ。

白を基調とした煉瓦で作られた白。目立った汚れはなく、日差しを受け薄く輝いて見えるほどだ。

チンケな言い方になるが舞浜にある有名な遊園地にある城に近い雰囲気を感じる。

そして何より城門のなんたる壮大なことか。門扉には金の装飾が施され、豪華さを感じさせながらも黒の木目が派手にさせすぎないように引き立てる。どこことなく懐かしさを感じさせる。

……門扉は良いのだが、白を基調にした壁と有ってないような気がしなくもない。

というか既視感の正体に気づいたわ。木造の門扉に金装飾ってお寺や神社の門扉と一緒にじゃない？なんか気づいたらソレにしか見えなくなってきたわ。なんで西洋風の白の門扉が和風なんだよ。

「呆けてないで早く、置いていくよ」

「ごめんなさい！」

門を見て考え込んでいた俺を一切待つことなく進んでいたネフ
ティスにそう言われて慌てて追いつく。

廊下でも俺はついつい物珍しきでキョロキョロと辺りを見回して
しまう。

テレビでしか見たこと無いような赤絨毯に、飾られた甲冑。広々と
した廊下は馬車で乗り入れてもすれ違いそうだ。

時々、見張りの兵がいるが、誰もこちらを見ることなく、気のせい
でなければ意識がなさそうにも見える。

進んでいくと外の日が入りにくいのか奥に行くにつれて次第に暗
くなっていった。更に兵士も減ってきたような気がする。

そんな中、薄暗い廊下の真ん中に佇む人影が近づく。

「待っていたぞ」

その影は俺らが目の前に来るまで待つてから口を開いた。

「……」

「団長。そやつらが例の冒険者で間違いないな？」

「そのとおりです。マイザ様」

団長さんは単調に答える。

近衛兵を隷属れいぞくさせたのが宰相のマイザである可能性が高い。なる
べく怪しまれないためにということだったが、若干棒読みっぽいのが
気になる。

隷属化してた間は言葉を聞いていないからわからないが、そんなも
んなのだろうか。

「そうか、ならばここからは私が引き継ごう。諸君らは営舎にでも
戻っておれ」

「……ハッ！」

マイザと呼ばれた初老の男がそんな少ない言葉で団長と、近衛兵の
鎧を着たザコツシユを下がらせる。

予定ではここから別行動になる。予定通り。出だしは上々といえ
るだろう。

マイザは2人が完全に見えなくなるまで立ち尽くし、それから俺達

に向き直すところり笑った。

「ようこそセレブダロウ城へ。お二方とも、呼びかけに応じて頂きありがとうございます」

あんな招待の仕方でもくもぬけぬけと言えるな。と思ったのは俺だけでは無いようで、隣に立つネフティスが1歩前に出ると口元にだけ笑みを浮かべる。

「丁寧な挨拶、痛みいるわね。手荒なエスコートだった騎士をは大違いだわ」

「……どうやら騎士との間で連絡不備があったようで、もうしわけありませんでした」

「それなら精々語弊を産まないようにすることね」

ネフティスの放つ皮肉にマイザはただただ頭を下げた。

経験則で判る。マイザは心から頭を下げているのではなく『謝罪をしている実績を作る』ために頭を下げているのだと。

証拠と言うわけではないが、ちらっと見えた顔が薄ら笑っていた。特殊性癖でないならば何かを企んでいるのだろう。

「申し訳ない、お二方ともこちらへ」

謝り倒したマイザは話を切り上げると、俺達を城の奥へと誘った。その方向は事前に見た玉座の間への道ではない。それは勇者の居ると思われる部屋の方向へ続く道。

やはり、久々津がこのイカニモナの資源問題を引き起こしている元凶なのだろうか。

勇者でありながら女を食い物にし、農民を酷使し、国を操る諸悪の根源に成り下がってしまったのだろうか。

いや、まだ決めつけるには早い。それに、それだけだと謎が残る。そう単純な話ではないはずだ。

俺は1ヶ月間、ただ魔物を討伐していたわけではない。なるべく広範囲かつ勇者が関わったと思われる土地を巡り情報を集めていた。ネフティスには冒険者として顔売るためだと偽って、だ。

そう、俺はかなり初めの方から管理部を、いやイナンナを疑っていた。イナンナは人を騙してまで働かせるような女神だが、仕事に対し

ては真摯で仕事のやり方は教えてくれたし、わからなくても聞けば答えてくれた。それこそエルラドのときは答えてくれていたのである。それがイカニモナに來た途端に放任もいいところ。

考えすぎかも知れないけれど、多分俺は試されているのだと思う。

「どうした姉さん。城についてからずっと上の空じゃないか。緊張してんのか?」

「そう、かもしれないですね……。何分なにぶんこうした所は初めてですから……」

「ま、私達は客人なんだしもつと堂々としなよ」

「ティースは堂々としすぎですよ……」

確かに緊張もしている。

手はずでは俺かネフティス、もしくは両方を傀儡にしてくるであろう久々津に対して、俺達は術に嵌った振りをする。そして久々津が近寄ってきた所で一気に魂を引き抜く。

その後はわざと窓から目立つように脱出、ネフティスの補助で転移して人気のない所から天界に帰還。

久々津に出会ったら事は一気に終わる。はずだ。

情勢の安定については王の意識が戻ったら団長さんと一緒になんとかしてくれるだろう。団長さんも情勢の回復をしたいと言っていたし。

各地を回って確かめたが、そこまで近隣諸国との擦れが起きてるようにも思わなかった。下手に俺らがなにかするより現界げんかいの人達にやらせた方が良く。本当なら俺達関わっていること事態がイレギュラーなのだから。

「……この先に勇者様の部屋がございます。私は王の下へ行かねばなりませんので、ここで失礼します。部屋の扉に薔薇があしらわれているのですぐに分かるかと思えます。最後まで案内できず申し訳ない」
「あつそ。まあ、適当にやっつくよ」

「案内を離れる前に忠告を一つ。この城はあらゆる所に結界を張り巡らせています。あまり変な所へ行くと取り返しつかないことになりますので、目的地へはまっすぐ行かれると良いかと。後ほど勇者様

の部屋まで迎えを出します。それまでは勇者様とごゆるりされるといいでしょう」

「ぶ〜ゆるり」ね。わかったわ」

昨夜に話したとおり、マイザは勇者の部屋に辿り着く前に離脱。代わりの案内が現れるとの予測だったが、そこは勝手に行けとの事。

俺の中の常識で言えば、見知らぬ相手、それも冒険者などというヤクザな商売をしているような相手を城の中で自由にさせるのはおかしい。

とはいえ決めつけられるほどの情報も無い。今は怪しい程度にとどまるか。

一度疑い出すと全てが怪しく思える。若手の話していた人狼ゲームとかいうやつでもやっている気分だ。

「突っ立っていても仕方ないですよ。行きましよう長瀬様」

「そうですね。じゃなかった。そうだな。行こう。終わらせに」

無意識にイエナとしての口調で話してしまい、慌てて戻す。1ヶ月も話しているので癖になってしまいうのも仕方ない。もし普通に女口調のキャラに化けていたら、咄嗟に出るのは女口調に成るわけだ。本当、敬語の姉キャラにしておいてよかった。

少し歩くと、薄暗かった通路は外からの光で明るくなった。どうやら外壁沿いに出たらしい。そして、目の前に見えるのは薔薇のついた部屋の扉。

「……だな」

「……他にそれっぽい部屋はありませんでした。間違いないでしょう」

この部屋に入ればひとまずイカニモナでの活動は終わる。答え合わせは天界に帰ったらすればいい。答えは、久々津から聞けば良いのだから。魂を殺すかどうかともその後で良いはずだ。

「それじゃあ。ノックするぞ」

深呼吸をしてネフティスに確認してから扉を3回叩く。

一拍置いて、中から「どうぞ」の声が聞こえたのを確認して扉を開いた。

∴
T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第八話：転生課の役目を果たすときみたいです

「待っていたよ」

扉が開かれ、部屋の中に居る男と俺達、お互いの姿が確認できるようになる。部屋の中に居る男はそう声をかけてきた。

なるべく怪しまれないように俺達は「失礼します」と言ってから部屋の中へと侵入する。

ひとまず部屋の入り口に結界のようなものは感じなかった。ネフティスにも目配せして確認を取ると、ネフティスは小さく頷く。

「はじめまして。私は冒険者のイエナと申します。こちらは妹のティースです。貴方は勇者様、でよろしいでしょうか？」

ネフティスよりも1歩前に出ながら俺はお淑やかに礼をして、男に問う。

本当は答えは聞くまでもなくわかっていた。男の身体には天の力が満ちている。これは天界で管理している勇者である証拠だ。その身体が天の力で構成されている勇者はある意味『勇者』という種族とも言える。見るものが見れば正体を見破るのはあまりにも易い。

「ああ、よく来てくれたな。俺は久々津誠一郎。これでも勇者と呼ばれている」

「かの有名な勇者様にお目通りできて光栄の極みです」

軽い挨拶をしたところで俺はふと背後が静かすぎると気づいた。

今までは止めてほしくとも首を突っ込んでいたというのに、この部屋に入る前辺りから随分と静かすぎる。

『ネフティス？』

『おかしいと思いませんか？』

『何が？』

『私が1月前に見た女性達の姿がありません』

『……………ふむ？…』

ネフティスの話では女性を傀儡にして侍らせているということだったはずだが、確かに部屋に女性の姿は無い。

違和感があるが、俺が事前に集めていた情報を考えれば、そこまで

おかしいというほどでもない。

俺が得た情報。それは、久々津が農村に対し農耕の技術や簡易的な害獣対策を教えていたこと。また、災害による難民の対策も行っていたらしいこと。次にまた大雨や地震等の災害が起きても良いような知識の伝授。

まさに救世主とも言える勇者的活躍。

確かに見目の良い女性を城に呼び寄せたりなどの行動も有ったらしい。が、それは勇者が世間に顔を見せず、城に引きこもるようになってから。

方法は必ず近衛兵団を使いに出しての呼び出し。あのパイザとかいう男も居たらしいことを確認している。

些か強引で陰謀論めいた考えだが、俺は宰相のマイザが何らかの力で兵を操り女性を呼び寄せ、久々津に仕向けることでコントロールしようとしたのではないかと考えている。

とは言え、結局女を喰い散らかして、状況に甘んじて受けているだけなら世界にとって、管理する側にとって害になるのだろうか。

「どうした黙って。待っていれば俺が隙を見せるとでも思ってるのか？」

久々津は薄い笑みを浮かべて軽い殺気を放つ。

突然の殺気に背筋に冷たいものが走るような感覚を覚え、一步、後ずさる。

「隙、とは？」

「とぼけんなよ。俺を狙いに来たんだろ？」

そう言われた瞬間に俺は反射的に身構えてネフティスの顔をチラと見てしまう。まだしらを切ることもできたはずなのに。

ネフティスはネフティスで予想していなかったのか驚きの表情が浮かんでいた。

もう誤魔化せない。

俺達の反応を見た久々津がニヤリと口角を上げ言い放つ。

「〴〵勇者の名の下に命を下す。客人を無力化しろ！」

次の瞬間、天井やベッドの下、家具の中、そして俺達が入ってきた

扉から何人もの人影が部屋に雪崩込んだ。

あれよあれよと言う間に部屋と廊下が勇者の呼び出した女性達によって埋め尽くされる。

咄嗟に防郭ぼうかくを貼つていなければ、俺はともかくネフティスは組み伏せられていたかもしれない。ネフティスも強いとは言っても、制約によって天の力は念話程度しか扱えないのだ。いくら強くても数には勝てない。

「まずいな……」

女性達はいずれも武装している。久々津は無力化と言ってはいたが容赦なく襲ってくるだろう。怪我を負わせても魔法で治せば良いだけなのだから。

転移で一旦逃げてしまうのも手だろうが、そうすると勇者に接触するのが困難になってしまう。

怠惰たいだで好き勝手やっていたとは思えないほど勇者からは隙を感じない。気配察知に優れている。だったか。まるで野生動物のようだ。

女性達を無力化しようにも制圧できるような武術は使えない。俺にできるのは何でも切り裂けるスモールソードを1月で身につけた剣術を使って振り回すことだけ。ここで振り回したらゾンビ物も真っ青なグロ映像になることだろう。

ひとまずは防郭のお陰で攻撃されても悠長ゆうちょうに構えていられるが、これでは膠着こうちやく状態じょうたいになるだけで状況は良くも悪くもならない。

「そうやって身を守るのは良いが、いつまで持つかな？」

久々津の言葉は明らかにこちらを見下し

『長瀬様。防郭を解いてください』

『流石に危険じゃないか？』

『この身体は現界で行動するために作られた仮のものですよ。天界の者は現界で死んだとしても天界で復活するだけ、ご存知でしょう？』

『だからって……』

『良いから解いてください。多分、上手くいくと思いますよ』

『……わかった』

強気なネフティスの言葉に俺は渋々、防郭を解く。せき止められて

いたダムを開放するように操られた女性達が襲いかかってくる。

棍棒らしきものを振り回す妙齡の女性、ナイフを突き刺そうとする少女、剣を持った婦人。様々な武器を手にした女性があらゆる方向から俺やネフティスに向かって振りかざす。

俺は問題ない。天の衣を貫けるのは天の力だけだから。だが、ネフティスは――

「ぐっ……い！」

「なんだ、もう少し抵抗するかと思っただが、案外早かったな」

鍛えられてない女性の力とは言え武器を振りかざせば人を傷つけるには十分だ。ネフティスの身体は叩かれ、切り裂かれ、身体の各所に血を滲にじませていた。

多数に全方位から襲われて大きな怪我を負っていないのは流石の技量というべきか。

「どうした。降参するなら精々可愛がってやるぞ」

「……誰が降参だって？」

徴発する勇者の言葉にネフティスは頬ほおの血を拭って勇者を睨む。拭われた血の下に傷は無く、ただ拭われた血の跡だけが残っていた。

「私は殲滅治癒師よ。この程度の攻撃じゃダメージにもなりやしないわ」

そう言いながら襲いかかる女性の腕を右手でそっと払うと左手を真っ直ぐ相手の胸に叩きつけた。

威力があるようには見えなかったが、掌底を食らった女性はカハツと息を吐き出して膝をついて倒れた。

倒れる女性には目もくれず、上半身を軽く倒すようにして足を後ろ向きに振り上げすぐ後ろに居た別の女性の顎を蹴り上げ、更に今度は身体全体を落とすと前方に向かってスライディングするようにして数人の足を払った。

一連の動きは一切の無駄も無く、さながら時代劇か何かの殺陣たてようですらある。

「打ち止めかしら、私はまだ無傷よ？」

「っは、やってくれるじゃねーか」

数秒で10人程を無力化したネフティスが勇者を挑発する。

『長瀬様、こいつらは武器を持っているだけの素人です。防郭を広げて一気に押し潰しちやっってください』

『わ、わかった！』

『全力で！』

言われるがままに自分の周りに発生させている防郭を一瞬だけ全力で膨張させ、周囲の女性達を吹き飛ばす。その勢いで壁に激突して動かなくなった。肉体の死を感じないので生きては居るようだ。しかし加減がわからなかったとは言え、打ちどころが悪ければ死んでもおかしくない攻撃。

もしかしたら殺していたかもしれない。

そう考えた途端にゾクつとした。

「これでアンタを守る盾は居なくなつたわね」

手が震え、立ち竦む俺など意にも介さずに、ネフティスは地を蹴り勇者へ拳を突き出し肉薄する。

これを勇者は片手で受け止め余裕の表情で、こちらを称賛する。
「防郭で吹き飛ばすとは考えたな」と。

勇者の言葉に返事をする事無く、ネフティスは受け止められた拳をサツと引つ込め、逆の手を貫手ぬきてにして喉を狙う。勇者の反応が追いつかない程に素早く放たれる。

しかし――

「チィ……！」

「並の攻撃では天の衣を破れない」

天の力によって出来た壁によってネフティスの貫手は阻まれ、喉まで届くことは無かった。

『今です！全力で攻撃を!!』

ネフティスの声にハツとして、俺も遅れながら勇者へ駆け寄る。拳を振り上げ、声を張り、とにかく全力で勇者を殴らんと猛る。もはや真意などどうでも良くなっていた。

俺の中にあるのは女を操り、武器をもたせ自らを守る盾としたこと

への怒り。そして期待していたがための失望だった。

勇者はもはやネフティスを見ることすらなく、自信たつぷりの表情でこちらを見つめ、天の力を乗せた声を発する。

「天に代わりて勇者が命ず、動きを止め、我に従え」

「うおおおおおおあああああ——」

だが、その声が俺に届くことはない。いくら勇者と言えど生半可な力では純粋な天の力を防ぐことは出来ない。

「何!? て、天に代わりて勇者がめいずりゆぐがあ——」

「——つりゃあ!!!」

傀儡化が効かず慌てふためく勇者の横っ面に拳が天の衣を貫き、叩き込まれる。

素人のパンチではあるが大の大人が放つ全力のパンチ。人が飛ぶには十分な威力が乗っていた。

「つぐ……。くそっ！素人同然の動きしかしてない冒険者に天の衣が抜かれるだど！そんな馬鹿な話があるか！」

良い一発が入ったと思っただが、勇者は軽く頬を抑えてすぐさま立ち上がり、手を地面に叩きつけた。

「《バインドスパーク》」

勇者が叫んだ途端、床一面がバチバチと音を鳴らし絨毯を焦がす。

目には見えなかったがどうやら電気が床を駆けたようだ。効果は一瞬だったのか飛び退いたネフティスはケロツとしている。

名前から察するに地面に触れている相手を痺れさせる魔法のようだ。念の為に床に転がっている女性達にも防郭を張っておいてよかった。

「……もろともとはな」

「どう思おうと勝手だが、奴らは仲間じゃないからな」

「下衆が……」

勇者の反応に俺もネフティスと同じ言葉を口から漏らした。

このクズは一発殴った程度では生ぬるい。腐った性根に社会の厳しきってもんを刻みつけてやる。

先程の魔法でわかったが、こいつはヘンリーと違って天の力を使い

こなせてない。つまり、こいつの攻撃が俺に届くことはない。ならば俺はもう何も気にせず、とにかく勇者をぶっ飛ばせばいい。

「おつらあー！」

駆け寄り、振り抜いた拳は空を切る。

「このっ！」

逆手でアツパーを仕掛けるも再び空を切る。

「ふんー！」

ならばと足を水平に振り抜くが、これも当たらない。

薄々とわかつてたことだが、いくら天の衣を抜けたって攻撃が当たらなければ意味がない。

「鈍い拳だな。油断しなけりやそんな攻撃とも呼べないもの当たらねえっつーの!!」

全力で突き出した右の拳を半身で避けられ、そのままカウンターで俺の腹に勇者の拳が突き刺さ、らずに防郭によって防御される。

「にしても硬え防郭だな。……こりや体術じゃ無理か」

勇者は足元に向かって電撃と思われる魔法を放つことで床材を弾けさせ、俺達が怯んだ隙に距離を離れた。

すぐさまネフティスが近づこうとするが、勇者は逃げに徹してネフティスを近づけさせない。俺も挟撃きょうげきのために動くべきだが、高速で動き回る2人を目で追うのがやつと。とてもではないが動きについていけない。

ただ逃げてるだけではなく、勇者は何やら呪文のようなものを紡ぎ、内包する魔力を練り上げている様子だった。ネフティスもそれがわかってるようで、なんとか妨害してやろうと追いかける。

「天に代わりて、勇者が、命ずる……!!」っ！「我、に仇あだなす！者に光の如き裁ばきの雷霆らいていによ、る！一撃！を、与え給え!!」

詠唱を終え練りに練られた魔力を窓の外に放ち、勇者は自らの身体を窓の左側に預けた。そのチャンス逃すはずもなくネフティスは素早く拳を叩き込むが、それを勇者は手で受け止め、更にネフティスが放った足刀までも逆手で払うようにして掴んだ。

「捉えたぞー！」《閃電せんでん電撃でんげき》!!」

ネフテイスの身体を抑える瞬間を待っていたとばかりに勇者は魔法を放つ。

それは魔法と読んで良いのかはわからない。

城に入ったときは晴れていたはずの空はどす黒い雲に覆われ、渦を巻いていた。地獄の鬼のような唸り声をあげ、紫電しでんに紫閃しせんがビカビカと空を彩る。

勇者がニヤリと笑った瞬間、

―ビツシャアアアン！

という空気を裂く音と共に部屋が紫閃で埋め尽くされた。

∴T o B e C o n t i n u e d

第八話：転生課の役目を果たすときみたいです②

光に対し咄嗟とっさに腕で目を覆う。辛うじて目を塞ぐ前に見えていたのはネフティスが勇者に掴まる瞬間だった。

勇者の放った魔法がとてつもない魔力が込められていた。勝手に天の衣が発動している俺はともかくネフティスは無事では済まないかもしれない。

「ネフティス!!」

未だ閃光で目が眩む中、俺は偽名のことなど忘れてネフティスの名を叫ぶ。

「ネフティス！無事なら返事をしろ！」

しかし、返事は無い。

次第に暗順応によつて徐々に視界が開かれる。

やがて見えたのは窓際に立っている勇者と人の形をした炭。左腕と右足を勇者に掴まれた不自然な形の炭。それが何であったかを想像するのは難くない。

「あああああああああああああ!!!」

死んだ。ネフティスが死んだ。俺の目の前で、殺された。

誰に？勇者にだ。

世界を救うために天から遣わされた勇者に、ネフティスが殺された。

「よくも！よくもおお!!」

怒り、猛り、俺は感情のままにスモールソードを抜き斬りかかる。

「こいつ！さつきより早く……!!」

「よくもネフティスをおお!!」

「つく……!!」

「許さねえ！お前だけは絶対に！」

「なんだっ！さつきまでと様子が——」

持っているものが真剣だということも忘れ、ただ目の前の男に暴力を振りかざす。

天の衣という最高の防御のおかげで捨て身のまま剣を振り回す。

勇者が何をしようかと俺に届きはしないのだから。

無我夢中で剣を振り、目の前の敵を滅さんとする。

「このっ！くそが！避けるな!!」

「つく……。段々早くっ……………」

駄々をこねる子供のように、型も何も無い純粋な暴力を勇者へ振りかざす。

気迫に押され勇者はじわじわと部屋の端へ追い詰められ、ついに壁際に勇者の足が壁にぶつかった。

「しまっ—」

「取った!!」

『いけません長瀬様!!』

「!？」

まさに剣を勇者の首へ振り下ろす既のところで誰かの声が頭に響く。

謎の声に動揺した一瞬の隙を逃さずに勇者は俺の持つスモールソードの柄を下から突き上げるようにして弾き飛ばす。だが、強引に武器を弾き飛ばした勇者はもはや俺の拳を避けるだけの余裕はなくなっていた。

勇者は油断していたのだろう。勇者も完全ではないが天の衣を持つ、故に剣を弾けば驚異はないと、女の細腕では何も出来ない。油断したのだ。

「このっ!!」

渾身の力を込めた天使の拳が勇者の頬に突き刺さる。

それだけではなく、俺は勇者に触れた瞬間に勇者の魂を肉体から引き剥がした。理性的な判断をしたわけではない。剣が弾かれなければ俺は怒りのままスモールソードを、全てを天の力で切り裂く剣を勇者の身体に振りかざしていただろう。

勇者が気付けるはずもないが転生課から来た俺は身体に触れられさえすれば魂を引き抜ける。勇者よりもよほどチート地味な存在。俺は単に勇者を殺すために魂を引き抜いたに過ぎない。

「……………」

魂を引き抜かれた勇者の身体は、棒立ちになり、目の焦点も合わずに虚空を見ていた。

「やったか」

『いや、やってねえよ!? え? なにこれ! え、俺が目の前に!』

「くそっ! 目的を果たしたってネフティスが生きてなきや意味がねえだろ!!」

『無視すんなよ。お前、おい聞こえてるんだろ? なんだよこれ!』

「うるせえ! 俺は悲しんだよ!」

『え、あ、ごめんささい』

魂の抜けた勇者の身体はただの抜け殻、管理課がこの抜け殻をどうするつもりかは知らない。新たな魂でも入れて使うのだろうか?

狙ったわけではないが、イシスからの依頼通りにはなった。

『ところでよ。あれ、そのままでもいいのか?』

「は?」

声の主が指差したほうを見ると、そこには抜け殻となったはずの勇者の身体だった。

「うそ……だ……ろ……?」

魂は間違いなく抜いたはずだ。なのに、どうして勇者の身体が動いている?

勇者の身体はギギギと音を立ててそうな動きでゆつくりと首をこちらに向け、ニヤリとその口角を吊り上げた。

『やべえー! 避ける!!』

そう聞こえたと同時に、紫電の光と空気を切り裂く轟音が響き渡る。

今のは勇者の使っていた魔法、確か閃電せんでんなんたらとか言ってた魔法。ネフティスが消し炭にされた魔法だ。

どうして魂が抜けたはずの勇者が魔法を打ってくるのかはわからないが、とにかく今の魔法にはかなりの魔力が込められていた。

現に先程のときとは違い、石で出来ているはずの壁までも焦げ付く程の威力があった。

『閃電せんでん雷撃……!?! まずい! 女の子達が!』

「っ！」

女の子達と聞いて俺は慌てて部屋を見渡す。俺が防郭でふっ飛ばした女の子には俺が個別で防郭を張って保護していたが、部屋に居た全ての子にそれが出来たわけではない。

ベッドの周りに転がっていた女性達は石畳に同化するようにして焦げ消えている。

姿形が残らず、あるのは黒い焦げ跡だけ。人としての形すら残していないおかげで凄惨な死体を見ずに済んでいるが良いのか悪いのか。しかし、幸いにもベッドと、その上に乗っていた女性達は無事だった。これはネフティスのおかげだ。

ネフティスは荒っぽく戦っていたように見えて、気絶した女性達はベッドに放り投げていた。おかげで俺は

床に寝かせていたのでは動きづらいのもあっただろうが、ベッドに投げていた辺りは配慮してたらしい。俺はそうして雑に投げられていたベッドに防郭を貼り守ることが出来た。

何人死んだのかはわからない。もし俺が全ての女性に防郭を貼れていれば、操られていた女性が犠牲になることは無かったはずだ。

グツと拳を握りしめ歯噛みする。不甲斐ない。俺が力を使いこなせていれば助けられた。

『おい！ぼーっとしてる場合じゃねえぞ！2発目が来る!!』

再び紫電の光が迸る。

『やべえぞ！あんまし撃たれると城が壊れちまう！』

『そうは言っても！』

『どうにも出来ないならせめてアイツを引き連れて外に出れないか!?!』

『……やってみる！』

俺は声に従い、部屋の入口まで移動してわざとらしく中指を突き立てる。

「クソ勇者！こっち来てみやがれ！」

「!!」

勇者が俺を見て怒ったのか、たった1蹴り地を蹴るだけで俺の下ま

で跳び拳を振りかぶった。

なんとか目で追うのがやつとの攻撃だったが、天の衣があるから大丈夫。そう思った。しかし、俺の身体は衝撃と共に廊下の壁に打ち付けられた。

「カハッ!？」

肺の空気が一気に吐き出され、全身を打った衝撃で身体が軋む。絶対なる盾と思っていたものに裏切られた。

と、思ったけれど、よく考えたら2度目だった……。

『大丈夫か!』

「なんとかね……」

ノーガードでふっ飛ばされたはずだが、怪我らしい怪我はない。吹き飛ばされたから勘違いしそうになったが、どうやら勇者の攻撃には天の力が使われていないようだ。つまり、天の衣が抜かれた訳ではない。

ならばなぜ吹き飛ばされたのか。わからないけれど、とにかく今は逃げるしか無い。何度も吹き飛ばされては敵わない。

「俺はまだピンピンしてるぞ!どうしたこっち来い!」

精一杯の虚勢を張り上げ、なんとか誘導する。どの道、俺に勇者アレを倒す術はない。剣珠すら付け焼き刃なのに、剣が無い今の俺にできるのは精々引き連れて連れて行くことだけ。

どこに?」

倒せるであろう人がいるところに、だ。

「久々津!玉座まで案内しろ!」

すぐ後ろについている久々津の魂に命令する。そうなのである。俺は確かに久々津の身体から魂を引き抜いているのだ。現に追いかけてきている久々津の身体からは魂の存在を感じない。

『はあ!?!城の外に誘導するんじゃないのかよ!』

「いいから玉座に案内しろ!」

『だあ!わかったよ!』

俺達が勇者の部屋に向かい、戦闘してる間にどれだけの時間が経っているかはわからないが、読みが間違っていないなければいるはずだ。

最高の等級を持つ冒険者が。

『その階段を登って、そのまま真っ直ぐ正面の扉だ』

久々津の案内に従い、長い廊下を駆けて玉座につながる扉を蹴破る。

『おい！丁寧に扱えよ！』

何やら文句を言っているやつがいるが、そんなことを気にしている場合ではない。

広い玉座の間に入ると、部屋の中はやたらとボロボロな状態になっていた。

床はヒビが入りところどころ抉れたように穴が空き、壁や柱は碎け、壁掛けのランプは割れていた。

明らかな戦闘跡、そして部屋をこんなにしたであろう者たちが部屋の奥に見える。

「っは、乱暴な登場だからティースかと思ったが、イエナの方だったとはな。すまないが手伝ってくれ」

部屋に入ってきた俺に気づいたザコツシユが俺をチラ見してからそう言う。

ザコツシユは団長さんを庇うように立ち、マイザと対峙していた。団長さんは負傷している様子は無いものの、誰かを抱きかかえるようにしてしゃがみ込み、視線だけをマイザに向けている。

『あれはポンド王だ！おい！あの盾の魔法で王を守れ！』

「俺は誰かを守りながら戦うのが苦手だな。こいつは俺がなんとかするから2人に防郭を貼って耐えていてくれ！」

ザコツシユはマイザの放つ魔法を防ぐので手一杯なよう思うように攻められないようだった。言われた通り団長さん達の周りに防郭を貼って駆け寄る。

そのタイミングで今度は玉座の間の扉が吹き飛び、勇者が現れる。まずい。と思った。いくらザコツシユが強くても勇者とマイザを同時に相手できるはずがない。なんといっても勇者はネフティスを倒せる実力があるのだから。

「……イエナさん」

打開策をひねり出そうとしている俺に団長さんが話しかけてきた。
「王を頼みます」

そう言っつて団長さんは抱きかかえていた王を俺に預け立ち上がり、
剣を抜く。

「何をしているのか知らんが、俺はそんなことをするために剣を教え
たわけじゃないぞ」

剣先を勇者に向けると力強い声でそう言い放った。

…:T o B e C o n t i n u e d

第八話：転生課の役目を果たすときみたいです③

抜刀と同時に団長さんは石の床の表面が薄く弾けるほどに床を強く蹴る。

ザコツシユの爆発とは違う純粋な筋肉の跳躍ちようやくによって勇者の懐まで潜り込んだ団長さんは下から跳ね上げるようにして勇者の右肩を狙う。

「――」
はつきりいつて勇者は団長さんの攻撃に反応すら出来ていなかったように見えた。それでも団長さんの剣は止まった。不可視の何によって。

天の衣に似ていたが、天の力ではなかった。もつと暗く沈み込むような重たい気配。それが負の資源ダメーヅリソースであることはすぐに解った。

「これは……」

攻撃を止められた後、跳ねるように距離を取った団長さんが何かに気づいたかのように呟く。

一方、勇者は攻撃された事など気づいていないかのように首をぐりりと回してマイザに顔を向けた。

マイザは勇者をちらと見ると黒い炎を放ち強引にザコツシユから離れるともう一度勇者を見てからニヤリと笑う。

「ふふふ、お遊びはここまでにしましょう。ちようど器も来たことですしね」

「……………」

勇者の隣まで移動したマイザが片手で2人を牽制けんせいしながら高笑いする。

「今日はこの国、いやこの世界にとって歴史に残る日になる!!」

その手に負の資源と思われる黒いモヤを纏ったまま、マイザはその腕で勇者の心臓を貫き穿つ。

肋骨が砕け、肉が引きちぎられる音と鮮血の垂れるピチャピチャと言う音が石造りの部屋に響いた。

「ふふ、ふふふふ、今こそ、今こそ！この私が――」

「——止める！」

勇者の血を浴びながら愉悦ゆえつに満ちた笑みを浮かべるマイザに左右からザコツシユと団長さんが交差するように斬りかかる。

——だが、

グニヤリ、とマイザと勇者の周りの空間が歪み、負の資源で作られた黒いモヤに包まれた。団長さんは寸でのところで剣を止めたが、剣を振り抜いたザコツシユの剣先はまるでアイスをくり抜いたようななめらかな断面を残して無くなっていた。

「おいおい、こりゃ反則だぞ」

「魔力を感じない……!?!」

ギョルギョルと音を立てながらマイザと勇者が空間ごと圧縮されていく。

マイザは負の資源を操る。いや、負の資源そのものだった。その存在は一般的にこう呼ばれる。

——魔王と。

「不味くないか……?」

ザコツシユは場の異常を感じてジリつと後ずさる。団長さんも額に大きな汗をかいて歯噛みしているのが解った。

どうすればいい?

俺は知識として知っている。だからザコツシユと団長さんの2人では絶対に対処出来ないことが解ってしまう。

あれは天の力たる資源リソースを扱える勇者が居なくては倒せない。

俺も天の力を扱えるが、天界の住人では駄目だ。魔王を倒せたとしても、負の資源ダメージリソースを天へ還元出来ないため、その膨大な負の資源が霧散しセレブダロウ一体が死の大地と化してしまうことだろう。

『おいーお前、天使か女神なんだろ！なんとか出来ないのか、このままじゃ皆が！世界が！』

久々津は俺にせがむ。魂だけの存在で器用にも頭を地につけて。どの口で、そう思った。

『……頼むーこの世界を、見捨てないでくれ！』

「厚かましいと思わないのか、魔王が生まれたのも、魔王に国が操られ

ていたのも、ネフティスが死んだのも！全部！お前が、お前の怠惰が産んだことだぞ！」

俺はネフティスに隠れて色々調べていた。だから勇者以外にも兵士を操っている者が居ることには気づいていた。その存在が魔王とまではわからなかったが。

ネフティスと冒険者として各地を巡り、確かに勇者が地域の復興や、農耕技術の普及などに力を入れていたことも、その後の経過を兵士にさせていたことも知っていた。女を招集しているのも勇者の手のもものではなさそうだと言うことも。

だが、実際は与えられた地位と褒美に目を曇らせ墮落していた。

『それは……』

「お前は魔王が居ることにも気づいたはずだ。いや、気づいてなければおかしい」

『……』

久々津は何も言えず頭を下げたまま固まる。

「イエナ！お前は王を連れて逃げろ！あれが覚醒したら多分俺達じゃ対処出来ねえ！」

ザコツシユがマイザだったものを見ながら叫ぶ。

黒いモヤはもはや球体と化し、不気味にも脈を打っていた。その様子は繭まゆのように見える。

「久々津。お前はこの世界のために、全存在を賭けられるか」

『え——』

ふと、口をついてそんな言葉が出た。

「——この世界を守るために自分が消えても良いと思えるか」

お前は何をしにこの世界に来た？管理部の依頼は何だった？

そんな考えが頭に浮かび、ぐるぐると回る。思考が勝手に誘導されているような妙な違和感を感じる。

どうするべきなのか、今この場で俺は何が出来るのかが勝手に頭に浮かんでいく。

『俺は……』

久々津は顔を伏せる。

「イエナ！早くしろ！そろそろヤバそうだ！」

外野が五月蠅い。そう感じるほどに思考が変な方向に寄っていくのを感じる。

「どうした。早く答えろ。この世界を見捨てたくないのだろうか？」自分の存在が消える程度なんてことない。『俺は……』勇者だ。確かに俺は立場を利用して許されないような事をしてきた。女神から与えられた能力を悪用したのも確かだ……』

久々津は頭を上げ、眼差しを強くして俺を見上げた。

『都合のいいことを言っているのは解っている。こんな俺が頼める立場ではないことも。でも、何も俺は世界が滅んでしまってもいいと思っていたわけではない！』

勇者は立ち上がり、俺の前に立つ。その瞳には確かな光を宿して。『元はと言えば俺の責任だ。やってやる！俺の存在を賭けて！せめて最後に勇者として散ってやる！』

「そうか、ならばならば我も神の正義の名のもとに力を貸してやろう。覚悟して見ろ。お前の戦うべき相手——」

俺は静かに振り返り、〃まゆ繭〃を指差す。

「――魔王の誕生だ」

脈打っていた繭は静まり、ピシピシと音を立て、今まさに孵化しようとしていた。

繭の欠片がポロっと落ち、穴が開く。その瞬間に全身の毛が逆立ち、息を詰まらせそうな空気が玉座の間に充満した。

ザコツシユも団長さんも繭から視線を外せずに、ただ歯噛みしてその額に汗を浮かべる。俺は一步ずつ繭へ近づき、2人の前に出る。

「か弱き魂を守れ ヘフンスランバート《天 罌 壁》」

スモールソードを創生し、虚空にこの世界の魔法文字を描く。天罌壁は天の衣を擬似的に再現し他人に付与する防護術。

「これは、防郭か。助かる、だがなぜ逃げなかった」

俺はザコツシユを一瞥だけして繭へと視線を向ける。

ダメーシリッス負の資源を直接操れる魔王の攻撃相手では心許無いが、彼らほどの実力者なら致命傷を避けるくらい役に立ちはずだ。

これで2人のことは放っておいてもいい。まずは勇者の器を取り戻すとしよう。

『俺は、何をすればいい』

「我が貴様の器を用意して、場を整えてやろう」

『そしたら俺の、勇者の出番って訳か……』

「そうだ」

繭の全体にヒビが入り、ところどころ零れ落ち空いた穴から仄暗い空気が地に堕ちてゆく。それに伴い空気は重みを増す。

「―来る!!」

団長さんの鬼気迫る声の後に繭は弾けた。

足元を舐めるような冷たい風が吹き抜け、魔力と負の資源の混ざった力が形を成して顕現する。

黒を基調に金色の刺繍ししゅうの入った豪華なローブを纏い、負の資源によって作られた黒い宝玉オーブと絢爛豪華な宝石をはめ込んだ杖を持ったマイザだった存在。

「我が名はグリード」

身の毛のよだつような低く悍ましいおぞ声が響く。

「金の妄執もうしゅうにより生まれし魔王也」

宙に浮き、俺達を見下ろすグリード。

「ははっ。誉れほまだぜ……!魔王と戦えるなんてよ!!な、団長!イエナ!

「ええ、こうなったらやるしかありません。ザコツシユさん、イエナさん。共に世界を守りましょう」

悲愴感を感じさせないように互いに鼓舞こぶし合う2人を無視し、繭が合った場所を見る。繭の残骸ざんがいの中に埋もれる無残な姿へ変貌へんぼうした久々津の器を。

2人には俺が器を取るのを邪魔されぬように魔王を止めてもらわねばならない。そう思ったら自然とどんな能力を使えばいいかが解った。

手をかざし辺りの負の資源を消し去る。それだけで重苦しかった空気が幾ばか軽くなる。

「我の目的のために力を貸してもらおうか」
今こそ、神の正義を示す時だ。

T o B e C o n t i n u e d

第八話：転生課の役目を果たすときみたいです④

俺は1歩ずつゆっくりと前へ進む。

走る必要ない。これは結末の決まっている言わば予定調和。

「何故だ！どうして私の攻撃が届かない!!」

喚く魔王を尻目に俺は天の力によって幾重にも結界を張り巡らせ、魔王を閉じ込めると同時にこの場にいる全員に加護を与えた。

一時的なものではあるが神使代理としての役目を与え、それに見合う力を加護に込めた。生まれたての魔王如きが太刀打ちできるはずもない。

そこまでの人間には過ぎたる力、本来なら代償もある。が、転生課の権限で踏み倒した。

「助かるイエナー！これなら戦える！」

増幅された力に驕ることなく2人の神使代理は勇猛果敢に魔王へと挑む。

ザコツシユは得意の爆発魔法を剣先に込めて一点を狙う鋭い突きを、団長さんは悪しき物を拒む浄化の魔法陣を魔王の下に描く。

「ぬうーやりおるーだが、闇の衣の前には全てが無力よー」

ゆらり、と魔王の周囲が怪しく揺らめく。

どうやらマイザが纏っていたものと同じ、負の資源で出来た鎧を纏っているようだ。

まるで天の衣の模写のように思えるが、今なら根本の原理からして違うと解る。負の資源、言い換えればマイナスのエネルギーによって作られた衣が、ダメージを肩代わりしているようなもの。

確かに膨大な負の資源があるならば無敵に近いかもしれないが、マイナスを振り切る力で攻めるか、千日手でも確実に攻め続ければ勇者の力がなくとも突破できるだろう。

尤も、それでは解決しないのだが。

「やっつこ」

2人を相手に五分の戦いを続ける魔王はこちらにまで意識を向けることが出来なかったのか、俺は何事もなく勇者の残骸の下までたど

り着いた。

素手で引き裂かれ、その後もエネルギーの奔流ほんりゆうに巻き込まれた身体はほとんど原型を留めてなく、もはや人の遺体であることすらわからない程に損傷していた。

『…………』

久々津は自らの遺体を前に目を背け口元を抑える。心配せずとも魂の状態で吐いたりすることなんて無いというのに。

いや違う。そうではない。彼は目の前で自らが殺されるのを目撃し、変わり果てた遺体を今、目に見ているのだ。こうなるのは必然とも言える。

むしろ俺だって悲惨な死体を目にこうなってもおかしくないはず。だのに俺は悲しくないどころか冷静に場を、物事を推察できるほどに精神が静か。

何かがおかしい。

『…………器、用意してくれんだろ。早くしてくれ』

久々津は目を覆い、催促する。こんなものは見たくない、早くなんとかしてくれと。

「わかった。今からお前の身体うっわを再構成する。自然の摂理を侵す行為。その代償はお前の魂の消滅。今ならまだ——」

『——いいから！やってくれ!!』

最終確認しようとする俺の言葉を遮り、久々津が猛る。

「いいだろう。覚悟せよ。お前は今から神の尖兵と成り魔王を討つ槍となるのだ」

俺はなにもない虚空からバインダーに挟まれた1枚の紙とペンを取り出し久々津に渡す。

『…………契約書?』

「そうだ。注意書きをしつかり読んで一番下に署名しろ」

『はあ!?そんな場合じゃねえだろ!』

「いいから読め」

『だあ!解ったよ!ほら書いたぞ。これでいいんだ、ろ—!?!』

乱雑にサインを書きながら俺に契約書を渡した瞬間から変化は始

まった。

『なんだこれ!?おい、これどうなって―』

勇者の残骸と久々津の魂が光を放ち、それぞれが光の玉へと変わる。

とてつもない光が現れたことで魔王達も戦いの手を止め、こちらへと視線を向ける。

「それは一体なんだ。お主は一体なにをしておる!」

魔王は激昂し、

「何という力……。しかしこの温かさは……」

団長さんは安堵し、

「なんかすげえ……」

ザコツシユは語彙力をなくした。

「神の正義の下に命ず。勇者、久々津誠一郎の肉体に魂を戻し、今一度この世界に残照せよ」

手を合わせ、片膝を着いて天を仰ぎ祈る。

熟練の聖職者ですら泣いて讃えそうなほど堂に入り、一片の隙も無い完璧な所作によって行われた祈り。

俺が行ったのは勇者の身体を一度資源へと還元して、新たに天界から持ってきた資源を合わせてから勇者の身体を再構成すること。

天使をして自由に力を使える転生課だからこそ出来る荒業といえる。

光が収束し、人の形が見えてからポンッと勇者久々津が姿を現した。

「何がどうなって……」

天の力でゆっくりを地面に降り立った勇者久々津は事態を飲み込めないのか自らの手を握ったり開いたり、辺りを見回したりしていた。

「んな……勇者が、生き返った……!?!」

ザコツシユの間抜けな声に久々津はようやく自身が再び肉体を得たことに気づく。

「ぬおおおお!身体!俺の身体だ!!」

喜び勇み頬を引っ張ったり身体を叩いたりして喜びを全身で表す
久々津とは真逆に、魔王は苦虫を噛み潰したような顔を作った。

目の上のたんこぶだった勇者が居なくなっただと思ったら、ものの1
時間もしないうちに復活したのだ。気持ちは解る。同情する気は起
きないが。

「我が怒りを剣に込め勇者久々津に託そう。受け取るが良い」

俺は手に持ったスモールソードに天の力を纏わせ、やや無骨ながら
も細部に細工の施された両刃の剣へと変える。ずしりとした重みを
感じさせ、手に持つ事で誰かの怒りを感じさせる魔剣のような代物。

剣を手渡された久々津は両手でしっかりと握り込むと刀身を額の
前に掲げて俺に跪いた。

「天より授かりし剣、確かに受け取りました。命に変えても魔王を
討つて見せましょう」

祈りを捧げるようにそう呟いた久々津は立ち上がると、両手で握つ
たまま持ち手を顔の右側まで持ち上げ、長い刀身をやや下げるよう
にして正面へと構えた。

その構えは団長さんのものとよく似ている。

「先程からおかしな事ばかり起きる。私の力で破れぬ結界に、勇者の
復活。貴様！この世界の住人では無いな！」

魔王は怒り狂い闇の炎と思わしき魔法を乱雑に放つ。しかし、その
いずれも天^{ヘブンズランバート} 壘壁の前に霧散する。

「この力！私の力によく似ていながら全く違う力！おのれ！何故だ。
何故管理者が地上に居るのだ！」

負の資源を噴射するというロケットのような推進力で俺と久々津
のいる方向へ飛び込んできた魔王を久々津が剣で受け止める。

「つぐ……重っ!!」

「墮落してた勇者なんぞに止められぬわ!!」

腕を振り抜き、受け止めた久々津を剣ごと押し返すようにして弾
き、そのまま爪を突き刺そうと腕を出す。既^{すんで}のところでは爪を掠めな
がら、身体を捻ることで避けた久々津だったが、速度に寄って生まれ
た衝撃はまでは受けきれずに吹き飛び柱に打ち付けられる。

漫画の描写の如く柱に人形のヒビを作る。

もしも久々津が人間ならば頸椎けいついや背骨せほねが折れてもおかしくないだろう。だが、久々津は『勇者』だ。純粋な人間ではない。

「冥府より来たりし闇よ。光を飲み込め！ 《暗黒貪食》!!」

柱に打ち付けられた久々津に対して魔王が光すら飲むような黒い魔法で追撃する。

「やべっー」

回避行動の遅れた久々津に魔法が襲いかかる。

「させません!!」

もう駄目かと思われたタイミングで団長さんが割り込み、魔力を纏わせた剣で魔法を受け止める。

「これは……！ 長く持たないっ！」

「任せろ！」

魔法を受け止めたはいいが、威力が強すぎるためか押された団長さんが苦悶の表情を浮かべる。そこにザコツシュが得意の爆発による加速を使つて久々津を救い出す。

「もういいぞー！」

ザコツシュの合図と共に団長さんは真横に飛ぶようにしながら魔法を反らす。

素晴らしい技量だが、強引に割り込んだ代償が剣に現れる。たった一撃受け止めただけで、柄に装飾の施されたキレイなロングソードに亀裂が走っていた。

「力を過信するなど散々教えただろう」

「ごめん」

「彼の者の傷を塞げ 《応急手当》」

「助かるよ団長」

「……もう剣がボロボロだね。次は助けに入れるとは限らないぞ」
「解ってる。もう油断しないよ」

身体の調子を確かめるように腕を回し、久々津は剣を構え直す。そんな様子を見て魔王は苦虫を噛み潰したような顔で3人を見下ろす。

「イエナ！ 支援してくれ！」

2人より前に出て牽制に走ろうとするザコツシユが俺に向けて叫ぶ。だが、俺は否定する。

「何故だ！」

「既に我は十分に助けを出している。後は其方そなたら現界げんかいの者が解決すべき事柄ことがらである」

「はあ!?意味わからねえよ！」

実際、俺は場の負の資源を抑え、ザコツシユと団長さんには負荷を軽減する加護を与え、更には勇者の再構成まで行っている。

これ以上の手助けはもはや助けではなく、お節介と言えるほどに。魔王の出現はこれっきりでない。毎回転生課や管理課から助けを必要とするようでは駄目なのだ。

「傭兵さん。恐らくだがこれはこの国の、いや俺達イカニモナに住む全員の問題なんだ。彼女におんぶに抱っこで居るわけにはいかないのだろう」

「……後で説明しろよ。イエナ」

なにかに感づいていそうな団長さんの言葉に不満げながらもザコツシユは武器を構え直して今度は団長さんに支援魔法を頼んだ。

「あんたは防衛と支援に徹してくれ、後は俺と勇者の小僧でやってやる」

「小僧じゃない。久々津誠一郎だ」

「解った。頼むぜクグツ」

ザコツシユはニヤッと笑ってから、

「とにかく俺が暴れて引きつける。隙を見つけて仕留めるんだ。そのすげえ剣なら魔王を殺せるんだろ？」

そう言った。その問いに久々津は頷いて答える。

彼らは強い。生まれたばかりの魔王ゴごときにやられることはないだろう。それも攻撃を防がれたことに狼狽ろうばいして勇者たちが態勢を立て直す猶予まで与えてしまうような魔王には。

「よう。待たせたな魔王」

「なにやら策を練ったようだが無駄だ！当代の勇者は性に乱れた空けよ！我が力でねじ伏せてくれるわ！」

「全力で行くぜ！」

言うやいなやザコツシユは跳ぶ。弾丸男《バレットマン》に相応しい彼の得意技。そう思われたが、速さが段違いで違った。

俺の与えた加護と团长さんから受けた支援魔法によって人智を超え、文字通り爆発的な速さを生み出しているようだ。

どうでもいいけど、よくあの速度で動体視力が追いつくなど思った。俺なら自らの身体を操りきれずに壁にぶつかっていると思う。そもそも肉体強化魔法がなければ風圧で身体が持たないのではないのだろうか。

「喰らえや！《神風》エー！」

音をも置き去りにした剣閃が魔王を襲う。

「何という重さ……!!」

刃は届かないまでも、速度によつて生まれた衝撃までは防ぎきれないのか魔王はザコツシユの攻撃にややのけぞった。

ザコツシユは切り結ぶことなく、そのまま魔王の脇を抜けると爆発を利用して要因に急旋回をして更にのけぞった魔王へ追撃を仕掛ける。

躊躇ためらいなく喉元を狙い剣を振り抜く。が、やはり闇の衣によりその切っ先が届くことは無かった。

「速く、正確。だが、それだけでは我は倒せぬ！」

負の資源を闇の力として操る魔王は、この世界の法則で計ることが出来ない存在と言える。

確かにザコツシユの攻撃は速度に質量が合わさりとてつもない破壊力を産んでいる。少なくとも音速を超えている時点で衝突で産まれるエネルギーが凄まじい事になっているはずだが、どうやら衝撃波ソニックブームすら届いてないようだ。

「いくらなんでも硬すぎんだろ!!」

爆発を利用して跳び続けるザコツシユを久々津が止める。

「ザコツシユ………だったか？まあいい。とにかく一旦止まれ！このままじゃ建物が持たない！そもそも合わせようにも見えねえし衝撃波スゲエし！」

ザコツシユが答えに応じ止まるとスイッチするようにして久々津が紫電の魔法を放つ。

「すまん。自分でもびっくりするくらいノっちまってよ！」

今度はその魔法を防ぐために突き出された魔王の手元を狙ってザコツシユが剣を振るう。

「俺に合わせてくれ！お前に合わせるのは無理だ！」

合わせるのが無理と言いつつ、剣を止められたザコツシユへ魔法を放とうとする魔王の脇を逆袈裟ぎやくけさに切り上げる。

ほんの一瞬、ザコツシユへ気を取られ勇者への警戒を怠わしたった魔王の右腕が飛んだ。

真つ赤な鮮血が振り抜かれた切っ先に沿うように弧を描く。

「ぐ、あああああ!!?我の、私の腕が!!許さん!許さんぞオ!!」

怒り狂い、獣の如く勇者へと襲いかかる魔王。しかし、振り上げた左腕は光の壁に阻まれ振り下ろす事は叶わなかった。

「私を忘れてもらっては困りますよ！」

結界魔法を生み出した团长さんが自慢気に笑う。

そしてその隙を逃すはずもなく、久々津が今度は真正面から剣を振り下ろす。

「くっそお!!」

脳天をかち割らんとする久々津の剣を魔王は既の所で防ぐ。だが、受けきれずに左手が切り落とされた。

「何故だ！なぜ天は人に味方する！我とてこの世界に産まれた住人だ！どうして我を滅さんとするのだ!!」

手のない左腕で、落とされた右肩を庇い、よろよろと後退する魔王は吠える。その怒りの矛先は俺へと向けられていた。

魔王は負の資源を使い止血する魔王だったが明らかに弱っており、もはや浮いていることも出来ず今にも膝を折りそうに成っている。それでも確かな殺意をその目に宿す。

場に静寂が訪れた。

本来なら魔王に回復の暇を与えずにさっさとトドメを刺すべき状況であるはずだが、意識のないセレブダロウ王を除く誰もが、魔王の

問いに対する俺の言葉を待っていた。

別に答えてやる義理はない。そもそも天界の、神や天使の存在を現界げんがいに知られては行けないという依頼になっている。

それでも俺は口を開いた。何も知らぬまま産まれてすぐ死んでいく存在あわに哀れみを感じたからだ。

「……俺達は誰の味方をしている訳でもない。ただ世界をこちらの都合に合わせるようとしているだけだ」

誰に言われたでもない、負の資源の持つ力によって意思を捻じ曲げられ、ただ世界のシステムによって動かされている哀れな存在、魔王。

「俺は仕事として、己の部署とクライアントの意向を達成すべくここに居る。あんたはただ、その神こゝろの正義せいぎに沿わない存在だったってだけだ」

「そん、な。我は……」

望んで生まれたわけでも無いのに、産まれた時点で業を背負われ、挙げ句の果てに理不尽な暴力で消される。

魔王は崩れ落ち、項垂れてしまった。

「……介錯かいしゃくしてやれ」

「ああ……」

俺は久々津にそう命令した。

スツキリしない終わりだが、仕方のないことなのだ。魔王の命を絶たねばイカニモナは負の資源を溜め込みいずれ荒廃こうはいしていつてしまう。

魔王の首が落とされる所を俺は目を逸らす訳にはいかない。何故なら魔王は俺が、俺の意思で殺したのだから。

俺はこの世界に来て沢山の魔物の命を奪ってきた。それらは意思疎通の出来ない言わば害獣のようなものと割り切った。だがしかし、魔王は違う。言葉を介し意思の疎通も取れた。

気づくと頭の中で魔王を殺したことへの正当性を考えていた。握り込まれた手は汗でじつとりと湿り、鼓動は早まり、無意識に噛み締められていた顎が痛みを発する。

これが、人を殺す。ということなのだろうか。

「なあ、もしかしてお前って……」

……
T o B e C o n t i n u e d

第八話：転生課の役目を果たすときみたいです⑤

「なあ、もしかしてお前って……」

「どうかしましたか？」

ザコツシユが何かを言いたげにしているのを無視して俺は微笑みながらはぐらかす。

「いや……。やっぱいいわ。そういえばアイツは？」

答える気の無い反応を察したのかザコツシユは話題を変え、
ネフ^{ティース}ティースの事を聞いてきた。

「あの子は……」

どう答えるべきかわからずに言い淀んで部屋の入口へ目を向ける。

「ティースのやつがどうかしたのか？」

「あつ……。その、だな」

怪訝そうな顔をするザコツシユに久々津が目を泳がせながら申し訳無さそうに言葉を選ぶ。

今更だが彼女は死んでない。確かに肉体が炭化したか、天使や神にとっては〴〵それだけのこと〴〵で済ませられる。

先程、天使としての力を使っていた時に気配も確認した。今はまた現界へ降りてきているようだ。

天使になる前に説明は受けていたはずなのに、気配を感じるまではその事を忘れ、死んだと思っていた。いや、そもそも生きてるとも言い難いのだが。

俺の肉体にしたって、このイカニモナにおいて活動するために創造されたもので俺本来の肉体ではない。

久々津は自分が殺してしまったと思っているのか、しどろもどろになりながら「部屋が、俺が……」と少しずつ話そうとしていた。

「何をどうってんだ？ ティースに何があつたんだよ」

「それは、えっと、その……」

痺れを切らしたザコツシユが久々津に詰め寄る。そのタイミングで部屋の入口に人影が現れる。

「アタシがどうかしたのか？」

気配を感じ取れていたものでわかっていたが、どうやら入るタイミ
ングを伺っていたらしいネフティスがわざとらしくボロボロの衣服を
身にまとって現れた。

「なんだ。無事じゃねーか。ビビらせやがって」

ザコツシユは久々津の頭をグリグリと強く撫でてから軽く手を上
げてネフティスと呼んだ。それから団長さんと久々津を指差して「治
療してやってくれ」と言った。

団長さんは強がっているものの剣を握っていた指の骨がひと目で
分かるように折れていたりと決して軽い怪我ではなかった。久々津
もまた魔王によって与えられた傷で衣服のあちこちに赤い滲みを
作っている。

「何よ。アンタが一番ボロボロじゃない」

ネフティスの言うようにこの中で一番の重症者は間違いなくザ
コツシユだ。

与えた加護や団長さんの補助魔法などで能力を高めた結果、亜音速
に近い速度で動き回った結果、空気抵抗により上半身の服は跡形もな
く消え去り、肌の一部が爛れるように焼けている。

「お前こそボロボロだぞ」

「アタシはもう治したからボロなのは服だけよ。あーもう痛々しいわ
ね」

「良いんだよ。死にやしねえ」

「跡が残るでしょ跡が。全く……。天の御心よ今ここに《ハイヒーリ
ング》」

ネフティスが魔法を唱えると、ザコツシユの身体が淡く光を放ち、
爛れた皮膚がみるみるうちに元に戻った。同じようにして久々津と
団長さんにも回復魔法をかけていく。

最後に王へ天の力を使った何か別の術をあたかもハイヒーリング
かのように見せてかけた。

「言っておくけど、血が戻ったわけじゃないから。水を飲まないで脱
水症状で死ぬわよ」

「ああ、サンキュ。……やっぱ回復魔法はすげえな」

「崇め奉りなさい」

「はいはい。助かりました」

2人がじゃれ合っている間、俺は今回の依頼を振り返っていた。多分、間違えていないはずだ。この依頼は恐らく俺のために作られたものだ。

「久々津さん、少しよろしいですか？」

「!?はい!？」

俺はあることを確かめるために久々津を呼ぶと、イエナとしての口調で呼んだためか久々津は目を丸くして驚く。とはいえ、そんな事にいちいち反応してられないのでスルーして話を続ける。

「私との契約を覚えていますか？」

「あー……。そういえば契約書になんか色々書いてあったっけ……」

明らかに読んでいない事がわかる反応に俺はため息を付いた。契約書にはそこまで難しいことは書いていなかったというのに。

まあ、読まないだろうと思って契約書を作っているのだが。

ちなみに契約内容は、

1、甲―イカニモナ管理課―は乙―久々津誠一郎―に勇者として世界を管理する上で必要な力を与えなければならない。

2、乙は与えられた力を使い、甲の意向に沿って動かなければならない。

3、乙の魂は死後、天界において天人てんじんと成りその身で生んだ業を祓うまで輪廻りんねの輪に帰れないものとする。

4、乙は天界について知り得た事を口外してはならない。

5、上記に反する場合は乙を悪魂あくこんと定め、灼熱地獄に落とし地獄の業火によって魂を消滅させるものとする。

以上の事に同意する場合は署名すること。転生課所属、智天使長瀬ケルセム啓示。

こうなっている。

「……そんな契約だったのか」

「という訳ですので、まずは魔王と貴方のせいで混乱している情勢を安定させ、国の立て直しをしなさい。言っておきますが傀儡かいらいを作る能

力は剥奪はくだつしましたので自らの力を使って事態の解決に努めなさい」

「ま、マジすか……」

「マジです」

実の所、〃5〃の項目は有っても無くても変わらなかつたりする。契約書に署名した時点で契約書の力によつて久々津は無意識のうちに履行りこうするようになっていたからだ。

そう、強制力。俺が確認したかったことの1つがこれだ。天使の持つ知識の中に契約書についてそう記憶されていた。

以前、イスラに『元の肉体に引つ張られすぎている』と言われたが全くもつてその通りだ。俺は天使の力も知識も全然活用出来ていない。

ともあれ、これで勇者の処分と情勢の安定、それぞれ依頼にあつた事は達成したと言える。情勢については即効性ではないものの、契約書の強制力で久々津が時間がかかつたとしても解決させるだろう。

「ティース、私達は一度帰りましょう。そろそろ王が目を覚ましそうです」

「ん？ああ、そうね。ほら、雑魚も出るわよ。起きたときに冒険者アタシらが居たらやややしそうだし」

「雑魚じゃねえし！つたく、んじやとりあえず俺達は帰るからクグツの坊主と団長さんで事後処理頼むわ」

「え？あのっ！ちよつと」

「よろしくおねがいますね。団長さん」

「……あ、はい」

後のことを丸投げし、俺達は王城から立ち去つた。こそこそしながら。

困つたことに、魔王が消え、久々津の傀儡化能力も消えた結果、城内の兵士は正気を取り戻し、目が冷めた者から順に慌ただしく駆け回っていたのだ。

一時はどうなるかと思つたが、ネフティスが姿を消す魔法を使つてくれたおかげで事なきを得た。

城内から出た後はザコツシユとも別れ、俺とネフティスは初めにイ

カニモナに来たときと同じ隠れ家へと向かった。

「そういえば勇者の部屋と生き残りの女の子達は？」

俺は適当な椅子に腰を降ろして、久々に自らの姿へ戻してからネフティスに聞く。

「死体を消し、娘達の記憶を改変しておきました。勇者やマイザに関する記憶を消して、私達の事は王に呼ばれた事になっています」

「それで王様にも記憶改変を施したのか？」

「はい」

「他にも隠していることがあるだろうか？」

「……お気づきでしたか」

「研修、だったんじゃないか？」

「本場に良い目を持ってますね……。探偵か小説家への転向でも考えてみてはどうでしょうか」

ネフティスは態とらしく肩をすくめて見せた。

「その通りですよ。イカニモナ管理課ちからの依頼は嘘フエイク。勇者の事は確かに問題でしたが、転生課が必要なほどではありませんでした。ですが、管理課で把握していなかった事態がありました」

「久々津が操っていると思っていた王様が魔王、かはともかく他の何かに操られていることが判った」

「そうです」

恐らくネフティスが気づいたのはこの世界に来たとき、初めにしていた偵察で判明したのだろう。

研修として俺に力の使い方を教える合間にそれを探っていた。

「魔王が顕現していたのは誤算でした。勇者が城に張っていた結界のせいで負の資源ダメージリソースが集まっていることに気づけなかったのです」

『はいい。ですのうでえ、急遽予定を変更したんです』

「!?つと……。ああ、イシスさんですか、びつくりしました……」

唐突に入り込んできた声に驚いたが、間延びした話し方ですぐにイシスであることに気づいた。

あの時、怒りに任せて久々津に剣を振り下ろそうとした時に聞こえたのもイシスの声だった。

「一旦、戻りましょうか。管理課の方で全てお話しますよ」

椅子から立ち上がり背伸びしながらネフテイスが言った。最後に「お姉ちゃんが」と付け加えて。

笑って良いのか困惑する俺を置いてネフテイスは手を差し伸べてくる。俺がその手を取ると身体は光に包まれ、眩しさに閉じた目を開いた時にはワークデスクが並ぶ管理課の一角へと帰っていた。

……T o B e C o n t i n u e d

エピローグ：転生業務課は本日也大忙しです①

様々な出来事を超えて、俺は久々に転生課へと戻ってきた。

地球とは時間の流れも日付感覚も違うけれど、体感的には一月ほど空いていたように思う。

実際、デスクの上の書類をどかし、置いていた地球の時間に合わせた時計を見ると、DATE機能が依頼開始から一月半経っていることを示している。

3月24日。俺が死んでから3ヶ月程のときが経ったことになる。同時に、転生課で働き始めてからも3ヶ月という事にもなるか。

「おかえり」

書類の山で壁になった机から掠れた女性の声が聞こえる。

「ただいま戻りました。大丈夫ですか？随分と、こうコミカルな机になっていますが」

心配するべきかどうか迷ったが、あえて少しおどけて様子を見ると、イナンナは声を荒げ、

「大丈夫な訳ないでしょー!」

吠えた。

「ブーティカのやつ責務を放り出して逃亡したのよ!ただでさえエルラドの管理の件で仕事が増やされていたのに、逃亡してくれちゃったおかげで更に仕事が増えているんだから!イカニモナの件の報告は後で良いから長瀬くんもとりあえず作業に取り掛かって頂戴!」

「は、はい」

書類の山が出来上がっていたのはその所為だったのか。

俺は明らかにピリピリしているイナンナを刺激しないようにコーヒーを2杯淹れ、そつとイナンナの所に置いてから席につく。まずは書類を分類分けして、一番簡単な悪魂の転生に関する処理をしていく傍ら、今回のことを振り返って考えてみた。

今回の発端はイカニモナに召喚された勇者久々津誠一郎が勇者としての使命を放り出して色欲におぼれてしまったことから始まる。

なんとかしようにも勇者は城に結界を施し、管理課からの手出しが

出来ない状態になった。そのため管理課は現界げんかいでも問題なく能力の行使が出来る転生課に応援の依頼をした。

しかし、これは表向きの理由で実際はイナンナから管理課に、俺が天使として、転生課として能力を使えるようになるための研修だった。そのため、依頼は非常に簡単に本来ならネフティス1人だけでも解決できるような極々ごくごく些細な問題。のはずだった。

ここで更なる問題が発生した。管理課は勇者が国を操っていると見ていたが、実際のところは勇者の他に国を操っているものがいたのである。しかし、結界のため深入り出来ず。調べるためにも本来の目的通り、色ボケ勇者に招き入れてもらうために、あえて派手な冒険者活動をした。俺が能力を使えるようにする練習も兼ねて。

そうした活動の傍らで俺はネフティスの動向に不快感を覚え、独自に探りを入れ始め、ネフティスはネフティスで俺が普通の天使ではないことに気づき、探りを入れていた。

そして俺が『神の正義』の意を持つザドキエルという天使としての真名まなを持つことが判明した。

正直、平社員からいきなりの重役に戸惑いしかない。『神の正義』だなんて大層な肩書も重くて仕方ない。俺はそんなに大きな人ではないのだから。

「ふう……」

山一つ分を処理し終えた俺はすっかり冷めているコーヒーをズズと啜すする。酸化したコーヒーの強い酸味と雑味が脳を刺激し、いくらか意識がハッキリとする。

眠気が襲つてこないとはいえど、精神的な疲れは溜まる。

そうこうしている内にまた天人てんじんの男性が書類を抱えていそいそと入ってきては置いていく。減ってはいるはずだが、途中で増えるものだから全然進んだ気がしない。

小さく息を吐き、残ったコーヒーを一気に飲み干してから俺は備え付けのコーヒーマシンからコーヒーマシンをマグカップへと注ぐ。

「私にも頂戴」

席へ戻ろうとする俺にヨレヨレな声のイナンナが書類の山の隙間

から腕だけを出して言う。

もはやギャグのような光景に俺は思わず笑みが漏れながらも「どうぞ」と言いながらマグカップを渡す。

「ありがとう」

「いえ」

簡単な返事で会話を終わらせ、再び席に座り残りの山を崩しにかかる。

「そういえばさ」

ある程度、作業が進んだところで唐突にイナンナが話しかけてきた。

俺は作業の手は止めずに「なんですか?」とだけ返す。

「私の姿を使ってみて、どうだった?」

「ぶっふおっ!!?」

「何をびっくりしてるのよ。バレてないとも思っていたのかしら?」

「えっと、それは、その」

「私の身体、使ったのでしょうか?」

「うっ……」

「恥ずかしいところも全部、見たのでしょうか?」

「それはっ!」

「それは?」

「……………」

なるべく見ないようににはしてたけど、1月も生活していれば見ちゃうことも有ったわけで。

「くくく、あははははははー!」

どう言い訳したものと焦っているとイナンナが急に笑い出した。「いひひ、あーはははは! いやー笑った笑った。ふふふ、別に責めてる訳じゃないのよ。そりゃあ勝手に姿を使われたのは少し気恥ずかしさもあるけれど、そこまで狭量きせうりょうじゃないわよ。これでも神ですから」

姿は見えないけれど、声からしてドヤっている感じが伝わる。ともあれ助かった。勝手に姿を借りていたことを今の今まですっかり忘

れていたから。

でも確かに、胸やクビレ、脚などの女性らしいラインを見てしまっているのである。いくら女体化しないと行けなかったとはいえ、セクハラどころの話ではない。まあ見れてラッキーとは思ってしまったけれど。ちよつとだけ。

「あー本当に気にしてないから、そんな気に病まなくていいよ」
「……はい」

社会人なんだからコンプライアンスくらい考えるべきだったと今更ながら反省する。散散さんざんつぱら会社で言われてた事なのに。

「反省より今は作業のが優先ね」
「はい」

それからたまのコーヒータイムを除いてずっと山を崩すべく作業を続け、気づけばデスク上の時計はそろそろ26日になろうとする時間を指し示していた。

大量にあった山はその殆どが処理され、机らしい見た目に戻っている。イナンナの机はまだ山が残っているものの、隠れていたイナンナの姿が見える程度には片付いていた。

「流石ね。ブーティカとは作業の速さが段違いだわ」
「えと、ありがとうございます?」

「なんで疑問形? まあ良いわ。少し落ち着いたし、イカニモナに関する報告を聞いちゃおうかしら」

「あ、はい。わかりました」
俺はイカニモナ管理課に行つてから、転生課へ戻るまでのことをざつくりを話す。城に行き、魔王が現れたことや勇者の再構成をしたことなど重要そうな部分は詳しく。

「いくつか聞いておきたいことがあります」
「何かしら」

この展開が判っていたのかイナンナは俺の態度を見ても眉一つ動かさない。

「まずは俺の真名についてです。イナンナさんは当然ご存知でしたね?」

「ええ、そうね。私が昇華の際に指定したことだからね」

「あんな別の人格みたいなの聞いてなかったんですけど？」

多少の恨みを込めてイナンナにジト目を飛ばすと、イナンナは苦笑しながら、

「別の人格ではないわ。それは長瀬君が長瀬君自身の感情を抑制^{よくせい}しただけね。恐らくそのままでは精神に負担がかかってしまうから自己防衛のために無意識下で能力を使ったのよ」

そう答えた。

「よくあることなのよ。勇者でも転生者でも、生き物を殺す事、傷つける事に慣れてない者は特にね」

「そうでしたか……」

「まあ、伝えてなかったのはわざとだけどね」

おい、と思わずツツコミを入れそうになるのを既^{すんで}で抑える。

そこからまた説明に戻り、最後まで話した所でイナンナは俺に「よくやった」と^{ねえ}褒いの言葉をかけてくれた。

これで報告は終わりだ。だが、まだ話が終わるわけではない。管理課で確かめたことと合わせ、答え合わせしなくてはならないことがいくつかある。

まず、大きなものから。

「イナンナさん」

「ん？」

「イナンナさんはどこまで知っていたのですか？」

「全部知っていたわ。イカニモナに魔王が生まれていたことも、勇者が操り人形に成りかけていたことも」

「やはり、でしたか」

『『どうして?』って聞かないのね』

「なんとなくわかるので」

「えー……」

不服そうな声を出すので仕方なく聞き返すことにした。

「……どうしてですか？」

「よく聞いてくれた。天部の部長でもある私のもとには各世界の資源^{リソース}

情報も入ってくるのである！」

「なるほど？」

「これを見てみ」

そう言いながらイナンナは一枚の紙を手渡してくる。

見れば、そこにはグラフでイカニモナの資源情報が描かれていた。

「ここ、急に負の資源が増えている。それと同時に天の力が弱まっているのもわかるでしょ？こういう動きから勇者が劣勢なのか、魔王は倒せそうなのかとも見てるのよ。そして力が足りなさそうなら管理課へ通達して勇者のサポートを促すってわけ。結構大変なのよ？」

「それって管理課の仕事じゃないんですか？」

「うん……本当はそう……」

シユンと肩を落として力のない返事が帰ってくる。

「500年くらい前かな？管理部の部長だった男神おがみがメンタルブレイクしちゃって部長から外されてね。その時、管理部の部長も任されたのよ。一時的なものはずだったんだけど、なんか後釜になる人が来なくってそのまま」

「うわあ……」

余りの酷さにかける言葉も見つからない。というかこの組織大丈夫なのか？

「まあ、そんな訳でイカニモナの状況は知ってたわ。知った上で長瀬君に丸投げしたわ」

丸投げって言いましたよこの女神。

「長瀬君の成長のために、仕方なくよ。決して対処が面倒だったからじゃないわ」

しかもなんか言い訳し始めたんですが。

「長瀬君、要領ようりょう良いし、なんとかしてくれると信じてたわ」

「おい」

「そんな怖い顔しないの。ある程度はイシス達の裁量さいりょうでやらせないと管理課の責任問題にもなっちゃうし」

「あー、そういうのもあるんですね」

「まあ長瀬君に丸投げしたのは本当なんだけどね」

「おいこらダ女神」

「告白しましたよこの女神。」

「何か有ったときのためにイスラに監視させてたから、もしもの時はイスラに連絡して解決させるつもりだったのよ」

「見られてたのか……」

「なんとなく監視されていたことを知り、背筋がゾクつとする。俺はもちろんのことネフティスも気づいていなかったはず。しかもイナナナの言い方だと初めから見られていたと思われる。それも1月以上の間、気づかれずに。」

「そういえばイスラも真名のある天使だったか。やっぱ能力もすごいのだろうか。」

「なにはともあれ、長瀬君。君はすごいわ。ただ管理課の言うことに流されるだけじゃなくちゃんと考えて事態を解決してきた。しかも女体化と言う今までの人生では考えられないような状況に置かれても自分を見失うことも無かった。合格だわ」

「合格、ですか」

「試用期間つてあるでしょ?」

「ああ、丁度3ヶ月くらいですもんね」

「試用期間とか今はじめて聞いたわとか言いたかったけれどやめておいた。これはもうそういう組織なんだと思う。大人には諦めも必要だ。それに、何言っても何やってもイナナナの手のひらの上から抜けられないような気がするし。」

「そんなことないわ。これでも綿密めんみつな計画を立ててから、その場のノリで送り出しているわ」

「さつきから随分と言葉がはっちゃけてませんかねえ!?!というかどんだけ心を読んでいるんだよ!」

「だってもう取り繕つくろう必要ないし?優秀な手駒てこまが手に入ったし?」

「この女神、猫かぶってやがったのか!」

「そうです。これが私の素です。長瀬君にはこれから私の手となり足となりキリキリと働いてもらいます」

「……………」

あまりの変貌へんぼうっぷりに思わず言葉を失い、顔もなんとも言えない表情のまま固まってしまふ。いわゆる絶句。

大人には諦めも必要だとは言ったけれど、すぐに状況を飲み込めるわけではないと思います。

—コンコン

そんななんとも言えない空気が漂ただよう転生課内にノックの音が響いた。

…:T o B e C o n t i n u e d

エピソード：転生業務課は本日也大忙しです②

「どうぞ」

イナンナの事務的な返事を返すと扉は開けられ、2人の人物が入ってきた。

「どもどもおー。イナンナさんお久しぶりいですねえー」

「失礼します」

部屋に入ってきたのはイシスとネフティスの2人だった。

どうしてと思ったが、ブーティカが来た時も管理不備に対する罰則としてだったから、おそらく2人もそうだろう。

「さつきぶりですね」

そんなネフティスの挨拶に「俺の感覚では数日ぶりですけどね」と返した。しかしネフティスはよくわかってなさそうな顔で軽く首をかしげた。

途方も無い年月を生きているであろう神や天使からしたら2日、3日なんて本当に“さつき”なのであろう。

俺は時間間隔の差に苦笑しながらも、2人の来訪目的を聞いてみた。

「姉さんは今回の魔王の一件と、貴方の研修に関する報告です。私は管理不備に対する罰則で転生課に出向です」

「ああ、なるほど」

どうして2人も来たのかと思っていたが、なるほど。

ネフティスは挨拶も早々に俺の机から書類の山を1つ取ると、空いてる机を勝手に使い、イナンナに一言断ってから仕事を初めた。これが1度目じゃないので仕事の説明などは要らないようだ。

イシスもイナンナと話し込んでいるし、俺も作業に戻ろうと机へ向き直したと同時にイナンナから声がかかった。間の悪さを感じながらもイナンナの方を向く。と言っても書類で顔が見えないのだが。

「改めてイシスから総評を聞いたわ」

「あ、はい」

何を言われたんだろう。そんなことを思いながら次の言葉を待つ

っているとイナンナは俺の常識では測れないトングデモ発言をぶちかましてくれた。

「君、1度も死ななかつたんだってね!？」

「いや1度でも死んでたまりますか!」

反射的に突っ込んだ俺は悪くないと思う。死を当たり前みたいに言わないでほしい。

「死ぬ感覚に慣れておいたほうが後々楽よ?」

「そうだよ。肉体の死に慣れておいたほうがか、便利なんだよお」

イシスまでイナンナの言葉に乗ってそんなことを言う。助け舟を求めてネフティスを見ればそちらも頷いていた。我ニ味方ナシ。

そういえばネフティスは勇者の攻撃で消し炭にされていたし、あの様子では死ぬのも初めてではないのかもしれない。

こうして考えるとやっぱ皆人間ではないんだなと思う。

「そういえばなんですけど」

「どうした?」

死についてのこととふと思い出した。

「エルラドに行ったときに、首を飛ばされてるんですけど、死ななかつたんですよ。意識もはつきりしていて、『戻れ』って念じたら身体も元通りになりました。例えば、イカニモナでは天の衣のお陰で掠り傷すら負っていません。そもそも話として俺は死ぬるのでしょうか?」

首が飛んだ時にしたって俺は血の一滴すら垂らしていない。切れた首の断面を見たわけではないが、今の身体に血が流れているのかすら怪しい。

例えば胸に穴が空いていても平然としていられるような気すらする。

「んー。死ぬときは死ぬんじゃないかしら」

「そんな適当な」

「今の長瀬君は無意識に力を使っているから、死のうとしてもそう簡単には死ねないと思うわ。でも、首を斬られた様に完全無敵ではないし、死ぬときは死ぬ」

イナンナは「でも」と言葉を続ける。

「私達が言いたいのはそういうことではないのよ。この先も転生課と

して働いていれば派遣先で天使として『殺される』ことや、『死んだように見せかける』ことが必ず必要になってくるわ。そういう時にちゃんと『死ねる』ことが大切なのよ」

「仕事として死ぬ……」

「まあそういう意味でも今回の研修はいい経験になったんじゃないかしら。課題点も残してるし、これからの成長に期待するわ」

多分、いや間違はなく今まで聞いてきた中で一番のパワーワード。死ぬことを強要される仕事とは一体。ブラック企業というかブラッティ企業というか。

「これからもよろしくね。長瀬君」

姿は見えないがなんとなく名前の後にハートマークがついてそうな声色でイナンナが言った。

こうして俺は研修期間を無事(?)に終え、正式に転生課の職員として働くことになった。なっちゃったのである。

ところで、俺は1つだけ思っていたけど言わなかったことがある。イカニモナでは休息も取れたから良いとしても、働き続けで3ヶ月つて実時間なら半年くらいになってるのではなからうかと。

まあ、天界に地球の時間間隔じかんかんかくを説いても仕方ないのだが。

ともあれ、俺が転生業務課てんせいぎょうむかの正式な職員となり、これからも働き続けなければならぬという事実がここにある以上、やるべき仕事はごまんとある。

「はい。これからも宜しくおねがいします。イナンナさん」

俺は諦めて、これが新しい日常なのだを受け入れた。

幾多いくたの山を作り連峰れんぽうと化した書類を切り崩しながら、俺はコーヒーススを啜すする。

どういう訳か急激に増えた書類は処理する側から新しいものが天人てんにんによって運ばれて来て、もはや処理する速度を超えていた。

「流星に多すぎる！イナンナさん何が起きてるんですか！」

「平行世界同士が衝突して対消滅したって報告が、さつき届いたわ……」

俺の哮りに、俺よりも酷い書類の山に埋もれた上司がしわっしわに枯れた声で答える。とんでもない事柄に俺は欧米人でもないのに「おーまいがー……」と声が漏れた。

世界2つ分の魂が生命の樹に流れてきているともなれば、弾かれた魂が膨大なのも納得できるが、いかんせん量が多すぎる。

「あ、でも罰則人員来ますよね……？」

今まで通りならブルーティカやネフティスのように出向された人員が来るはずだが、

「……………」

イナンナは何も答えなかった。

「イナンナさん？」

「逃げた」

「え？」

「管理課の責任者が現界に逃げた。守護天使隊が追ってるけど、奴ら墮天して天界を捨てたらしいわ」

「つまり？」

「捕まったとしても転生課には来ない」

「Oh……」

どうやら大変なことが起きているようだが、要するに書類の山々は全て俺達だけで処理しなければならぬといけならしい。

こうして話している今も天人が部屋に入ってきては書類の束をドサツと置いていつている。

あまりの多さに目眩がしそうだが、天使の身体がそれを許さないため仕方なく意識を保ったままひたすら心を無にして書類と戦う。

やがて処理が追いつき、ようやく正面から書類が無くなった頃、俺は立ち上がり身体をグーツと伸ばす。もはや立ち上がることにすらいつぶりか解らず、文字通り椅子に根を張っていたのではと思うほどの時間をかけていたようにおもう。

しかし生前に比べれば良いものだ。腹も減らないし、喉も渴かな

い、目も、腰も痛くならない。眠くもならないし、身体的な苦痛は何一つない。

イナンナの席を見ると、そちらも随分と書類が減りイナンナの顔が見えるようになっていた。

随分と久しぶりに上司の顔を見たような気がするが、思い返してみればヘンリーの魂を転生課へ連れてきた時が最後だと気づいた。

「おつかれさまです。コーヒー飲みますか？」

「……の、む」

髪は乱れ、口が半開きになり死に体な様子ようすのイナンナからマグカップを受け取り、既に挽かれてひいる豆を使ってコポコポとコーヒーを淹れる。

コーヒーが波々と注がれたマグカップを手渡してから自分の分のコーヒーを口へ運ぶ。

久方ぶりのコーヒーの苦み走った味と芳醇ほうじゆんな匂いが脳を刺激していくくらい気分がしゃっきりとした。

イナンナはコーヒーを飲んだ瞬間に、それまでの死に体が嘘のようにキリツとした表情になり、姿勢もピンと張って出来るビジネスウーマンのような雰囲気おんきを醸し出している。

「なんか久しぶりに長瀬君の顔を見た気がするわ」

「奇遇きぐうですね。俺も久しぶりにイナンナさんの顔を見た気がしてました」

「そうそう、今回の原因となった例の男神共おがみだけだね。捕まったわ。もう魂ごと処分したけど」

「……？あ、対消滅の」

「そう」

時間が空きすぎてなんのことも解らなかつたが、書類に追われる原因だと気づいた。そうか、男神だったのか。

名前も顔も知らない相手だし、もう処分されてしまったのなら恨みようもない。

「まあ、世界の消滅しょうめつ自体はたまにあることだから、また起きたら頑張って頂戴」

「うへえ……。わかりました」

天界の人の感覚で「たまに」なら本当にたまになのだろう。そういうことにしておこう。

コーヒーで軽く休憩した俺達は再び書類と向き合い、また仕事へと戻っていく。

運ばれてきた書類を善魂ぜんこんと悪魂あくこんに分けて、それぞれの処理方法で処理手続きをこなす、すっかり慣れたルーティンをこなし、コーヒーと紙の匂いで溢れた代わり映えのしない部屋で、いつまで経っても終わることのない仕事。

ある意味で死ぬ前と何も変わらない日常で、今日も明日も明後日も休みなく働く。

でも、美人な上司と2人きりで働くのは実はちよつと楽しいと思わなくもなかったり。

「長瀬君。悲しい知らせがあるわ」

「聞きたくありません」

「資源リソースの枯渇こかつで世界が消滅したわ」

「聞きたくなかったのに！てか世界の消滅は「たまに」じゃなかったのかよお!!」

前言撤回。

やっぱ美人と一緒にでも仕事に追われるのは楽しくない。

「働いていればいずれは起きうることだから諦めて」

「折角減ってきてたのにいいいいいい!!」

俺の悲痛ひつうな叫びが響く部屋に、次々に天人が入ってきては書類を積み上げていく。

程なくしてイナンナの顔はまた書類の山によって隠され、俺の前にもまた連峰れんぽうが生まれていた。

この仕事に安寧あんねいはないと、俺は強引に理解させられるのだった。積み上げられた書類を処理しながらすっかり冷めたコーヒーを飲んで俺は思う。

転生業務課は本日も大忙しです。

了

EXストーリー

EX1：エルラドの勇者①

その男は平凡な男だった。

特に運動が得意なわけでも頭がいいわけでもなく、2流とも3流とも取れるような大学を出て、これまた特に有名でもない普遍的な商社に務めている。

しかし、彼はとても満足していた。

それなりに裕福な家庭に生まれ、良い友人に恵まれ、職場では後輩に慕われて。職場の後輩であり歳が4つしたの女性と交際し、来年には婚姻の約束も控えていた。

私生活も仕事も充実。過不足があるわけでもない、ある意味では理想の人生とも言えるようなもの。

男の名はローガン・ウッド。イギリスはマンチエスターで生まれ育った英国紳士である。

だが、平穏で素晴らしい日常は意外と脆く、些細な事で瓦解してしまふものだ。

「やあ、エミリー。今日も素敵だね。そのブローチ、よく似合っているよ」

「おはよう、ローガン。ありがとう。これお気に入りなの。貴方から貰ったものだからね」

軽い朝の挨拶をした2人は「今日も仕事を頑張ろう」と言い合ってからそれぞれの持場へと着いた。

この日も普通の特筆すべきことの無い一日になるはずだった。

順調じゆんちょうに仕事をこなし、定時には誰一人残ること無く全員が帰り支度をして立ち上がる。

「エミリー、ディナーはどうする?」

「貴方と一緒にならどこでもいいわ」

「それならいつものレストランに行こうか」

「まだ少し早すぎるわ。どこかで紅茶でも飲みましょ?」

「いいね。そうしよう」

2人は気づかない。2人の歩く道の隣に広がる工事現場で何が起きているのか。頭上の方でギチギチと音を立て、倒壊しそうになっている資材のことに。

—ガラララン!!!

刹那、けたたましい金属のぶつかる音と共に大量の鉄筋てつきんが雨の如く降り注いだ。

「エミリー!!」

彼女よりも早く異常事態に気づいたローガンはすぐさま覆いかぶさるようにして彼女を守ろうとする。

結果的にローガンの身を挺した甲斐かいもあり、エミリーは押し倒された際に打ち付けた身体に軽い打撲を負っただけですんだ。

しかし—

「ローガンー！しっかりして！ねえ！冗談よね!!」

情けも容赦も一切なく襲った鉄筋は人体を容易たやすく破壊した。

頭部は陥没かんぼつ、背骨も、脚も、肩も、鉄筋によつて碎かれていた。腹部に至っては鉄筋が刺さり貫通までしていた。

「返事をして！嘘よ！嘘って言うて!!」

彼、ローガン・ウツドは32年の人生に幕を閉じた。彼女に庇い、腕を立て自らをシェルターにしたまま。どこか満足そうな顔で。

せめてもの救いは一番最初に受けた頭部の傷によつて、痛みを感じる間もなく意識を失った事かも知れない。

不意に、男は目覚めた。

何処とも知らぬ、白い世界で。

「よくぞ来た。人間よ」

白い部屋でこれまた白い服に身を包んだ女性が男を見下ろしていた。

男はハツとした様子で起き上がると、自らの身体を触る。

「ゆ、め……?」

傷のない身体に困惑しながら男は目の前の女性に視線を送る。

絶世の美女。そう形容するのが正しいと思えるような長い黒髪を携えたやや長身で妙齡そなたの女性。

「夢ではない。其方は落下する鉄筋から恋人を守り死んだ。今の其方は魂だけの存在よ」

「死ん……。やっぱり、そうなんですね……。でも良かった。エミリーがここに居ないってことは彼女を守り切れたのでしょう?」

「そうだ。其方の挺身ていしんによつて其方の恋人生きながらえた。(私の計画と違ってね)」

女性の言葉は最後になにかが小声で付け加えられていたが、男にはそれが聞こえなかった。

「人生もこれからといったところでの死、後悔も多かろう。そこで——」
「いえ、満足してますよ」

「愛するものを守り抜くその勇氣に免じて異世界に転せ……はあ?」

「私の人生にも意味があった。きつと私はあの時、あの場所で彼女を守るために生きていたんです。残された彼女は泣いてしまうかも知れませんが、彼女は強い人。きつと立ち直ってくれることでしょう」

「何を勝手な。それだと私が困る!」
「どうして貴女が困るので……。と言うか、貴女は一体何者なんですか?」

男は問う。ここが死後の世界だとするならば眼の前の女性がただの人間であるはずがない。

「よくぞ聞いてくれた。私はブーティカ。ブーティカ・エデン。女神が1柱である」

「は、はあ。女神様、ですか」

通常であればただの痛い人だが、自分が死んだであろう出来事の記憶、そしてどこが上とも知らぬ白い世界が目の前の女性の発言に真実味を与える。

男はなんとなく女神の目的がわかるような気がした。自分の好きジャパニーズアニメな日本のアニメでよく見る展開にそっくりだったからだ。

「其方には私の管理する世界で勇者として働……、世界を救ってほしいのだ。実は私の管理するエルラドで魔王が生まれてしまつてな。人々の生活が脅かされておる」

「……えつと」

男は訝しんだように女神を名乗る女を目を細めて見つめる。

そんな様子に女神はにっこりと笑つたまま静かに青筋を立てていた。

「お主の献身と咄嗟の判断力が勇者に向いてると思つたのだ。お主ならば私の力を使いこなし、きつと世界を救つてくれると見込んでおる」

困惑した様子の男を後目に女神は続ける。

「これから其方を人として枠を超えし半神デミゴッドと成りて地上へ送る」

「ちよ、ちよつと待つてください！私はやるなんて一言も！」

「理ことわりへ干渉を可能とする力を与えよう。魔王は既に居おるでな。なるべく早く対処してくれ。早いほどいい。」

「おい！聞いているのか！」

「では勇者よ。地上では欠かさずに協会へ脚を運ぶのだぞ」

「何を勝手な——」

もはや男の言葉なんて女神には届いてなかった。

詮索されるのはごめんとばかりに男を無視して地上へ落とす。

魔法と剣が飛び交う乱世の世界。エルラドへと。

男は再び目覚めた。

しかし今度は身体も動かず、声も出ない。目は開いているはずなのに視界はぼやけて何も見えなかった。

「（あらあら目が覚めたのね）」

誰かの声があった。どうやら近くに誰かが居るようだ。しかしその言葉は男の知らない言語だった。

少なくとも、英語、中国語、ドイツ語、ロシア語、日本語のどれで

もない。確証は無いがイントネーションからしてヨーロッパ圏の言葉とも違うだろう。

「だあ。ああだー！」

「(どうしたのヘンリーちゃん)」

なんとなく理解した。この言葉とは呼べない声は自分から発せられていると。身体が動かないのではなく、動いているけどそれをうまく知覚できないだけだと。

「ふあ、あ、ふぎゃああああ!!あああああ！」

「(よしよし、おっぱいが欲しいのね?)」

男は、赤ん坊に生まれ変わっていた。

首都から遠く離れた農村。その畜産農家の次男坊。ヘンリーとして新たな生を受けた男は、特に不自由もなく田舎の街で慎ましく育っていた。

あの女神には感謝の1つでも言いたいくらいに男は幸せだった。

この辺りは魔王領とも離れており、たまにはぐれの魔物が来るくらい。それだつて村の男衆で退治出来るレベル。

危険も少なく、自然は豊か。地球に未練がないと言えは嘘になるが、この世界もまた良いと思えた。

男が5歳になるまでは。

この世界は5歳になると洗礼の儀を受け、神から何かしらの加護を与えられるらしい。

「汝、ライブストック村のヘンリーよ。其方は崇高すうこうなる女神、ブーティカの寵愛ちゆうあいを受けし《勇者》である」

街まで出向き、教会で洗礼の儀を受けた男は、高位の神父様にそう告げられた。

予想はついていた。だから洗礼の儀は受けたくなかった。

しかしこの世界のルールがそれを許さず。もし拒否すれば天罰が下るのだという。

洗礼の儀で祈れば加護を与えられ、力も付く。拒否すれば天罰、力は得られない。それどころかこの世界で無神論者は罪人だ。

だから皆、教会へ足を運んでは口を揃えてこう言う。

『ブルーティカ様ありがとう』と。

酷いマッチポンプもあつたものだ。

「勇者ヘンリーよ。貴様はこれから国の騎士団へ入り立派な勇者として活躍できるように鍛え直してやる」

屈強な騎士がまだ幼い男の頭をゴツゴツした手でぼふぼふと叩き、ガハハと笑う。

その日から男の平穩だった生活は一変し、助けなんてどこにもない規律という名の拘束具でがんじがらめになった生活が始まった。

まだ幼い男の身など関係なしに、容赦なく騎士団の一員として訓練を課される。

もはやそれは拷問に近かった。とても5歳の身体にかけていい負荷では無い。

普通の子供なら泣き喚き、1日たりとも出来なかつたであろう訓練も男は元々30歳を超えた大の大人であつた。

男としてのプライド、大人としての矜持きようじそして何より誇り高き英国人としての意地が男を動かした。

そのお陰か、5年経ち、10歳となる頃にはとても子供とは思えない強靱な肉体、精神を手に入れ、もはや子供だからと侮あなどる者は1人として騎士団には居なかつた。

彼こそ勇者に相応しき御仁、女神の子だと持ち上げられる。

あまり嬉しくはない。

あれから何度か教会へ礼拝したが、女神は何も言つてこない。そもそも魔物の被害だつて大した脅威にもなつてない。

たまに小規模の群れが来る程度だが騎士団で十二分に対応できるレベル。

魔王にしたつて情報が全くと言つて良いほどにない。魔王領と呼ばれる魔物が湧き出る地域があると言うことだけ。

実被害じつひがいも驚異性きょういせいも何一つとして情報が入つてこないのである。

王は偵察部隊を編成して定期的に情報を得ようとしていると言つているが、それだつて怪しいと男は思つていた。ずっと王城に居て訓練している身の彼だが、『いつ』『誰が』『行つて』『戻つた』のか1度

たりとも噂すら聞いたことがない。

騎士団だけではなく街の人もそういつた噂は流れていない。『影』と呼ばれる諜報員ちようほういんの仕業だと考えれば辻褄つじつまは合うが、だとしても得ている情報があまりにもなさすぎる。

正直な話、男は王の事を信用してなかった。何かにつけて「女神からの言葉」だのなんだのと枕詞まくらことばをつけるが、勇者である男はこのエルラドに産まれてから女神の言葉は未だ聞いてない。それに国民に対して「魔王の驚異への対抗」と称して税金を上げたり、物資の徴発ちようはつを行ったりしているが、先程も説明したように精々小競り合いしか起きてないのだ。

それでも王城に残り騎士団の一員として訓練に励むのは家族のため。もし男が騎士団を抜けたりすれば『勇者としての使命を放棄した罪人』として一族郎党いちぞくろうどう処刑は免れない。

だから男は王に魔王討伐への旅を命じられることになっている。8歳までは耐え抜くと決めている。

絶対にもう家族を失いたくは無いから。

EX1：エルラドの勇者②

「勇者ヘンリーよ。来たときは幼子だった貴様も随分と大きくなったものだ。だが、ただ大きくなっただけでは無いことをそろそろ証明せねばならん」

王の間で跪き、王の語る徳のなさそうな話を延々と聞いたヘンリーは最後に援助金を受け取ってから退室した。

援助金が無ければ出席すらしたくなかった。実際、王の話の大半は「育ててやった恩を返せ、魔王倒してこい」これだけだ。

あまりにアホらしい。ヘンリーは農村で静かに暮らしていたかった。父と母、そして兄の家族と引き離され、合うことも出来ずに気づけば10年以上経っている。もはや村が今どうなっているのかすら解らない。

「よう。話は終わったのか？」

動きやすそうな軽鎧にポーチをいくつも付けた旅装備を身に着けた男が2人、俺の帰りを待っていた。

彼らはアインストトレス。此度の旅に同行してくれる仲間であり、ヘンリーも気を許している兄貴分である。

ヘンリーは革袋に入った金貨をトレスに手渡すと出立の意思を伝える。

今日は男がエルラドに転生して18年目。これからこの3人は魔王討伐のための旅に出る。

そう、たった3人で。

国として軍が出るわけでも、魔王領に隣接してる他国と連携するわけでもない。遠回しに『死に行け』と言っているようなものだ。

しかし、この国の王はそんなつもりで言ったわけでは無いことを3人は知っていた。この国の王は馬鹿なのだ。本気で勇者さえ居れば魔王を討伐出来ると考えている。

もし本当にそうならば、アインスやトレスのような実力者を集めて挑むだけで勝っているはず。そんな事すら解らない愚者なのである。

「んで、坊主。どっから行く?」

「まずは魔王領に隣接してるデモニアを目指そう。何か情報が得られるかもしれない」

「おいおい、デモニアはうちの国と仲が悪いんだぞ。知ってるだろ」

「アインス……。前にも話したけど俺の故郷、ギューの村はデモニアとも交友関係があつたんだ。だから行きがけに村に寄って村長に紹介状を書いてもらおうよ」

「ま、そういうことなら良いんじゃない」

こうして最初の目的地を帰郷と決めたヘンリーは徒歩で街道を進み、道中いくつかの街に寄りながら3週間ほどかけてギューの村に入った。

「ヘンリー、この村は一体……」

村に入る際、隠蔽の結界を抜けてからトレスはずっと辺りを不思議そうに見ていた。

「そのうち解るよ」

しばらく歩くと森を抜け、村らしい建物が見える平野が姿を表した。

そこに居たのは動物のような顔付きだったり、尻尾が生えていたりする様々な獣人や頭に角のある魔族^{まぞく}として――

「亜人^{あじん}に、エルフまで……」

尖った耳に長身で整った顔立ちの妖精族^{エルフ}がさも当然のように農作業を行ったりしている姿があつた。

「それにしても魔族がなぜこんなところで農作業を……。彼らは奴隷かなにかなのですか?」

トレスの疑問にヘンリーは首を振って否定した。

「彼らは角や翼があるせいで魔物^魔混じり^族なんて呼ばれているけれど、実際は獣人族と同じただの人間なんだ。この村は、大昔に勇者が作り上げたと言われている。様々な種族の人達が身を寄せ合って暮らしている村なんだ。だから結界で村を隠しているし、魔族国家のデモニアとの交流もある」

「王国の書庫に情報のない村だと思っていました、そういうことで

したか……」

納得した様子でトレスが頷く。

ヘンリーは歩きながら変わりない様子の村に安心していた。もしかしたら自分が勇者として騎士団に徴兵された影響で村の存在がバレたりしたんじゃないかと思っていたからだ。だが、村は特に変わった様子もなく至って平穏な空気が流れている。

まずは村で活動するために3人は里長の家を訪ねた。

村の中で最も大きな樹の根本をくり抜いて作られた家が里長の家だとヘンリーは言った。その樹は結界を抜けてからずつと見えていくほど巨大な樹で、遠目からでも大きいのが見て取れたが、近づくと更に大きかった。直径が15 mはある樹の根本に小さな扉がポツンと取り付けられている。

ヘンリーは躊躇いなくその扉を叩く。すると程なくして中から「入ってきなさい」と返事が帰ってきた。

「失礼するよ」

一言断ってから扉を開けて入っていくヘンリーと騎士2人。しかし中に居た人物は特に驚きもせずにごう言った。

「おかえりヘンリー」

「ただいま。元氣そうですね」

椅子に座り柔和な顔で3人を迎えるシワだらけで少し小柄な年老いたエルフの老人。年齢は千を軽く超えるエルフの中でも特別長命な彼は魔法を使い自身の前に3つの椅子を並べた。

「元氣と言ってもお前さんほどではないよ。……随分と逞しくなったじゃないか」

「騎士団で鍛えられましたから。それで里長、頼みがあるのですが――」
「―好きにせい。事情は精霊や木々から聞いておる。デモニアの商人が来るのは7日後じゃ。それまで里の者に話を聞きたけりや聞けば良い」

「ありがとう里長！」

「ただし、あれこれするまえに両親にしつかりと顔を見せてやりなさい。あやつらもお主の帰りを待っておったぞ」

「……わかりました」

ヘンリーは少し顔を落としながら静かに答えた。それから3人は里長が魔法で淹れたお茶を飲んでから里長の家を後にする。

その後、里長の家から少し離れた所に立つ木造の平屋へ移動した。その家こそヘンリーがこの世界で育った家。

扉に手をかけて固まるヘンリーに2人が声をかけた。

「どうしたのですか？」

「いや、どう入ったものかと思って」

「早く入ろうぜ。お前んちなんだろ？何をためらってんだよ」

「わかってるんだけど……」

ヘンリーは一種の罪悪感のようなものに駆られていた。この世界に落とされてからたった5年とはいえ育ててくれた両親。感謝だつてしている。だが、唐突に居なくなり勇者として帰ってきている。使命がある以上、この先、育ててくれた恩を返すことが出来るかどうかもわからない。生きて帰れるかすら判らない。そんな自分が親と再会する資格なんてあるのかと。

自分は親不孝者ではないか。そんな思いから戸を開けずにいた。

「うちの前で何やってんだお前ら」

そんな時、背後から声がかかった。

声の主は2 mを超す長身で、エメラルドのように輝く緑の鱗と丸太のように太く逞しい尻尾を持ったトカゲ顔の青年。彼を見たアインは咄嗟に抜剣し切っ先を向けようとする。しかし、

「やめろアインス！」

即座にヘンリーが声で牽制し、その切っ先は行方を失った後にゆつくりと鞘へ戻された。

「リザードマン、だよな？」

「違い、俺は竜人族だ。あんなトカゲの魔物を一緒にすんな」

「りゅ、竜人!?伝説では無いのですか!？」

竜人と聞いたトレスが目を輝かせて竜人族の青年をまじまじと見る。

竜人族の青年は奇異な様子のトレスにややたじろくが、扉の前にいる人物に気づくと目を見開いて詰め寄った。

「人間が居るだけでも驚いたが、お前、まさかヘンリーか！デカくなつたじゃねえか！」

「マラク兄……。久しぶり、だね」

マラクと呼ばれた竜人族の青年は嬉しそうにヘンリーの肩をバンバンと叩く。それとは対照的にヘンリーの顔は沈み込みマラクから目を背けていた。

「なんだよ帰ってくるなら言えよな！元氣そうで何よりだぜ！」

尻尾を地面に打ち付け楽しそうに笑うマラクは、ヘンリーの様子を見て一瞬だけ何かを考えるような顔をしてから扉を開けてヘンリーを家に押し入れる。それから啞然とした様子の2人も招き入れた。

アインストとトレスは不思議に思っていた。なぜならヘンリーはマラクの事を「兄」だと呼んだからだ。

ここがヘンリーの実家で、そこに住む「兄」と呼ばれた竜人族の青年。普通に考えれば2人は兄弟という事になるが、ヘンリーは教会で認定された真正銘、人間族の勇者だ。教会が嘘偽りを言っていないのであれば竜の血が混ざっているはずがない。

「母さん、居るか？」

マラクが家の奥に向かって声をかけると「はいはい、居ますよ」と返事がした後にパタパタと音を立てて赤い髪の女性が現れた。その女性は、マラクとは違い人間族のように見える。その姿を見てアインストは納得した様子だったが、トレスは依然として眉根を寄せたままだった。

「あらあらあら、お客様かしら？」

女性は柔らかな笑顔で近づいてきたが、突如として驚いたような顔に変わり目にも留まらぬ速さでヘンリーに抱きついた。

「ヘンリーー！ああ、また会えるなんて！よく帰ってきてくれたわね。元氣だったかしら？ご飯はちゃんと食べてる？随分と逞しい身体になったわね。母さん嬉しいわ。立派に育ったわね。王都での暮らしは苦労してないかしら？」

身につけている軽鎧が変形しそうなほど力強く抱きしめたまま涙を流し、ヘンリーに頬ずりする女性の姿を見たトレスは何かに気づき「やはり……」とこぼした。その囁きは荒ぶる女性の声にかき消され誰の耳にも入ることは無かった。

「おかえりなさい、ヘンリー」

「た、ただいま……」

熱烈な抱擁から開放され、疲弊した様子のヘンリーはやはり沈んだ様子で自分の母親からも視線をそらす。

ヘンリーは家族の様子にどう答えればいいかがわからなかった。2人共少し見ただけで自分に気づき喜んで迎えてくれた。本当に温かく、本物の家族のように。

自分は前世の記憶を持つ。それどころか血の繋がりがさえないのに。「お父さんももう少しで帰ってくると思うわ。すぐに発つ訳じゃないのでしょう？ 久しぶりの家なんだからゆっくりしていきなさい」

ヘンリーの母、サラマはマラクに客間の準備をするように言いつけてから、今日はごちそうにしないとと言い残して家の奥へと姿を消した。

残されたヘンリー達はマラクの指示で3人だと少し手狭なマラクの私室に通され、客間が片付くまで待つていてくれと言われた。

「ヘンリー。聞かせてください」

マラクが部屋から出ていったのを確認してからトレスが口を開く。そのままヘンリーの返事も待たずにトレスは言葉を続ける。

「この村は一体なんなのですか？」

「……トレスならもう気づいてるんじゃないのか？」

「予想はついています。これはただの答え合わせみたいなものですよ」

2人の様子にアインスが口を挟む。

「待てよ。何の話をしてるんだ？」

「気づかなかったのですか？ この村に入ってから私達はまだ人間族を見ていません。つまりこの村は亜人の隠れ里ですよ」

「はあ？ サラマさんは人間族だったじゃねーか」

「いえ、サラマさんも竜人族ですよ。髪に隠れていましたが角がありましたし、耳元にも赤い鱗がありましたから」

「え？マジ……？」

信じられないといった様子でアインスはヘンリーを見る。

見られたヘンリーは観念したように話し始めた。

「トレスの言う通り、母さんも竜人族だよ。父さんもな」

「待ってくれ！だってヘンリーは人間族だろ!？」

「そうだよ」

「え、じゃあヘンリーって……？」

「多分、捨て子だったんじゃないかな。詳しいことは知らん。物心つく頃にはこの家に居たからな」

「そう、か……。なんか、悪いな……」

バツの悪そうなアインスにヘンリーは「気にしてない」と答えた。

おまけ

おまけ：キャラクター紹介

本編に出てきたキャラクターの紹介となります。

主に、本編には絡んでこない無駄すぎる裏設定などが沢山あります。

ある意味で死に設定なので供養として残しておきます（）

ながせけいし
長瀬啓示

今作の主人公。

ブラック企業に努めていた日本人。享年29歳でギリギリ魔法使いにはなれなかった。

寝不足と過労が祟り、ふらついた所に居眠り運転のトラックが突っ込み死亡。THEトラック転生。

独り身で、家族には両親と弟がいる。という設定。生前に5徹してぶっ倒れた経験がある。

大学生の時期から入社してすぐの頃までは喫煙していたが、喫煙時間をもつたいたいという理由で止めている。

営業の仕事があるときは髭を剃って、駅前で髪を1000円カットしてもらっていた。

給料を使う暇が無いため、それなりの貯金があったはずだが、通帳記入すらしてないためいくら貯まっていたかは不明。

栄養の偏りや睡眠不足からやつれて、目元にはクマが目立っていた。

転生後は常に健康体のため生き生きとした顔つきになっている。

大学生時代までは趣味があったはずだが、社畜生活を続ける内に忘れてしまった。

イナンナ・エデン

楽園のイナンナと言うなんとも安直な名前をしている転生課の課長で女神。

1億と2千年前には転生課で働いていた。8千年過ぎた後も働いていると思う。

元々は転生課の課長のみだったが、転生課の実権が大きいという理由から天部の部長を兼任させられている。

また、管理部の部長がメンタルブレイクを起こして、代理として管理部の部長も兼任させられている。

結果的に、ただでさえ激務の転生課に管理部や天部としての仕事も舞い込み、イナンナ以外の職員は全て辞めて別の課へ行ってしまうた。

長瀬が来るまでは数百年単位の間を1人で切り盛りしている。

コーヒーと和菓子が好き。特に最中もなかが好き。理由は気軽に食べられて手が汚れないから。

まさに女神のように綺麗な姿だが、激務と1人業務が続いた結果、髪はほつたらかし、目はうつろと残念な見た目になっている。

来客があるときだけしゃっきりとした姿を見せる。

イスラフィール・アクイナス

天界で守護騎士隊の筆頭隊長を努めている大天使。

元は一介の天使だったが、実力で大天使への昇華を果たしている実力派。

ヤンキー漫画が好きで「くっす」が口癖。

癒やしに特化した力を持っていて、イナンナの専属神使としてイナンナのサポートをしている。

アクイナスの名前は神学者のトマス・アクイナスから。

イスラフィールはラファエルの別名。そのため天使としての真名はラファエルとなる。

ブラフ・アトム

長瀬を天使に昇華させた時にちよつとだけ出てきた最高神。

名前の由来は宇宙の根理を意味するブラフマンから。

イナンナとほぼ同期の男神。

出番がなさすぎて設定があまりない。

イシス・フィラエ

イカニモナ管理課の課長。外見が幼く、見た目だけなら幼女。合法ロリ。

話し方がゆっくりしていて、語尾に小音がつく。

甘いものが好きで特にマサラチャイが好物。

管理者としての腕はかなり高い。

ネフティスという妹がいる。

ネフティス・フィラエ

イカニモナ管理課の係長。妙齢で背が高くイシスと並ぶとかなりの身長差がある。

イナンナほどではないが美人。クールビューティー。

現界のイカニモナには頻繁に降りており、冒険者として活躍している。

現界での名前は「ティース」で二つ名は「殲滅治療師（せんめつひーらー）」

姉ほど甘いものが好きではなく、マサラチャイよりコーヒーのほうが好き。

イナンナに憧れてるフシがある。

寝る時になにかに抱きつく癖がある。

ヘンリー（ローガン）

エルラドで出会った元イギリス人の勇者。

ブーティカに良いように弄ばれ、利用され、挙げ句に殺されかけるが全て実力で切り抜けてきた。

天界に悟られぬように結界を貼り、息子に被害が出ないように自分の下から話して妻と2人で隠れ住んでいた。

元々は営業マンであったため口が達者。

キヤメル・サタン・デモニア

ヘンリーの妻。魔族の姫。名前に深い意味は特に無い。

羊のような角を持った夢魔。

レオ

ヘンリーとキヤメルの息子。ヘンリーが正式に勇者に生まれ変わったことで、その身体に流れる血が変化し勇者としての力も受け継いでいる。

ザコツシユ

イカニモナで出会った冒険者。

まるで雑魚みたいな名前だが、イカニモナでは一等級の凄腕冒険者。

爆発系統の魔法を使いこなし亜音速で動き回る。

現界で能力が制限されているネフティスよりも強いいため、ネフティスに目の敵にされている。

特等冒険者候補であり、かなり強い。

二つ名は「弾丸男（ばれっどまん）」

セレブダロウ近衛騎士団長

彼はセレブダロウの近衛騎士団長である。名前はまだない。

爵位持ちの貴族であり、代々王に仕えている侯爵。守る力に長けており、癒やしの術にも心得がある。

以上が設定付きのキャラクターたちになります。

自分で描けたら良かったのですが、あまり絵がうまくないこともあり、外見設定がかなりおざなりになってます。

設定もほぼ合っていないようなものばかりなので、自己満足としてここに置いて終了とさせていただきます。

お付き合いくださりありがとうございました!!